

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第152集

ゆ む た 遺 跡  
湯 牟 田 ( 二 次 調 査 )

Yumuta Site

東九州自動車道（都農～西都農）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書47

2007

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第152集

ゆ む た 遺 跡  
湯 牟 田 ( 二 次 調 査 )

Yumuta Site

東九州自動車道（都農～西都農）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書47



2007

宮崎県埋蔵文化財センター



遺跡遠景（小丸川南方より幾重の段丘面と尾鈴連山を望む）



調査区全景（南から）

图版 2



E区全景





2号（手前）・3号竪穴住居跡炭化材検出状況（東から）

図版 4



3号竪穴住居跡掘検出状況（北から）



2号竪穴住居跡炭化材検出状況（東から）



5号竪穴住居跡焼土検出状況（東から）

図版 6



11号竪穴住居跡北側張り出しの土層断面（西から）



13号竪穴住居跡貼床面検出状況（南から）

## 序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成 11 年度から実施しております。本書はその発掘調査報告書であります。

本書に掲載した川南町所在の湯牟田遺跡は、平成 15 年度から平成 16 年度にかけて発掘調査を行ったものです。調査によって後期旧石器時代から中世までの遺構・遺物を確認することが出来ました。

特に、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑が検出された弥生時代後期後葉～古墳時代前期の集落跡では、焼失した竪穴住居跡が数多く検出され、そのうちの一軒では、木製の鋤が炭化した状態で出土しています。住居内での出土は非常に稀で、文化財としての価値は非常に高く注目されます。

あわせて、溝状遺構、掘立柱建物跡、竪穴状遺構、土坑が検出された中世の集落の一端が確認されたことは、調査の大きな成果といえるでしょう。

ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びにご指導・ご助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成 19 年 3 月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 清野 勉

## 例言

- 1 本書は、平成15・16年度に実施した東九州自動車道（都農～西都賀間）建設に係る埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団から委託を受けて宮崎県教育委員会が実施した。なお、日本道路公団は平成17年10月1日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となったが、本報告書では日本道路公団として記載する。
- 3 現地での実測等の記録は、主に金丸史絵、大野義人、松元一浩、黒木修、吉富俊文が行ったほか発掘作業員が補助した。
- 4 本書で使用した遺構等の写真は、主に松元一浩、金丸史絵、大野義人、黒木修、吉富俊文、今塩屋毅行が、出土遺物の写真は、松元一浩の協力を得て撮影した。
- 5 測量・空中写真・自然科学的分析等は、次の機関に委託した。  
地形測量、グリッド杭設定：(有)タイユウ測量設計[E区]、(有)久保田測量設計[D区]  
空中写真：(株)九州航空  
自然科学分析：(株)古環境研究所
- 6 フローテーション法による微細遺物の選別採取・一次同定や、それに先立つ土壌サンプルリング等の一連の作業は、谷口武範が総括し、金丸が発掘作業員の補助を得て行った。
- 7 出土した木製品を含む遺構の切り取り及び保存処理は、谷口武範が総括し、調査担当者が行ったほか、当センター職員及び発掘作業員が補助した。
- 8 出土した鉄器の保存処理は丹後諒が行い、実測は主に大野が行った。
- 9 遺物の実測及び浄書は、松元が整理作業員の補助を得て行った。
- 10 一部の石器の実測及び浄書は、(株)大成エンジニアリングに業務委託した。
- 11 本書で使用した略記号は次のとおりである。  
SA：竪穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SC：土坑、竪穴状遺構  
SE：溝状遺構 SI：集石遺構
- 12 本書で使用した周辺遺跡分布図は、国土地理院発行の5万分の1図を基に、遺跡周辺地形図は日本道路公団作成の1千分の1図を基に作成した。
- 13 本書で使用した国土座標は、旧平面直角座標系Ⅱ（日本測地系）による。
- 14 本書で使用した方位は座標北（G.N.）を基本とするが、個別遺構実測図等は磁北（M.N.）を使用している。なお、磁北の本地域における真北との偏差は約6°15' Wを測る。
- 15 本書で使用した標高は海拔高である。
- 16 土器の色調及び土層については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」に準拠した。
- 17 本書の執筆・編集は松元が担当した。
- 18 出土遺物その他の諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

## 凡例

- 1 本遺跡では、一次調査のA～C区に準じ、調査区を北からD～E区に分けて表記している。
- 2 挿図の縮尺は次の通りとする。  
遺物・遺構分布図：1/800 土層断面図：1/20～1/80  
遺構実測図：1/20～1/80  
石器実測図：2/3、1/2、1/3、1/4  
土器実測図：1/3、1/4
- 3 本報告書に記載する層序については、層（テフラ、ローム層）の呼称は、平成16年度の「東九州自動車道（都農～西都賀間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書V」第1章第3節の記載に準ずる。基本的には次の呼称がある。  
M：宮崎平野を意味する識別記号 ML：ローム層 MB：黒色土帯

# 本文目次

## 第I章 はじめに

- 第1節 調査に至る経緯 …… 1
- 第2節 調査の組織 …… 1

## 第II章 遺跡の環境

- 第1節 地理的環境 …… 2
- 第2節 歴史的環境 …… 2

## 第III章 調査の方法と経過

- 第1節 確認調査の概要 …… 5
- 第2節 発掘調査の方法 …… 6
- 第3節 整理作業及び報告書作成 …… 6
- 第4節 保存処理 …… 8

## 第IV章 調査の記録

- 第1節 調査の概要 …… 9
- 第2節 基本層序 …… 11

### 第3節 旧石器時代の遺物

- 1 遺物 …… 13

### 第4節 縄文時代の遺構と遺物

- 1 遺物 …… 19
  - (1) 石器 …… 19
  - (2) 土器 …… 19
- 2 遺構 …… 19
  - (1) 集石遺構(S1) …… 21
  - (2) 土坑(S C) …… 23

### 第5節 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物

- 1 遺構 …… 30
  - (1) 竪穴住居跡(SA) …… 30
  - (2) 掘立柱建物跡(SB) …… 73
  - (3) 土坑(S C) …… 77
- 2 遺物 …… 80
  - (1) S7グリッド周辺 …… 80
  - (2) その他 …… 80
  - (3) 小結 …… 80

### 第6節 中世の遺構と遺物

- 1 遺構 …… 110
  - (1) 掘立柱建物跡(SB) …… 110
  - (2) 竪穴式遺構(S C) …… 127
  - (3) 土坑(S C) …… 128
  - (4) 溝状遺構(S E) …… 131
- 2 遺物 …… 135

### 第7節 その他の遺構と遺物

- 1 遺構 …… 141
  - (1) 掘立柱建物跡(SB) …… 141
  - (2) 土坑(S C) …… 149
- 2 遺物 …… 150

## 第V章 自然科学分析

- 第1節 自然科学分析の目的 …… 155
- 第2節 放射性炭素年代測定 …… 155
- 第3節 樹種同定 …… 157
- 第4節 炭化種実同定 …… 165
- 第5節 植物珪酸体分析 …… 170
- 第6節 花粉分析 …… 173

## 第VI章 まとめ …… 180

- 遺構および遺物一覧表 …… 185
- 写真図版 …… 211



# 挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図 …… 3
第2図	周辺地形図および調査区 …… 4
第3図	確認調査トレンチ配置図 …… 5
第4図	グリッド配置図 …… 7
第5図	振立柱建物跡の規模・規格 …… 9
第6図	全遺構分布図 …… 10
第7図	土層観察箇所位置図 …… 11
第8図	南北方向土層断面図 …… 12
第9図	東西方向土層断面図 …… 12
第10図	遺物分布図 …… 13
第11図	出土石器実測図(1) …… 14
第12図	出土石器実測図(2) …… 15
第13図	出土石器実測図(3) …… 16
第14図	出土石器実測図(4) …… 17
第15図	出土石器実測図(5) …… 18
第16図	出土石器実測図(6) …… 19
第17図	出土石器実測図(7) …… 20
第18図	S11、2実測図 …… 23
第19図	S13～6、8、9実測図 …… 24
第20図	S17、10～12実測図 …… 25
第21図	S113～15、19実測図 …… 26
第22図	S116～18実測図 …… 27
第23図	S120～23実測図 …… 28
第24図	SC89、90、100実測図 …… 29
第25図	遺構分布図 …… 31
第26図	SA1実測図・遺物出土状況図 …… 47
第27図	SA2実測図・遺物 …… 48
第28図	SA3炭化鋳出土状況図 …… 49
第29図	SA3実測図 …… 50
第30図	SA3遺物出土状況図 …… 51
第31図	SA4実測図 …… 52
第32図	SA4遺物出土状況図 …… 53
第33図	SA5実測図 …… 54
第34図	SA5遺物出土状況図 …… 55
第35図	SA7実測図 …… 56
第36図	SA7遺物出土状況図・SA6実測図・遺物出土状況図 …… 57
第37図	SA8実測図・遺物出土状況図 …… 58
第38図	SA9実測図・遺物出土状況図 …… 59
第39図	SA10実測図・遺物出土状況図 …… 60
第40図	SA14実測図・遺物出土状況図 …… 61
第41図	SA11実測図 …… 62
第42図	SA11遺物出土状況図 …… 63
第43図	SA12、15実測図・遺物出土状況図 …… 64
第44図	SA16実測図・遺物出土状況図 …… 65
第45図	SA13実測図 …… 66
第46図	SA13遺物出土状況図 …… 67
第47図	SA13-SC29・30実測図 …… 68
第48図	SA17、18実測図・遺物出土状況図 …… 69
第49図	SA19、21実測図・遺物出土状況図 …… 70
第50図	SA20実測図・遺物出土状況図 …… 71
第51図	SA22・24、23実測図・遺物出土状況図 …… 72
第52図	SB3、21実測図 …… 74

第53図	SB11、33実測図 …… 75
第54図	SB20、30実測図 …… 76
第55図	SC2、3、6、11実測図 …… 78
第56図	SC13、37、55、98実測図 …… 79
第57図	SA1出土石器実測図 …… 81
第58図	SA2出土石器実測図 …… 81
第59図	SA3出土石器実測図 …… 82
第60図	SA4出土石器実測図 …… 82
第61図	SA3、6出土石器実測図 …… 83
第62図	SA5出土石器実測図 …… 84
第63図	SA7出土石器実測図 …… 85
第64図	SA8出土石器実測図(1) …… 86
第65図	SA8出土石器実測図(2) …… 87
第66図	SA9出土石器実測図 …… 87
第67図	SA10出土石器実測図 …… 88
第68図	SA11出土石器実測図(1) …… 88
第69図	SA11出土石器実測図(2) …… 89
第70図	SA12出土石器実測図 …… 90
第71図	SA13出土石器実測図 …… 90
第72図	SA14出土石器実測図 …… 91
第73図	SA15出土石器実測図 …… 91
第74図	SA16出土石器実測図 …… 91
第75図	SA17出土石器実測図 …… 92
第76図	SA18出土石器実測図 …… 92
第77図	SA19出土石器実測図 …… 92
第78図	SA20出土石器実測図 …… 93
第79図	SA21出土石器実測図 …… 94
第80図	SA22・24、SA23出土石器実測図 …… 94
第81図	SB20出土石器実測図 …… 95
第82図	SC3、11、37出土石器実測図 …… 95
第83図	S7グリッド周辺出土石器実測図 …… 95
第84図	包含層出土石器実測図 …… 96
第85図	SA1出土石器実測図 …… 96
第86図	SA2出土石器実測図 …… 97
第87図	SA3出土石器実測図 …… 97
第88図	SA4出土石器実測図 …… 98
第89図	SA5、6出土石器実測図 …… 99
第90図	SA7出土石器実測図 …… 100
第91図	SA8出土石器実測図(1) …… 100
第92図	SA8出土石器実測図(2) …… 101
第93図	SA9出土石器実測図 …… 102
第94図	SA12出土石器実測図 …… 102
第95図	SA10出土石器実測図 …… 103
第96図	SA11出土石器実測図 …… 104
第97図	SA13出土石器実測図 …… 105
第98図	SA14出土石器実測図 …… 105
第99図	SA15、17、19出土石器実測図 …… 106
第100図	SA16出土石器実測図 …… 106
第101図	SA20出土石器実測図 …… 106
第102図	SA22出土石器実測図 …… 107
第103図	SA23出土石器実測図 …… 107
第104図	包含層出土石器実測図 …… 107
第105図	遺構および包含層出土石器実測図(1) …… 108
第106図	遺構および包含層出土石器実測図(2) …… 109
第107図	遺構分布図 …… 111
第108図	SB5、9実測図 …… 114
第109図	SB6実測図 …… 115
第110図	SB7実測図 …… 116



# 表 目 次

第111図	SB10、12実測図	117
第112図	SB14実測図	118
第113図	SB17、22実測図	119
第114図	SB27、28実測図	120
第115図	SB29、35実測図	121
第116図	SB36、40実測図	122
第117図	SB31、8実測図	123
第118図	SB43実測図	124
第119図	SB41、42実測図	125
第120図	SB45、46実測図	126
第121図	SB47実測図	127
第122図	SC5、7実測図	129
第123図	SC9、16、48、SD1、2実測図	130
第124図	SE5、6実測図	133
第125図	SE1、7、8、9実測図	134
第126図	SE2、3、4、11、12、14実測図	135
第127図	SB、SC出土土器、陶磁器実測図	136
第128図	SE1出土土器、陶磁器実測図	137
第129図	SE2、3出土土器、陶磁器実測図	137
第130図	SE5、7、8、10、14出土土器、陶磁器実測図	137
第131図	その他の出土土器、陶磁器実測図	138
第132図	SB、SC出土石器実測図	138
第133図	SE1出土石器実測図	139
第134図	SE1、2、3出土石器、鉄器実測図	140
第135図	SB1、2実測図	142
第136図	SB4、13実測図	143
第137図	SB15、16、18実測図	144
第138図	SB19、23、26実測図	145
第139図	SB24、25実測図	146
第140図	SB32、34、37実測図	147
第141図	SB38、39、44実測図	148
第142図	SC10、17、15・50・51実測図	151
第143図	SC68、70、73~78実測図	152
第144図	SC94~97実測図	153
第145図	SB2、15、SC10、70出土土器、石器実測図	153
第146図	包含層出土石器実測図	154
第147図	湯牟田遺跡の炭化材	159
第148図	湯牟田遺跡の炭化材	160
第149図	湯牟田遺跡の炭化材	161
第150図	湯牟田遺跡の炭化材	162
第151図	湯牟田遺跡の炭化種実	168
第152図	D区N4グリッド地点における植物珪酸体の分析結果	175
第153図	湯牟田遺跡の植物珪酸体(プラント・オパール)	176
第154図	D区N4グリッド地点における花粉ダイアグラム	178
第155図	湯牟田遺跡の花粉・澱子	179

第1表	調査の概要	0
第2表	放射性炭素年代測定の結果と方法	155
第3表	放射性炭素年代測定結果	156
第4表	樹種同定結果	158
第5表	炭化種実同定結果(1)	166
第6表	炭化種実同定結果(2)	167
第7表	植物珪酸体分析結果	171
第8表	花粉分析結果	177
第9表	集石遺構一覧表	186
第10表	土坑一覧表	187
第11表	竪穴住居跡一覧表(1)	188
第12表	竪穴住居跡一覧表(2)	189
第13表	掘立柱建物跡一覧表(1)	190
第14表	掘立柱建物跡一覧表(2)	191
第15表	石器一覧表(旧石器時代~縄文時代)(1)	192
第16表	石器一覧表(旧石器時代~縄文時代)(2)	193
第17表	石器一覧表(旧石器時代~縄文時代)(3)	194
第18表	石器一覧表(弥生時代~古墳時代、中世、その他)(1)	193
第19表	石器一覧表(弥生時代~古墳時代、中世、その他)(2)	194
第20表	石器一覧表(弥生時代~古墳時代、中世、その他)(3)	195
第21表	石器一覧表(弥生時代~古墳時代、中世、その他)(4)	196
第22表	石器一覧表(弥生時代~古墳時代、中世、その他)(5)	197
第23表	石器一覧表(弥生時代~古墳時代、中世、その他)(6)	198
第24表	土器一覧表(縄文時代)(1)	198
第25表	土器一覧表(縄文時代)(2)	199
第26表	土器一覧表(弥生時代~古墳時代)(1)	199
第27表	土器一覧表(弥生時代~古墳時代)(2)	200
第28表	土器一覧表(弥生時代~古墳時代)(3)	201
第29表	土器一覧表(弥生時代~古墳時代)(4)	202
第30表	土器一覧表(弥生時代~古墳時代)(5)	203
第31表	土器一覧表(弥生時代~古墳時代)(6)	204
第32表	土器一覧表(弥生時代~古墳時代)(7)	205
第33表	土器一覧表(弥生時代~古墳時代)(8)	206
第34表	土器一覧表(弥生時代~古墳時代)(9)	207
第35表	土器一覧表(弥生時代~古墳時代)(10)	208
第36表	土器一覧表(中世)	208
第37表	陶磁器一覧表(中世)(1)	209
第38表	陶磁器一覧表(中世)(2)	209
第39表	鉄器一覧表	210

# 図版目次

## 【巻頭】

- 図版1 遺跡遠景  
調査区全景
- 図版2 E区全景
- 図版3 2号・3号竪穴住居跡炭化材検出状況
- 図版4 3号竪穴住居跡鋪地検出状況
- 図版5 2号竪穴住居跡炭化材検出状況  
5号竪穴住居跡焼土検出状況
- 図版6 11号竪穴住居跡北側張り出しの土層断面  
13号竪穴住居跡貼床面検出状況

## 【巻末】

- 図版7 ①土層断面（O6グリッド西壁）／②土層断面（H6グリッド西壁）／③確認調査風景／④竪穴住居跡調査風景／⑤台風一過、調査区が濡年溜田と繋がった／⑥2.5%調査風景／⑦S11検出状況／⑧S12検出状況
- 図版8 ①S13検出状況／②S14検出状況／③S15検出状況／④S16検出状況／⑤S17検出状況／⑥S18検出状況／⑦S19検出状況／⑧S110検出状況
- 図版9 ①～⑦S111～18検出状況／⑧S119半載状況
- 図版10 ①S120～23検出状況／②SC89土層断面／③SC90断ち割り状況／④SC100半載状況／⑤SA1遺物出土状況／⑥SA2焼土・炭化材検出状況／⑦SA2が接土坑半載状況／⑧SA3炭化木製品出土状況
- 図版11 ①SA3炭化材出土（焼土除去後）、遺物出土状況／②SA4焼土・炭化材検出、遺物出土状況／③SA4炉とが接土坑完無状況／④SA4屋内土坑群／⑤SA5炉とが接土坑
- 図版12 ①SA5-P5、6断ち割り状況／②SA5-P2、SC66完無状況／③SA5土層出土状況／④SA5土器出土状況／⑤SA5-SC65検出状況／⑥SA5炭化材に載る繊維質植物遺体／⑦SA7-SC2、3完無状況／⑧SA6遺物出土状況
- 図版13 ①SA7焼土・炭化材検出、遺物出土状況／②SA8遺物出土状況（土器集中取り上げ後）／③SA8南東隅土器集中／④SA8北西隅土器集中／⑤SA9焼土・炭化材検出、遺物出土状況
- 図版14 ①SA9炭化材検出、遺物出土状況／②SA10遺物出土状況／③SA10-191裏と磨石／④SA11遺物出土状況／⑤SA11が接土坑半載状況／⑥SA11炉とが接土坑／⑦SA12遺物出土状況／⑧SA13遺物出土状況
- 図版15 ①SA13-SC30、-P2／②SA13ベツド状遺構と壁溝／③SA13褐色土貼床範囲セクション（南から）／④SA13-SC29／⑤SA13屋内土坑群／⑥SA14焼土・炭化材検出、遺物出土状況／⑦SA14焼土・炭化材検出箇所セクション／⑧SA14-P1、2断ち割り状況
- 図版16 ①SA14繊維質植物遺体検出状況／②同上／③SA14欠込痕のある炭化材／④SA15貼床面検出状況／⑤SA16炉とが接土坑
- 図版17 ①SA16炭化材検出（焼土除去後）、遺物出土状況／②SA16炭化材／③SA17遺物出土状況／④SA17壁溝／⑤SA17壁溝
- 図版18 ①SA18遺物出土状況／②SA18床面検出状況／③SA19遺物出土状況／④SA19遺物出土状況／

- ⑤SA20遺物出土状況／⑥SA20遺物出土状況／⑦SA20-SC1遺物出土状況／⑧SA21遺物出土状況
- 図版19 ①SA22・24検出状況／②SA22・24遺物出土状況／③SA23検出状況／④SA23遺物出土状況／⑤SA23床面検出状況／⑥SB3（一部断ち割り）／⑦SB11／⑧SB11-P1断面
- 図版20 ①SB20-P3半載状況／②SB20-P4半載状況／③SB30-P1、5半載状況／④SB30-P6、7半載状況／⑤SC2完無状況／⑥SC3遺物出土状況／⑦SC6検出状況／⑧SC11遺物出土状況
- 図版21 ①SC13遺物出土状況／②SC37遺物出土状況／③SC55半載状況／④SC98半載状況／⑤S7グリッド周辺／⑥S7グリッド周辺遺物出土状況（1）／⑦S7グリッド周辺遺物出土状況（2）／⑧SB2、4、5
- 図版22 ①SB7／②SB7-P8／③SB6／④SB6-P3出土炭化材／⑤SC5検出状況／⑥SC7完無状況／⑦SC9床面検出状況／⑧SC9土層断面
- 図版23 ①SC16半載状況／②SC4遺物出土状況／③SC61遺物出土状況／④SE1遺物出土状況（1）／⑤SE1遺物出土状況（2）／⑥SE1、9土層断面／⑦SE2土層断面／⑧SE5土層断面
- 図版24 ①SE6土層断面／②SE5、6完無状況／③SE7土層断面／④SE8遺物出土状況／⑤SE11遺物出土状況／⑥SE12土層断面／⑦SE13遺物出土状況／⑧SE14土層断面
- 図版25 ①SE14屈曲部分／②M・V層出土土器／③～⑥V層出土土器／⑦～⑩IV層出土土器
- 図版26 ①～④IV層出土土器／③～④IV層出土土器／⑤SA1出土土器／⑥SA2出土土器／⑦SA3出土土器／⑧SA4出土土器
- 図版27 ①SA5出土土器／②SA6出土土器／③SA7出土土器／④SA8出土土器／⑤SA9出土土器
- 図版28 ①SA10出土土器／②SA11出土土器（1）／③SA11出土土器（2）／④SA12出土土器／⑤SA13出土土器／⑥SA14、15出土土器／⑦SA16出土土器／⑧SA17、18出土土器
- 図版29 ①SA19出土土器／②SA20出土土器／③SA21出土土器／④SA22・24、23出土土器／⑤SB出土土器／⑥SC3、11、3出土土器／⑦S7グリッド周辺出土土器／⑧SA1、3、5、包含層出土土器・土製品
- 図版30 ①SA1出土土器／②SA2出土土器／③SA3出土土器／④SA4出土土器（1）／⑤SA4出土土器（2）／⑥SA5出土土器／⑦SA6出土土器／⑧SA7出土土器
- 図版31 ①SA8出土土器（1）／②SA8出土土器（2）／③SA9出土土器／④SA10出土土器（1）／⑤SA10出土土器（2）／⑥SA11出土土器（1）／⑦SA11出土土器（2）／⑧SA12出土土器
- 図版32 ①SA13出土土器／②SA14出土土器／③SA15、17、19出土土器／④SA16出土土器／⑤SA20出土土器／⑥SA22、23出土土器／⑦包含層出土土器／⑧SAほか出土土器（1）
- 図版33 ①SA7出土板状鉄斧／②SAほか出土鉄器（2）／③SB、SC出土土器・陶磁器／④SC4出土遺物／⑤SC61出土遺物
- 図版34 ①SE1土師器・陶磁器／②SE2、3出土土師器・陶磁器／③SE5、7、8、10、14出土土師器・陶磁器／④その他の出土土師器・陶磁器／⑤SE1、2、3出土土器／⑥その他のSB、SC出土土器／⑦その他の出土土器（1）／⑧その他の出土土器（2）

# 第 I 章 はじめに

## 第 1 節 調査に至る経緯

東九州自動車道(都農～西都農)は、平成元年2月に基本計画がなされ、平成9年3月には整備計画路線となっている。さらに、平成9年10月に建設大臣から日本道路公団へ施行命令が出され、公団では翌年の2月から事業に着手している。

その間、宮崎県埋蔵文化財センターでは、平成6年度にこの区間の遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施工によって影響が出る部分については、工事着手前に発掘調査を実施することになった。調査は、平成11年度より宮崎県埋蔵文化財センターで実施している。

児湯郡川南町大字川南字湯牟田の工事区内一帯は水田耕作地帯であり、その中に湯牟田遺跡がある。平成15年5月1日から同年7月4日にかけて確認調査を行った結果、主にKAh層上面(層序については後述の第IV章第2節を参照)で多数の遺構が検出され、上位のクロボク層で土器・陶磁器、石器など多数の遺物が出土した。また、KcKb層～MBO層に後期旧石器時代～縄文時代早期の包含層を確認した(詳細は第III章第1節)。

これらの結果から本調査を実施することとなり、調査対象面積を9,950㎡として、平成15年8月28日に着手、平成17年3月31日に終了した。整理作業は平成15年10月から実施、平成18年12月に終了した。

## 第 2 節 調査の組織

湯牟田遺跡の調査組織は次の通りである。

調査主体

宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長

米良 弘康(平成15年度)

宮園 淳一(平成16・17年度)

清野 勉(平成18年度)

副所長兼総務課長

大藪 和博(平成15・16年度)

副所長

加藤 悟郎(平成18年度)

副所長兼調査第二課長

岩永 哲夫(平成15～18年度)

総務課長

宮越 尊(平成17・18年度)

主幹兼総務係長

石川 恵史(平成15～17年度)

高山 正信(平成18年度)

調査第一課長

児玉 章則(平成15年度)

高山 富雄(平成16～18年度)

調査第一係長

谷口 武範(平成15・16年度)

調査第一課主幹兼調査第二係長、調査第一係長

調査第一課主幹調査第一担当リーダー

長津 宗重(平成15～18年度)

調査第一課主幹兼調査第二係長

調査第一課主幹兼調査第二担当リーダー

菅付 和樹(平成17・18年度)

主査

大村公美恵(平成15年度、整理作業調整担当)

鶴戸 周成(平成16年度、整理作業調整担当)

小山 博(平成17・18年度、整理作業調整担当)

吉富 俊文(平成15・16年度、確認・本調査担当)  
主事

松元 一浩(平成16～18年度、本調査報告書担当)

大野 義人(平成16年度、本調査担当)

整理専門員

金丸 琴名(平成15～17年度)

嘱託調査員(本調査担当)

大野 義人(平成15年度)

金丸 史絵(平成15・16年度)

松元 一浩(平成15年度)

黒木 修(平成15・16年度)

## 調査指導

泉 拓良 (京都大学)  
大塚 昌彦 (沼川市教育委員会)  
小畑 弘己 (熊本大学)  
高妻 洋成 (奈良文化財研究所)

本田 道輝 (鹿児島大学)

日崎 博之 (愛媛大学)  
福留日佳男 (文化庁)  
広瀬 和雄 (国立歴史民俗博物館)  
柳沢 一男 (宮崎大学)

(五十音順)

# 第Ⅱ章 遺跡の環境

## 第1節 地理的環境

(第1・2図)

本遺跡の所在する川南町は、宮崎県央の宮崎平野北端に位置する。西は九州山地、東は日向灘に面し、南は小丸川の北岸で急崖をなし高鍋町と接する。北西の上面木山(標高1,040m)から丘陵が派生しており、その麓から海岸にかけて十数回の段丘面が広がる。

これら段丘面のうち、国光原段丘面・川南段丘面・小丸川北岸に落ちる高城段丘面と、北から南へ下る3段丘面の境目付近に本遺跡は位置し、標高約63m・小丸川まで約2km・海岸まで約4kmを測る。

現地形は、戦後の基盤整備・水田耕作により段差を持たせつつ削平・造成されており、旧地形も起伏しながら緩やかに南に下る地形であったことが窺い知れる。

調査区は、北端が国光原段丘面と川南段丘面の境にあたる。クロボク層・KAh層上面・MBO層上面のいずれにおいても、それぞれ緩急の程度差はあるが、段丘面境に緩やかな谷筋が東から西へと走り、現在の湯平田溜池へと繋がっている。一方この谷筋から調査区南側にかけては、南東に向かい緩やかに上る微丘陵となっている。

## 第2節 歴史的環境

川南町域を主とした本遺跡の周辺は、周知の遺跡は散在するものの発掘調査事例は少なく、近年の東九州自動車道開通を中心に詳細な様相が把握されつつある。ここでは、これらの周辺遺跡について時代ごとに概観する。

**旧石器時代** 大野寅男氏の踏査および川南町の分布調査により、番野地C遺跡・大久保遺跡・谷之口遺跡・辛手遺跡など後期旧石器時代の遺跡が挙げられる。また近年では、後牟田遺跡・持田中尾遺跡・高鍋町野首第2遺跡・中ノ迫第1～3遺跡などが調査されている。山地および丘陵に集中する傾向にある。

**縄文時代** 川南町教育委員会の分布調査では約60箇所の遺跡が確認されている。後牟田遺跡・霧島遺跡・蔵座村遺跡・上ノ原遺跡・野首第2遺跡・銀座遺跡などが知られ、特に押型文土器を伴う早期遺跡が多い。旧石器時代と同様の立地傾向にある。

**弥生時代** 台地上および丘陵縁辺部に集中する。前～中期の遺跡は少ないが、V字溝や朝鮮系無文土器、大陸系磨製石器が出土した持田中尾遺跡が知られる。

後期～終末期にかけて遺跡数は急増し、把田遺跡・中ノ迫A遺跡・上ノ原遺跡・八幡第2遺跡などの集落遺跡や、周溝墓の検出された東平下遺跡・赤坂遺跡などの墳墓遺跡も少なくない。

これら多くの集落・墳墓遺跡からは、後続する古墳時代に展開する川南古墳群や持田古墳群の母胎となるような大規模な社会動態が想起される。

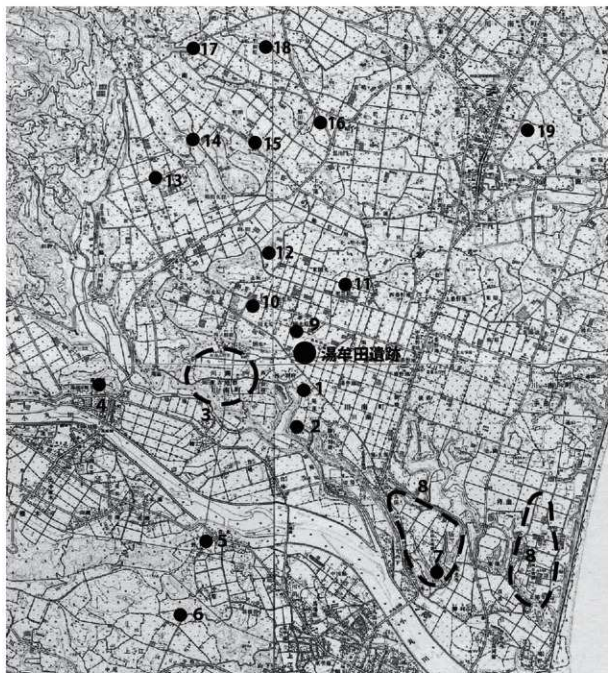
**古墳時代** 台地縁辺部に大規模古墳群が展開する。川南古墳群は前方後円墳24基・円墳25基を数え、39号墳は小丸川流域で最大規模を誇る。持田古墳群は前方後円墳9基・帆立貝式古墳1基・円墳75基を数える。

また、近隣の台地縁辺部には、古墳時代初頭～前期を最盛期とする尾花A遺跡が位置している。当該期の整った住居跡は多くが切り合い、既に300軒以上

が検出されている。こうした集住度の高さからも上述古墳群との直轄的な関連性を窺わせ注目される。

**古代以降** 古代の遺跡数は比較的に少ないが、本遺跡の一次調査では大規模な道路状遺構が検出されている。中世では前ノ田村上第1遺跡・銀座第1遺跡など、多くの掘立柱建物跡と溝状遺構を有する集落

跡がみられ、当該期の集落や社会を考える上で注目される。他に天正6（1578）年の印川合戦に関連する遺跡が確認されている。ほか、近世以降を主とした地名考は本遺跡一次調査報告書に詳しいので参照されたい。



1. 西ノ別府遺跡 2. 尾花A遺跡 3. 川南古墳群 4. 永山古墳 5. 野首古墳群 6. 下耳切第3遺跡  
 7. 持田中尾遺跡 8. 持田古墳群 9. 国光原遺跡 10. 上ノ原遺跡 11. 把言田遺跡 12. 赤坂遺跡  
 13. 大久保遺跡 14. 大迫遺跡 15. 中ノ迫遺跡 16. 松ヶ迫遺跡 17. 赤石天神本遺跡  
 18. 丸山西原遺跡 19. 野稲尾遺跡

第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)



第2図 周辺地形図および調査区 (S=1/4,000)

## 第三章 調査の方法と経過

### 第1節 確認調査の概要

**期間** 平成15年5月1日から同年7月4日

**面積** 9,600㎡ (内トレンチ掘削750㎡)

**方法** トレンチ45箇所(4m×4m、トレンチ相互の間隔は東西15m・南北6m)(第3図)

**内容** 旧地形は若干谷地形の沼地であったため、湯牟田沼池に近いトレンチでは深さ1mほどで湧水し深く掘削できない状況であった。ほぼ全てのトレンチでクロボク層及びKaH層を確認した。

[アカホヤ降灰以降の包含層]

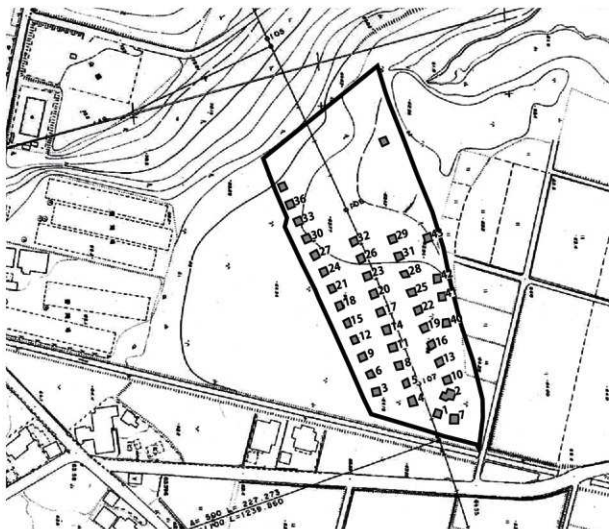
クロボク層：弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器など多数と磨石・蔽石・石廻丁など十数点の遺物が出土。

KaH層上面：上位のクロボク層から掘り込まれたと考えられる遺構多数、竪穴住居跡6軒、溝状遺構4条、土坑・小穴群などを検出した。

[後期日石器時代～縄文時代の包含層]

Kc-Kb～MBD層：礫群1基、集石遺構1基を検出。剥片十数点、縄文土器5点が出土した。

上記の確認調査を行った結果、調査区全域で発掘調査(本調査)を実施する必要性が生じた。また、湯牟田沼池に隣接する調査区北側は、降雨量の多い時期での調査が、また排土の調査区外への搬出が困難である点が懸念された。



第3図 確認調査トレンチ配置図 (S=1/1,000)



## 第2節 発掘調査の方法

### 1 調査区の設定

調査区は南北に細長く対象面積は9,950㎡を測る。本遺跡の一次調査区(A～C区)に準じ、北半をD区、南半をE区とした(第2図)。但し、一次確認調査時のD・E区とは別である。

### 2 調査の手順及び内容

確認調査において遺構密度の高いことが分かったE区から着手した。耕作土を重機で除去し、国土座標を基準として10mメッシュのグリッドを設定、KAh層上面で遺構検出を行った。その後、同様の手順でD区でもKAh層上面で遺構検出を行った。

次に、KAh層上面での遺構が少なかったD区について、縄文時代早期の遺構および遺物包含層の存在が確認されていたMBO層までを重機で除去し、調査区のほぼ全面で遺構・遺物の有無を確認した。MBO層～KrKb層については、各グリッドの中央に5mメッシュのグリッドを設定して25%調査を実施した。一部AT層下位まで掘り下げたが遺構・遺物は確認できなかった。

また、懸念されていた降雨だが、平成16年秋に集中した台風により、調査区北半のD区が数週間にわたり水没し、文字通り湯平田稲穂の様相を呈するという予想以上の被害に見舞われた。調査工程へも少なからず影響を及ぼし、調査事務所プレハブの壁が抜け一部崩壊するなどの実害もあった。

### 3 現地説明会の実施

埋蔵文化財センターでは、県民の方々に対し、地域から出土した埋蔵文化財及び埋蔵文化財保護行政に対する認識と理解を仰ぐため、東九州自動車道関連の発掘調査の成果を公開する活動を行っている。

その一環として、調査区にしか直接目にするのできない遺構を中心に、遺跡の概要や特徴について解説する現地説明会を開催している。

本遺跡では、平成16年4月21日(水)と同年12

月12日(日)の2回にわたり現地説明会を実施した。1回目の4月、E区では多数の焼失した竪穴住居跡を含む弥生時代終末期～古墳時代初頭の集落跡が検出されており、なかでも3号竪穴住居の炭化した木製跡は主目を集め、平日にもかかわらず46名の参加者を得た。また2回目は焼失住居や中世集落跡の概要を説明し参加者は84名にのぼった。



写真1 現地説明会の様子

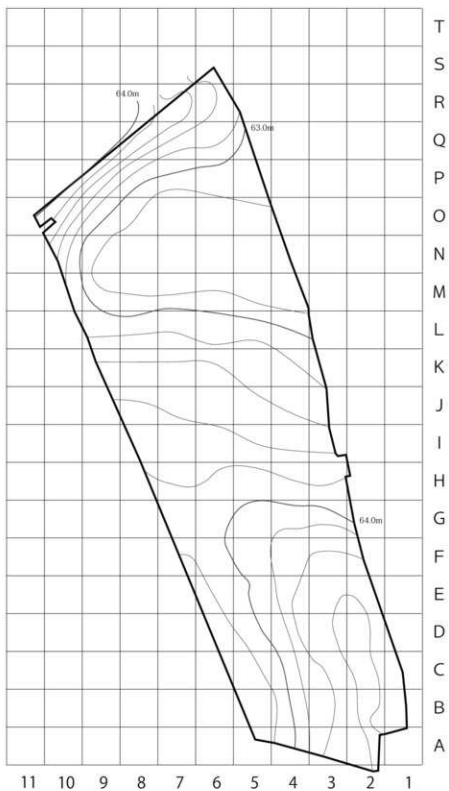
## 第3節 整理作業及び報告書作成

整理作業のうち水洗・注記作業のみ、発掘現場にて平成15年10月から平成17年3月にかけて行った。その後、埋蔵文化財センターにおいて平成17年4月から6月にかけて注記作業を終了させ、7月から翌年3月にかけて土器・陶磁器の接合作業を行った。

実測作業は、弥生時代以降の石器を平成17年8・9月に、土器・陶磁器を平成18年2月から8月にかけて行った。また石器の一部は、平成18年5月から8月にかけて、実測・トレース作業について業務委託した。

報告書作成は整理作業と平行して行い、トレースからレイアウト作業にデジタル方式を導入し原稿を作成した。





※ コンタラインはⅢ層（アカホヤ層）上面

第4図 グリッド配置図 (S=1/1,000)

## 第4節 保存処理

弥生時代終末期～古銅器時代初頭を中心とする集落跡で検出された多数の焼失住居のうち、3号壁穴住居跡では住居の焼失に伴い、木製跡が炭化した状態で検出されている。その出土状況は稀で、文化財としての価値は極めて高く、高妻羊成氏（奈良文化財研究所）の指導を受けながら切り取り保存を行う運びとなった。

主な作業として、現地において①バインダーを吹き炭化材を強化、②表面を紙で養生・周囲の掘削・ウレタンで梱包、③吊り上げて地山と切り離す、④反転させ密封・裏側の余土除去、という工程を行った。

その後埋蔵文化財センターに持ち帰り、④本強化（炭化材はバラロイド B72、土はOM50による）を行ったが、その間に遺構保存につきものカビ発生やヒビ割れに見舞われ、特にヒビ割れは深刻な状況を招いた。

当初では、本強化が完了した段階で再度反転させ裏側から成形・余土除去を行う予定であったが、ヒビ割れが著しく工程変更を余儀なくされた。そこで、⑤ヒビ割れに沿ってブロックに分割・個別に余土除去、⑥それぞれのブロックを接合、という工程を経て、平成18年11月現在は⑦接合箇所の補填・表面の化粧を実施中である。



写真3 炭化材と土の強化（平成16年7～9月）



写真4 ヒビ発生（平成16年10月）



写真2 切り離し（平成16年5月）



写真5 小ブロックの接合（平成18年2月）

## 第IV章 調査の記録

### 第1節 調査の概要

調査の概要を第1表に、調査した全遺構の分布を第6図に示す。

**遺構の帰属時期** 弥生時代および中世の遺構が同一面で検出されており、掘立柱建物跡や土坑は帰属時期の不明確なものも少なくなかったが、主に出土遺物により時期の推定を行った。

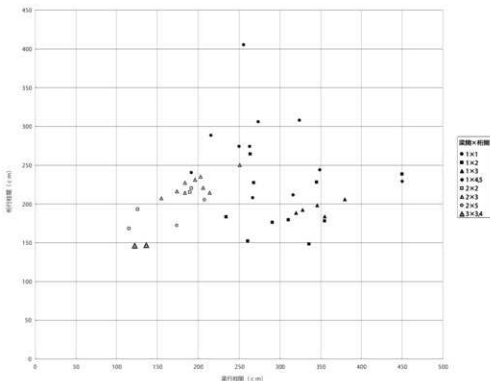
掘立柱建物跡については、梁間×桁間の規模において時期的な傾向性を把握できたので(第5図)、規模の特徴も併せて時期の推定を行った。

柱穴内出土の遺物から中世以降と判断できる掘立柱建物跡をみると、梁行×桁行が2×3間あるいは2×2間の構造がほとんどで、梁行柱間180～220cm・桁行柱間210～240cmと規格性が高い。

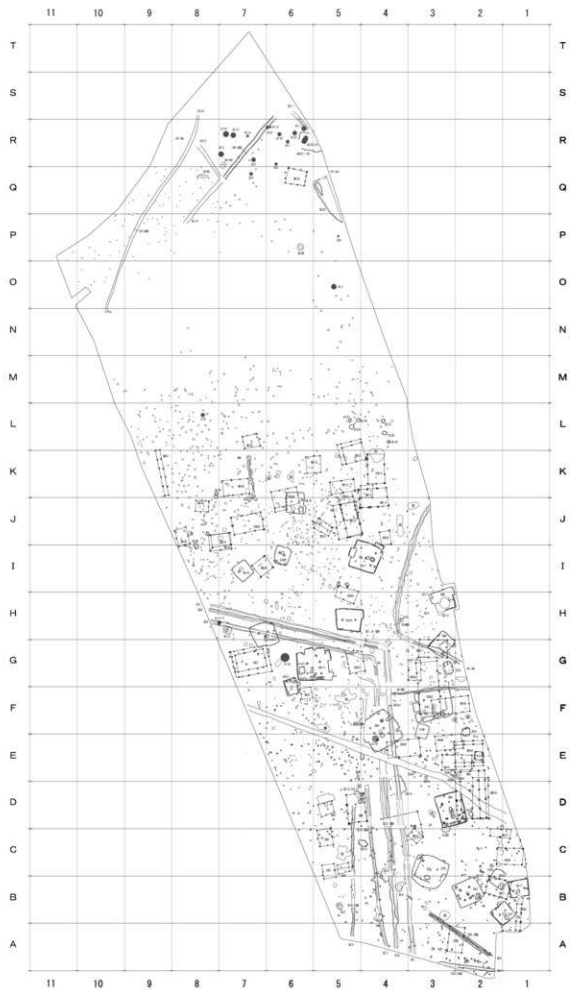
また、1×3間の構造にも一定のまとまりがあり、梁行柱間は大きくばらつくものの、桁行柱間180～210cmと規格である。遺物がなく時期推定は困難だが、前ノ田村上第1遺跡や銀座第1遺跡の中世掘立柱建物跡においても、1×3間構造は桁行柱間が200cm前後と規格であるのに対し、梁行柱間には大きなばらつきがある。本遺跡の1×3間構造もこ

第1表 調査の概要

時代	遺構	遺物
後期旧石器	—	ナイフ形石器、細石刃・核、掻器、削器、二次加工剥片、石核、剥片
縄文	集石遺構 23基	押型文土器、石器類(尖頭器、石鏃、石匙、二次加工剥片、掻器、削器、石核、剥片)
弥生～古墳	竪穴住居跡 24軒(中期末～後期初頭3、後期後葉～古墳時代前期前半21)、掘立柱建物跡6棟、土坑9基	土器(甕、甕、高坏、器台、鉢、ミニチュア土器)、土製品(防錘車、菅玉)、石器(石砲子、台石、磨石、砥石他)、鉄製品(鉄鏃、板状鉄斧、袋状工具)、木製品(駒)
中世	溝状遺構 13条、掘立柱建物跡跡 23棟、竪穴状遺構 3基、土坑 6基	土師器、須恵器(東播系等)、陶磁器(備前系・常滑系・古瀬戸系)、青磁(龍泉窯系等)、白磁、鉄製品、鉄滓



第5図 掘立柱建物跡の規模・規格



第6図 全遺構分布図 (S=1/800)

うした範囲で捉え、「第6節 中世の遺構と遺物」で扱うこととする。

一方、弥生時代の掘立柱建物跡に関しては時期認定が困難であり、独立棟持柱を有する構造や柱間の狭い構造など、当該期に特徴的な構造のみ「第5節 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物」で扱い、そうでないものは全て「第7章 その他の遺構と遺物」にて扱うこととする。

## 第2節 基本層序

これまで、宮崎県埋蔵文化財センターでは東九州自動車道関連の遺跡調査に際して、新富・高鍋地域の発掘成果をもとに基本層序を作成し、遺跡間の共通理解を図ってきた。火山灰層は略号を、火山灰降下後に発達するローム層はML、さらにローム層が土壌化した黒色土帯はMBの記号を用いて表している。また、川南地域、都農地域へと調査が北進するにつれ、それぞれの地域に応じた基本層序が更新されており、対応関係は各年度の概要報告書に詳しい。

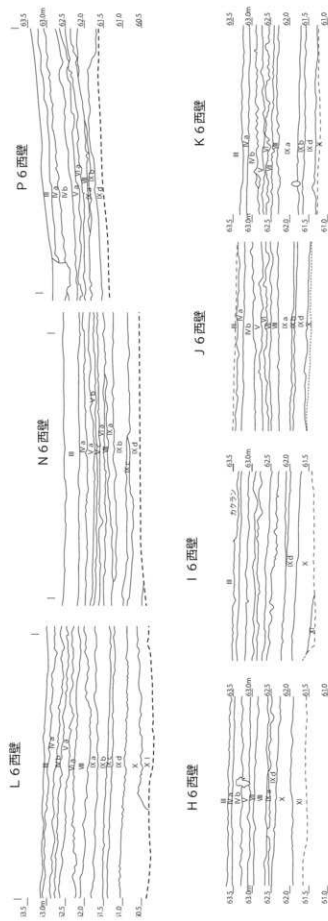
本遺跡の基本層序は以下のとおりである。「第II章第1節 地理的環境」でも触れたが、調査区は段丘面境に緩やかな谷筋が走り、この谷筋から南東に向かい緩やかに上る微丘陵となっており、この谷筋に近い箇所では局所的にSs層およびKr-Iw層が堆積している。時期が新しくなるにつれ勾配は緩やかになる。また、谷筋付近の低位におけるD層やIII層のテフラは、水成作用と考えられる薄色化が顕著にみられる。

### 湯平田遺跡（二次調査）基本層序

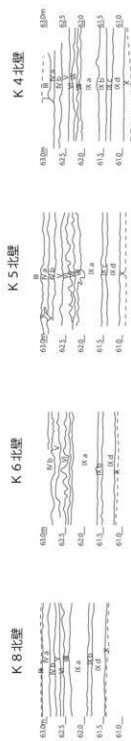
- I 表土
- II a クロボク層：黒色土（10YR1/7/1）さらさらして粘性はない。
- II b クロボク層：黒色土（10YR2/1）第II a層よりしまっていて粘性が若干ある。白色土を塊状に含む。
- III K-Ah層（鬼界アカマシ）：黄褐色土（10YR5/6）固くしまっていて、粘性はない。下部では土層は水の影響を受け、白っぽく黄色。下部は褐色が強い。
- IV a MBO層（黒褐色ローム）：黒色土（10YR1/7/1）～（10YR2/1）谷部では、第II a層より薄い色できめが細かい。若干粘性がある。さらさらして軟らかく粘性はない。白粉（ $\phi 1\text{mm}$ ）を塊状に含む。軟らかくやや粘性がある。白色透明微細粒を散在に含む。
- IV b MBO層（黒褐色ローム）：黒色土～黒褐色土（10YR2/1～10YR2/1）谷部では、ややしまりがあり、きめが粗かく粘性がある。平地では、やや固くしまっていて、粘性はほとんどない。
- V a ML1層（暗褐色ローム）：黒褐色土（10YR2/2）～（10YR3/3）ややしまりがあり粘性はない。
- V b Ss-5層（桜島噴出）：褐色土（7.5YR5/4）固くしまっている。
- V c ML1層（暗褐色ローム）：黒褐色土～暗褐色土（10YR2/2）～（10YR3/3）ややしまりがあり、粘性はない。 $\phi 1\text{mm}$ 以下のぶい褐色粒を塊状に含む。
- Va Kr-Kb相当層（小林軽石を含む層に相当）：黒褐色土～暗褐色土（7.5YR3/2）～（10YR3/4）谷部では、雄略火山山の影響から若干赤味がある。平地では、ややしまっているが軟質で粘性がある。
- Vb Kr-Kb相当層（小林軽石を含む層に相当）：オリーブ褐色土（2.5YR4/3）固くしまっている。白色の粗粒がみられる。褐色粒・ブロックを含む。
- Vc MB1層（暗褐色ローム）：暗褐色土谷部では、非常に固くしまっていて、粘性がある。平地では、ややしまっており軟質で粘性がある。黒褐色ブロック（10YR2/3）を塊状に含む。
- Vd ML2層（褐色ローム）：褐色土（10YR4/4）ややしまっており、軟質で粘性がある。 $\phi 1\sim 2\text{mm}$ の白色・褐色粒を大量に含む。
- Dx a AT層（始良Tn二次堆積）：明褐色土（10YR5/6）固くしまっている。粘性はない。褐色土（10YR4/6）にATがブロック状に混入している。下部は暗オリーブ褐色土（2.5YR3/3）で非常に固い。
- Dx b AT層（始良Tn二次堆積）：明褐色土（7.5YR5/8）粗粒でザラツラしている。谷部では、しまりはなくさらさらしている。箱根様状に堆積にも堆積している。
- Dx c AT層（始良Tn二次堆積）：（10YR4/4）非常に固くしまっている。第II b層ほどはつきりしないが、箱根様状にATが幾層にも堆積している。固結。
- Dx d AT層（始良Tn）：黄褐色土～にぶい黄褐色土（10YR5/4）～（10YR7/4）谷部では、しまりはなくさらさらしている。平地では、非常に固くしまっている。上部になるほど混入物が多くなる。平地では、粘性がある。
- X MB2層（暗褐色ローム）：黒褐色土（10YR2/2）固くしまっており、粘性がある。
- XI MB3層（暗褐色ローム）：暗褐色土（10YR3/4）固くしまっており、かなり粘性がある。褐色土が混じる。



第7図 土層観察箇所位置図



第8图 南北方向土层断面图 (S=1/100)



第9图 东西方向土层断面图 (S=1/100)

### 第3節 旧石器時代の遺物

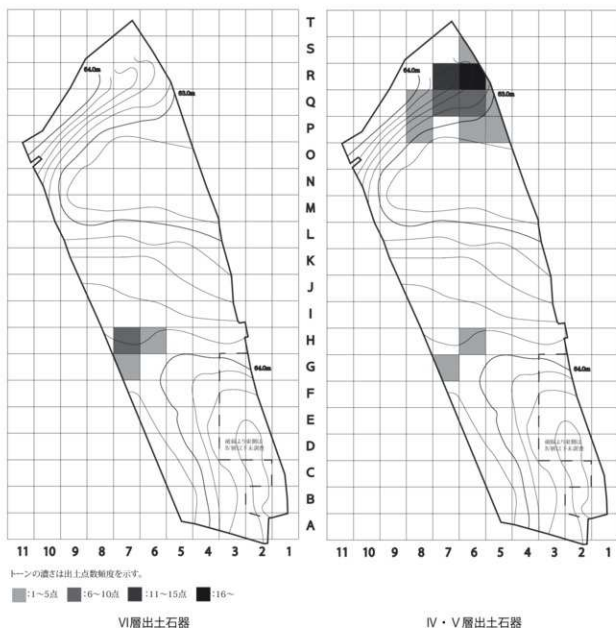
#### 1 遺物

(第11～13図、第15～17表、図版25・26)  
調査区北側のP～R5・6グリッドを中心に、VI・V層(Kr-Kb相当・ML1層)において後期旧石器時代の石器が出土した。後述する縄文時代早期を主とした包含層のIVb層(MBO下層)と連続する部分もあり文化層としては認識し得なかったため、基本層序に沿った出土層別別に図化資料を掲載する。

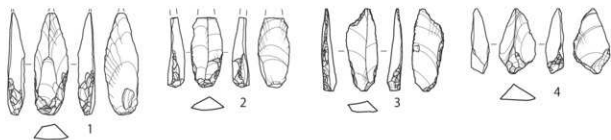
ナイフ形石器、搔器、二次加工剥片、石核や細石刃・細石刃核が出土した。石材では、流紋岩を中心に頁岩・ホルンフェルスがみられる。

ナイフ形石器では、縦長剥片素材が圧倒的に多く、鋸歯状の刃直し加工が施される二側縁加工が多いが、なかには黒曜石製の刃出形(12)もある。

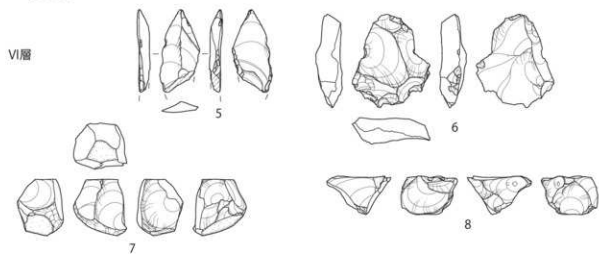
細石刃核では、畦原型(20)、船瀬型(46)のほかは、打面転移を繰り返し小型化したものが多い。黒曜石では豊岳産が多く、ほか桑ノ木津留産が認められた。



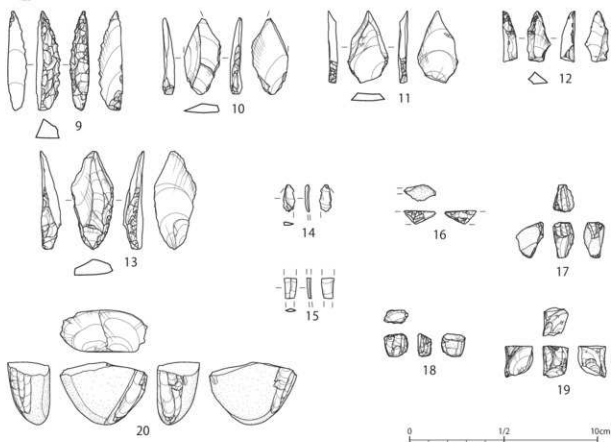
第10図 遺物分布図



VI層

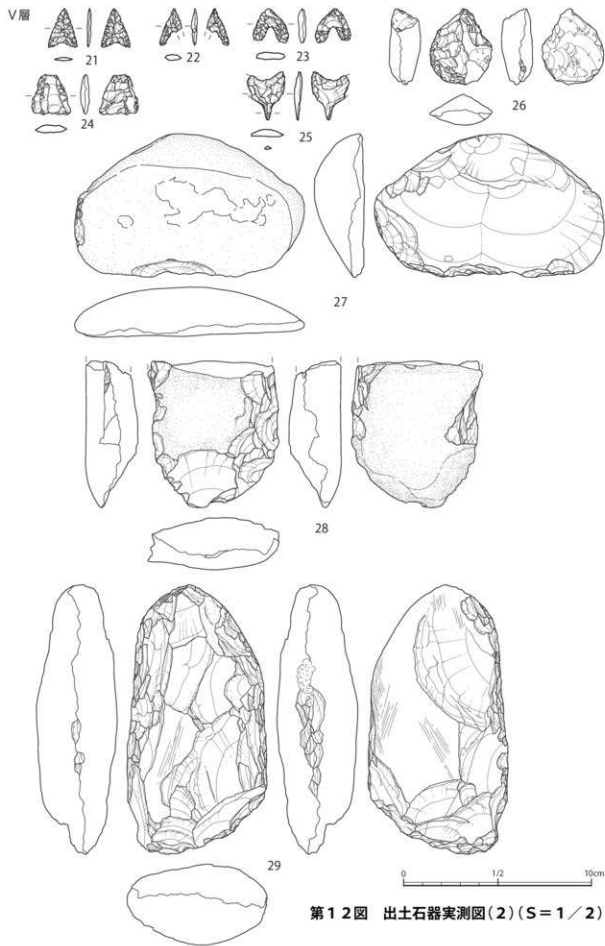


V層

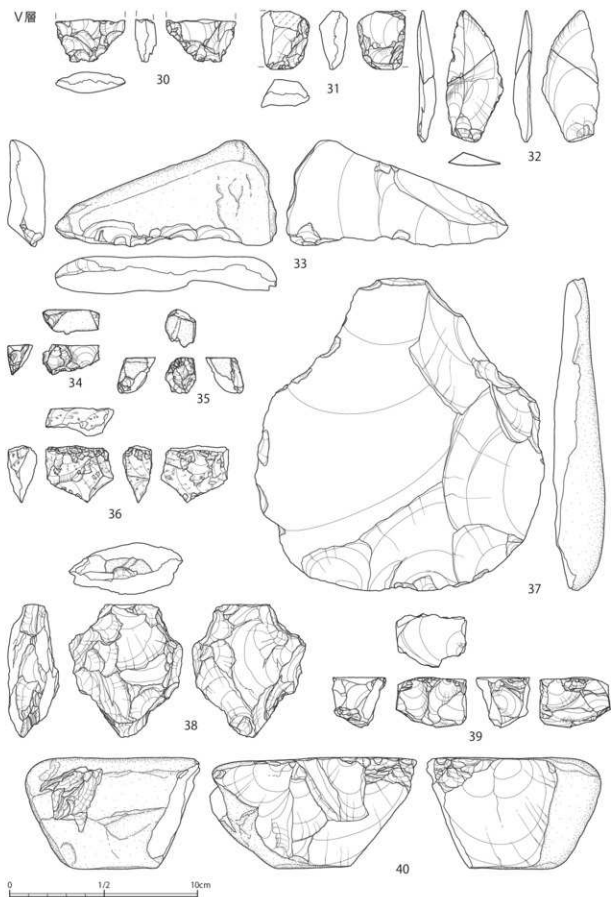


第11圖 出土石器実測図(1) (S=1/2)

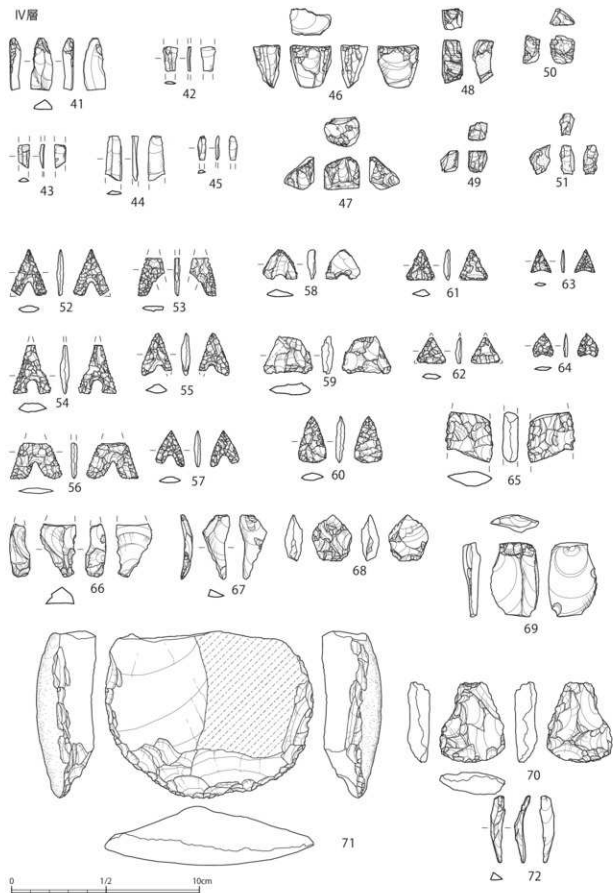




第12図 出土石器実測図(2)(S=1/2)

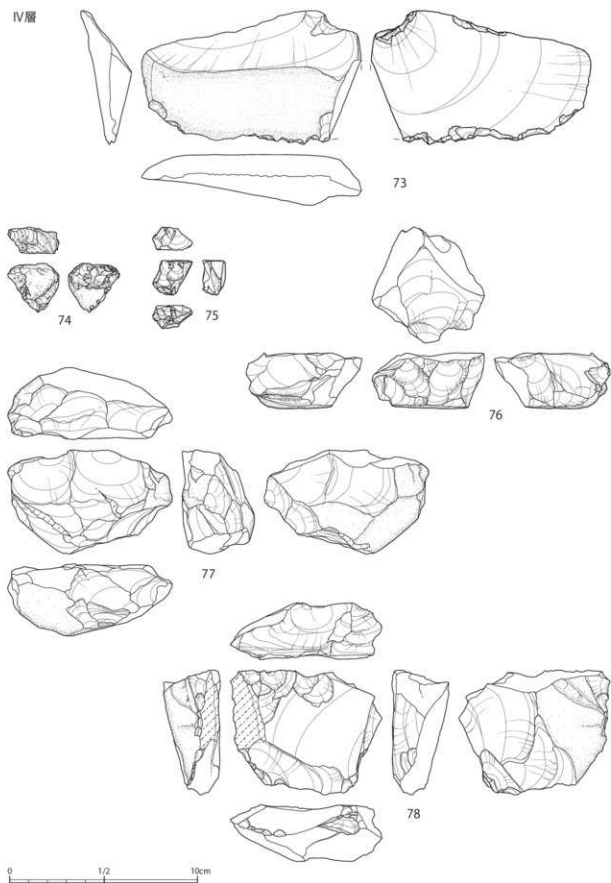


第13図 出土石器実測図(3)(S=1/2)

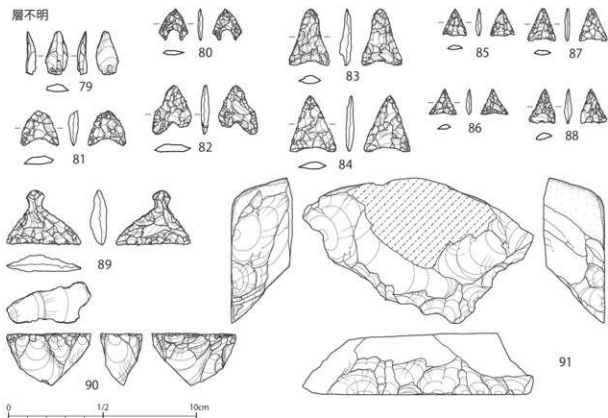


第14圖 出土石器実測図(4) (S=1/2)

IV層



第15図 出土石器実測図(5)(S=1/2)



第16図 出土石器実測図(6)(S=1/2)

## 第4節 縄文時代の遺構と遺物

調査範囲北側のP~R5・6グリッドを中心に、IV~V層において縄文時代早期が主とみられる遺物・遺構を確認した。

### 1 遺物

#### (1) 石器

(第14~16図、第16~18表、図版25・26)

IVb層を中心に、石鏃、尖頭器、石匙、搔器、削器等の石器が出土した。

石鏃には多様な形態が認められており、形状では正三角形~二等辺三角形を呈し、大きさに傾向がある。大型のものは二等辺三角形が多く、小型には正三角形が多い。また、大型・二等辺三角形には基部に抉りを有する。

石材では、チャートと黒曜石がほとんどで、小型・

三角形に黒曜石が使用されている。

なかには、製作途中とみられるものや、先端が大きく欠損した後に再度調整されたものもある。またこれら製作・調整工程に関連するとみられる碎片も多数出土している。

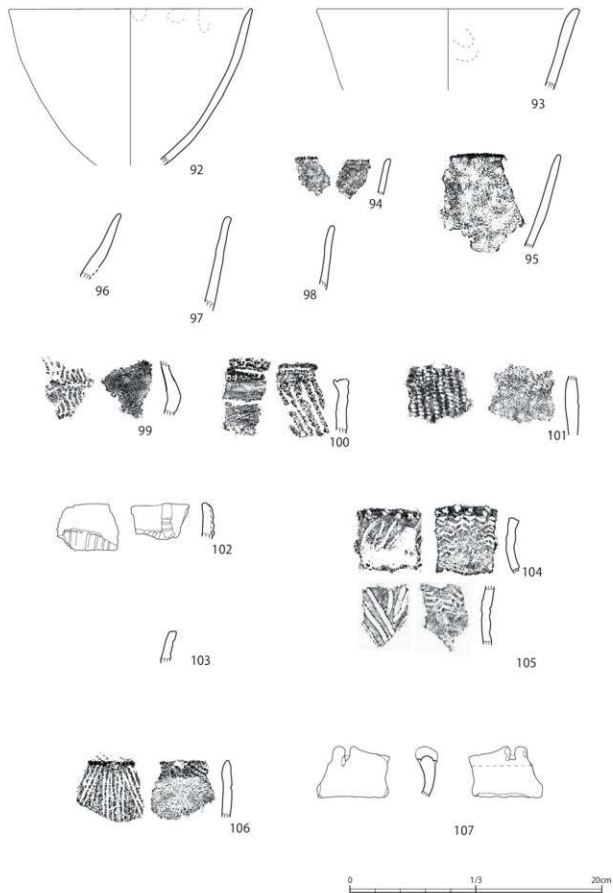
#### (2) 土器

(第17図、第25表、図版26)

土器では、小破片が多く完形に復元できるものはなかった。無文土器が多く、口縁部内外面に横ナデ調整されている。ほか、田村式や手向山式など早期後半の押型文土器や、竈式など前期土器も少量出土している。

### 2 遺構

集石遺構23基、土坑3基の遺構を検出した。集石遺構では遺物の出土もあったが土器はいずれも細片であった。



第17图 出土土器实测图 (S=1/3)

## (1) 集石遺構 (S I)

(第 18～23 図、第 9 表、図版 7～10)

集石遺構について項目ごとに記述する。**構成礫**では、礫の集中する密度と破砕具合について、便宜的にそれぞれ 4 段階を設けた。密度は「高い/やや高い/やや疎ら/疎ら」、円礫率は「円/亜円/亜角/角」の 4 段階である。

### S I 1 (第 18 図)

**分布・切り合い** 攪乱により一部を破壊されている。

**礫範囲** 検出面での礫の拡がりは攪乱により不明だが、残存部分は長軸 80cm の範囲に収まる。

**掘り込み** 長軸 93cm・深さ 26cm を測る。

**構成礫** 掘り込みの上位にあたり全体的に密度はやや高い。破砕した 10cm 長ほどの角礫が大半を占める。

**埋土の堆積状況** 掘り込みの上位に構成礫があり、中位まで炭化物・炭化材を微量に含む。

### S I 2 (第 18 図)

**礫範囲** 検出面での礫範囲は長軸 128cm・短軸 89cm を測る。

**構成礫** 密度はやや高い。5～10cm の円礫が目立つ。

### S I 3 (第 19 図)

**礫範囲** 検出面での礫範囲は長楕円形ブランを呈し、長軸 108cm・短軸 40cm を測る。

**構成礫** 密度は疎ら。5～10cm 長の円・亜円礫が多い。

### S I 4 (第 19 図)

**礫範囲** 検出面での礫範囲は円形ブランを呈し、長軸 85cm・短軸 72cm を測る。

**構成礫** 密度は高い。5～10cm 長の円礫が目立つ。

**遺物** 縁辺寄りで無文土器片 1 点、他に 10cm 長の敲石 2 点が出土した。

### S I 5 (第 19 図)

**礫範囲** 検出面での礫範囲は円形ブランを呈し、長軸 73cm・短軸 63cm を測る。

**掘り込み** 円形ブランで長軸約 70cm・短軸約 60cm・深さ 13cm を測る。

**構成礫** 密度は高い。比較的大きい礫が多く、10cm 長前後の亜円・角礫が目立つ。

**遺物** 縁辺で土器片 1 点が出土した。

### S I 6 (第 19 図)

**礫範囲** 検出面での礫範囲は不定形ブランを呈し、長軸 50cm・短軸 48cm を測る。

**構成礫** 密度はやや高い。5cm 長前後の円礫が多い。

### S I 7 (第 20 図)

**礫範囲** 検出面での礫範囲は円形ブランを呈し、長軸 118cm・短軸 106cm を測る。

**掘り込み** 円形ブランで長軸約 150cm・短軸約 110cm・深さ 22cm を測る。

**構成礫** 密度は高い。5～10cm 長の円・亜円礫が多い。

### S I 8 (第 19 図)

**礫範囲** 検出面での礫範囲は不定形ブランを呈し、長軸 97cm・短軸 83cm を測る。

**構成礫** 密度は高い。5cm 長前後の円・亜円礫が多い。

### S I 9 (第 19 図)

**礫範囲** 検出面での礫範囲は不定形ブランを呈し、長軸 85cm・短軸 50cm を測る。

**構成礫** 密度はやや疎ら。5～10cm 長の亜角・角礫が多い。

**遺物** 縁辺で土器片 1 点が出土した。

### S I 10 (第20図)

**礫範囲** 検出面での礫範囲は円形プランを呈し、長軸90cm・短軸71cmを測る。

**掘り込み** 不整形円形プランで長軸136cm・短軸108cm・深さ34cmを測る。

**構成礫** 密度は高い。5cm長前後の円・亜円礫が多い。

**遺物** 石核2点(第16図90、91)、剥片1点、7cm長の敲石1点が出土した。91は礫範囲の縁辺で、90は構成礫の中心部分下位での出土である。

### S I 11 (第20図)

**礫範囲** 検出面での礫範囲は円形プランを呈し、長軸110cm・短軸90cmを測る。

**構成礫** 密度は高い。5cm長前後が多く、円・角礫を同等に含む。

**遺物** 縁辺で土器片1点(無文系か)が出土した。

### S I 12 (第20図)

**礫範囲** 検出面での礫範囲は円形プランを呈し、長軸98cm・短軸77cmを測る。

**構成礫** 密度は高い。5～10cm長の亜円・亜角礫が多い。

### S I 13 (第21図)

**礫範囲** 検出面での礫範囲は不整形プランを呈し、長軸49cm・短軸34cmを測る。

**構成礫** 密度はやや疎ら。10cm長以上の亜角・角礫が多い。

### S I 14 (第21図)

**礫範囲** 検出面での礫範囲は不整形プランを呈し、長軸58cm・短軸41cmを測る。

**構成礫** 密度はやや疎ら。5～10cm長の亜角・角礫と、10cm長以上の円・亜円礫を同等に含む。

### S I 15 (第21図)

**礫範囲** 検出面での礫範囲は円形プランを呈し、

長軸120cm・短軸115cmを測る。

**構成礫** 密度はやや高い。5～10cm長の亜円・角礫を同等含む。

**遺物** 縁辺で土器片1点、他に5～7cm長の棒状・円状の敲石4点が出土した。

### S I 16 (第22図)

**礫範囲** 検出面での礫範囲は不整形プランを呈し、長軸127cmを測る。

**構成礫** 密度はやや疎ら。10cm長の円・亜円礫が多い。

### S I 17 (第22図)

**礫範囲** 検出面での礫範囲は円形プランを呈し、長軸87cm・短軸86cmを測る。

**掘り込み** 深さ15cmを測る。

**構成礫** 密度は高い。5～10cm長の円・亜円礫が多い。

### S I 18 (第22図)

**礫範囲** 検出面での礫範囲は円形プランを呈し、長軸190cm・短軸160cmを測る。

**構成礫** 密度は疎ら。5cm長前後の亜角・角礫が多い。

### S I 19 (第21図)

**分布・切り合い** SA5の床面で検出。SA5竪穴部掘削時に上部構成礫の一部を除去されている可能性がある。

**掘り込み** 円形プランで長軸150cm・短軸137cm・深さ30cmを測る。

**構成礫** 密度は高い。5～10cm長の亜円・角礫が多い。

**配石** 掘り込み中央に40cm長の扁平な円礫があり、その周囲に10～20cm長の円・亜円礫が見られる。

### S I 20 (第23図)

**礫範囲** 検出面での礫範囲は不整形プランを呈し、長軸100cm・短軸45cmを測る。



**構成礫** 密度はやや高い。5～10cm長の亜円・亜角礫が多い。

**所見** S I 22・23の構成礫の一部である可能性もある。

### S I 21 (第23図)

**礫範囲** 検出面での礫範囲は不整形プランを呈し、長軸133cm・短軸83cmを測る。

**構成礫** 密度はやや疎ら。5～10cm長の亜円・亜角礫が多い。

**所見** S I 22・23の構成礫の一部である可能性もある。

### S I 22 (第23図)

**掘り込み** 円形プランで長軸157cm・深さ34cmを測る。

**構成礫** 密度は高い。10cm長以上の亜円～角礫が多い。

### S I 23 (第23図)

**掘り込み** 円形プランで長軸115cm・深さ28cmを測る。

**構成礫** 密度は高い。5～10cm長の亜角・角礫が

多い。

## (2) 土坑 (S C)

(第24図、第10～11表、図版10)

土坑について以下の項目ごとに記述する。

### SC89 (第24図)

**形態・規模** IVb層検出。検出プラン・床面プラン共に円形。長軸140cm・短軸131cm・深さ17cm。壁はやや開きつつ立ち上がる。

### SC90 (第24図)

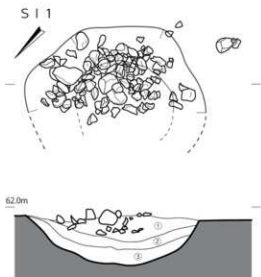
**形態・規模** IVa層検出。検出プラン・床面プラン共に円形。長軸250cm・短軸150cm(反転復元)・深さ54cm。壁はやや開きつつ立ち上がる。

**遺物** 炭化材(15cm長)

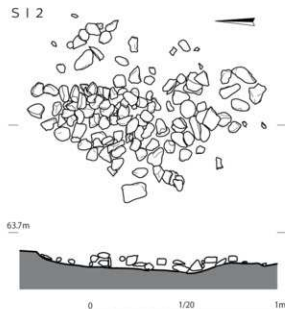
### SC100 (第24図)

**形態・規模** IVa層検出。検出プランは楕円形、床面プランは円形。長軸276cm・短軸224cm・深さ40cm。壁は緩やかに立ち上がる。

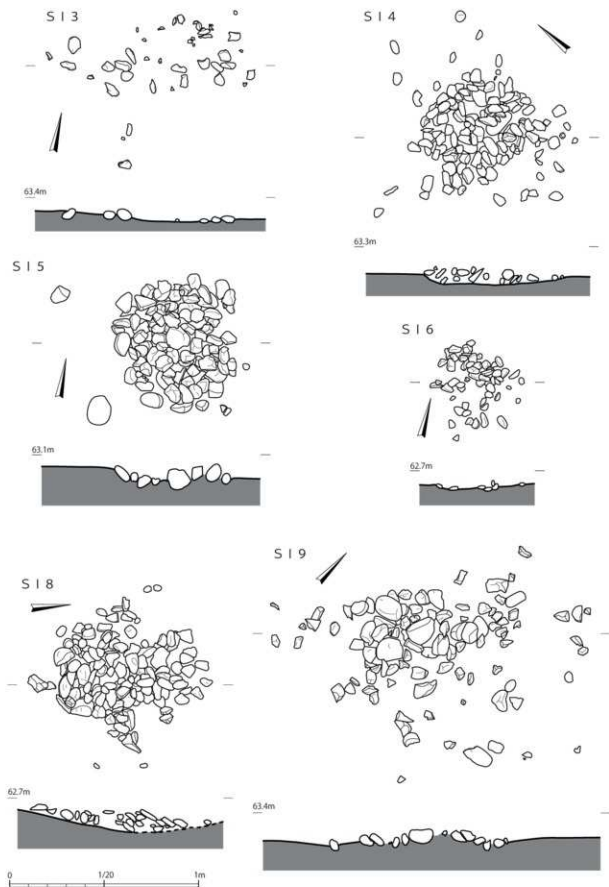
**埋土の堆積状況** 黒褐色土。締まり非常に強い。中位には炭化物が多量に含まれる。



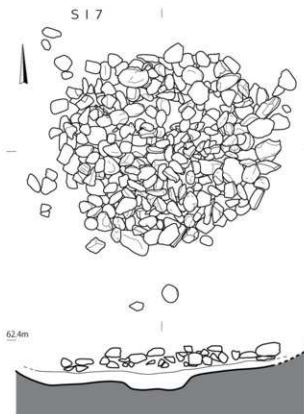
S I 1  
①黒褐色土(Hue10YR1/3)。しまり強い、粘性やや強い。炭化物を微量に含む。  
②暗褐色土(Hue10YR3/3)。しまり強い、粘性強い。炭化物粒を微量に含むが、より少ない。  
③鈍い黄褐色土(Hue10YR4/3)。しまり強い、粘性強い。周囲のM.I.層より暗い色調。



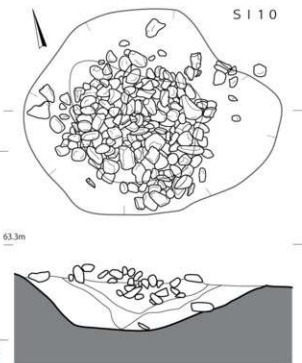
第18図 S I 1、2実測図 (S=1/20)



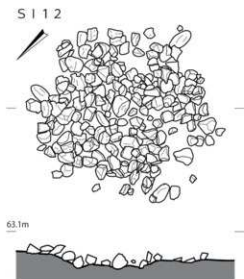
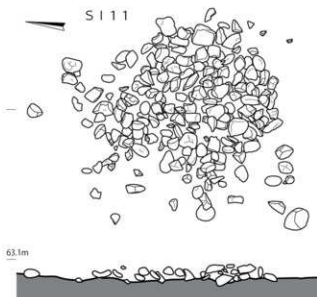
第19図 S13~6、8、9実測図 (S=1/20)



**S17**  
 ①黒色土 (10YR2/1) サラサラしていて粘性はない。棕色、白色粒を僅かに含む。中央部に多くの炭化物を含む。  
 ②黒褐色土 (10YR3/1) やや固くしまっている。粘性ややある。黒色土が混在。中央部のみ炭化物を抽出。

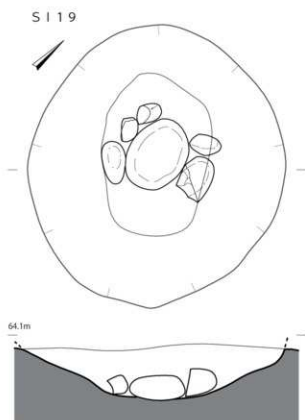
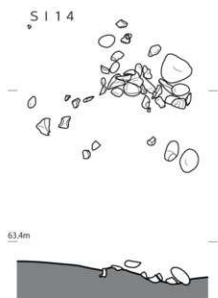
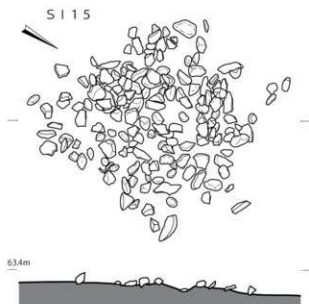
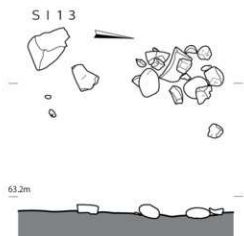


**S110**  
 ①暗褐色土 (10YR3/3) しまりやや弱い。粘性やや強い。炭化物 (φ 3mm) を抽出に含む。  
 ②にぶい暗褐色 (10YR4/3) しまりやや強い。粘性やや強い。炭化物 (φ 3mm) を抽出に含む。  
 ③褐色土 (10YR4/4) しまりやや弱い。粘性強い。炭化物 (φ 3mm) を微量に含む。

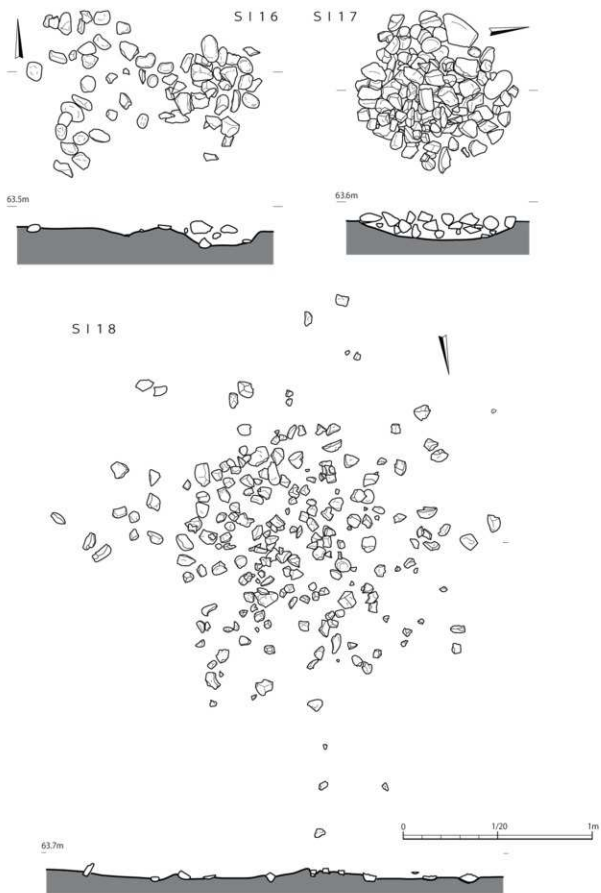


0 1/20 1m

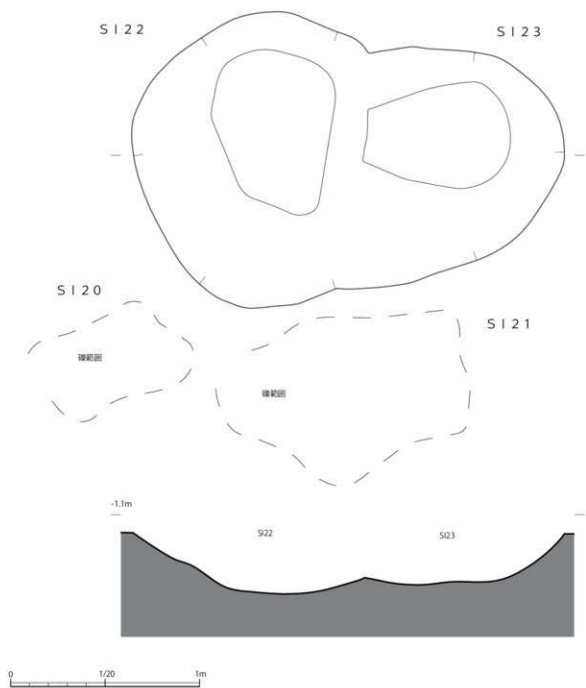
第20図 S17、10~12実測図 (S=1/20)



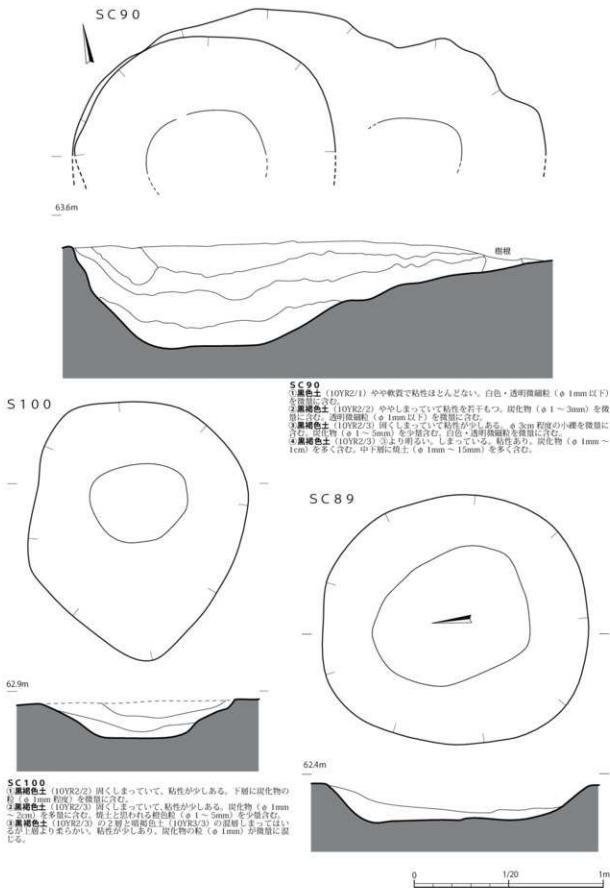
第21図 S113~15、19実測図 (S=1/20)



第22図 SI 116~18実測図 (S=1/20)



第23図 SI 20~23実測図 (S=1/20)



第24図 SC89、90、100実測図 (S=1/20)

## 第5節 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物

### 1 遺構

Ⅲ層上面において弥生時代～古墳時代の竪穴住居跡24軒、掘立柱建物跡6棟、土坑9基の遺構を検出した。

#### (1) 竪穴住居跡(SA)

(第25～51、57～80図、第26～34、36表、

図版10～19、26～33)

竪穴住居跡について項目ごとに記述する。**形態・規模**は床面(貼床面)を基本とする。また**遺物出土状況**では、竪穴部埋土での出土層位を便宜的に分別し、床直のほか、床直より10cm上位までを下層・10～20cmまでを中層・20cm以上を上層とした。**遺構の時期**は出土土器の出土状況とその編年観(松永2004)をもとに検討した。

#### SA1 (第26、57、85図)

**位置・切り合い** 北東隅中央付近に土坑が位置するも切り合い関係は不明。

**形態・規模** 床面は方形で、コーナー部分は直角に近い。長軸382cm・短軸379cm・深さ30～35cm、面積約14㎡を測る。壁は4辺ともにほぼ垂直に立ち上がる。

**柱穴** 2基検出(P1・2)。略円形プランで、直径22～25cm・深さ55～68cmを測る。柱穴間の芯々距離は1.4mを測る。

**貼床** 床面全体に貼床が施されており、厚みは8～12cmを測る。北半がやや厚い。壁際には施されず15～20cmの間隔がある。

**壁溝** 部分的だが、床面4辺のおよそ6割に施されている。深さは4cm前後を測る。

**張り出し・間仕切り・ベッド遺構** なし。ただ、北半側、特に北西側に僅かな高まりが見られ、南半側との高低差5～8cmを測る。

**炉** 1基検出(SC2)。ほぼ中央で棟軸より70cm

ほど南側に位置する。略楕円形プラン・断面皿形を呈し、長軸73cm・短軸55cm・床面からの深さ5～9cmを測る。

**炉接土坑** 1基検出(SC1)。炉の南側に接するが切り合いはない。略円形プラン・断面逆台形を呈し、長軸94cm・短軸92cm・床面からの深さ25cmを測る。炉側の壁面は埋蔵な段を有しつつ緩やかに立ち上がる。埋土上層で土器断片、底面近くで台石(333)が出土した。

**屋内土坑** 北西隅に1基検出(P4)。略円形プラン・断面不整形で長軸32cm・深さ14cmを測り、底面より4cm上位で幾の小片が出土した。

**埋土の堆積状況** 全体的に平坦に堆積している。

**遺物出土状況** 床面出土の遺物は概して少ない。炉SC2の際で浅鉢(112)、北側壁際に高環の柱部(116)、砥石(327)、南西側に凹石(331)や礫が数点出土している。

一方、住居北半を中心に、床面から5～10cm浮いた埋土下層で高環の裾部(119)や深鉢(113)、器台柱部(114)、凹石(329・330)、砥石(328)、鉄鏝(482・483)が、床面から10～30cm浮いた埋土中～上層では、器台柱部(115)、高環/器台の裾部(118)、甕の底部(109・111)、土製管玉(117)、石庵丁(326)、磨製石鏝(324)、袋状工具(484)が出土した。このうち109はSA埋土上層出土の小片と接合している。

これら住居北半を中心とした埋土中層～上層の遺物は、住居廃絶後の廃棄等の流れ込みと考えられる。

**遺構の時期** 時期の推定に有効な遺物は少なく確定的ではないが、119など床直～下層出土の高環/器台裾部は後期後葉～終末期(松永2・3期)の様相を呈しており、住居の廃絶もこれに近い時期が想定される。

#### SA2 (第27、58、86図)

**位置・切り合い** 北東隅にSC12が位置し、切り合い関係は不明。

**形態・規模** 床面は方形プランで、長軸530cm・短軸490cm・深さ39～50cm、面積約26.0㎡を測る。

**柱穴** 4基検出(P1～4)。略円形～略楕円形





第25図 遺構分布図 (S=1/500)

ランで、直径 34 ～ 53cm・深さ 82 ～ 102cm を測る。柱穴間の芯々距離は、東西方向は P13 間 214cm・P24 間 215cm、南北方向は P12 間 212cm・P34 間 225cm を測る。また、P1・P3 の上端周辺に貼床土とは異なる焼土を含む範囲を確認した。これら重複するような柱穴形態から建て替えが行われた可能性が考えられる。

**貼床** 北東壁際と南西壁際の床面に部分的に貼床が施され、厚みは 1 ～ 8cm を測る。

**間仕切り・張り出し・ベッド状遺構** 非定形的だが、東壁に張り出し 1 箇所を有する。三角形プランで、幅 446cm・奥行 56 ～ 20cm を測り、不明瞭ではあるが段状を呈する。上述の建て替えに伴い拡張された可能性がある。

**炉** 1 基検出 (SC3)。ほぼ中央部分に位置する。焼土の範囲は、略楕円形プラン・断面皿形を呈し、長軸 130cm・短軸 53cm・深さ 8cm を測る。

**炉接土坑** 1 基検出 (SC1)。他の住居のそれと接するのに対し、この土坑は 30cm 程離れているが、形態・規模的に類似しており同様の類と見なされる。楕円形プラン・断面逆台形で、長軸 118cm・短軸 92cm・深さ 53cm を測る。埋土中位に焼土が最大 29cm 厚で堆積しているが、その上位には黒色土が堆積している。直上に糞の底部片と炭化材が出土した。

**屋内土坑** 3 基検出 (SC2・4・5)。SC2 は北西隅に位置し、直径 51cm・深さ 51cm を測る。SC4 は西壁際中央に位置し、円形プラン・断面皿形で、直径 44cm・深さ 19cm を測る。SC5 は西壁際中央の SC4 の北隣に位置し、楕円形プラン・断面皿形で、長軸 51cm・短軸 42cm・深さ 20cm を測る。SC6 は南東隅に位置し、三角形プラン・断面皿形で、長軸 136cm・短軸 115cm・深さ 23cm を測る。底面より 15cm 程浮いた状態で 12cm 長・厚み 2cm の灰白色の粘土塊が検出された。

**埋土の堆積状況** 床面上には竪穴住居跡の焼失に伴って多量の焼土・炭化材が検出された。壁際は三角堆積がみられ、その上はレンズ状堆積となる。

**焼失状況** 上述の焼土は厚み最大 14cm を測り、主に住居西半分と西壁際に多量に分布する。逆に炭

化材は、主に住居東半分と東壁際に多量に分布する。これら炭化材は、分布状況からほとんどが垂木材と考えられ、住居北東部分では幅 12cm 程の板状の垂木材が複数出土した。また、中央部分よりやや西側で、住居の南北軸に沿う直径 16cm の炭化材が出土した。この炭化材は、15 本程の垂木材がほぼ直交して載っており、梁または桁であると考えられる。これら 20 点について樹種判定を行った (第 V 章)。また、焼土と炭化材に挟まれるように、炭化材に直交する状態で繊維質植物遺体が多数箇所で見出されており、種別を特定するため植物組織体分析を行った。

**遺物出土状況** 床直出土の遺物は主に南半から磨石 (343) や糞 (120)・深鉢完形 (126) 等の土器片が出土し、北東壁際寄りで鉢 (485)、張り出し北部分より木質の付着した鉢 (486) が出土した。

下層でも、主に南半から磨石・砥石 (341・342)・石庖丁 (335) や鉢完形 (125・127)・高環 (128) 等の土器片が出土し、北東壁際に凹石 (340) が出土した。

中層～上層では、張り出し中央壁際より磨石 (336)、北東壁際寄りで磨石 (338) を出土し、南西隅より糞 (121) が上層より出土した。

ほか埋土層位不明だが、二重口縁部・縁部片 (122・124)・糞 (123)・砥石・磨石 (337・339)・石庖丁 (334)・鉄片が出土している。

これらのうち、南壁寄りでは床直の台石・完形鉢や土坑周辺の糞片等は、腐蝕部には存在したものと考えられる。

**自然科学分析** 上述の繊維質植物遺体は、植物珪酸体分析の結果からススキ属の茎葉に由来すると判断された。

**遺構の時期** 頸部の屈曲が緩やかな糞 (120) や、布留系とみられる高環 (128) など、床直・下層出土の土器は古墳時代前期 (松永 5・6 期) の様相を呈し、住居の廃絶もこの時期と考えられる。

## SA3 (第 28 ～ 30、59、61、87 図)

**形態・規模** 床面は D 字状プランで、長軸 716cm・短軸 675cm・深さ 40cm、面積約 48.3m<sup>2</sup> を測る。

**柱穴** 3基検出 (P1～3)。炭化木製品検出箇所  
の部分的な切り取りのため、P3は部分的な検出であ  
った。また本来は4本柱構造であったと考えられ  
るが、切り取りにより未確認である。略円形プランで、  
直径20～17cm・深さ60～63cmを測る。柱穴間  
の芯々距離は、東西方向はP2・3間321cm、南北方  
向はP2・1間273cmを測る。

**貼床** 貼床面はほぼ平坦だが南西半が若干低い。  
全体が厚に4cm前後と薄いが、南半は掘方底面が隆ん  
でおり10cm程度の厚みがある。

**張り出し・間仕切り・ベッド状遺構** 西壁から南  
壁にかけてと東壁中央にベッド状遺構を有する。長  
さ800cm・奥行110cm程度・床面との比高差7～  
12cmを測るが、南西隅では奥行50cmと狭くなる。  
KAh層の地山を掘り残すことで形成されており、貼  
床は施されていない。

東壁中央は幅170cm・奥行80cm程度の範囲で、  
床面との比高差5～7cm程度である。貼床を周囲  
より厚く盛ることで形成されているが、明瞭な段状  
ではない。

**炉** 明確な炉は確認できなかったが、SC1は炉の  
可能性がある。

**屋内土坑** 4基検出 (SC1～4)。SC1はほぼ中央  
に位置し、楕円形プラン・断面皿形で、長軸84cm・  
短軸50cm・深さ2cmを測り、上面に破砕した礫が  
出土した。SC2は南央に位置し、略円形プラン・断  
面皿形で、長軸128cm・短軸86cm・深さ4cmを測る。

SC3・4は北西隅に位置し、SC3は略円形プラン・  
断面逆台形で長軸52cm・短軸45cm・深さ18cm、  
SC4は円形プラン・断面皿形で長軸52cm・短軸  
45cm・深さ18cmを測る。

**埋土の堆積状況** 北～西側を中心に、三角堆積が  
みられる。また、南西半を中心に、竪穴住居跡の焼  
失に伴う焼土と炭化材・炭化物が検出され、その後  
はレンズク堆積となっている。

**焼失状況** 焼土は厚み最大15cmほどで、住居全  
体にまばらに分布する。炭化材は主に焼土のまとまり  
の縁辺から出土し、厚みのある部分の真下から出  
土することは少なかった。また炭化材は、南西側中  
央では床直だが、壁寄り、特に北側では床面より10

～20cmほど深く。中央では小片が多く雑然として  
いるが、壁寄りでは放射状に分布するものもあり垂  
木と考えられる。

**遺物出土状況** 床直出土の遺物は南央壁寄りにみ  
られ、甕(130)・深鉢(132)、台石・砥石(348・  
349)などが出土している。また、東央壁際の高まり  
に載るような状態で、鋤・炭化材が壁際へ平行し  
て出土した。

下層では南央壁際の甕(129)・高環(134)や磨  
石(346)が出土している。また中層では、北東寄  
りに台石が、北西壁寄りに鉄鏝(488)を含めた鉄  
が散在していた。

これら下層以上の出土遺物、特に南壁際付近は、  
住居跡絶後における廃棄などの流れ込みである可能  
性が高い。

ほか、土製の紡錘車(144)や手捏土器(133)  
が出土している。

**自然科学分析** AMS法による放射性炭素年代測  
定を、木製鋤、土器付着の炭化物、フローテーショ  
ン法により住居床面の埋土から選別採取された種実  
種子(イチイガシ子葉片)の3点について行った。  
得られた補正14C年代値(年BP)は、鋤が1930  
±40、甕(130[注記-63他])に付着した炭化物が  
1850±40、種子No.7が1780±40であった。

また樹種判定の結果、鋤はコナラ属アカガシ亜属、  
④・⑥はシャシャンボ、⑤はブナ科、@アワブキ属、  
①はヌルデであった。垂木と思われる2点はC13が  
クリ、C14がコナラ属コナラ節であった。

フローテーション法により、床面埋土から選別採  
取された種実を特定した結果、イネ4点・イチイガ  
シ2点・ヤマモモ1点・ナズナ1点が検出された。

**遺構の時期** 下層出土の甕(129)や高環(134)  
など古銅時代初頭～前期(松永4・5期)の様相が  
強い。この時期までに住居は廃絶されたと考えられ  
る。

**所見** 鋤の出土状況について、木質遺物は一般的  
に低湿地等の限られた環境でしか残存しないなか  
で、住居内で出土したことは特筆される。

またその評価は、得てして農耕に関する機能や環  
境に直結されがちであるが、水田域での出土比率が

少なく、土木工具・掘削具的な意味合いが強いとする見解もあり注目される。(山口 2005)。

## SA4 (第31・32、60、88図)

**位置・切り合い** 東半をSB6に、北東隅をSE10に切られる。

**形態・規模** 床面は長方形プランで、コーナー部分は直角を呈する。長軸706cm・短軸562cm・深さ40cm、面積約39.7㎡を測る。壁は4辺ともにほぼ垂直に立ち上がる。

**柱穴** 7基検出(P1～7)。但し、7基の位置関係や規模から、P1・3・5・7が主柱穴でP2・6は副次的な柱穴と考えられる。主柱穴は略円形プランで、直径24～41cm・深さ81～93cmを測る。柱穴間の芯々距離は、東西方向はP1-7間320cm・P3-5間272cm、南北方向はP1-3間322cm・P7-5間325cmを測る。

4基の主柱穴はそれぞれ、2つの柱穴が重複するような形態を呈し、一方は深さ80～90cm程度、片方は40～70cm程度である。これら重複するような形態から、建て替えが行われた可能性が考えられる。P1内では石廬丁(353)が出土した。

副次的柱穴は略円形プランで、直径19～26cm・深さ20～45cmを測る。

**貼床** 全体的に平坦で厚み5cm程度。

**壁溝** 北西隅を除いた壁際で確認された。深さは4～5cm。

**炉** 2基検出(SC12・13)。床面のほぼ中央に位置する。SC12は不整な楕円形プランで断面皿形を呈する。幾つかの片が重複しているように見られたが、明確に線引きできるものではなかった。長軸132cm・短軸75cm・床面からの深さ5～8cmを測る。SC13は不整な略円形プランで断面皿形を呈し、長軸57cm・短軸43cm・床面からの深さ12cmを測る。焼土の割合はSC12より少なく、SC12に切られている。蛇紋岩製の小玉(350)が底面より3cmほど浮いて出土した。

**炉接土坑** 1基検出(SC1)。炉SC13の南側に接するが切り合い関係にはない。略楕円形プラン・断面逆台形を呈する。長軸110cm・短軸88cm・住居

床面からの深さ23cmで方塊状やや深い。

遺物は、底面より7cmほど浮いた状態で土器片・磨石・台石の破片が出土した。

**屋内土坑** 南西隅に12基検出(北～南西～南東へ、SC11、3・6・7、8・16・9・10・4・2、15、5)。いずれも略円形プランを呈する。

SC11は北側壁際に位置し長軸31cm・短軸26cm・深さ5cmの窪み状である。

SC3・6・7は南西隅壁際に沿って連続して切り合って位置し、真中のSC6が両端のSC3・7を切る。SC6は長軸59cm・短軸55cm・深さ18cm、SC3は長軸55cm・深さ24cm、SC7は深さ18cmで、いずれも断面ボウル状を呈する。SC6では浅鉢が出土し(141)、住居南央およびSC99底面で出土した小片と接合している。

SC8・16・9・10・4・2は南側壁際に沿ってそれぞれが近接して位置する。SC8は長軸38cm・短軸35cm・深さ8cm、SC16は長軸53cm・短軸41cm・深さ10cm、SC9は長軸30cm・短軸27cm・深さ4cmで、いずれも断面皿形を呈する。SC10は長軸29cm・短軸24cm・深さ4cmで断面皿形、SC4は長軸37cm・短軸33cm・深さ11cmで断面ボウル状、SC2は長軸46cm・短軸34cm・深さ16cmで断面逆台形の二段掘りである。SC2では底面で磨石(356)や土器片が出土している。

SC15・5は南東隅壁際に沿って近接して位置する。SC15は2つの土坑が重複しているように見えたが切り合い関係不明。長軸118cm・深さは北側16cm・南側10cmで断面ボウル状を呈する。SC5は長軸49cm・短軸4cm・深さ39cmで断面ボウル状を呈する。

**埋土の堆積状況** 住居床面で焼土と炭化材がまばらに分布する。壁際には三角堆積がみられ、その上はレンズ状堆積となる。

**焼土状況** 焼土は厚み最大20cmほどで、住居床面の四方壁際寄りに分布する。炭化材は主に焼土のまとまりの縁辺から出土し、厚みのある部分の真下から出土することは少なかった。焼土は量的に少ない。また、炭化材は比較的片が多いものの放射状の分布が確認できた。

**遺物出土状況** 床直出土の遺物は概して少なく、住居南側に偏る。南側で甕底部(136)や壺口縁部が、中央に磨石(357・358)・台石(364)・砥石(352)などが出土したのみである。また、住居北側寄りの台石は、住居焼失の際の被熱等によるのか他の要因かは不明だが、赤化・破砕した状態であった。

下層では、甕底部(138)・壺口縁部(135)・深鉢(139・140)がみられ、135・140など、焼土の内部や焼土・炭化材の上からの出土もあった。

埋土中～上層では、住居中央～北半で鉈や鉄鍔、袋状工具(485・489・490)が出土した。

また出土層位は不明だが、南半にて石庵丁2点(354・355)・磨製石鏃(351)が出土した。

**遺構の時期** 時期の推定に有効な遺物は少ないが、136の甕底部は後期後葉～終末期(松永2・3期)の特徴を持つ。確定的ではないが、この時期までに住居は崩壊されたと考えられる。

**所見** SC99は当初、SA4を切る遺構とみられていたが、それぞれの床/底面出土の土器片が接合したことからは、他の攪乱を考えない限り、SC99とSC6が叩印に開口していたことが考えられる。さらにSC99はSA4の付属施設である可能性も同時に想定される。

## SA5 (第33・34, 62, 89図)

**位置・切り合い** 東半をSE1に、中央をSE2に、北西をSE3に、南西隅をSE10に切られる。南西側の主柱が付近でSI19を切る。

**形態・規模** 床面は方形で、コーナー部分は直角を呈する。長軸764cm・短軸698cm・深さ35cm、面積約53㎡を測る。壁は4辺ともにほぼ垂直に立ち上がる。

**柱穴** 6基検出(P1～6)。但し、6基の位置関係からP1～4が主柱穴で、P5・6は棟持柱等の副次的な柱穴と考えられる。主柱穴は略円形プランで、直径27～42cm・深さ79～96cmを測る。柱穴間の芯々距離は、東西方向はP1-2間290cm・P4-3間281cm、南北方向はP1-4間296cm・P2-3間298cmを測る。副次的柱穴は略楕円形プランで、直径24～35cm・深さ70～86cmを測る。

主柱穴P2については、貼床面ではSC66のプランしか認識できず、P2がSC66を切るような状況は確認できなかった。またSC66は、部分的ではあるが焼土・炭化材を被っており、後述の住居焼失以前に掘削されたものと判断できる。さらにP2の埋土は、柱穴的な類(柱跡跡+周囲の硬化したブロック混土)ではないことも併せて考えると、SC66はP2を切る「柱抜き取り」に伴う掘削であると考えられる。

P5・6では、底面から20cmほど上位までしまりの非常に強い黒褐色土層が検出されており、主柱穴とは様相を異にする。

**貼床** 西半を中心に施されており、厚みは4～9cm、南西側に行くほど薄い。

**張り出し・間仕切り・ベッド状遺構** 東側に張り出し3箇所(＝間仕切り2箇所)、西側に張り出し1箇所を有する。東側3箇所の張り出しの規模はおおよそ、北側が幅200cm・奥行120cm、中央が幅235cm・奥行90cm、南側が幅140cm・奥行80cmを測る。各張り出し間の間仕切りは、北側が幅70cm・南側が幅50cmを測る。

明顯なベッド状遺構ではないが、東半、特に張り出し箇所が周辺に比べ緩やかに高まっている。

**炉** 1基検出(SC45)。床面のほぼ中央で副次的柱穴を結ぶ軸より40cmほど南側に位置する。略楕円形プラン・断面皿形を呈し、長軸88cm・短軸69cm・床面からの深さ10cmを測る。

**炉接土坑** 1基検出(SC44)。炉の南側に接するが切り合いはない。略台形プラン・断面逆台形を呈する。長軸102cm・短軸91cm・住居床面からの深さ28cmを測る。炉側の壁面は垂直に近いが反対の南側のみ緩やかに立ち上がる。

埋土中に焼土層が見られるが、住居の焼失に伴う焼土層と連続している。

遺物は、底面より2～6cmほど浮いた状態で磨石(372)・台石(370)が出土。他に土器片が出土しており150や155と接合している。

**屋内土坑** 北東隅に1基検出(SC65)。不整円形プランで長軸57cm・深さ21cmを測り、底面でミニチュア甕(154)が出土した。

**埋土の堆積状況** 床面上には整った住居跡の焼失に

伴う多量の焼土と少量の炭化材・炭化物を含む層がみられる。また、貼床とは別のしまりの強い層が平坦に分布している。その上位は壁際よりレンズ状に堆積しており、自然堆積的な様相を呈する。

**焼失状況** 上述の焼土は厚み最大24cmを測り、住居床面の中央付近に環状に分布する。また、焼土の分布と重なるように、主に焼土の下部から炭化材が検出された。しかし炭化材は主に、焼土のまとまりの縁辺から出土し、厚みのある部分の真下から出土することは少なかった。これら炭化材は、その分布状況からほとんどが垂木材と考えられる。

中央付近では、炭化材に向きを同じくして載る状態で繊維質植物遺体が検出されており、種別を特定するため植物珪酸体分析を行った。

**遺物出土状況** 床面出土の遺物は南半に多い。南東側張り出し部分の壁際では、甕(147)が倒置状態で出土した。また同様に、西側張り出し部分の壁際でも小型甕(149)が倒置状態で、主柱穴P2の際で高環の受部(156)が倒置状態で、その横に甕(148)が横転している。これらの中で少なくとも156は、柱部以下が同遺構内で出土しておらず、この環部のみが意図的に伏せられた可能性が高い。

さらに中央西寄りでは、二重口縁壺(152)の頸部から上の部分が正置状態で、胴・底部が2mほど離れ、正置状態で出土した。この頸部を境とした上下部分は、それぞれが分割された状態で、156と同様に意図的に配置された可能性が高い。

尚、これら意図的に配置されたと思われる土器は、全体に焼土を厚く被っており、住居の焼失する以前に配置されたであろうことは言える。

床直では他に、壺(153・150・151)や円筒形の甕(155)、磨製石鏃(366)、磨石4点(373・374、376・377)が出土している。

**自然科学分析** 上述の繊維質植物遺体は、植物珪酸体分析の結果からススキ属の茎葉に由来すると判断された。

**遺構の時期** 甕(147)や高環(156・157)は後期後葉～終末期(松永2・3期)にあたり、この時期に住居は廃絶されたと考えられる。

**所見** 柱抜き取りの痕跡からは、住居の焼失が住

居使用時に偶発的に起こったものではなく、住居廃絶後に起こったものと考えられる。また、完形土器の少なさからは、廃絶時の「持ち出し・片付け」を想定せざるを得ない一方で、土器の意図的な配置、特に壺(152)の分割の在り方は、住居の使用時から日常的にそうあったものとは考えにくく、廃絶時に配置されたものと推定される。

住居の焼失は、その状況から廃絶後間もない時機であったと推測され、柱抜き取り、土器等の持ち出し・片付け・意図的な配置が一連するようなく、住居の廃絶に関わる焼却処分であったと考えたい。

## SA6 (第36、61図)

**位置・切り合い** SA7に近接する。

**形態・規模** 床面は方形プランで、長軸278cm・短軸213cm・深さ18cm、面積約59㎡を測る。

**遺物出土状況** 床直出土の遺物はなく、床面より10cm前後深く下へ中層で土器片等が出土しており、壺(146)や深鉢(145)などが南西隅にみられる。ほかに、剥片(371)や磨石2点(371、375・378)が出土している。

**遺構の時期** 時期を推定できる遺物は少ないが、他の整った住居跡と同時期と想定しておく。

**所見** 平面規模が小さく、柱穴や炉が見られないなどの特徴から、建物ではなかった可能性もある。

## SA7 (第35・36、63、90図)

**位置・切り合い** 北端をSE7に、西半をSB43、南東半をSB45に切られる。

**形態・規模** 床面は方形プランで、長軸832cm・短軸660cm・深さ44cm、面積約549㎡を測る。

**柱穴** 4基検出(P1～4)。略円～楕円形プランで、直径17～42cm・深さ30～48cmを測る。柱穴間の芯々距離は、東西方向はP1-2間376cm・P3-4間381cm、南北方向はP1-3間290cm・P2-4間305cmを測る。P2・4周囲の貼床面上には、ML1層土主体の土がみられ、柱穴掘削時の排土(あるいは抜き取り時か)と考えられる。

**貼床** 貼床面はほぼ平坦だが南西半が若干低い。南半は掘方底面が窪んでおり10cm程度の厚みがあ

る。

**貼床** 貼床面はほぼ平坦だが中央が若干低い。全体的に4cm前後と薄く、ベッド状遺構の部分で10～15cm程度である。

**張り出し・間仕切り・ベッド状遺構** 西壁に張り出し3箇所を有し、いずれも内部がベッド状遺構となっている。また、ベッド状遺構は南壁から東壁にかけてもみられ、西壁南側の張り出しとの間と南壁中央に間仕切りを有する。

西壁の張り出しは、掘方底面の地上が掘り残され周辺の掘方よりも緩やかに高まっている。そこに貼床が施され明確な段状を呈する。

**屋内土坑** 4基検出(SC4、1、2・3)。SC4は南側に位置し、楕円形プラン・断面皿形・長軸108cm・短軸71cm・深さ13cmを測る。SC1はSC4の南側に接し、南壁際のベッド状遺構およびSC2の北側に接する。略楕円形プラン・長軸113cm・短軸82cm・深さ15cmを測る。甕(162)の小片が出土しており、周辺床直の破片およびSA8の下層出土の底部片と接合した。

SC2・3は南壁側中央のベッド状遺構と重複するように位置する。SC2は略長方形プラン・断面方形・長軸135cm・短軸95cm・深さ20cm、SC3は略楕円形プラン・断面方形・長軸90cm・短軸70cm・深さ38cmを測る。

**埋土の堆積状況** 床面中央を中心に竪穴住居の焼失に伴う焼土と炭化材・炭化物を含む層がみられる。壁際に三角堆積がみられ、その後はレンズ状堆積となっている。

**焼失状況** 焼土は厚み最大15cmほどで、量的には少なく住居中央にまとまる。炭化材も比較的少量で、主に焼土のまとまりの縁辺から出土し、小片が多く雑然としている。また、中央北西寄りでは焼土の下かつ貼床上に、厚み約5cmの硬化層が約1㎡にわたり検出されているが、何に由来するかは不明である。

**遺物出土状況** 床直では、住居中央の南西寄りに土器小片が密集しており、住居の廃絶後間もない時機で、かつ焼土を被っていたことから焼失前に廃棄されたものと考えられる。甕(158・161・162)・壺(165・

164・163)・浅鉢(166)や砥石(385)などがあり、162はSA8の中央部下層出土の破片と接合する。ほかに、SA13および同SC30出土の大型壺(231)と接合している。

下層では鉄鏝(492)が、中～上層では、甕(159・160)や石庖丁(380)が出土した。159はSA9の床直出土の小片と接合している。

さらに、特筆される遺物としてSE7に切られる箇所では板状鉄斧(494)が出土した。

**遺構の時期** 床直出土の158をはじめ、甕はいずれも古墳時代初頭～前期前半(松永4・5期)の特徴を持つ。この時期に住居は廃絶されたと考えられる。

## SA8 (第37、65・66、91図)

**位置・切り合い** 西半をSB47に切られる。

**形態・規模** 床面は若干長方形プランで、コーナー部分は直角～隅丸を呈する。長軸455cm・短軸366cm・深さ30～38cm、面積約17㎡を測る。壁は4辺ともやや垂直に立ち上がる。

**柱穴** 1基検出(P3)。略方形プランで直径21cm・深さ53cmを測る。

**貼床** 南側中央が薄く4～5cm、その周辺部に北半分が厚く12cmを測り、南半より高まる。

**張り出し・間仕切り・ベッド状遺構** 北半にベッド状遺構を有する。貼床は南側中央が薄く、逆にその周辺部が8cmほど高まっている。

**屋内土坑** 南西隅に2基検出(SC1・2)。南側壁際に沿っている。いずれも略円形プラン・断面皿状で浅く、単なる床面の窪みである可能性も否定できないが、ここでは屋内土坑としておく。SC1は長軸52cm・深さ14cmを測り、炭化材が出土した。SC2は長軸48cm・深さ11cmを測る。

**埋土の堆積状況** 西側を除いた壁際に三角堆積が見られ、特に北東隅に顕著である。また、南東隅と北西隅では多量の土器片が集中していた。

**遺物出土状況** 床直出土の遺物は概して少ない。床直では、中央東寄りでは甕(168・169)と少量の土器細片が出土し、埋土下層では中央および北側壁際に甕/壺の底部(171・179)が出土している。こ

のうち 171 は SA9 と接合、また SA7 の 162 と接合する破片もあった。

また台石や 20cm 長の礫が多く出土しており、南半を中心台石（床直：396・394、下層：390・393・395）や石核（391）、20cm 長の礫が散在する。

一方で、埋土中へ上層を中心に、上述 2 箇所の土器片集中が検出されている。これらのうち南東隅部分は、住居の検出時すでに壁際に土器片が出土しており、そこから住居内部の床面に下るよう多量の上器片が集中していた。なかには甕（170・172・175・173・177・176・174）・鉢（181）・台石（397）・砥石（389）・敲石（390）などが含まれる。

北西隅部分では、埋土中へ下層で数個体分の土器片が集中していた。壺（178）・深鉢（180）・高杯の受へ柱部（182）である。このうち 178 は、底へ胴部周囲が上方向に向かって打ち欠かれたように大きく剥離している。

これらの土器片集中は、いずれも床面から浮いており、特に南東部分では壁際の三角堆積に載る状態にあった。住居廃絶後、壁際が埋没し、かつ中央部まで大きく埋没しない程度の際機に、壁穴部の外側から廃棄されたと考えられる。

そのほか、中層で石庖丁（386）・刺片（388）などが出土している。

**遺構の時期** 廃絶時に伴うと考えられる土器は少なく住居の廃絶時期は明らかでない。一方、廃棄された甕（170・172・175）や高杯（182）は、古墳時代前期後半（松永 6・7 期）の特徴を持つ。また SA7 の 162 との接合が確認されており、遅くとも SA7 の廃絶以前に SA8 自体は廃絶し、ある程度埋没していたと想定したい。

## SA9（第 38、66、93 図）

**位置・切り合い** 北西隅を SC17 に、南西隅を SC16 に切られる。

**形態・規模** 床面は方形プランで、コーナー部分は直角を呈する。長軸 423cm・短軸 418cm・深さ 24～32cm、面積約 18㎡を測る。

**柱穴** 2 基検出（P1・2）。床面では柱礎跡のみ検出された。掘方底面での柱が掘方は略円形プランで、

直径 28～30cm・深さ 64～71cm、柱穴間の芯々距離は 238cm を測る。柱礎跡の周囲の土は貼床と同質であり、貼床施工以前に柱が埋没され、貼床施工と同時に立柱されたと考えられる。

**貼床** 南半が薄く 5cm 前後、北半は 15cm と厚く高まる。

**壁溝** 東側中央～南側中央にかけて施されている。深さは 6cm 前後を測る。

**張り出し・間仕切り・ベッド状遺構** 北半両側に張り出しを、北半にベッド状遺構を有する。2 箇所の張り出しの規模はおおよそ、北東側が幅 175cm・奥行 30cm、北西側が幅 205cm・奥行 45cm を測る。

ベッド状遺構は北半部分の貼床を厚くすることで形成されており、中央部分で若干北側に傾ける。

**炉** 住居の焼失に伴う焼土との区別が困難で不明確だが、床面中央南寄りに焼土の混入する範囲が確認されておりその可能性がある。

**埋土の堆積状況** 住居中央部分の床面上には、壁穴住居跡の焼失に伴う焼土と炭化材・炭化物を含む層がみられる。その上に K-ah 層ブロック土と炭化材・炭化物を含む層が部分的に堆積し、さらに上に黒色土のレンズ状堆積がみられる。

**焼失状況** 焼土は厚み最大 10cm ほどで、住居床面の中央付近に分布する。また、炭化材は主に焼土のまとまりの縁辺から出土し、厚みのある部分の真下から出土することは少なかった。炭化材のほとんどは床直だが、北壁寄りには床面より 10～20cm ほど浮いていた。その分布状況から殆どが垂木材と考えられる。

**遺物出土状況** 床直出土の遺物は概して少なく、住居南側に集中する。南側壁際に壺（185）・深鉢（188）・砥石（404）・磨石（400）・敲石（402）・凹石（401）が、中央部のベッド状遺構に囲まれた部分で砥石（399）・敲石（403）が、北西側張り出し部分で石庖丁（398）が出土している。このうち SA7 中層出土片と接合するものもある（159 葉）。

一方、床面より 10cm ほど深く中層では、中央部分で高杯の柱部（190）が出土したほか、北東隅で甕の口縁部（183・184）が出土している。焼土・炭化材の分布と重なっておらず明確ではないが、お



そらくは焼却後に廃棄されたものと考えられる。このうち、SAS 中央部下層出土の 171 と接合する破片もある。

**遺構の時期** 廃絶層に伴うと考えられる土器は少なく、また時期を推定できるような器種ではないため、住居の廃絶時期は明らかでない。一方、竪穴部埋没中に廃棄された甕 (183・184) や高環 (190) は、古墳時代初頭～前期前半 (松永 4・5 期) の特徴を持つ。この時期までに住居は廃絶されたと考えられる。

## SA10 (第 39、67、95 図)

### 位置・切り合い

**形態・規模** 床面は方形プランで、長軸 517cm・

短軸 437cm・深さ 20～37cm、面積約 226m<sup>2</sup>を測る。

**柱穴** 2 基検出 (P1～2)。略円形～円形プランで、直径 33～41cm・深さ 64～83cm、柱穴間の芯々距離は 275m を測る。

**貼床** 床面全体に施されており、厚みは 3～11cm を測る。ほぼ平坦だが南東側が若干窪む。

**壁溝** 南壁中央の一部分を除き、後述の張り出し部分にも確認された。深さは 4～7cm を測る。

**間仕切り・張り出し・ベッド状遺構** 東壁北際に張り出し 1 箇所を有する。幅 163cm・奥行 16～35cm を測る。床面との比高差はない。

**埋土の堆積状況** 床直で少量の焼土・炭化材が検出された。壁際には三角堆積がみられ、その上はレンズ状堆積となる。

**遺物出土状況** 床直出土の遺物は南東側にまとまって出土した。南壁際中央に台石 (421)・砥石 (417・414)・凹石 (420)・打欠石錘 (413) などの石器や、壺 (195) などの土器片が集中して出土した。このうち磨石 (419) は、421 の台石に接する甕 (191) の内部で出土している。また、西壁際では石庖丁 (410)・石庖丁未製品 (412)、北壁寄りでは石庖丁 (411)・甕 (193)、北東寄りでは鉄片が出土した。193 は SA13 出土の破片と接合する。

埋土下層～中層で甕 (192) などの土器片が散在して出土、SA13 出土の高環 (237) と接合する破片もあった。

ほか出土層位は不明だが、甕底部 (194)・壺底部 (196)・深鉢?底部 (197・198)・高環 (199) が出土している。196 は SA13 出土片と接合する。

**自然科学分析** AMS 法による放射性炭素年代測定を、炭化材、土器付着の炭化物、フローテーション法により住居床面の埋土から選別採取された炭化米の 3 点について行った。得られた補正 14C 年代値 (年 BP) は、炭化材 No.3 が 1800 ± 40、甕 (192 注記 30 他) に付着した炭化物が 1860 ± 40、種子 No.8 が 1820 ± 40 であった。

また、床面よりイチイガシ・コナラ属等のドングリが出土したほか、床面より 2～3cm の厚みでサンプリングした埋土からフローテーション法により選別採取された種実を同定した結果、イネ 12 点・イチイガシ 5 点・コナラ属 6 点・カヤツリグサ科 2 点・タデ属 1 点・アカネ科 1 点・オナモミ 6 点・不明種実 9 点が検出された。

**遺構の時期** 時期を推定できる遺物は少ないが、廃絶時には存在していたとみられる甕 (191) や下層 192 は古墳時代初頭～前期前半 (松永 4・5 期) の特徴を持つ。この時期に住居は廃絶されたと考えられる。

## SA11 (第 41・42、68・69、96 図)

### 位置・切り合い

**形態・規模** 床面は方形プランで、長軸 582cm・

短軸 570cm・深さ 31～46cm、面積約 332m<sup>2</sup>を測る。

**柱穴** 4 基検出 (P1～4)。略円形～円形プランで、直径 28～43cm・深さ 70～98cm を測る。柱穴間の芯々距離は、東西方向は P1～2 間 325cm・P3～4 間 330cm、南北方向は P1～4 間 307cm・P2～3 間 280cm を測る。

**貼床** 床面全体に施されている。厚みは 2～8cm 程度だが、北西と南西隅は部分的に厚く～13cm を測る。

**壁溝** 西壁の張り出し付近を除いた壁際に確認された。また、北壁東側の張り出し部分にも確認された。深さは 4～10cm を測る。

**間仕切り・張り出し・ベッド状遺構** 北壁東際と西壁中央の 2 箇所に張り出しを有し、それぞれの内

部がベッド状遺構となっている。

北壁東際の張り出しは、幅 186cm・奥行 66cm・床面との比高差 14cm を測る。張り出し内部のベッド状遺構を形成する際に、壁溝を埋めベッド状遺構の粘床を施していることが確認された。

西壁中央の張り出しは、幅 184cm・奥行 55cm を測る。ベッド状遺構は粘床を厚くすることで形成されているが、明瞭な段状ではない。張り出し部分から住居内部の床面にまで延び、幅 198cm・奥行 112cm・床面との比高差 8cm を測る。

**炉** 2 基検出 (SC 4・SC5)。SC 4・5 は住居のほぼ中央に位置する。SC4 は略楕円形プラン・断面皿形、長軸 88cm・短軸 65cm・深さ 9cm を測り、その西側に隣接して略円形プラン・断面皿形、長軸 43cm・短軸 34cm・深さ 8cm を測る。埋土に炭化物を多量に含む遺構を呈する。SC5 は略楕円形プラン・断面皿形、長軸 68cm・短軸 54cm・深さ 5cm を測る。

**炉接土坑** 1 基検出 (SC1)。炉の西側に接するが切り合いはない。隅丸方形プラン・断面逆台形で、長軸 120cm・短軸 85cm・深さ 33cm を測る。

遺物は、底面より浮いた状態で砥石や土器が多数出土。

**屋内土坑** 2 基検出 (SC2・3)。SC2 は東壁際の南側に位置し、円形プラン・断面逆台形で、直径 45cm・深さ 12cm を測る。底面で直径 2.5cm・長さ 25cm の炭化材が 1 点のみ出土。SC3 は北東隅に位置し、略円形プラン・断面皿形で、長軸 46cm・短軸 40cm・深さ 8cm を測る。

**埋土の堆積状況** 壁際には三角堆積がみられ、その上はレンズ状堆積となる。

**遺物出土状況** 床直出土の遺物は、主に南東から南西の中央付近に見られ、甕 (210)・浅鉢 (217・218)・磨石 (437)・砥石 (427・429)・台石 (438) 等が出土し、西壁中央の張り出しでは、壺胴部 (211)・高環脚部 (203) が出土した。また、南壁際中央寄りでは鉄鏝 (495) が、北東部より鉄鏝基部? が出土している。下層では、中央付近より甕 (206)・甕/甕 (214) が出土した。

中層～上層では、南壁際中央より中央に向かって流れ込むように、上層から甕 (205・215)・甕/甕

(212)・砥石 (432)・台石 (439) 等が、中層から高環 (202)・浅鉢 (216)・二重口縁壺口縁部小片・甕/甕 (225)・石庖丁 (425・423・424) 等が出土した。また、中層では南東隅より甕 (208)・深鉢 (221・219) が出土している。

ほかに土層位不明だが、二重口縁壺口縁部 (200・201)・甕/甕 (213)・深鉢 (223・224・220・222)・高環 (204) や磨石 (433・436・434)・砥石 (431)・石庖丁 (422)・砥石 (428)・火打石 (435) が出土している。

**遺構の時期** 時期を推定できる遺物は少ないが、床直の高環 (203) や壁穴部埋没後の廃棄とみられる数個体の甕は後期後葉～終末期 (松永 2・3 期) の特徴を持つ。この時期に住居は廃絶されたと考えられる。

## SA12 (第 43、70 図)

**位置・切り合い** SA13 に近接する。

**形態・規模** 床面は長方形プランで、コーナー部分は隅丸を呈する。長軸 305cm・短軸 228cm・深さ 10cm、面積約 7㎡ を測る。

**柱穴** 1 基検出 (P1)。主柱穴は略円形プランで、直径 31cm・深さ 88cm を測る。

**壁溝** 全体的に壁際が低い。北から東側で明瞭に確認できた。深さは 3cm 程度。

**屋内土坑** 4 基検出 (SC18～21)。全て SA12 との切り合いを確認できていないが、SA12 との関連性も考えられるためここに記述する。

SC21 は北西隅に位置し、円形プラン・断面方形で、長軸 34cm・短軸 31cm・深さ 38cm を測る。

SC18 は南西隅に位置し長軸 100cm・短軸 60cm・深さ 15cm で断面逆台形である。底面より 10cm ほど浮いて壺の胴～底部片 (226) などの土器片が出土した。

SC19 は東東際に位置し短軸 88cm・深さ 13cm・断面皿形で、SA12 との重複部分で磨石 (408・407) が出土した。SC20 は南東隅に位置し短軸 53cm・深さ 10cm 程度・断面皿形で、SA12 との重複部分で高環部片 (228)・砥石 (406) が出土している。

**遺物出土状況** 床直では住居中央で甕/壺の底部

(227) や台石 (409) ・礫が出土した。

**遺構の時期** 時期の推定に有効な遺物は少なく確定的ではないが、土坑出土土器を含めても古銅時代初頭(松永4期)を下るような特徴はみられない。SA12はこの時期以前に廃絶されたと想定しておく。**所見** 比較的規模が小さく1本主柱で、炉を有しない点などから、簡易な構造の建物であったと想定される。

## SA13 (第45～47, 71, 97図)

### 位置・切り合い

**形態・規模** 床面は方形プランで、コーナー部分は直角を呈する。長軸700cm・短軸642cm・深さ24～28cm、面積約449㎡を測る。壁は4辺ともにほぼ垂直に立ち上がる。

**柱穴** 4基検出(P1～4)。P1としたものは、他に比べ掘方が著しく狭く、また樹根のように凹凸が著しかった。しかし、SA13を定型的な4本主柱構造と見た場合、位置的には主柱のある範囲であり、また周辺を精査しても柱穴的なものは確認できなかったためP1とした。

P1は不整形プランだが、他はいずれも略円形プランで、直径23～32cm・深さ49～65cmを測る。柱穴間の芯々距離は、東西方向はP1-2間267cm・P4-3間302cm、南北方向はP1-4間204cm・P2-3間250cmを測る。

P2について、貼床面ではSC30しか検出できず、P2がSC30を切るような状況は確認できなかった。SC30内でも他の柱穴に共通するようなKAh層上～ML1層土混交の埋土は確認されなかった。またその上層は土器片や10cm長のKAh層土ブロックにより塞がれる恰好となっており、以上のような状況からP2がSC30に切られると判断した。

これらSC30の土器片のうち、南側の一群は231と同一個体とみられる。同じくSC30内北側の一群は、当SA13南東半下層出土の一群およびSA7南西寄りの床面に密集する小片一群と同一個体とみられる。

**貼床** 南央が低くなっており、その周囲、特に北半が高まっている。西側の壁寄りでは18cmと厚く高まり、南東半は薄く7cm程度である。

また、南央の一定範囲にはML1層土主体の掘削土が貼られており、周囲の貼床とは色調が大きく異なる。この貼床土は後述のSC29下半の③層埋土に類似しており同一の可能性はある。

**壁溝** 南東半を除いた壁際で確認された。深さは4～11cm。

**張り出し・間仕切り・ベッド状遺構** 北側に張り出し3箇所(=間仕切り2箇所)、北東隅と南東隅の2箇所、計5箇所に張り出しを有する。

北側3箇所の張り出しの規模はおおよそ、西側が幅120cm・奥行60cm、中央が幅185cm・奥行70cm、東側が幅190cm・奥行60cmを測る。間仕切りは、西側が幅55cm・東側が幅50cmを測る。

ベッド状遺構は、明瞭ではないものの南側に確認されており、長さ490cm・幅50cm程度を測る。SC29の掘削土を盛って形成されたと考えられる。

また、ベッド状遺構とは見なし難いが、住居西壁側で、SC29に北接する範囲の貼床土に、ML1層土主体の土が6～8cmの厚みで平坦に載り周辺より高まっており、やはりSC29の掘削土に相当すると考えられる。

**炉** 3基検出(SC28・38・33)。SC28・38は住居のほぼ南央に、SC33は北央壁寄りに位置する。SC28は略円形プランで断面皿形、長軸62cm・短軸53cm・深さ8cm、SC38は略楕円形プランで断面皿形、長軸65cm・短軸54cm・深さ5cm、SC33は略楕円形プランで断面皿形、長軸52cm・短軸36cm・深さ5cmを測る。

**屋内土坑** 6基検出(SC57, 60・59, 58・39・40, 29)。SC57は北東隅の張り出し内に位置し、略円形プラン・断面ボウル形で、長軸40cm・短軸26cm・深さ17cmを測る。底面で石瓦丁未製品(448)が出土した。

SC60・59は南央壁際に沿って位置する。SC60は不整形円形プラン・断面皿形で、長軸110cm・短軸78cm・深さ28cm、SC59は略円形プラン・断面ボウル状で、長軸56cm・短軸50cm・深さ15cmを測る。

SC58・39・40は南央東寄りの壁際に沿って位置する。いずれも略円形プラン・断面ボウル状で、SC58は長軸57cm・短軸48cm・深さ30cm、SC39

は長軸 48cm・深さ 15cm、SC40 は長軸 47cm・深さ 25cm を測る。

SC29 は西側壁際の南寄りに位置し、貼床面で検出された。間丸長方形プラン・断面逆台形で、長軸 152cm・短軸 128cm・深さ 64cm (遺物群の検出面までは 22cm)、を測る。掘方底面より 40cm 上位までは MBO 層～ML1 層土のブロックが多く混じる暗褐色土が均質に堆積しており (③層)、意図的に埋め戻した可能性が高い。

その上面はほぼ平坦で、北側壁際に直径約 50cm の範囲に最大 20cm の厚みで粘土が検出された。その粘土にもたれるようにほぼ完形の甕が、南側壁には甕 (229)・台石 (448) が出土した。

**埋土の堆積状況** 住居南央の低い部分にフラットな堆積がみられ、その上はレンズ状堆積となる。

**遺物出土状況** 床直出土の遺物は殆どなく、主に南側壁寄りに小片が散らばるのみである。南央の付近で甕片 (230)・深鉢 (243)・高環脚部片 (240)、磨石 (446) が、中央東寄りて鉄鍔? (496)・鉄片が出土している。230 は SC29 内の甕と接合する。

対して、下～中層では少なからず出土しており、南央および北半の一群がある。甕・壺 (231・232・233・236・235)・高環環部 (237)・深鉢・手摺鉢 (244・242・241)、石庖丁および未製品 (441・443)・台石 (447)、鉄製品? (497) が出土している。237 は SA10 出土片と接合する。他に、193・196 など SA10 埋土中層～上層の破片と接合する。

ほか埋土層位不明だが、高環脚部および柱部片・二重口縁壺口縁部片などが、また、貼床土内で敲石 (444)・剥片 (440) が出土している。

ほか、炭化材 1 点が出土しているが、部材であるかどうかさえ判断は困難であった。

**遺構の時期** 甕(229・230)や中層出土の高環(237)からみて古銅時代初頭(松永4期)には既に廃絶され埋没していたと考えられる。

**所見** 主柱穴 P2 が SC30 に切られる点について、柱穴的な埋土が確認されなかったことや、上層を塞ぐような土器片群および KAh 層土ブロックの状況からみると、SC30 の形成された時点で柱は存在し難いことが考えられ、先述の SA5 - P2 と同様に「柱

抜き取り」が行われた可能性が大きい。

また SC30 の土器片は、SA13 北半の中層に散在する一群と接合 (231)、SA7 南西寄りの小片集中の一群とも部分的に接合しており、これらは同一個体の大型壺とみられる。

## SA14 (第 40、72、98 図)

**位置・切り合い** 北東隅を SE1 に、南東隅から北西隅を SE2 に切られる。

**形態・規模** 床面は方形プランで、長軸 492cm・

短軸 472cm・深さ 30～45cm、面積約 232㎡を測る。

**柱穴** 2 基検出(P1～2)。略円形～円形プランで、直径 36～40cm・深さ 47～71cm を測る。柱穴間の芯々距離は 182cm を測る。また、P1 南側床面では貼床土とは異なる P1 内埋土に似た土が薄く堆積していた。

**貼床** 床面全体に平坦に貼床が施され、厚みは 2～8cm を測るが、壁際には施されず 5cm～22cm の間隔がある。

**間仕切り・張り出し・ベッド状遺構** 南壁東際に 1 箇所、張り出しを有する。幅 250cm・奥行 34cm を測る。

**炉** 1 基検出 (SC1)。中央部分よりやや南側に位置する。焼土の範囲は、略楕円形プラン・断面皿形を呈し、長軸 130cm・短軸 88cm・深さ 8cm を測るが、下層に焼土粒と炭化物を含む埋土の略楕円形プラン・断面皿形を呈し、長軸 155cm・短軸 130cm・深さ 41cm を測る。

**炉接土坑** 1 基検出 (SC2)。炉の南端を切るような形で位置する。楕円形プラン・断面台形を呈し、長軸 100cm・短軸 76cm・深さ 26cm を測る。

**屋内土坑** 2 基検出 (SC3・4)。SC3 は東壁際中央に位置し、略円形プランで、長軸 38cm・深さ 10cm、SC4 は北東隅に位置し、略円形プラン・長軸 34cm・短軸 30cm・深さ 12cm を測る。

**埋土の堆積状況** 床面上には竪穴住居跡の焼失に伴う多量の焼土・炭化材を含む層が見られる。壁際には三角堆積がみられ、その上はレンズ状堆積となる。

**焼失状況** 上述の焼土は厚み最大 12cm を測り、

住居北東の床面付近に分布する。また炭化材は、焼土の分布とほぼ重なるように出土し、壁際では焼土の上でも検出されたが、主に焼土の下から検出された。これら炭化材は、分布状況からほとんどが垂木材と考えられ、中央付近では加工痕（欠き込み痕？）と見られるものもあった。また、焼土と炭化材に挟まるように、炭化材に直行する状態で繊維質植物体が数箇所検出されており、種別を特定するため植物珪酸体分析を行った。

**遺物出土状況** 床直出土の遺物は概して少ないが、住居南東の壁際を中心に有溝石錘（449）・磨石（452）・砥石（454）・石核（451）が出土し、西壁寄り、深鉢（246）・高環（247）が出土した。SC2底面で鉄片？（498）が出土している。

下層では、南東隅より石庖丁（450）が出土した。ほか埋土層位不明だが甕（245）が出土している。

**自然化学分析** 上述の繊維質植物遺体は、植物珪酸体分析の結果からススキ属の茎葉に由来すると判断される。

**遺構の時期** 時期の推定に有効な遺物は少なく確定的ではないが、高環部片（247）は後期後葉～終末期（松永2・3期）の特徴を持つ。この時期に廃絶されたと想定しておく。

## SA15（第43、73、99図）

**位置・切り合い**

**形態・規模** 床面は方形プランで長軸340cm・短軸329cm・深さ20～28cm、面積約112㎡を測る。

**貼床** 床面全体に貼床が施されており、厚みは10～15cmを測る。

**炉** 1基検出。中央北寄りに位置する。略楕円形プラン・断面皿形を呈し、長軸92cm・短軸70cm・床面からの深さ14～17cmを測る。

**炉接土坑** 1基検出。炉と西側壁の間に位置する。炉に近接するが切り合いはない。略円形プラン・断面皿形を呈し、長軸49cm・短軸44cm・床面からの深さ7cmを測る。

**埋土の堆積状況** 壁際には三角堆積がみられ、その後はレンズ状堆積となっている。

**遺物出土状況** 床直出土の遺物は非常に少ない。

西壁中央の壁際に甕口縁部片（248）、中央で高環部片・石庖丁（455）などの小片が出土したのみで、下層でも甕底部（249）・二重口縁甕口縁部（250・251）など少量の小片のみである。

**自然科学分析** フローテーション法により、炉の埋土から選別採取された種実を含む微細な炭化物を種実同定した結果、不明種実5点が検出された。

**遺構の時期** 時期の推定に有効な遺物は少なく確定的ではないが、下層出土の二重口縁甕口縁部片からみて、遅くとも古墳時代前期前半（松永5期）までには廃絶したものと想定しておく。

**所見** 平面規模が小さく、柱が見られないなどの特徴から、簡易な構造の建物であったと想定される。

## SA16（第44、74、100図）

**位置・切り合い** SB29に北西半を切られる。

**形態・規模** 床面は長方形プランで、コーナー部分は直角を呈する。長軸440cm・短軸378cm・深さ30～35cm、面積約166㎡を測る。壁は4辺ともにはほぼ垂直に立ち上がる。

**柱穴** 2基検出（P1・2）。略円形プランで、直径20～28cm・深さ60～63cmを測る。柱穴間の芯々距離は162cmを測る。

**貼床** ほぼ平坦だが、壁穴部の掘方底面が凹凸しており貼床の厚み4～12cmと差がある。張り出し部には貼られていない。

**壁溝** 西側壁際に確認された。深さは3～7cm。

**張り出し・間仕切り・ベッド状遺構** 東壁南側に張り出し1箇所を有する。幅174cm・奥行65cmを測る。Kah層が床面となっており、住居内部の床面とは比高差12cmを測り、その面がベッド状遺構になっている。

**炉** 1基検出。住居南側に位置する。略楕円形プラン・長軸52cmを測る。

**炉接土坑** 1基検出（SC4）。炉の南西側に接し重複するが切り合い関係は不明。楕円形プラン・長軸80cm・短軸60cm・深さ46cmを測る。

**屋内土坑** 5基検出（SC5・3、6、1、2）。SC5・3はSC4の南側に連続して重複する。SC5は略楕

円形プラン・長軸 55cm・短軸 48cm・深さ 15cm、SC4 は略円形プラン・直径 47cm・深さ 46cm を測る。SC6 は住居南西隅の張り出しに沿うように位置し、楕円形プラン・断面皿形で長軸 148cm・短軸 95cm・深さ 13cm を測る。SC1 は住居東壁際北寄りに位置し、円形プラン・断面方形で直径 45cm・深さ 38cm を測る。SC2 は住居北壁際東寄りに位置し、略円形プラン・断面皿形で直径 30cm・深さ 10cm を測る。

**埋土の堆積状況** 壁際に三角堆積がみられる。中央床面から北側にかけて、壁柱住居跡の焼失に伴う焼土と炭化材・炭化物を含む層がみられる。その後はレンズ状堆積となっている。

**焼失状況** 焼土は比較的に少なくブロック状に含まれる程度である。炭化材は北半のみにみられ放射状に分布する。中央付近では床直だが、壁寄り、特に北側では床面より 10～20cm ほど浮く。

殆どが垂木と考えられるが、なかには直径 15cm 程の丸太材もみられ、主柱あるいは樫木など、垂木以外の主要な部材である可能性がある。

他に、中央部の炭化材に載る状態で繊維質植物遺体が検出されており、種別を特定するため植物珪酸体分析分析を行った。

**遺物出土状況** 床直出土の遺物は住居南東の戸・土坑群の周辺から南西半にかけてみられる。南東は、甕 (252)・高坏 (264・265)、砥石 (461)、鉄片 (501)、南西隅は壺 (253・256) などである。

一方、中央付近では炭化材に載るような状態で鉢 (257) が、北東半の炭化材群より壁寄りでは、甕／壺底部 (255)・深鉢 (259)・浅鉢 (262) が上層より出土し、張り出しの南東隅でも深鉢底部 (260) が上層よりしている。

**自然科学分析** 炭化材について、AMS 法による放射性炭素年代測定の結果、垂木と思われる炭化材 (資料番号 C15) は補正 14C 年代値 1900 ± 40 (年 BP) が得られた。

また樹種同定の結果、垂木と思われる 4 点は C3 がコナラ属コナラ節、C4 がエゴノキ属、C8・C15 がクリで、主柱等の主要な部材と思われる C21 はコナラ属コナラ節であった。

さらに上述の繊維質植物遺体は (資料番号 3)、植物珪酸体分析の結果、SA2・5・14 と同じく、ススキ属の茎葉に由来すると判断された。

**遺構の時期** 時期の推定に有効な遺物は少なく確定的ではないが、高坏片 (264・265) は終末期～古墳時代初頭 (松永 3・4 期) の特徴を持つ。この時期に廃絶されたと想定しておく。

## SA17 (第 48、75、99 図)

**位置・切り合い** 南壁際中央部分を SC11 に切れられ、北西半で SB11 と切り合い関係にある。

**形態・規模** 床面は方形プランで、長軸 398cm・短軸 340cm・深さ 15～25cm、面積約 135㎡ を測る。

**柱穴** 2 基検出 (P1～2)。略円形プランで、直径 36～38cm・深さ 71～73cm を測る。柱穴間の芯々距離は 240cm を測る。また、P2 周囲の半径 25cm 程の貼土には焼土が含まれていた。

**貼床** 床面全体に平坦に貼床が施され、厚みは 4～12cm を測る。

**壁溝** 全体に確認された。深さは 3～12cm。

**屋内土坑** 3 基検出 (SC1～3)。SC1 は住居南半の中央に位置し、楕円形プラン・断面皿形で、長軸 110cm・短軸 60cm・深さ 5cm を測る。SC2 は東壁際中央に位置し、円形プラン・断面皿形で、直径 37cm・深さ 8cm を測る。SC3 は西壁際中央に位置し、楕円形プラン・断面皿形で、長軸 54cm・短軸 30cm・深さ 11cm を測る。

**埋土の堆積状況** 一部三角堆積がみられ、他は比較的平坦な堆積となっている。

**焼失状況** 焼土は概して量的に極少く、住居中央付近に分布している。炭化材も同じく量的には極少く、住居中央付近と北壁・東壁際中央に分布する。

**遺物出土状況** 床直出土の遺物は概して少ないが、床直では、中央付近より石庖丁 (457) が、南西で台石が出土し、下層では、南西隅より甕 (266)、北東隅より石庖丁 (458) が出土している。

**遺構の時期** 時期を推定できる遺物は少ないが、他の壁柱住居跡と同時期と想定しておく。

## SA18 (第48, 76 図)

**位置・切り合い** 南西隅をSB11に、南東隅を時期不明の土坑?に切られる。

**形態・規模** 床面は方形プランで、長軸350cm・短軸337cm・深さ8cm、面積約118㎡を測る。

**炉** 1基検出(SC1)。住居中央南西寄りに位置し、楕円形プラン・断面皿形・短軸47cm・深さ4cmを測る。

**屋内土坑** 1基検出(SC3)。南西隅に位置し、略円形プラン・断面不整形・直径30cm・深さ22cmを測る。

**遺物出土状況** 床直出土の遺物は概して少なく、北側壁寄りと南側壁寄りの2箇所にとまる。床直～下層では、南側壁寄りで壺(271)が、北側壁寄りで壺・小型壺(268)・器台/高環脚部(269)が出土した。

**遺構の時期** 器台/高環脚部(269)や壺の底部形態からみて、弥生時代後期後葉～終末期(松永2・3期)には既に廃絶され埋没していたと考えられる。

**所見** 平面規模が小さく、柱穴が見られないなどの特徴から、簡易な構造の建物であったと想定される。

## SA19 (第49, 77, 99 図)

**位置・切り合い** 北東から南西にかけてSE1に切られる。

**形態・規模** 床面は方形プランで、長軸360cm・短軸290cm・深さ12cm、面積約10㎡を測る。

**遺物出土状況** 床直の遺物は非常に少なく、中央北寄りで砥石(459)が出土したのみである。

他ほとんどが底面より67cm浮いた下層で出土した。中央西寄りで甕(272・273)が、北西隅および南西隅で高環脚部(275・274)が、中央北寄りで鉢が出土しており、高環脚部の275はSA5出土の小片と接合、同じく南西隅下層の甕/壺片がSA4出土の破片と接合している。

**遺構の時期** 高環脚部(275・274)や甕(272)は弥生時代後期後葉～古墳時代初頭(松永2～4期)の特徴を持つことから、この期間に廃絶されたと考えられる。

**所見** 平面規模が小さく、柱穴や床が見られない

などの特徴から、建物ではなかった可能性もある。

## SA20 (第50, 78, 101 図)

**形態・規模** 床面は方形プランで、コーナー部分はやや丸みを帯びる。長軸358cm・短軸313cm・深さ21～40cm・面積約112㎡を測る。

**貼床** 床面中央の窪み部分にのみ貼床が施されており、厚みは14～18cmを測る。

**張り出し・間仕切り・ベッド状遺構** なし。ただ、床面中央に径2m範囲・深さ30cm程度の窪みがあり明瞭な段を有する。

**炉** 2基検出(炉1・炉2)。ともに近接する。炉1は中央東寄りに位置する。不定形プラン・断面皿形を呈し、長軸49cm・短軸33cm・床面からの深さ12cmを測る。

炉2は中央北寄りに位置する。略楕円形プラン・断面方形を呈し、長軸93cm・短軸80cm・床面からの深さ12～18cmを測る。北東側がやや深い。

**炉接土坑** 1基検出(SC3)。炉と西側壁の間に位置する。炉に近接するか切り合いはない。略円形プラン・断面逆台形を呈し、長軸46cm・短軸38cm・床面からの深さ18cmを測る。

**屋内土坑** 3基検出(SC1・2・4)。SC1は南東隅の壁際に位置する。楕円形プラン・断面略方形を呈し、長軸56cm・短軸44cm・床面からの深さ52cmを測る。底面より25cmほど上位で磨石4点(465・467・468・470)が重なった状態で出土した。また底面より40cmほど上位から炭化種子1点(ドングリ)が出土した。

SC2・4は南壁西側の壁際に位置する。SC2は不定形プラン・断面皿形を呈し、長軸66cm・短軸48cm・床面からの深さ8cm、SC4は長楕円形プラン・断面皿形を呈し、長軸74cm・短軸31cm・床面からの深さ5cmを測る。

**埋土の堆積状況** 住居東壁際付近の床面で焼土のまとまりが確認されている。壁際には三角堆積がみられ、その後はレンズ状堆積となっている。

**遺物出土状況** 床直出土の遺物は、北東半を中心に宍形の土器が多い。鉢(284)・高環(285・286・287)・二重口鉢が出土しており、特に286の環部

は伏せられたような倒置状態にあった。東壁南側の壁際では裏底部(279)・数個体の裏・壺脚部などが出土している。

下層では、北東隅で裏(276)・高環脚部(287)が、南西から南壁際で磨石・台石(469・466)が出土している。

中層では、西壁南側の壁際の三角堆積に載るように裏(277)が、近接して砥石(464)が出土している。

**自然科学分析** フローレーション法により、炉1の焼土・炉2の埋土から選別採取された種実を同定した結果、それぞれイネ2点・1点が検出された。

**遺構の時期** 床直の高環(286)や流れ込みと考えられる裏(276・277)などの特徴を見ると、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭(松永2～4期)の特徴を持つことから、この期間に廃絶されたと考えられる。

**所見** 平面規模が小さく、柱穴が見られないなどの特徴から、簡易な構造の建物であったと想定される。

## SA21 (第49、79図)

**位置・切り合い** 東半をSE2に切られる。西側でSC37と重複する。

**形態・規模** 床面は不整形プランで、長軸272cm・深さ12cmを測る。

**遺物出土状況** 裏などの土器片が出土しており、SC37内に密集する土器片と接合する(壺288・高環部289)。

**遺構の時期** 時期の推定に有効な遺物は少なく確定的ではないが、高環部(289)は弥生時代後期後葉～終末期(松永2～3期)の特徴を持つ。この時期を想定しておく。

**所見** 平面規模が小さく、柱穴やがが見られないなどの特徴から、建物ではなかった可能性もある。

## SA22・24 (第51、80、102図)

**位置・切り合い** 調査区北東隅に位置し調査区外に延びる。検出時の平面形態は、方形プランおよび円形プランの竪穴住居跡2軒が切り合い関係にあるとみて、円形の部分をSA22、方形の部分をSA24と

した。しかし、平面および断面で明確な切り合いは確認できておらず、同一遺構である可能性も否定できない。ほかSE11に切られる。

**形態・規模** 床面プラン・規模ともに不明。深さ20cm程度である。

**柱穴** 1基検出(PI)。略円形プランで、直径30cm・深さ52cmを測る。M30～M11層の散礫を切っており、柱穴壁面に礫が露出している。

**貼床** 全体に施されており、厚み8cm前後を測る。

**張り出し・間仕切り・ベッド状遺構** 明瞭ではないがSA24側壁際が高まっており貼床が厚い。

**埋土の堆積状況** 壁際には三角堆積がみられ、その後はレンズ状堆積となっている。

**遺物出土状況** 床直出土の遺物は中央およびSA24側壁際のみみられ、裏(296・292)・壺(294)、砥石(473)や礫が出土している。同じく中央の下層で裏(293)、石燈丁(471)が、SA22側壁際の中層では裏(290・291)が出土している。

**遺構の時期** 裏(290・293)からみて、弥生時代中期末～後期初頭には廃絶されたと考えられる。

## SA23 (第51、80、103図)

**位置・切り合い** 調査区北東隅に位置し調査区外に延びる。

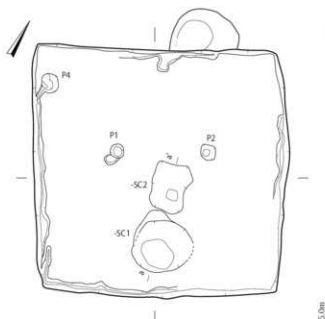
**形態・規模** 床面プランは不明。最長10m・深さ20cm程度である。

**遺物出土状況** 床直出土の遺物はない。北西隅の床面より10～15cm浮いた中層で、壁際から内部へと下るように、20～40cm長の多数の礫・台石(475)や裏底部(297)が集中して出土した。廃棄等の流れ込みと考えられる。

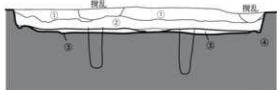
**遺構の時期** 確定的ではないが、埋土中の裏底部(297)やSA22・24に近いことから、弥生時代中期末～後期初頭には廃絶されたと想定しておく。

**所見** 柱穴もなく住居跡ではない可能性もある。

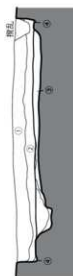




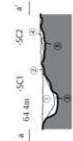
65.0m



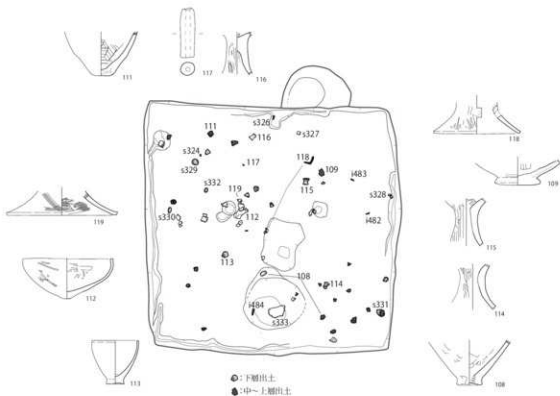
65.0m



**SA1**  
 ①黄褐色土 (7.5YR2/1) しまり強い、粘性も強い。φ1mm以下の砂粒を含む。またφ1~2cmのK-Ah層土ブロックを少量含む。  
 ②黄褐色土 (10YR2/1) 色調は①とほぼ同じ。しまり強く、粘性の強い硬い土である。φ1mm以下の砂粒、φ2~5cmのK-Ah層土ブロックを多く含む。まれにφ2cm程度の暗褐色土ブロックも含む。  
 ③黄褐色土 (10YR2/2) しまり非常に強く、粘性やや強い。砂粒はφ1mm以下のものを少量含む程度で、φ2~5cmのK-Ah層土、暗褐色土ブロックを含む。粘土。  
 ④M B 0 とほぼ同じ土だが、粘性があり柔らかい。噴湧の埋土。



**SA1-SC1, 2**  
 ①黄褐色土 (5YR2/1) しまり強く粘性弱い。シルト質土。φ1cm程度のK-Ah層土ブロック、暗褐色土のブロックを含む。φ1mm以下の砂粒を少量含む。  
 ②黄褐色土 (7.5YR2/1) しまりやや強く粘性弱い。シルト質土。φ5mm程度のK-Ah層土ブロックを少量含む。またφ1mm以下の砂粒を少量含む。  
 ③黄褐色土 (7.5YR2/1) しまりやや強く粘性弱い。シルト質土。φ1cm程度のK-Ah層土ブロックを多く含む。φ1mm以下の砂粒を少量含む。  
 ④黄褐色土 (10YR2/2) しまり強く粘性弱い。φ1~4cmの暗土ブロックを少量含む。他にφ5mm程度の炭化物、φ1mm以下の砂粒をまばらに含む。  
 ⑤黄褐色土 (10YR2/1) しまり強い。粘性やや弱い。φ1~4cmの暗土ブロックを少量含む。φ1mm以下の砂粒をまばらに含む。



第26図 SA1実測図、遺物出土状況図 (S=1/60)



粘性なし。シルト質～微砂質土。  
硬質。

**SA2-SC4.5**

① 黒色土 (10YR2/1) ややし  
まりあり。粘性ほとんどなし。シ  
ルト質。φ 1cm 以下の暗褐色  
土を極微量含む。

**SA2-SC6**

① 黒色土 (10YR2/2) しまり  
あり。粘性ほとんどなし。  
φ 3cm 以下の K-Ab 層土を極微  
量含む。φ 1cm 以下の暗褐色  
土を極微量含む。

② 暗褐色土 (10YR2/3) しまり  
あり。粘性ほとんどなし。  
φ 5mm 以下の暗褐色土を 10%  
程度含む。

**SA2-P1**

① 黒色土 (10YR2/1) ややし  
まりあり。粘性ほとんどなし。  
φ 5mm 以下の暗褐色土を極  
微量含む。柱状跡あり。

② 暗褐色土 (10YR2/3) しまり  
あり。やや粘性あり。φ 3cm  
以下の暗褐色土を 30% 含む。

③ 黒色土 (10YR2/3) ほとん  
どしまりなし。粘性ほとんどな  
し。φ 3cm 以下の暗褐色土を極  
微量含む。黒色土 (10YR2/1) を  
極微量含む。

④ 黒色土 (10YR2/2) ほとん  
どしまりなし。やや粘性あり。  
K-Ab 層土の砂粒を極微量含む。

⑤ 暗褐色土 (10YR2/3) しまり  
あり。粘性あり。周りの K-Ab  
と土色が似ているため判別しづ  
い。

⑥ 黒色土 (10YR2/1) しまりあり。  
やや粘性あり。

**SA2-P2**

① 黒色土 (10YR1.7/1) ほとん  
どしまりなし。粘性ほとんどな  
し。φ 1cm 以下の炭化物を極微  
量含む。下位ほど黒褐色土を含  
む。φ 3mm 以下の褐色土を含  
む。柱状跡あり。

② 暗褐色土 (10YR2/3) しまり  
あり。やや粘性あり。φ 3cm 以  
下の褐色土を 30% 含む。

③ 暗褐色土 (10YR2/3) ややし  
まりあり。やや粘性あり。褐色  
土を 50% 含む。

④ 黒色土 (10YR2/1) ほとんど  
しまりなし。やや粘性あり。①  
と土色が似たり合った感じ。

**SA2-P3**

① 暗褐色土 (10YR2/2) しまり  
あり。粘性なし。φ 5mm 以下の  
暗褐色土を 80% 含む。φ 5mm  
以下の炭化物を 10% 程度含む。柱  
状跡あり。

② 暗褐色土 (10YR2/3) しまり  
あり。やや粘性あり。φ 5cm 以  
下の褐色土を 80% 含む。

③ 暗褐色土 (10YR2/3) ほとん  
どしまりなし。やや粘性あり。  
φ 2cm 以下の褐色土を 30% 含  
む。

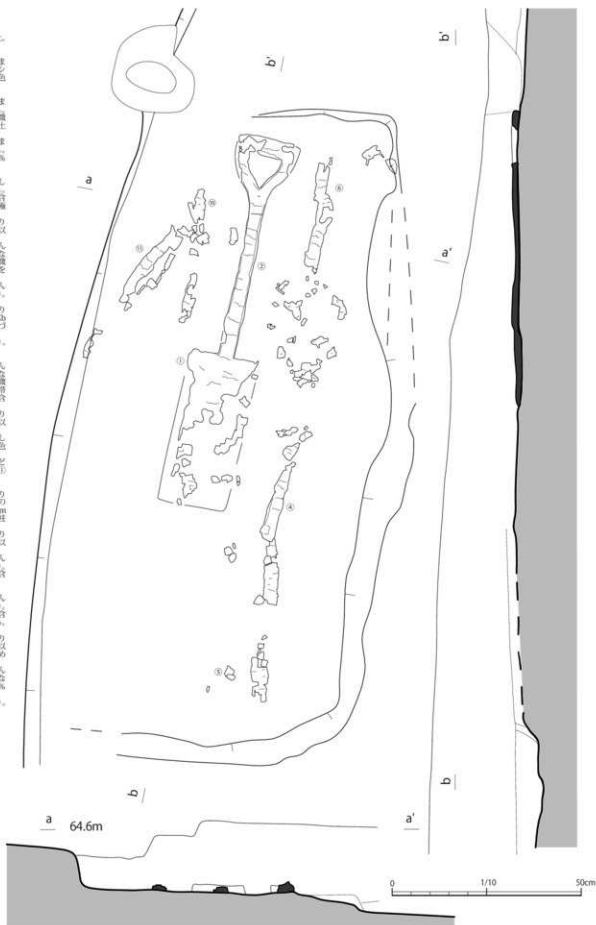
**SA2-P4**

① 暗褐色土 (10YR2/3) ほとん  
どしまりなし。やや粘性あり。  
φ 5mm 以下の褐色土を極微量  
含む。黒色土が縦に帯状に混ざる。  
柱状跡あり。

② 暗褐色土 (10YR2/3) しまり  
あり。やや粘性あり。φ 3cm 以  
下の褐色土を 60% 含む。柱状跡  
あり。

③ 暗褐色土 (10YR2/2) ほとん  
どしまりあり。粘性ほとんどな  
し。φ 1cm 以下の褐色土を 20%  
程度含む。

④ 黒色土 (10YR2/1) しまりあり。  
やや粘性あり。



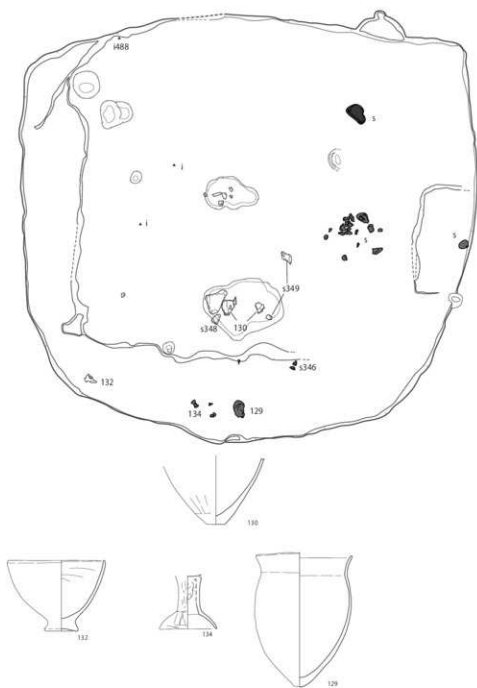
第 28 図 SA3 炭化鋤出土状況図 (S=1/10)



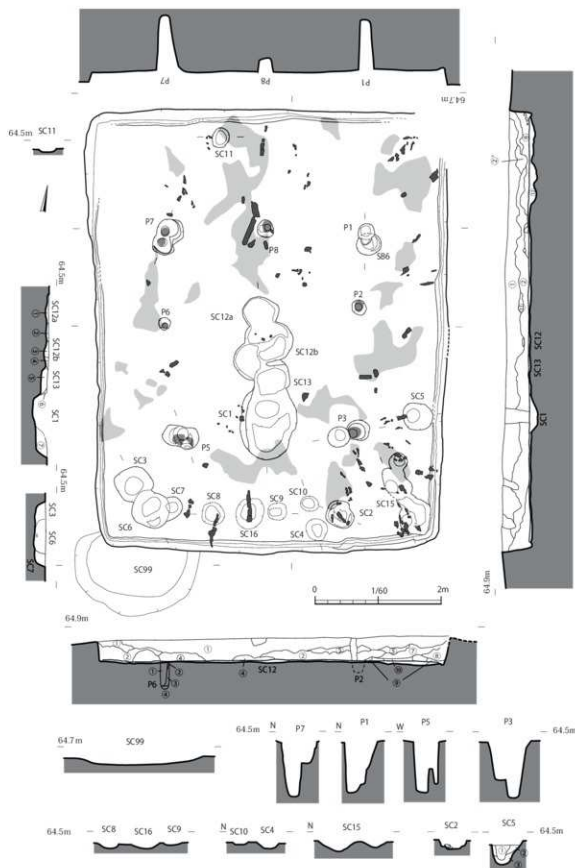
- SA3**
- ① 黒褐色土 (10YR2/2) しまりや中弱く、粘性強いシルト質土。まらからい。φ1~3cmのKAh層土ブロックを散見。φ1mm以下の砂粒を10%含む。
- ② 黒褐色土 (10YR3/1) しまりや中弱く、粘性やや弱いシルト質土。φ1~3cmのKAh層土ブロックを散見。φ1mm以下の砂粒を5%含む。
- ③ 黒褐色土 (10YR2/2) しまりや中弱く、粘性強いシルト質土。φ1~3cmのKAh層土ブロックを散見。φ1mm以下の砂粒を5%含む。
- ④ 黒褐色土 (7.5YR2/1) しまりや中弱く、粘性強いシルト質土。硬い。φ1~4cmのKAh層土ブロックを5%、φ1mm以下の白・褐色の砂粒を5%含む。
- ⑤ 黒褐色土 (10YR3/1) しまりや中弱く、粘性強い。50%以上をKAh層土ブロック(硬土?)が占める。炭化物を散見。含む。
- ⑥ 黒褐色土 (2.5Y/2) しまり非常に強く、粘性強いシルト質土。非常に硬い。φ1~3cmのKAh層土ブロックを10%、φ1mm以下の砂粒を10%含む。
- ⑦ 黒褐色土 (10YR2/1) しまり弱く、粘性やや弱いシルト質土。φ1~3mmの粗砂(硬土?)が30%を占める。
- ⑧ 黒褐色土 (10YR3/1) しまりや中弱く、粘性強いシルト質土。φ1cm程度のKAh層土ブロック・炭化物を散見。φ1mm以下の砂粒を10%含む。
- ⑨ 黒褐色土 (10YR3/2) しまりや中弱く、粘性強いシルト質土。φ0.5~3cmのKAh層土ブロックを10%程、φ1mm以下の砂粒を散見。含む。
- ⑩ 黒褐色土 (10YR2/2) 土質は⑧と同じだが、KAh層土が30%程占める。
- ⑪ 黒褐色土 (10YR1/7/1) しまりや中弱く、粘性強いシルト質土。φ1~3cmのKAh層土ブロックを10%、砂粒はほとんど含まない。
- ⑫ 黒褐色土 (10YR1/7/1) ⑪に似るが土質は柔らかい。

- ⑬ 黒褐色土 (7.5YR2/1) しまりや中弱く、粘性強いシルト質土。φ1~3cmのKAh層土ブロックを散見。φ1mm以下の砂粒を10%程含む。
- ⑭ 黒褐色土 (10YR2/2) しまりや中弱く、粘性強いシルト質土。φ2~4cmのKAh層土ブロックを散見。φ1mm以下の砂粒を10%程含む。
- ⑮ 黒褐色土 (10YR3/1) しまりや中弱く、粘性強い。φ2~3cmのKAh層土ブロックを10%程、φ1mm以下の砂粒を10%程含む。
- ⑯ 黒褐色土 (7.5YR1/7/1) しまりや中弱く、粘性やや弱いシルト質土。φ2~5cmのKAh層土ブロックを20%、φ1mm以下の砂粒を10%程含む。
- SA3-SC1**
- ⑰ 黒褐色土 (2.5Y/2/1) 土はSC2と同じだが、横土や炭化物を含む。横土に関しては上からの流れ込みの可能性が高い。
- SA3-SC2**
- ⑱ 黒褐色土 (2.5Y/2/1) しまりや中弱く、粘性強い。1cm角KAh層土ブロックを点的に含む。また、暗褐色のロームブロック(1cm角)が6%程占める。シルト質であり砂粒はほとんど見られない。

第29図 SA3実測図 (S=1/60)



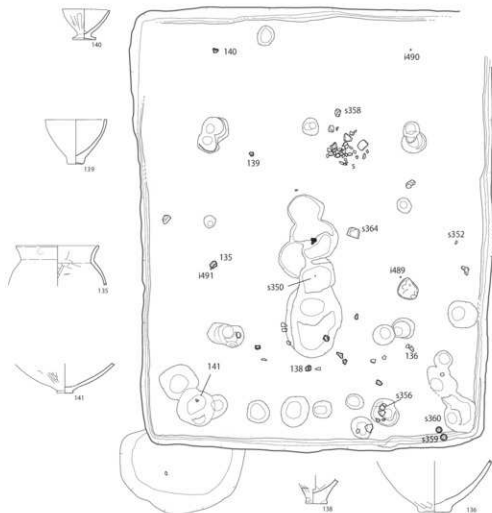
第30図 SA3遺物出土状況図 (S=1/60)



第31图 SA4实测图 (S=1/60)

- SA4**  
 ①黄褐色土(7.5YR2/1)しまりやや強く、粘性弱いシルト質土。K.Ah層土ブロックを1mm以下の砂粒を極微量含む。  
 ②黄褐色土(7.5YR3/1)しまり強く、粘性やや強いシルト質土。φ1~5mmのK.Ah層土ブロックをφ1mm以下の砂粒を極微量、暗褐色ロームブロックを10%程含む。  
 ③黄褐色土(7.5YR3/1)②の土が腐植の影響により変質したもので、表から、  
 ④黄褐色土(10YR1/7)しまり強く、粘性弱いシルト質土。K.Ah層土ブロックは含まない。φ1mm未満の砂粒を10%程含む。  
 ⑤黄褐色土(7.5YR2/2)しまり強く、粘性弱いシルト質土。特徴は③とほぼ同じ。  
 ⑥黄褐色土(10YR3/1)しまり強く、粘性弱いシルト質土。特徴は③とほぼ同じ。  
 ⑦黄褐色土(10YR3/2)しまり強く、粘性弱いシルト質土。φ1mm未満の砂粒を極微量含む。  
 ⑧黄褐色土(10YR3/2)しまり強く、粘性弱いシルト質土。φ3mm程の腐植層。φ1mm以下の砂粒を10%含む。  
 ⑨黄褐色土(10YR2/1)しまり強く、粘性やや強い。腐土を極微量含む。φ1mm以下の砂粒を10%程含む。  
 ⑩黄褐色土(10YR2/3)しまり強く、粘性やや強い。腐植層土を多く含む。φ1mm以下の砂粒を10%程含む。  
 ⑪黄褐色土(10YR2/3)しまり強く、粘性やや強い。暗褐色土(10YR2/3)ロームブロックをφ1~3cmを10%、φ1cm以下のK.Ah層土ブロックを20%程含む。  
 ⑫黄褐色土(10YR2/2)しまりやや強く、粘性やや弱い。明確か。  
**SA4-C3**  
 ①黄褐色土(7.5YR3/1)しまりやや強く、粘性強い。暗褐色ロームブロック(1cm角)を極微量。φ1mm以下の砂粒を5%含む。また、極微量に炭化物片を含む。  
**SA4-C4**  
 ①黄褐色土(7.5YR3/1)しまりやや強く、粘性強い。φ0.5~1cmのK.Ah層土ブロックを極微量。暗褐色ロームブロックを極微量。φ1mm以下の砂粒を極微量含む。  
**SA4-C5**  
 ①黄褐色土(10YR1/7)しまりやや弱く、粘性弱い。φ1mm以下の砂粒を5%、炭化物片を極微量に含む。  
 ②黄褐色土(10YR2/2)しまりやや強く、粘性やや弱い。1cm角のK.Ah層土ブロックを極微量。φ1mm以下の砂粒を極微量含む。  
 ③黄褐色土(10YR3/2)しまりやや強く、粘性やや強い。φ1mm以下のロームの粒を50%含む。

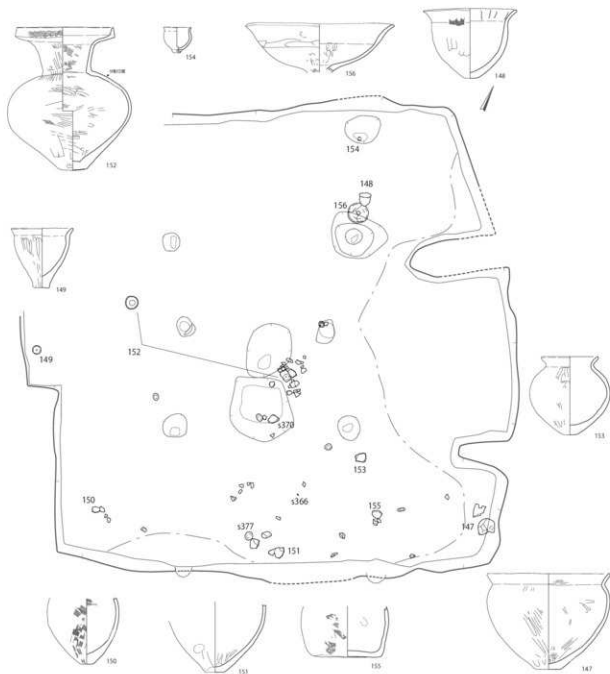
- SA4-C6**  
 ①黄褐色土(10YR2/2)しまりあり。粘性ほとんどなし。φ1cm以下の暗褐色土(10YR4/6)を極微量含む。φ1mm以下の炭化物を極微量に含む。  
**SA4-C12, 13, 1**  
 ①明褐色土(10YR5/3)腐土。かなりしまりあり。粘性なし。φ5mm以下の炭化物を多く含む。暗褐色土(10YR3/3)のローム土ブロックが50%占める。  
 ②暗褐色土(10YR3/3)かなりしまりあり。粘性ほとんどなし。φ1mm以下の炭化物を極微量に含む。φ5mm以下の腐土ブロックを10%。φ1cm以下のK.Ah層土ブロックを極微量含む。  
 ③暗褐色土(10YR3/4)かなりしまりあり。粘性なし。φ3cm以下の腐土ブロックを30%含む。φ5mm以下の炭化物を極微量含む。  
 ④暗褐色土(10YR3/3)かなりしまりあり。粘性ほとんどなし。φ3mm以下の炭化物を極微量に含む。φ5mm以下の腐土を極微量含む。  
 ⑤暗褐色土(10YR3/3)かなりしまりあり。粘性ほとんどなし。φ1cm以下の炭化物を5%含む。φ5mm以下の腐土を極微量含む。SC1層の腐植土、炭化物の量が多い。  
 ⑥暗褐色土(10YR3/2)しまりあり。粘性ほとんどなし。φ3mm以下の炭化物を極微量含む。φ5mm以下の腐土を極微量含む。  
 ⑦暗褐色土(10YR3/2)しまりあり。粘性ほとんどなし。φ5mm以下の炭化物を極微量含む。φ1mm以下の腐土を極微量に含む。また、φ5cm以下の暗褐色土ブロックを20%含む。  
**SA4-P6**  
 ①黄褐色土(10YR2/2)しまり弱く、粘性強い。φ5mm以下の炭化物と焼土が極微量。φ1cm以下の暗褐色土(10YR3/3)が10%混ざる。  
 ②暗褐色土(10YR3/4)しまり強い。粘性やや弱い。  
 ③黄褐色土(10YR2/3)しまりやや強い。粘性やや弱い。暗褐色土(10YR3/3)が混ざる感じ。  
 ④暗褐色土(10YR3/4)しまりやや強い。粘性強い。



第32図 SA4遺物出土状況図 (S=1/60)



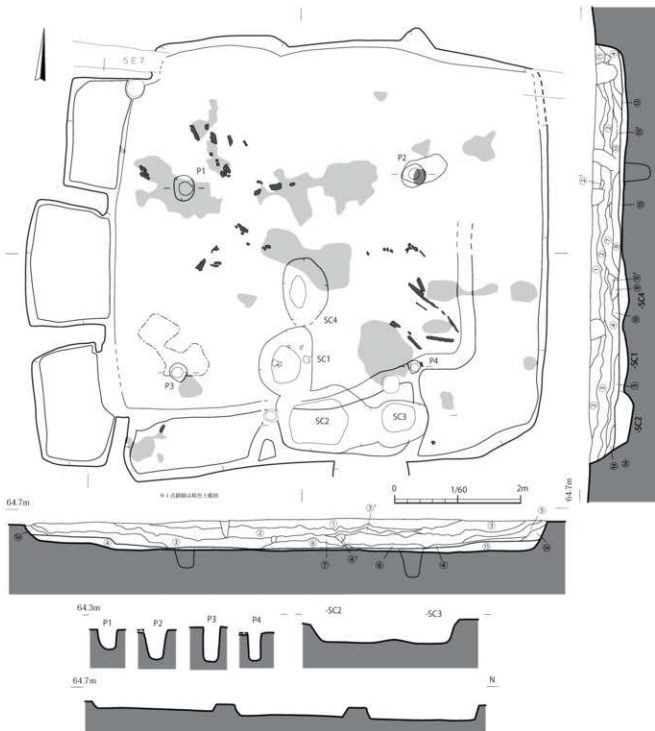




- SA5-P3**  
 ① 黒色土 (7.5YR2/2) しまり非常に強い、粘性強い。  
 ② 褐色土 (10YR4/4) M.L.土。しまりやや弱い、粘性強い。
- SA5-P4**  
 ① 黒色土 (7.5YR2/2) しまり強い、粘性強い。  
 ② 黒色土 (7.5YR2/2) + M.L.土。ブロック (2期) しまり強い、粘性強い。  
 ③ 黒色土 (7.5YR2/2) + M.L.ブロック (4期) しまり強い、粘性強い。  
 ④ 褐色土 (10YR4/4) M.L.土。しまりやや弱い、粘性強い。
- SA5-P5**  
 ① 黒色土 (7.5YR2/2) しまり非常に強い、粘性強い。  
 ② 褐色土 (10YR4/4) M.L.土。しまりやや弱い、粘性強い。
- SA5-P6**  
 ① 黒色土 (7.5YR2/2) しまり強い、粘性強い。  
 ② 黒色土 (7.5YR2/2) + M.L.土。ブロック (2期) しまり強い、粘性強い。  
 ③ 黒色土 (7.5YR2/2) + M.L.ブロック (4期) しまり強い、粘性強い。  
 ④ 褐色土 (10YR4/4) M.L.土。しまりやや弱い、粘性強い。
- SA5-P8**  
 ① 黒色土 (7.5YR2/1) しまり非常に強い、粘性強い。K.Ah層土粒を極微量(極微量以下)含む。柱頭が  
 ② 褐色土 (10YR4/4) しまり非常に強い、粘性強い、M.L.粒、ブロックを80%含む。

- ③ P6の②と同様。  
 ④ P6の②と同様。
- SA5-PC6**  
 ① 黒色土 (7.5YR2/1) しまりやや強い、粘性やや弱い、K.Ah層土粒を極微量含む。柱頭が  
 ② 黒色土 (7.5YR2/2) しまり強い、粘性やや弱い、K.Ah層土粒を極微量 (①より少ない) を含む。MBOブロックが立しんだ感じ。  
 ③ 黒色土 (7.5YR2/2) しまりやや弱い、粘性強い、ボロボロ、K.Ah層土粒を20%含む。  
 ④ 黒色土 (10YR2/2) しまりやや強い、粘性やや強い、K.Ah層土粒を20%含む。  
 ⑤ 褐色土 (10YR4/4) しまり強い、粘性やや強い、色調は③に近く、より多くM.L.粒、ブロック (φ.3cm) を70%含む。感触は③に近く同じ、柱頭めがたズレか、柱頭によるしまり。  
 ⑥ 黒色土 (7.5YR2/2) しまり非常に強い、粘性やや弱い、K.Ah層土粒を極微量含む。柱頭が  
**SA5-SC44**  
 ① 褐色土 (7.5YR2/2) しまりやや強い、粘性強い、柱頭横突に伴う境上。  
 ② 黒色土 (10YR2/1) しまり強い、粘性強い。

第34図 SA5遺物出土状況図 (S=1/60)

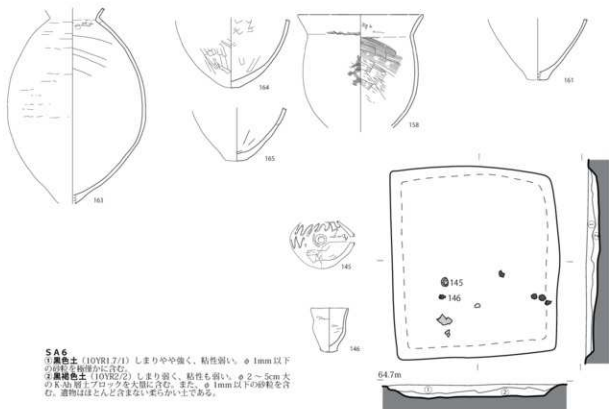
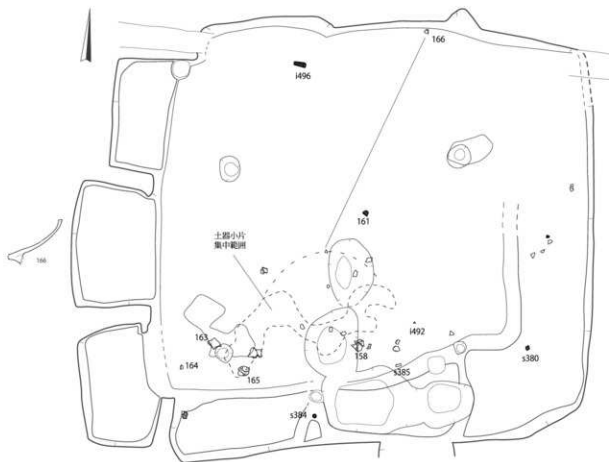


**SA7**

- ① 黒色土 (10YR17/1) しまりやや強く、粘性弱い。φ 1mm 以下の砂粒を 10% 含む。
- ② 黒色土 (10YR2/1) しまりやや弱く、粘性弱い。1cm の KAh 層土ブロックを抽出。φ 1mm 以下の砂粒を 5% 含む。
- ③ 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや強く、粘性やや強い。0.5 ~ 1cm の KAh 層土ブロックを抽出。φ 1mm 以下の砂粒を 5% 含む。
- ④ 黒褐色土 (10YR3/1) しまりやや強く、粘性弱い。0.5 ~ 1cm の KAh 層土ブロックを抽出。φ 1mm 以下の砂粒を 10% 含む。ややザラつく (④ は図が示す位置)。
- ⑤ 黒色土 (10YR2/1) しまり強く、粘性強い。1 ~ 2cm の KAh 層土ブロックを抽出。φ 1mm の砂粒を 5% 含む。
- ⑥ 黒色土 (10YR17/1) しまり強く、粘性やや強い。1cm の KAh 層土ブロックを抽出。φ 1mm 以下の砂粒を抽出。④ 同。
- ⑦ 黒褐色土 (10YR3/1) しまりやや強く、粘性弱い。0.5 ~ 1cm の炭化物を 5%、1 ~ 3cm の KAh 層土ブロックを抽出。φ 1mm 以下の砂粒を 5% 含む。ザラつく。

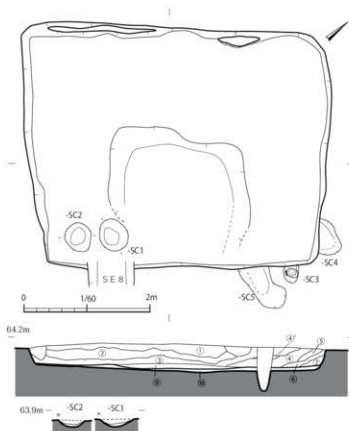
- ⑧ 黒褐色土 (10YR3/1) しまり強く、粘性弱い。50% を粘土が占める。
- ⑨ 黒褐色土 (7.5YR3/1) しまりやや強く、粘性弱い。1mm 以下の炭土ブロックが 30% 混じる。
- ⑩ 黒色土 (7.5YR17/1) しまりやや弱く、粘性弱い。1mm 以下の炭土を抽出。φ 1mm 以下の砂粒を 5% 含む。
- ⑪ 黒褐色土 (7.5YR17/1) しまりやや弱く、粘性弱い。1mm 以下の砂粒を 5% 含む。
- ⑫ 黒褐色土 (10YR3/2) しまりやや弱く、粘性強い。1 ~ 3cm の KAh 層土ブロックを 30% 含む。
- ⑬ 黒色土 (10YR2/1) しまりやや弱く、粘性弱い。1mm の KAh 層土ブロックを 5%、φ 1mm 以下の砂粒を 5% 含む。(⑬ は下半分を KAh 層土ブロックが占める)
- ⑭ 黒褐色土 (10YR2/2) しまり弱く、粘性やや強い。φ 1mm の砂粒を 10% 含む。粘結

**第35図 SA7実測図 (S=1/60)**

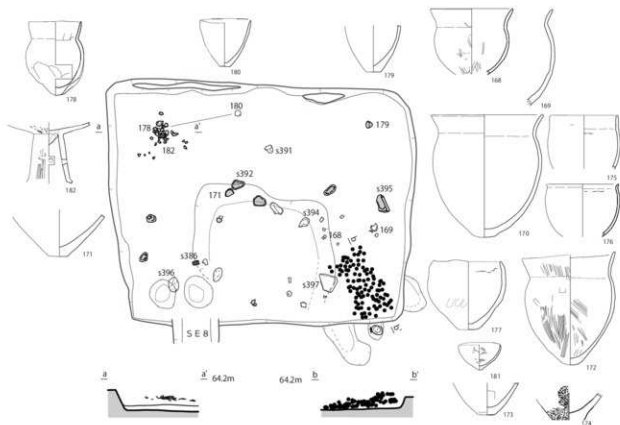


**SA6**  
 ① 黄褐色土 (10YR1.7/1) しまりや平強く、粘性弱い。φ 1mm 以下の砂粒を稀薄かに含む。  
 ② 黄褐色土 (10YR2/2) しまり強く、粘性も弱い。φ 2~5cm 大の K 質 層上ブロックを大量に含む。また、φ 1mm 以下の砂粒を含む。遺物はほとんど含まない柔らかい土である。

第36図 SA7遺物出土状況図、SA6実測図・遺物出土状況図 (S=1/60)

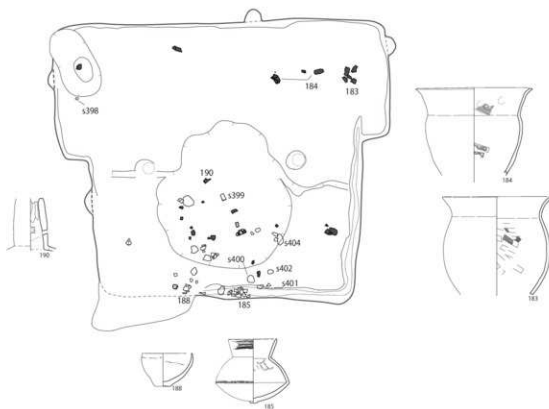
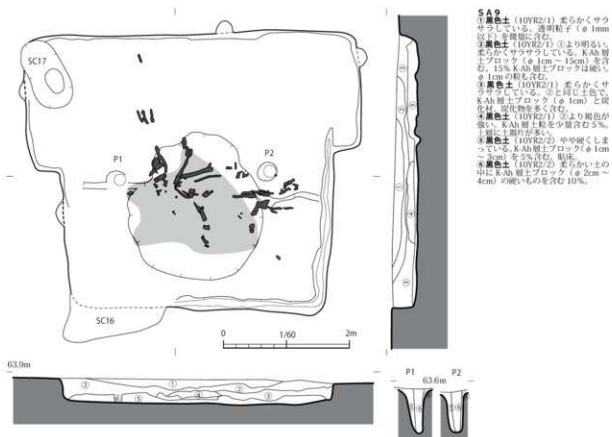


- S A 8**
- ①黒色土 (75YR1.7/1) しまり強い、粘性強い、 $\phi$  1mm以下の砂粒を極微量含む。
  - ②黒色土 (10YR2/1) しまりやや強く、粘性強い、 $\phi$  2~3cmのKAh層土ブロック、 $\phi$  1cm以下の砂粒を極微量含む。 $\phi$  1mm以下の砂粒を10%程度含む。
  - ③黒褐色土 (7.5YR3/1) しまりやや強く、粘性強い、 $\phi$  1cmのKAh層土ブロックを極微量、 $\phi$  1mmの棕色粒を10%程度含む。
  - ④黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや強く、粘性強い、 $\phi$  2~5cmのKAh層土ブロック、 $\phi$  1mm以下の砂粒を極微量含む。
  - ⑤黒色土 (10YR2/1) 土質は④と同じで、色調が若干薄い。
  - ⑥黒色土 (10YR1.7/1) しまり弱く、粘性やや強い、 $\phi$  1.5cmのKAh層土ブロックを極微量、 $\phi$  1mm以下の砂粒を極微量含む。
  - ⑦黒色土 (10YR2/1) しまりやや強く、粘性強い、 $\phi$  1mmのKAh層土粒を極微量、 $\phi$  1mm以下の砂粒を極微量含む。
  - ⑧黒色土 (10YR2/1) しまりやや強く、粘性強い、 $\phi$  0.1~1cmのKAh層土、暗褐色ブロックが50%を占める、 $\phi$  1mmの砂粒を10%程度含む。セラガラ。
  - ⑨黒色土 (10YR1.7/1) ③か、⑦もほぼ同じだが、土質が半強。
  - ⑩黒色土 (10YR2/1) しまりやや強い、粘性やや強い、KAh層土ブロック $\phi$  2cm以下を1期未満含む。土質強弱を含む。
  - ⑪黒褐色土 (10YR2/2) しまり非常に強い、粘性強い、KAh層土ブロック $\phi$  5cm以上を5~10%含む。MPOを主体に、①の色調が弱まる。
- S A 8 - S C 1**
- ①黒色土 (10YR2/1) しまりやや強い、粘性強い。
  - ②黒褐色土 (7.5YR2/2) しまりやや強い、粘性やや強い、 $\phi$  5cm以下のKAh層土ブロックを2期ほど含む。MPOを主体に、①の色調が弱まる。
- S A 8 - S C 2**
- ①黒色土 (10YR2/1) しまりやや強い、粘性強い。
  - ②黒褐色土 (7.5YR2/2) S C 1と同じだが、KAh層土ブロックはなし。
- S A 8 - S C 4**
- ①黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや強い、粘性やや強い、 $\phi$  3cmのKAh層土ブロックを10%含む。

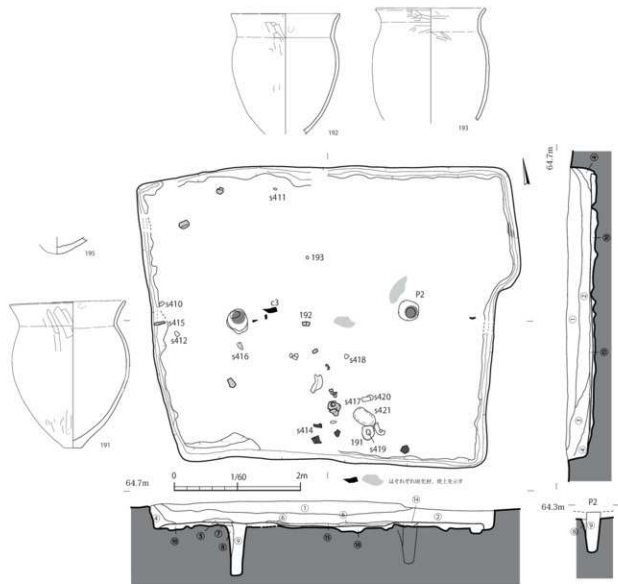


第37図 SA8実測図、遺物出土状況図 (S = 1 / 60)

※ドットは土器片を示す



第38図 SA9実測図、遺物出土状況図 (S=1/60)



### SA10

- ① 黒色土 (10YR17/1) ややしまりあり、若干粘性あり。微砂～シルト質土。
- ② 3mm以下のK.Ah層土を極微量含む。
- ③ 黒色土 (10YR2/1) しまりあり。やや粘性あり。微砂～シルト質土。φ5cm以下のK.Ah層土を10%含む。
- ④ 黒色土 (10YR2/1) しまりあり。やや粘性あり。微砂～シルト質土。φ5cm以下のK.Ah層土を20%含む。
- ⑤ 黒色土 (10YR2/1) しまりあり。若干粘性あり。シルト質土。φ5mm以下のK.Ah層土を極微量含む。
- ⑥ 黒色土 (10YR2/1) しまりあり。若干粘性あり。微砂～シルト質土。K.Ah層土を極微量含む。立上り土層は明らかに褐色気味。
- ⑦ 黒色土 (10YR17/1) しまりあり。やや粘性なし。微砂～シルト質土。明褐色土(7.5YR5/8)の塊土が30%程度含む。
- ⑧ 黒色土 (10YR2/2) しまりあり。粘性あり。シルト質土。φ5mm以下のK.Ah層土を極微量含む。暗褐色土(10YR3/3)が散在する。
- ⑨ 黒色土 (10YR2/1) しまりなし。若干粘性あり。微砂～シルト質土。
- ⑩ 3mm以下のK.Ah層土を極微量含む。
- ⑪ 黒色土 (10YR2/2) しまりなし。粘性あり。シルト質土。φ5mm以下のK.Ah層土を極微量含む。暗褐色土(10YR3/3)が散在する。
- ⑫ 黒色土 (10YR2/1) しまりなし。若干粘性あり。微砂～シルト質土。
- ⑬ 3mm以下のK.Ah層土を20%程度含む。粘土。
- ⑭ 黒色土 (10YR17/1) ほとんどしまりなし。ほとんど粘性なし。シルト質土。上部に明褐色土(7.5YR5/8)の塊土を含む。柱状内のくぼみの理。

### SA14

- ① 黒色土 (10YR17/1) しまりあり。粘性なし。微砂～シルト質土。K.Ah層土の砂粒を極微量含む。SE2埋土。
- ② 黒色土 (10YR17/1) しまりあり。やや粘性あり。微砂～シルト質土。φ5cm以下のK.Ah層土の砂粒を極微量含む。
- ③ 黒色土 (10YR17/1) しまりあり。やや粘性あり。微砂～シルト質土。K.Ah層土の砂粒を極微量含む。
- ④ 黒色土 (10YR2/1) しまりあり。粘性ほとんどなし。細砂～シルト質土。φ1cm以下のK.Ah層土を極微量含む。
- ⑤ 黒色土 (10YR2/1) しまりあり。粘性ほとんどなし。細砂～シルト質土。φ5cm以下のK.Ah層土を極微量含む。φ5cm以下のK.Ah層土を10%程度含む。
- ⑥ 黒色土 (10YR2/1) しまりあり。粘性ほとんどなし。細砂～シルト質土。φ5cm以下のK.Ah層土を極微量含む。φ5cm以下の暗褐色土(10YR3/4)のM.I.を極微量含む。
- ⑦ 黒色土 (10YR17/1) ややしまりあり。やや粘性あり。シルト質土。K.Ah層土の砂粒を極微量含む。
- ⑧ 黒色土 (10YR2/1) しまりあり。粘性ほとんどなし。細砂～シルト質土。φ5cm以下のK.Ah層土を極微量含む。K.Ah層土の砂粒を極微量含む。
- ⑨ 黒色土 (10YR2/2) しまりあり。やや粘性あり。微砂～シルト質土。明褐色土(7.5YR5/8)の塊土の砂粒を40%含む。
- ⑩ 黒色土 (10YR2/1) ややしまりあり。やや粘性あり。細砂～シルト質土。φ1cm以下の明褐色土(7.5YR5/8)の塊土の砂粒を30%程度含む。φ5mm以下のK.Ah層土を極微量含む。
- ⑪ a 暗褐色土(7.5YR5/8) しまりあり。やや粘性あり。微砂～シルト質土。塊土。φ5mm以下のK.Ah層土を極微量含む。
- ⑫ b 暗褐色土 (10YR2/2) しまりあり。やや粘性あり。微砂～シルト質土。塊土。φ5mm以下の暗褐色土(7.5YR5/8)の塊土を70%含む。φ5mm以下のK.Ah層土を極微量含む。
- ⑬ 黒色土 (10YR2/1) しまりあり。粘性あり。微砂～シルト質土。φ1cm以下のK.Ah層土を極微量含む。φ1cm以下の暗褐色土(10YR3/3)のM.I.を極微量含む。粘土。
- ⑭ 黒色土 (10YR2/1) かなりしまりあり。やや粘性あり。細砂～シルト質土。φ3cm以下のK.Ah層土を30%含む。φ3cm以下の暗褐色土(10YR3/3)のM.I.を30%含む。粘土。
- ⑮ 黒色土 (10YR2/1) ややしまりあり。やや粘性あり。K.Ah層土の砂粒を極微量含む。SE2埋土。

第39図 SA10実測図・遺物出土状況図 (S=1/60)

①暗褐色土 (7.5YR5/8) しまりあり。粘性なし。礫土。砂。

**SA14-P1**

①黄褐色土 (10YR2/1) ほとんどしまりなし。粘性なし。φ 5mm以下の暗褐色土 (10YR2/4) のML1ブロックを30%含む。柱状跡あり。

②暗褐色土 (10YR3/4) しまりあり。粘性なし。

③黄褐色土 (10YR2/2) しまりあり。やや粘性あり。φ 3mm以下の暗褐色土 (10YR4/6) のML1ブロックを50%含む。

④暗褐色土 (10YR3/3) ほとんどしまりなし。粘性なし。φ 1cm以下の暗褐色土 (10YR4/6) のML1ブロックを20%含む。

**SA14-P2**

①黄褐色土 (10YR1/1) ほとんどしまりなし。粘性なし。φ 3mm以下の暗褐色土 (10YR3/4) のML1ブロックを30%含む。柱状跡あり。

②黄褐色土 (10YR2/2) しまりなし。ほとんど粘性なし。φ 3mm以下の暗褐色土 (10YR3/4) のML1ブロックを40%含む。柱状跡あり。

③黄褐色土 (10YR2/2) ほとんどしまりなし。粘性なし。φ 3mm以下の暗褐色土 (10YR3/4) のML1ブロックを30%含む。

④暗褐色土 (10YR3/3) ほとんどしまりなし。粘性なし。φ 5cm以下の暗褐色土 (10YR4/6) のML1ブロックを60%含む。φ 3cm以下の暗褐色土 (10YR4/6) のK-Ah層土を20%含む。

**SA14-SC1, 2**

①黄褐色土 (10YR1/1) ほとんどしまりなし。粘性なし。φ 3mm以下のK-Ah層土の砂粒を10%含む。

②黄褐色土 (10YR2/1) しまりあり。ほとんど粘性なし。φ 5mm以下の暗褐色土 (10YR2/4) かなりしまりあり。粘性なし。φ 5mm以下の暗褐色土 (10YR2/4) の砂粒を10%含む。またφ 5mm以下のK-Ah層土の砂粒を20%含む。φ 1cm以下の暗褐色土 (10YR3/3) のML1ブロックを10%含む。

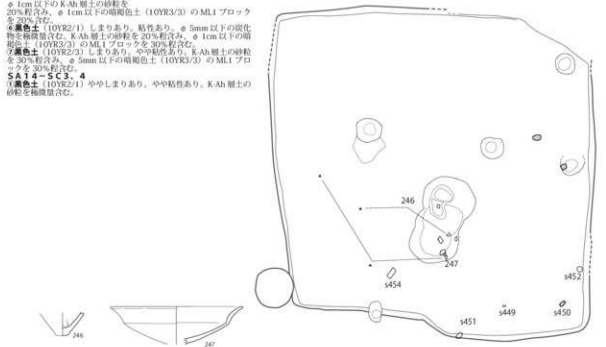
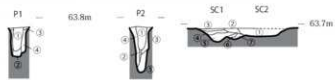
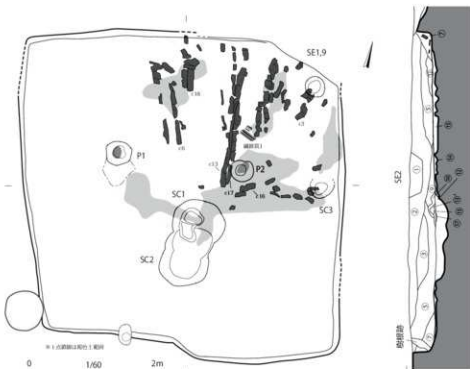
③暗褐色土 (7.5YR5/8) しまりあり。粘性なし。φ 5mm以下の暗褐色土 (10YR2/4) かなりしまりあり。粘性なし。φ 5mm以下の暗褐色土 (10YR2/4) の砂粒を10%含む。またφ 5mm以下のK-Ah層土の砂粒を20%含む。φ 1cm以下の暗褐色土 (10YR3/3) のML1ブロックを20%含む。

④黄褐色土 (10YR2/1) しまりあり。粘性あり。φ 5mm以下の暗褐色土 (10YR3/3) のML1ブロックを30%含む。

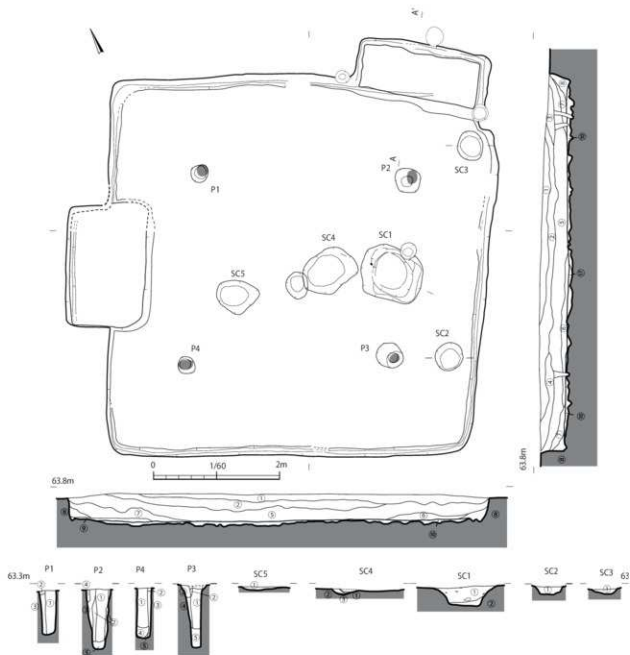
⑤黄褐色土 (10YR2/3) しまりあり。やや粘性あり。K-Ah層土の砂粒を30%含む。φ 5mm以下の暗褐色土 (10YR3/3) のML1ブロックを30%含む。

**SA14-SC3, 4**

①黄褐色土 (10YR2/1) ややしまりあり。やや粘性あり。K-Ah層土の砂粒を20%含む。



第40図 SA14実測図、遺物出土状況図 (S=1/60)



#### SA11

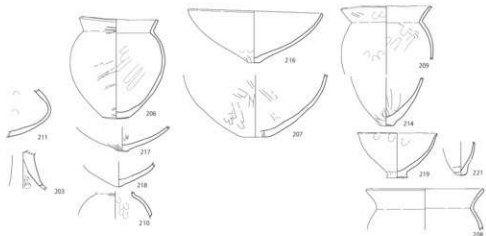
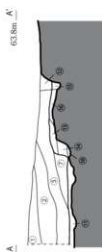
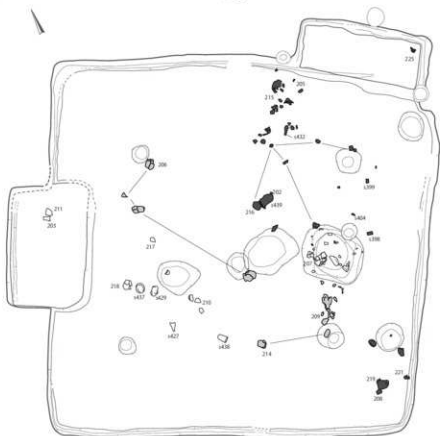
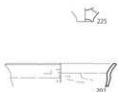
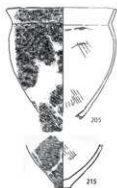
- ①黒色土 (10YR17/1) あまりしまりなし、粘性なし、微砂～シルト質土、KAh層土の砂粒を極微量含む。  
 ②黒色土 (10YR2/1) ややしまりあり、粘性ほとんどなし、微砂～シルト質土、KAh層土の砂粒を極微量含む。  
 ③黒褐色土 (10YR2/2) しまりあり、粘性ほとんどなし、微砂～シルト質土。  
 ④黒色土 (10YR2/1) しまりあり、粘性ほとんどなし、微砂～シルト質土。  
 ⑤黒色土 (10YR2/1) しまりあり、やや粘性あり、微砂～シルト質土。φ 3cm以下のKAh層土を30%含む。  
 ⑥黒色土 (10YR2/1) しまりあり、粘性ほとんどなし、微砂～シルト質土。  
 ⑦黒色土 (10YR2/1) しまりあり、粘性ほとんどなし、微砂～シルト質土。  
 ⑧黒色土 (10YR2/1) ややしまりあり、粘性ほとんどなし、微砂～シルト質土、KAh層土の砂粒を10%含む。  
 ⑨黒色土 (10YR2/1) しまりあり、やや粘性あり、微砂～シルト質土。φ 3cm以下のKAh層土を10%含む。粘底土。  
 ⑩黒褐色土 (10YR2/2) かなりしまりあり、やや粘性あり、微砂～シルト質土。φ 5mm以下のKAh層土を極微量含む。粘底土。  
 ⑪暗褐色土 (7.5YR5/8) しまりあり、粘性なし、細砂土。φ 1mm以下の炭化物を極微量含む。砂。  
 ⑫黒色土 (10YR2/1) しまりあり、ほとんど粘性なし、微砂～シルト質土、KAh層土の砂粒を極微量含む。  
**SA11-SC1**  
 ①黒色土 (10YR17/1) しまりあり、やや粘性あり、φ 5mm以下の炭化物を主に中に極微量含む、φ 2cm以下のKAh層土を10%含む。  
 ②黒褐色土 (10YR2/2) ほとんどしまりなし、やや粘性あり、φ 3cm以下のMLIブロックを30%含む。  
**SA11-SC2**

- ⑬黒色土 (10YR2/1) しまりあり、ほとんど粘性なし、φ 3mm以下の炭化物を極微量含む、φ 5mm以下のKAh層土を10%含む。  
**SA11-SC3**  
 ①黒色土 (10YR2/1) しまりあり、ほとんど粘性なし。  
**SA11-SC4**  
 ①黒褐色土 (10YR2/3) しまりあり、ほとんど粘性なし、φ 1mm以下の炭化物を極微量含む、φ 5mm以下の暗褐色土の粘土を30%含む。  
 ②暗褐色土 (7.5YR5/8) しまりあり、粘性なし、φ 1mm以下の炭化物を極微量含む。砂の埋土。  
 ③黒褐色土 (10YR2/2) しまりあり、ほとんど粘性なし、φ 5mm以下の暗褐色土の粘土を10%含む。  
**SA11-SC5**  
 ①黒褐色土 (10YR2/2) しまりあり、ほとんど粘性なし、φ 1cm以下の炭化物を極微量含む、φ 3cm以下の暗褐色土 (7.5YR5/8) の粘土を40%含む。  
**SA11-P1**  
 ①黒色土 (10YR2/1) ややしまりあり、粘性なし、KAh層土の砂粒を極微量含む。柱間砂。  
 ②黒褐色土 (10YR2/2) しまりあり、粘性ほとんどなし、φ 1cm以下のKAh層土を20%含む、φ 1cm以下の暗褐色土 (10YR3/3) のMLIブロックを20%含む。  
**SA11-P2**  
 ①黒色土 (10YR2/1) ややしまりあり、粘性ほとんどなし、KAh層土の砂粒を極微量含む。  
 ②黒褐色土 (10YR2/2) ほとんどしまりなし、粘性ほとんどなし、KAh層土の砂粒を10%含む。  
 ③黒褐色土 (10YR2/2) しまりあり、粘性ほとんどなし、φ 3cm以下のKAh層土を10%含む、φ 3cm以下の暗褐色土のMLIブロックを30%含む。柱間砂の砂。  
 ④黒色土 (10YR2/1) ほとんどしまりなし、粘性ほとんどなし、KAh層土の

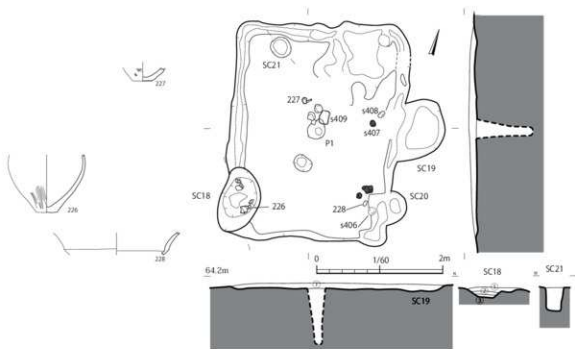
第41図 SA11実測図 (S=1/60)



砂粒を10%程度含む。  
 ① 黒褐色土 (10YR2/2) かなりしまりあり。やや粘性あり。暗褐色土のML1が若干混入する。  
**SA11-P3**  
 ① 黒色土 (10YR2/2) ほとんどしまりなし。粘性なし。KAh層土の砂粒を10%程度含む。柱状跡が、  
 ② 黒褐色土 (10YR2/2) かなりしまりあり。粘性ほとんどなし。φ2cm以下のKAh層土を極微量含む。  
 ③ 暗褐色土 (10YR3/4) かなりしまりあり。粘性ほとんどなし。φ1cm以下の暗褐色土のML1ブロックを10%程度含む。  
 ④ 黒褐色土 (10YR2/2) あまりしまりなし。粘性ほとんどなし。KAh層土の砂粒を20%程度含む。  
**SA11-P4**  
 ① 黒色土 (10YR2/1) ややしきりあり。粘性なし。KAh層土の砂粒を10%程度含む。柱状跡が、  
 ② 黒褐色土 (10YR2/2) しまりあり。粘性ほとんどなし。φ1cm以下の暗褐色土 (10YR3/3) のML1ブロックを20%程度含む。  
 ③ 黒色土 (10YR2/1) ややしきりあり。粘性ほとんどなし。KAh層土の砂粒を10%程度、φ1cm以下の暗褐色土 (10YR3/3) のML1ブロックを30%含む。  
 ④ 黒色土 (10YR2/1) かなりしまりあり。やや粘性あり。φ1cm以下のKAh層土を20%程度含む。φ2cm以下の暗褐色土 (10YR3/3) のML1ブロックを30%含む。  
 ⑤ 黒褐色土 (10YR4/4) しまりあり。粘性あり。  
 ⑥ 暗褐色土 (10YR3/3) のML1が混ざる。

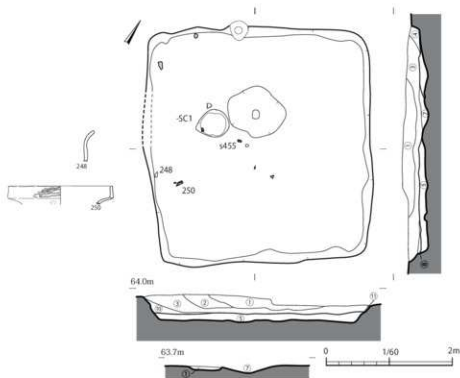


第42図 SA11遺物出土状況図 (S=1/60)



- SA12**  
 ①黒色土 (10YR2/1 ~ 10YR2/2), しまりやや強い, 粘性やや強い, KAh層土 (φ 5mm 以下) を少量含む。  
 SA12-P1  
 ①黒色土 (10YR2/1), しまりやや強い, 粘性やや強い。  
 SA12-SC18  
 ①黒色土 (7.5YR2/1) しまり弱い, 粘性やや強い, KAh層土 (φ 5mm 以下) を少量含む。  
 ②黒褐色土 (10YR3/1) をベースに黒褐色土 (10YR3/2) ~ 灰黄褐色 (10YR4/2)

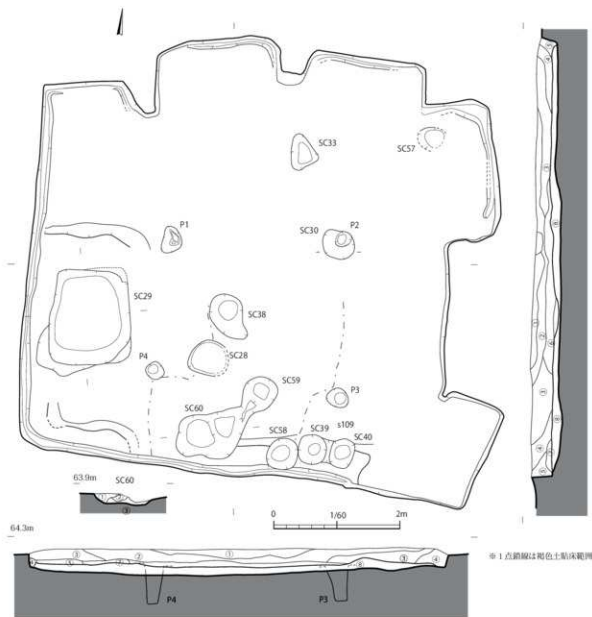
が7・8期ほどブロックで覆じる, しまりやや強い, 粘性やや強い, 全体に灰色がかったり, 「灰化物」の可能性ある, 灰化物は含まない。  
 ③黒褐色土 (7.5YR2/2) しまりやや強い, 粘性やや強い, 灰黄褐色土 (10YR4/2) のブロックを1~2割含む, KAh層土ブロック (φ 1cm 以下) を1割以上含む。  
**SA12-SC21**  
 ①黒~黒褐色土 (7.5YR2/1 ~ 3/1), しまりやや強い, 粘性やや強い, KAh層土ブロック (φ 2cm) を1割含む。



- SA15**  
 ①黒色土 (10YR2/1) 粘土細かく粘性がある, 中卒柔らかい層。  
 ②黒色土 (7.5YR1/1) 粘土細かく粘性ある, 中卒柔らかい層, φ 1mm 程のKAh層土ブロックを細かく含む。  
 ③黒色土 (10YR1/1) 粘土細かく粘性があり, 中卒柔らかい層, φ 5mm ~ 2cm 程のKAh層土ブロック層かに含む。  
 ④黒色土 (7.5YR2/1) 粘土細かく粘性があり, 中卒柔らかい層, ① ~ ③よりやや強い。  
 ⑤黒色土 (10YR2/1) 粘土細かく粘性があり, 中卒柔らかい層, φ 2 ~ 4cm 程のKAh層土ブロックを多く含む, 筋床に相当する, 硬くしまった層。  
 ⑥黒褐色土 (7.5YR2/3) 粘土が細かく粘性あり, しまった層であり, φ 1 ~ 1.5cm 程の黒土ブロックを黒土粒を多く含む, 筋。  
 ⑦黒色土 (7.5YR1/1) 粘土細かく粘性があり, 中卒柔らかい層, ① ~ ⑥, ⑧期に比べるほど柔らかい, φ 1cm 程のKAh層土ブロックを細かく含む。  
 ⑧黒色土 (10YR1/1) 粘土が細かく粘性があり, 中卒柔らかい層であり, KAh層土の砂粒を多く含む。

第43図 SA12、15実測図・遺物出土状況図 (S=1/60)





※1点断面は褐色土層床観測

**SA13**

- ①黒褐色土 (7.5YR2/1) しまりやや強い、粘性やや強い、混じりなし。
- ②黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや強い、粘性弱い、混じりなし。
- ③黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや強い、粘性やや強い、KAh層土粒 (φ 5mm 以下) 少量含む。
- ④黒褐色土 (10YR2/1) しまり強い、粘性やや強い、KAh層土 (φ 20mm 以下) 少量含む。
- ⑤黒褐色土 (7.5YR2/1) しまり強い、粘性やや強い、KAh層土 (φ 20mm 以下) 少量含む。
- ⑥黒褐色土 (7.5YR2/2) しまり強い、粘性弱い、KAh層土ブロック (φ 20mm ほど) 少量 (2-3割、④・⑤より多い) 含む。④・⑤では、KAh層土塊山が土はけと割れたような感じであるのに対し、⑥では、その断面に見られるような明確なブロックが認められる。

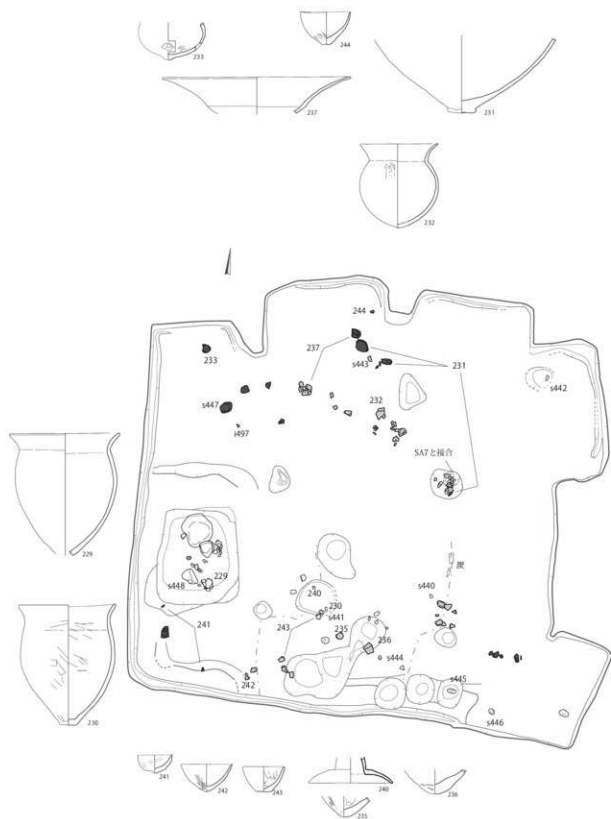
**SA13-SC59、60**

- ①黒褐色土 (7.5YR3/2) しまり強い、粘性強い、MBOのブロックがほとんど。
- ②黒褐色土 (10YR2/1) しまり強い、粘性強いMLIブロック (φ 3cm 以下) を1〜2割含む。
- ③暗褐色土 (10YR3/3) しまり強い、粘性強い、MLIのブロックがほとんど、ブロックはほとんどない。

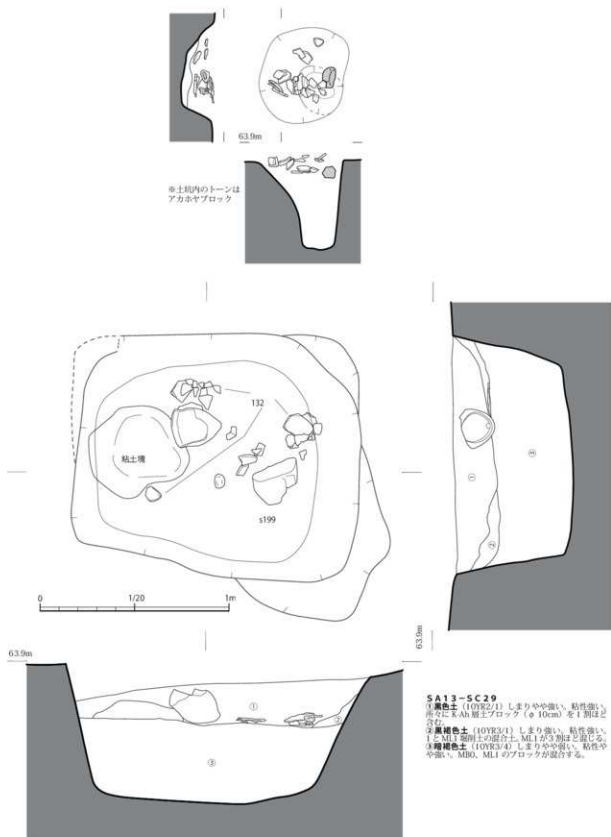
**SA13-P3、4**

- ①黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや強い、粘性やや強い、混じりなし。
- ②暗褐色土 (7.5YR3/3) しまりやや強い、粘性やや強い、MLIブロックが土。
- ③黒褐色土 (7.5YR2/1) しまりやや強い、粘性強い。

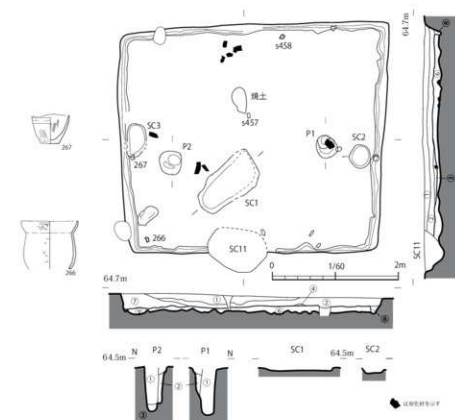
第45図 SA13実測図 (S=1/60)



第46図 SA13遺物出土状況図 (S=1/60)



第47図 SA13-SC29・30実測図 (S=1/20)



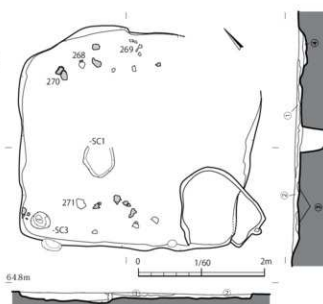
**SA 17-P1, 2**

①黒色土 (10YR1.7/1) ややしりあり、ほとんど粘性なし。シルト質土。φ 5mm 以下の炭化物を極微量含む。φ 3mm 以下の K-Ah 層土を極微量含む。柱線跡か。

②黒色土 (10YR2/1) あまりしりなし。ほとんど粘性なし。微砂〜シルト質土。φ 5mm 以下の K-Ah 層土を 30% 含む。φ 1cm 以下の黒褐色土 (10YR2/2) を 10% 程度含む。

③黒色土 (10YR1.7/1) かなりしりあり。やや粘性あり。シルト質土。K-Ah 層土の砂粒を極微量含む。

**SA 17-SC1**



④黒色土 (10YR1.7/1) あまりしりなし。粘性なし。シルト質土。φ 5mm 以下の炭化物を極微量含む。

**SA 17-SC2**

①黒色土 (10YR2/1) ややしりあり。ほとんど粘性なし。微砂〜シルト質土。φ 5cm 以下の K-Ah 層土を 10% 含む。φ 5mm 以下の黒褐色土 (10YR2/3) の MLI を 30% 含む。

**SA 17-SC3**

①黒色土 (10YR2/1) ややしりあり。ほとんど粘性なし。微砂〜シルト質土。K-Ah 層土の砂粒を極微量含む。

**SA 17**

①黒色土 (10YR2/1) ややしりあり。粘性なし。微砂〜シルト質土。φ 1cm 以下の炭化物を極微量含む。φ 3cm 以下の K-Ah 層土を極微量含む。

②黒色土 (10YR2/1) ややしりあり。粘性なし。微砂〜シルト質土。φ 3cm 以下の炭化物を極微量含む。φ 3cm 以下の K-Ah 層土を極微量含む。

③黒色土 (10YR1.7/1) あまりしりなし。粘性なし。シルト質土。φ 5mm 以下の炭化物を極微量含む。SC1 層土。

④黒褐色土 (7.5YR5/8) しりあり。粘性なし。微砂土。柱線跡の端に炭化材料あり。

⑤黒色土 (10YR1.7/1) ややしりあり。ほとんど粘性なし。シルト質土。φ 5mm 以下の炭化物を極微量含む。φ 3mm 以下の K-Ah 層土を極微量含む。柱線跡か。

⑥黒褐色土 (10YR2/2) しりあり。粘性ほとんどなし。微砂土。φ 5cm 以下の K-Ah 層土を 10% 程度含む。φ 5cm 以下の黒褐色土 (10YR3/4) の MLI を極微量含む。

⑦黒褐色土 (10YR2/2) しりあり。粘性ほとんどなし。微砂土。φ 5cm 以下の K-Ah 層土を極微量含む。φ 5mm 以下の黒褐色土 (10YR3/4) の MLI を極微量含む。

⑧黒色土 (10YR2/1) ややしりあり。粘性ほとんどなし。シルト質土。K-Ah 層土の砂粒を極微量含む。

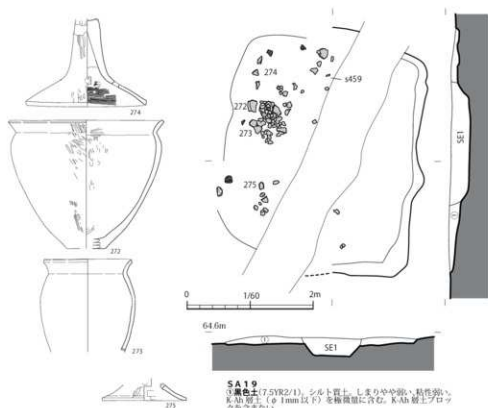
⑨黒色土 (10YR2/1) ややしりあり。粘性ほとんどなし。シルト質土。K-Ah 層土の砂粒を極微量含む。

⑩黒色土 (10YR2/1) ややしりあり。ほとんど粘性なし。微砂〜シルト質土。K-Ah 層土の砂粒を極微量含む。

⑪黒色土 (10YR2/1) ややしりあり。ほとんど粘性なし。微砂〜シルト質土。K-Ah 層土の砂粒を極微量含む。

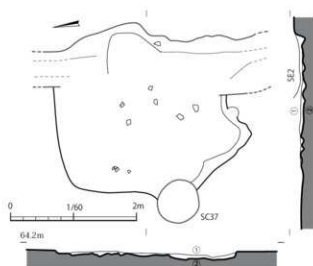
⑫黒色土 (10YR2/1) ややしりあり。ほとんど粘性なし。微砂〜シルト質土。K-Ah 層土の砂粒を極微量含む。

第 48 図 SA 17、18 実測図・遺物出土状況図 (S=1/60)



**SA 19**

①黄褐色土 (7.5YR2/1)。シルト質土。しまりやや強い。粘性強い。K.Ah層土 (φ 1mm以下) を極微量に含む。K.Ah層土プロックを含まない。



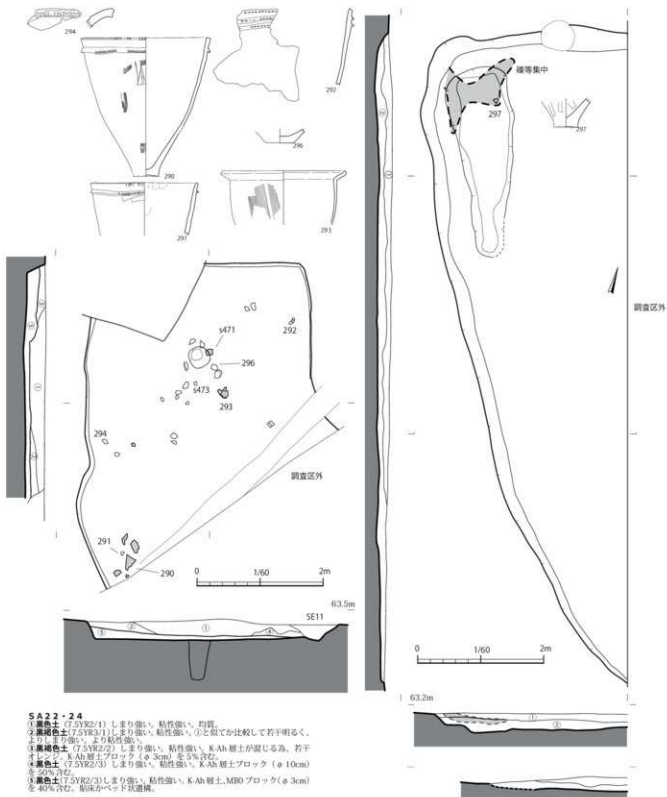
**SA 21**

①黄褐色土 (10YR2/1) 柔らかく、粘性なくサラサラしている。白色透明粉を微量に含む (φ 1mm)。K.Ah層土粒 (φ 1~2mm) を含む。  
 ②黄褐色土 (10YR2/1) しまり強い。柔らかくサラサラしている。K.Ah層土プロック (φ 1cm~3cm) を少量含む。白色、黄褐色粉を微量に含む。

第49図 SA 19、21実測図・遺物出土状況図 (S=1/60)







**SA 22・24**

- ①黒色土 (7.5YR2/1) しまり強い、粘性強い、均質。  
 ②黒褐色土 (7.5YR3/1) しまり強い、粘性強い、①と似てか比較して若干明るく、よりしまり強い、より粘性強い。  
 ③黒褐色土 (7.5YR2/2) しまり強い、粘性強い、K-Ah 層土が露じる為、若干オレンジ、K-Ah 層土ブロック (φ 3cm) を 5% 含む。  
 ④黒色土 (7.5YR2/3) しまり強い、粘性強い、K-Ah 層土ブロック (φ 10cm) を 50% 含む。  
 ⑤黒色土 (7.5YR2/3) しまり強い、粘性強い、K-Ah 層土、MBO ブロック (φ 3cm) を 40% 含む、筋状かベッド状遺構。

**SA 23**

- ①黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや強い、粘性やや強い、焼土ブロック (φ 5cm 以下) を極微量以下含む。  
 ②黒色土 (10YR1.7/1) しまりやや強い、粘性やや強い。

第 51 図 SA 22・24、23 実測図・遺物出土状況図 (S=1/60)

## (2) 掘立柱建物跡 (SB)

(第25、52～54、81図、第14～15、33～34表)

### SB3 (第52図)

**規模** 独立棟持柱建物跡。梁行1間(185・192cm)・桁行1間(240cm)で、面積約461㎡を測る。身舎は菱形を呈する。

**柱穴** 直径26～30cm・深さ12～20cmを測る。柱痕跡を残す。P3・4は棟持柱の柱穴だが、他の柱穴と形態・規模に大きな違いは見られない。

**遺物** 弥生土器小片

### SB11 (第53図)

**規模** 梁行3間(365・371cm)・桁行4間(444・470cm)で、梁行柱間は106～136cm、桁行柱間は105～147cm、身舎部分の面積は約174㎡を測る。

**柱穴** 直径24～41cm・深さ8～57cmを測る。

**遺構の時期** 弥生時代以降

### SB20 (第54図)

**位置・切り合い** SA15・20と隣接する。

**規模** 梁行1間(315・324cm)・桁行1間(298・308cm)で、身舎部分の面積は約100㎡を測る。

**柱穴** 直径29～37cm・深さ23～47cmを測る。

**遺物** P1・3・4内の底面より15～30cm上位で、弥生土器壺／甕の口縁部・底部片(298～301、303～305)が出上した。

### SB21 (第52図)

**規模** 独立棟持柱建物跡。梁行1間(194・234cm)・桁行2間(341・355cm)で、桁行柱間は165～183cm、身舎部分の面積は約83㎡、棟持柱の桁行は50cmを測る。

**柱穴** 直径15～37cm・深さ11～37cm、棟持柱は直径15～24cm・深さ10～11cmを測る。

### SB30 (第54図)

**規模** 梁行1間(200・247cm)・桁行2間(448・

424cm)を測る。

**柱穴** 直径19～28cm・深さ45～57cmを測る。

P1は検出プラン・底面プランともに円形で、長軸22cm・短軸22cm・深さ56cmを測る。P5はP1の北東に接するように位置し、さらに北東方向へと延びる窪みを伴う。P5・P1の切り合いは不明。P7はP6の北東に接するように位置し、さらに北東方向へと延びる窪みを伴う。P7はP6に切られる。

このようにP5・P7はSB30の建物外部方向(北東方向?)へ延びる楕円形の窪みを伴っている。P5に伴う窪みは、長軸約110cm・短軸68cm・深さ23cmを測る。壁はやや開きつつ立ち上がる。底面は北端からP5へと緩やかに下る。P7に伴う窪みは、長軸約122cm・短軸76cm・深さ30cmを測る。壁はやや開きつつ立ち上がる。底面は北端からP6へと緩やかに下る。

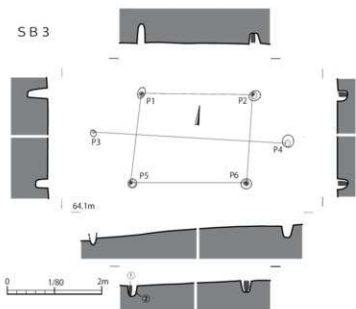
**遺物** P3から弥生土器壺／鉢類の口縁部小片が出土。

**所見** P5やP7の楕円形の窪みは、柱穴から緩やかに立ち上がる点、建物外部へと伸びる点から、掘立柱建物跡の「建て替え」に伴い柱穴周りを掘り窪め柱材を抜き取る、いわゆる「柱抜き取り痕跡」と考えられる。

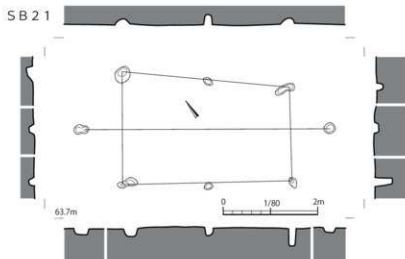
### SB33 (第53図)

**規模** 梁行3間(305・319cm)・桁行3間(407cm)で、梁行柱間は94～122cm、桁行柱間は125～146cm、身舎部分の面積は約130㎡を測る。

**柱穴** 直径19～36cm・深さ17～48cmを測る。

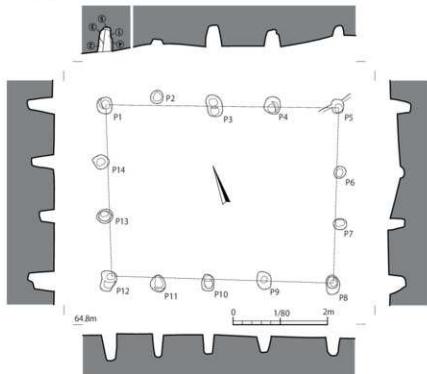


SB 3  
 ①黄褐色土 (10YR2/1) 柔らかくサラサラしている。白色、透明粒を微量に含む。  
 ②黒色土 (10YR2/1) ①より硬い、柔らかくサラサラしている。白色、黄褐色粒を微量に含む。  
 ◎ 1mm～1cmのK-Ah層土ブロックを稀微量に含む。



第52図 SB 3、21実測図 (S=1/80)

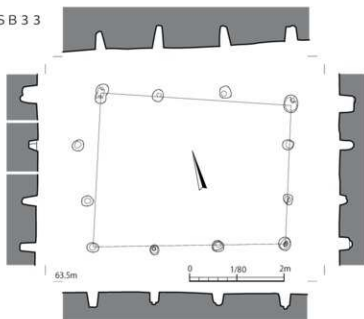
SB 11



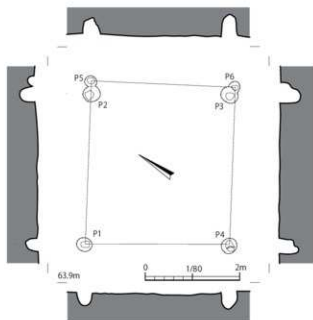
SB 11

- P 1**  
①黒色土 (10YR1.7/1) しまりあり、粘性ほとんどなし。φ 5mm以下のK-Ah層土を10%含む。  
②黒色土 (10YR2/1) しまりあり、粘性ほとんどなし。φ 1cm以下のK-Ah層土を10%含む。暗褐色土 (10YR3/3) を少量含む。  
③黒色土 (10YR2/1) しまりあり、粘性ほとんどなし。φ 5mm以下のK-Ah層土を10%含む。暗褐色土 (10YR3/3) が多少含まれる。  
④黒色土 (10YR2/1) ほとんどしまりなし。粘性なし。φ 1mm以下のK-Ah層土を10%含む。  
⑤暗褐色土 (10YR3/3) しまりあり、粘性あり。黒色土 (10YR1.7/1)・暗褐色土 (10YR3/3) が混ざる感じ。  
**P 2** = P 0。  
**P 8**  
①黒色土 (10YR2/1) しまりあり、粘性ほとんどなし。φ 3mm以下のK-Ah層土を10%含む。  
**P 9**  
①黒色土 (10YR1.7/1) しまりあり、粘性ほとんどなし。φ 1mm以下のK-Ah層土を約10%含む。  
**P 10**  
①黒色土 (10YR2/1) ややしまりあり。粘性ほとんどなし。φ 1cm以下のK-Ah層土を10%含む。  
**P 11** = P 10。  
**P 12** = P 5。  
**P 14**  
①黒色土 (10YR2/1) しまりあり、粘性ほとんどなし。φ 3cm以下のK-Ah層土ブロックを20%含む。  
**P 12**  
P 10のK-Ah層土20%含むタイプ。

SB 33

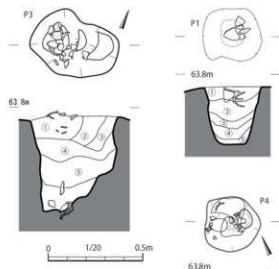


第53図 SB 11、33実測図 (S=1/80)



## P 3・6 (旧SC 26)

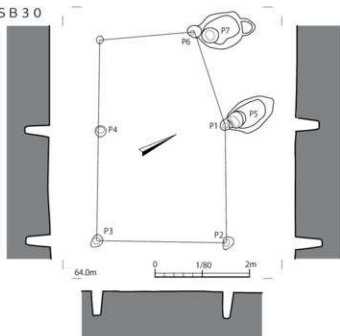
- ①黒色土 (7.5YR1.7/1) 粒子細かく、粘性あり。  
 ②黒色土 (10YR2/1) 粒子細かく、粘性あり。しまった層であり、φ 2mm ~ 3mm 程度の K-Ah 層土粒、及び φ 1cm 程度の K-Ah 層土ブロックを含む。  
 ③黒色土 (7.5YR2/1) 粒子細かく、粘性あり。  
 ④黒色土 (2.5YR2/1) 粒子細かく、粘性強い。  
 ⑤黒色土 (10YR2/1) 粒子細かく、粘性強い。柔らかい。



## P 4 (旧SC 27)

- ①黒色土 (10YR1.7/1) 粒子やや粗く、粘性弱い。K-Ah 層土粒を細断りに含む。  
 ②黒色土 (7.5YR1.7/1) 粒子細かく、粘性あり。φ 1mm 程度の K-Ah 層土粒を含む。  
 ③黒色土 (10YR2/1) 粒子細かく、粘性あり (②より強い)。  
 ④黒色土 (7.5YR1.7/1) 粒子細かく、粘性あり。φ 3mm ~ 1cm 程度の K-Ah 層土ブロック及び砂粒を多く含む。  
 ⑤黒色土 (10YR1.7/1) 粒子細かく、粘性あり (③より強い)。

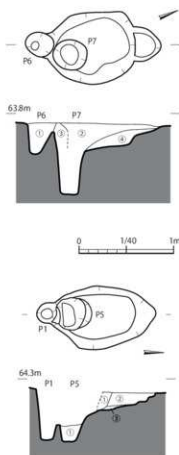
## SB 30



## SB 30

- P 1・5  
 ①黒褐色土 (10YR2/2) しまりあり、粘性なし。K-Ah 層土ブロック (φ 1 ~ 5mm) を 50%、ML1 層土ブロック (φ 1 ~ 5cm) を 30% 含む。  
 ②黒褐色土 (10YR2/2) しまりあり、粘性ほとんどなし。K-Ah 層土ブロック (φ 1 ~ 10mm) を 10% 含む。  
 ③黒色土 (10YR2/1) しまりあり、粘性ややあり。K-Ah 層土ブロック (φ 5 ~ 30mm) を 30% 含む。  
 P 6・7  
 ①黒色土 (10YR1.7/1) 柔らかくサラサラしている。中央部が黒色土のみ、周囲に K-Ah 層土粒 (φ 1 ~ 5mm)

- を含む。  
 ②黒色土 (10YR2/1) 柔らかくサラサラしている。K-Ah 層土ブロック・黒褐色土ブロック (φ 1cm 程度) を多く含む。  
 ③黒色土 (10YR2/1) 固くしまっている。K-Ah 層土ブロック・黒褐色土ブロック (φ 2 ~ 10cm) を多く含む。  
 ④黒褐色土 (10YR2/2) 柔らかく若干粘性あり。黒褐色土ブロック (φ 10cm 程度) を含む。



第 54 図 SB 20、30 実測図 (S=1/80)

### (3) 土坑 (SC)

(第55～56、82図、第10～11、34表)

土坑内部で出土した土器から遺構の時期を推定しているが、少量の破片のみである場合がほとんどで、土坑自体も時代を推定できるような特徴はみられず、明確に当該期の遺構として認定するのは困難である。ただ、明らかな擾乱を除き、当該期の遺構である可能性もまた否定できないため、以下の土坑を本節に掲載する。

#### SC2 (第55図)

**位置・切り合い** SC2に切られる。

**形態・規模** 検出・床面プラン共に不整形。長軸162cm・短軸122cm・深さ14cmを測る。ほぼ底面のみを検出で壁の立ち上がりは不明。

**遺物** 埋土中より多量の弥生土器小片が出土した。

#### SC3 (第55図)

**形態・規模** 検出・床面プラン共に楕円形。長軸86cm・短軸75cm・深さ30cmを測る。底面・壁面の境が明瞭でなくボウル状に立ち上がる。

**遺物** 西壁際の底面より15～30cm上位の埋土中で、土器底部(306)・高坏裾部片(307)・甕口縁部片など多量の弥生土器片と礫が出土した。

#### SC6 (第55図)

**形態・規模** 検出・床面プラン共に不整形を呈し、長軸205cm・短軸143cm・深さ32cmを測る。壁面は床面と同様に凹凸しており緩やかに立ち上がる。

**遺物** 埋土中で高坏不部片などの弥生土器片が出土した。

#### SC11 (第56図)

**位置・切り合い** SA17の南側壁付近に位置し、SA17を切る。

**形態・規模** 検出・床面プラン共に楕円形。長軸91cm・深さ31cmを測る。壁面はやや開きつつ立ち

上がる。

**遺物** 土坑中央の底面より18cm上位の埋土中で、完形の甕(310)が横位で出土した。

#### SC12 (第27図SA2実測図中)

**位置・切り合い** SA2の東側壁付近に位置し、切り合い関係は不明。

**形態・規模** 検出・床面プラン共に隅丸(長)方形。短軸(52)cm・深さ5cmを測る。ほぼ底面のみを検出で壁の立ち上がりは不明。

#### SC13 (第56図)

**位置・切り合い** SE2に切られる。

**形態・規模** 検出・床面プラン共に隅丸長方形。長軸179cm・短軸144cm・深さ45cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。また、床面中央に平面不整形で深さ約10cmの窪みがある。

**遺物** 埋土中で甕胴部片・二重口縁壺口縁部片などの弥生土器片が出土した。

#### SC37 (第56図)

**位置・切り合い** SA21と重複しているが切り合い関係は不明。

**形態・規模** 検出・床面プラン共に円形。長軸68cm・短軸61cm・深さ18cmを測る。壁面はやや開きつつ立ち上がる。

**遺物** 底面から15cm上位まで、壺(288)・二重口縁壺(308)・高坏(289・300)などの破片が集中して出土した。288・289はSA21出土の破片と接合している。

#### SC55 (第56図)

**形態・規模** 検出・床面プラン共に隅丸方形。でほぼ南北を指す。長軸102cm・短軸76cm・深さ22cmを測る。

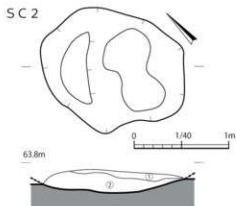
**遺物** 底面より約5cm上位で弥生土器小片が全面に散在する。

#### SC98 (第56図)

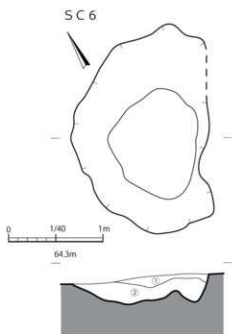
**形態・規模** 検出・床面プラン共に楕円形。長軸

71cm・短軸52cm・深さ21cm。壁はやや開きつつ立ち上がる。

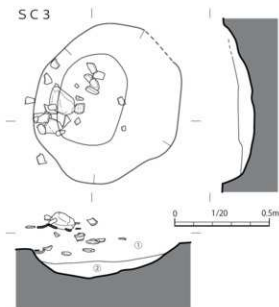
遺物 弥生土器細片、鉄片が出土した。



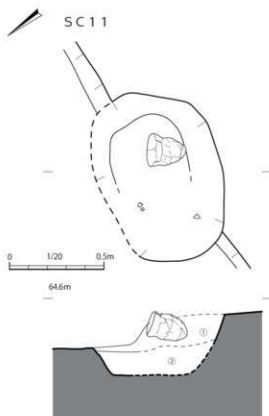
SC2  
 ①黒色土 (5Y2/1) 粘性はやや強く、しまりもやや強い。土質・特徴は②とほぼ同じだが、若干色調がうすい。  
 ②黒色土 (7.5Y2/1) 粘性はやや強く、しまりは強い。かたしまっており、所々にKAh層土ブロックが散じる。



SC6  
 ①黒色土 (10YR1.7/1) 柔らかくサラサラしている。KAh層土混じり程度別KAh層土ブロック(φ20cm~3cm)を含む。埋土中に土器片・  
 ②黒色土 (10YR2/1) 柔らかくサラサラしている。黄褐色粒を多く含む(φ1mm~2mm)。KAh層土ブロック(φ~5cm)を20%~30%、暗褐色土ブロックを少量含む。弥生土器片を含む。



SC3  
 ①黒色土 (10YR2/1) しまり強く、粘性は弱い。φ1mm以下の白色粒を所内に含む。また、極少量のKAh層土ブロックを多く含む。  
 ②黒褐色土 (10YR3/1) しまりは強く、粘性は弱い。KAh層土ブロックを多く含む。

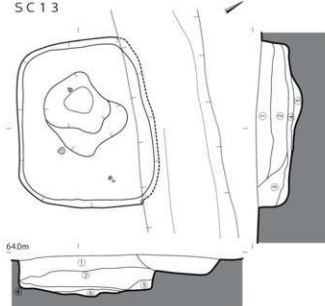


SC11  
 ①黒色土層 (10YR2/1) ややしりあり。粘性なし。KAh層土粒を10%程度含む。  
 ②黒褐色土層 (10YR2/2) ややしりあり。粘性なし。5cm以下のKAh層土ブロックを10%程度含む。

第55図 SC2、3、6、11実測図 (S=1/40、1/20)



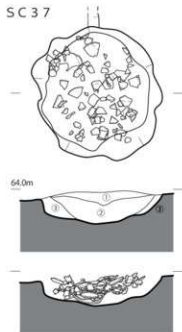
SC 13



SC 13

- ① 黒色土 (10YR1.7/1) ややしりあり、やや粘性あり、1cm以下のK-Ah層土ブロックと砂粒を10%程度含む。微砂土。  
 ② 黒色土 (10YR1.7/1) しりあり。やや粘性あり、3cm以下のK-Ah層土ブロックと砂粒を10%含む。細砂～微砂土。  
 ③ 黒色土 (10YR2/1) あまりしりない、ほとんど粘性ない。K-Ah層土の砂粒を20%含む。細砂土。  
 ④ 黒褐色土 (10YR2/2) しりあり。粘性ほとんどなし、3cm以下のK-Ah層土ブロックと30%程度の細砂～微砂土、M.I.ブロック(5mm以下)を極微量含む。  
 ⑤ 黒褐色土 (10YR2/2) ややしりあり、粘性ややあり、3cm以下のK-Ah層土ブロックとM.I.ブロックを極微量含む。  
 ⑥ 黒褐色土 (10YR2/2) しりあり、粘性ほとんどなし、3cm以下のK-Ah層土ブロックを30%含む。細砂～微砂土、M.I.を極微量含む。①～⑥に比べて硬い。

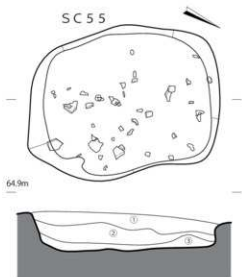
SC 37



SC 37

- ① 黒色土 (2.5Y2/1) しりやや強く、粘性強い、1φ未満の砂粒、砂粒が極微量混入。非常にキムが細かい。  
 ② 黒褐色土 (10YR3/1) しりやや弱く、粘性弱い。土質は①とはほぼ同じだが若干柔らかくて明るい。  
 ③ 黒褐色土 (10YR2/2) しりやや弱く、粘性やや弱い。φ1mm～1cmのK-Ah層土ブロックを20%程度、φ1mm以下の砂粒を極微量含む。

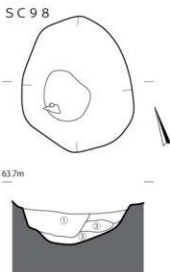
SC 55



SC 55

- ① 黒色土 (10YR2/1) 粒子細かく、粘性あり、やしり強い層である。  
 ② 黒色土 (7.5YR1.7/1) 粒子細かく粘性あり、やしりの強い層であり、φ3～4mm程度のK-Ah層土ブロック及びK-Ah層土粒を極微量含む。極微かに炭化物を含む。  
 ③ 黒色土 (7.5YR2/1) 粒子細かく、粘性あり、しりの強い層であり、MBO層土と混ざった部分が見られる(風化の影響か)。極微かに炭化物を含む。

SC 98



SC 98

- ① 黒色土 (10YR1.7/1) ややしりあり、粘性なし、φ3cm以下のK-Ah層土ブロックを20%程度含む。  
 ② 黒色土 (10YR2/2) しりあり、粘性ほとんどなし、K-Ah層土と黒褐色土(10YR2/2)が混入。  
 ③ 黒褐色土 (10YR3/2) しりあり、粘性ほとんどなし。①と黒褐色土(10YR2/2)が混入。

0 1/20 1m

第56図 SC 13、37、55、98実測図 (S=1/20)

## 2 遺物

### (1) S7グリッド周辺 (第83図)

調査区北端の谷筋が東へと窪地状に落ち込むS6・7グリッド周辺では、砂礫層の上にII層が厚く堆積している。S6・7グリッドの一定範囲においてこのII層で弥生土器が集中して出土した。土器では甕・壺(311～320)や高環脚部などがみられる。これら土器のほとんどは、近接するSA22～24で出土したものと類似しており、それらと同時期の弥生時代中期末～後期初頭が主体とみられる。ほかに、砥石・石庖丁(476・477)が出土した。

この窪地は、周辺の立地からも湧水や水の溜まる環境であった可能性が高く、当該期にも水場として利用されたと考えられる。

### (2) その他 (第84図)

グリッド一括や確認調査時のトレンチ等で当該期のもと考えられる遺物が出土した。甕(321)・注口土器注口部(322)・甕取手(323)や、石庖丁及び同素材剥片・石鏝(478-481など)、鉄鏝・鉄片?(503・504)が出土している。

### (3) 小結

遺構の項においては、出土遺物についてその出土状況を重視し、煩雑さを避けるために各個体についての話述は行わなかったが、特筆すべきもの、あるいは大まかな傾向について以下に記述する。

## 土器

出土土器のうち個体数が多い甕についてみていく。近隣の西ノ別所遺跡SA1で良好な一括資料が確認され、若干の分類がなされており参考とした。

中型甕の形態で、胴部では、最も数の多い長胴タイプ(a類)、寸詰まり胴タイプ(b類)、長脚短口縁タイプ(c類)の大きく3類に分けられ、またそれぞれの口縁部で直線的なもの(1類)と外反あるいは折り曲げられるもの(2類)に分けられる。典型として、a1類に191・205・277、a2類に184・229・230、b1類に147・272、b2類に170・183、c1類に245・273、c2類に131・188などが挙げられる。

## 石器

**石庖丁** 穿孔のある2点はいずれも弧背型で、ほかには両側端に挟りを持つ直背型が占める。穿孔のある355は中央にも末貫通の穿孔があり注目される。また、素材剥片や未成品(あるいは最小限に加工された打製石庖丁か)の多さは、石庖丁の保有や使用のあり方を考える上で重要である。

**磨製石鏝** 製品・欠損品で4点が出土した。3点では基部が無茎で基部は凹基である。いずれも緑色を呈する頁岩製であった。

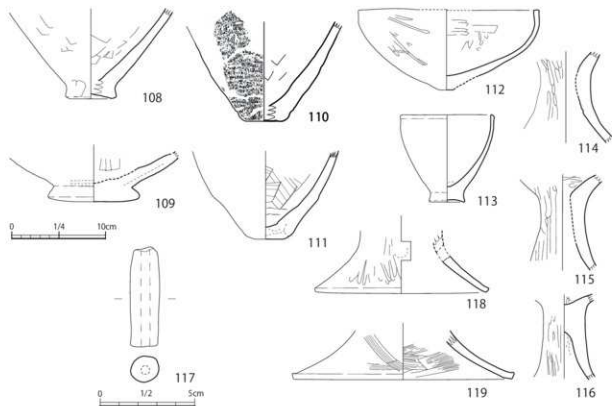
**砥石** 頁岩製で柱状や板状など定形的なものや、砂岩の自然礫・棒状礫を用いたものなど多様である。なかには、352・368や459・460など小型・定形的で、携行性が重要であったろうものもある。研磨対象としては、研磨痕の分析等は行っていないものの、素材剥片も多量に出土した石庖丁が当然対象とされるが、一定量出土した鉄器もその対象であったと考えられる。

**有溝石鏝** SA14で1点出土している(449)。真鍋篤行氏の有溝石鏝Ⅲ類(平断面楕円形で長・短軸に複数の溝を有する)に相当する(真鍋1995)。真鍋氏はⅢ類について、単体出土が多く溝幅も細いものが多いため、魚網鏝ではよく釣用鏝具の可能性が高いとしている。449も同様の事例であり釣用鏝具と考えられる。

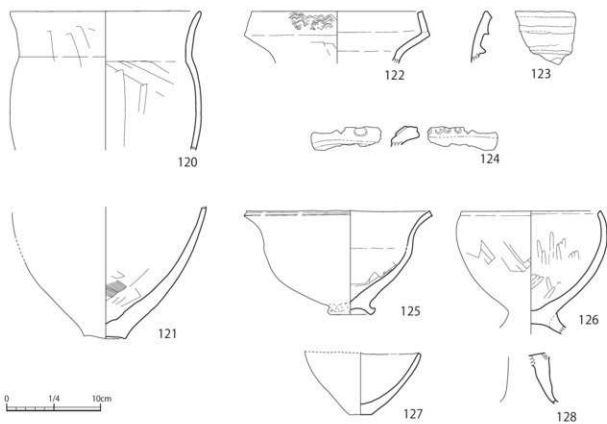
## 鉄器

**板状鉄斧** 494は、側面が平坦で、鉋打により表面中央部が若干窪み断面凹レンズ状を呈し、また刃部が弧状を呈するなどの技術的な特徴から朝鮮半島製と考えられる。朝鮮半島では、集落遺跡での出土より埋葬遺構での副葬品として出土することが多く、弥生時代後期前半相当の時期には減少する。SA7の廃館に伴うとみた場合、494は伝世品である可能性が高いと言える。

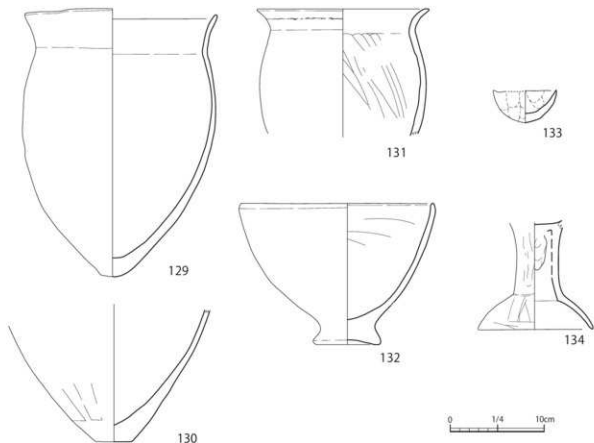
**袋状工具** 484は袋状型とも見られるが、身が長いわりに薄く、また袋部も胞割であるため盤としての使用に耐え得ないものと考えられる。段部上面は薄く平坦であり、柄を装着したのちに叫びた痕跡とみられる。また、同上端が内側に折れ曲がっており、柄に食い込ませたものとみられる。



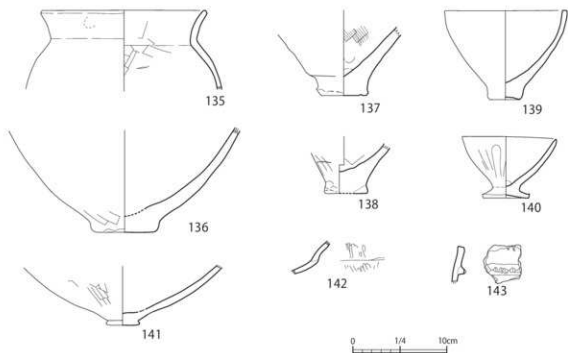
第57图 SA1出土土器实测图 (S=1/4、1/2)



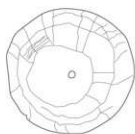
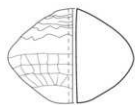
第58图 SA2出土土器实测图 (S=1/4)



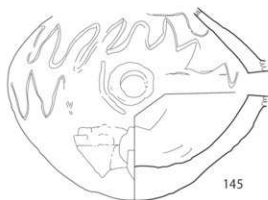
第59图 SA3出土土器实测图 (S=1/4)



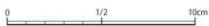
第60图 SA4出土土器实测图 (S=1/4)



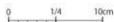
144



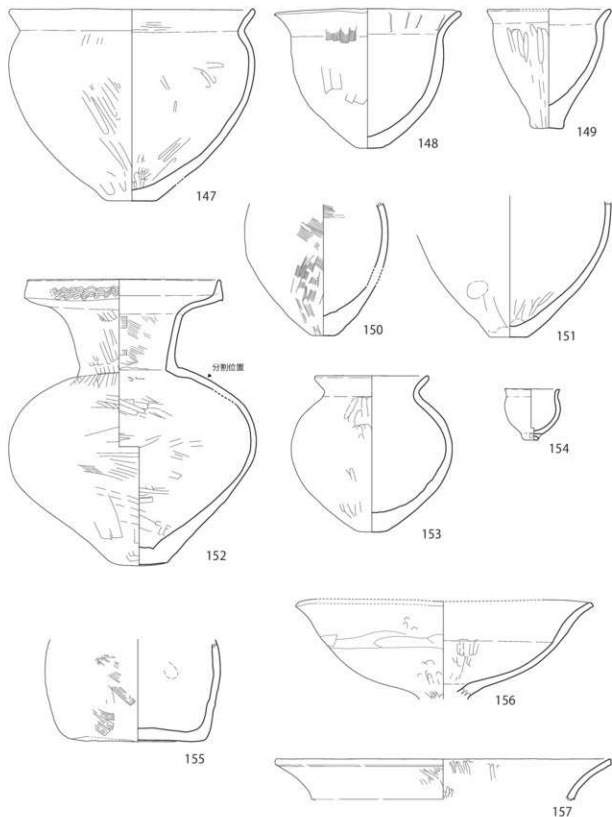
145



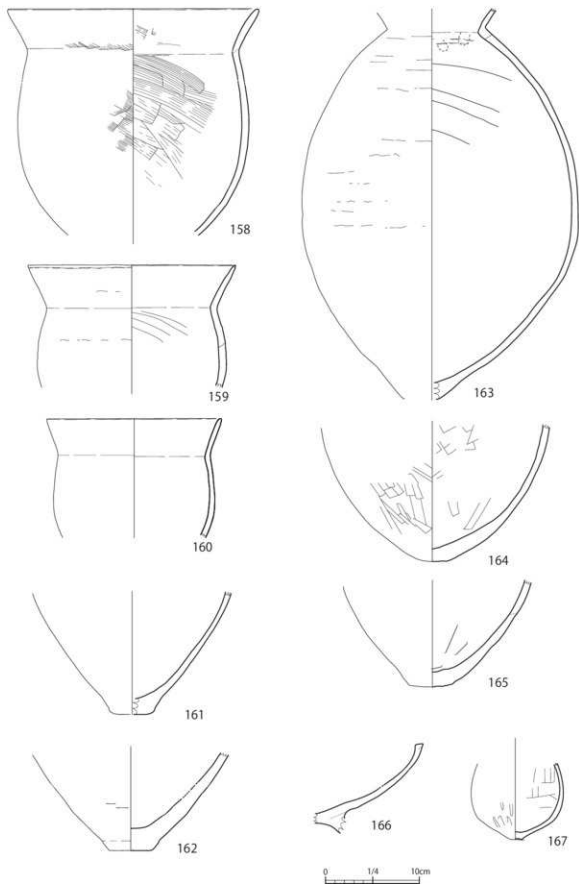
146



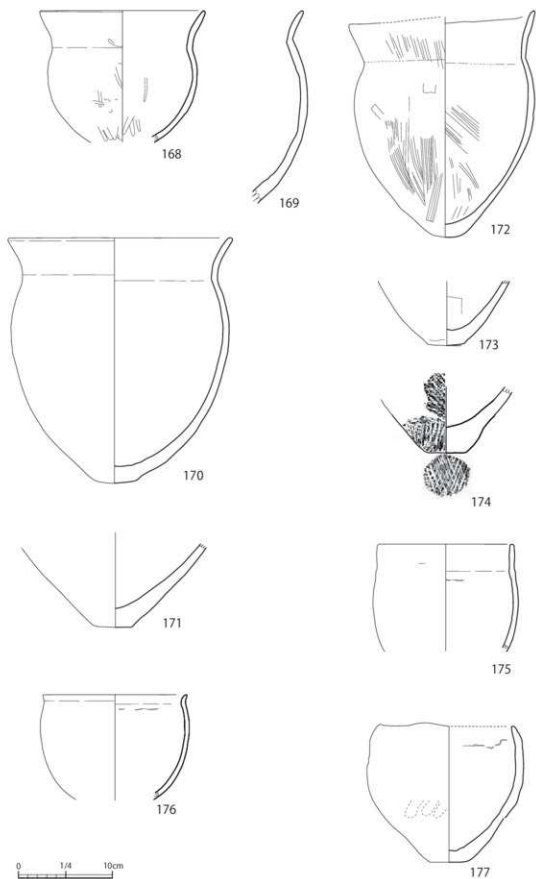
第61図 SA3、6出土土器実測図 (S=1/1、1/2、1/4)



第62图 SA5出土土器实测图 (S=1/4)

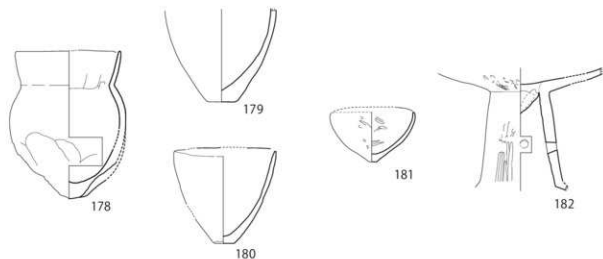


第63图 SA7出土土器实测图 (S=1/4)

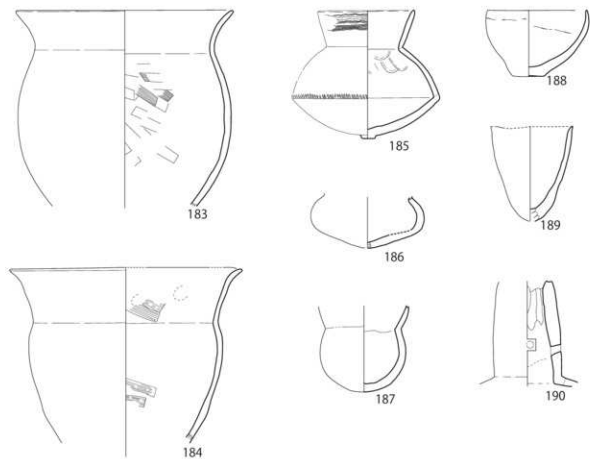


第64图 SA8出土土器实测图(1) (S=1/4)



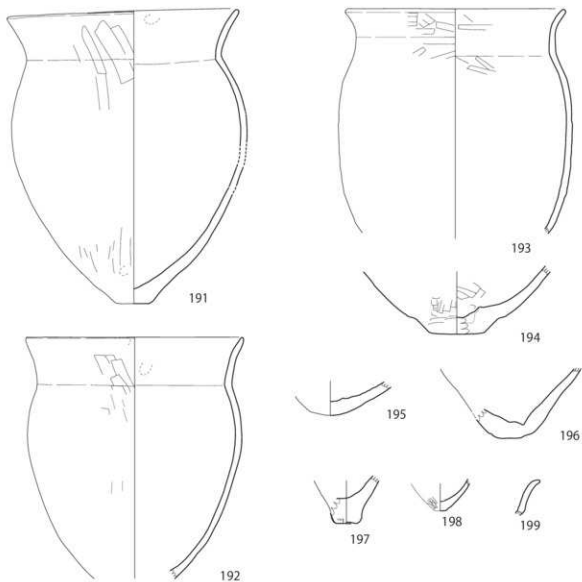


第65图 SA8出土土器实测图(2) (S=1/4)

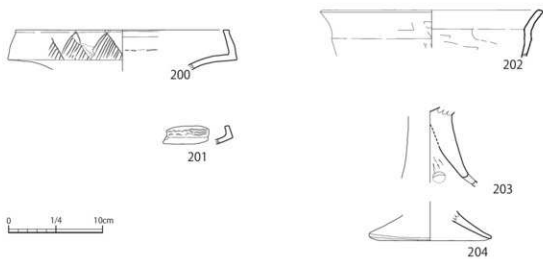


0 1/4 10cm

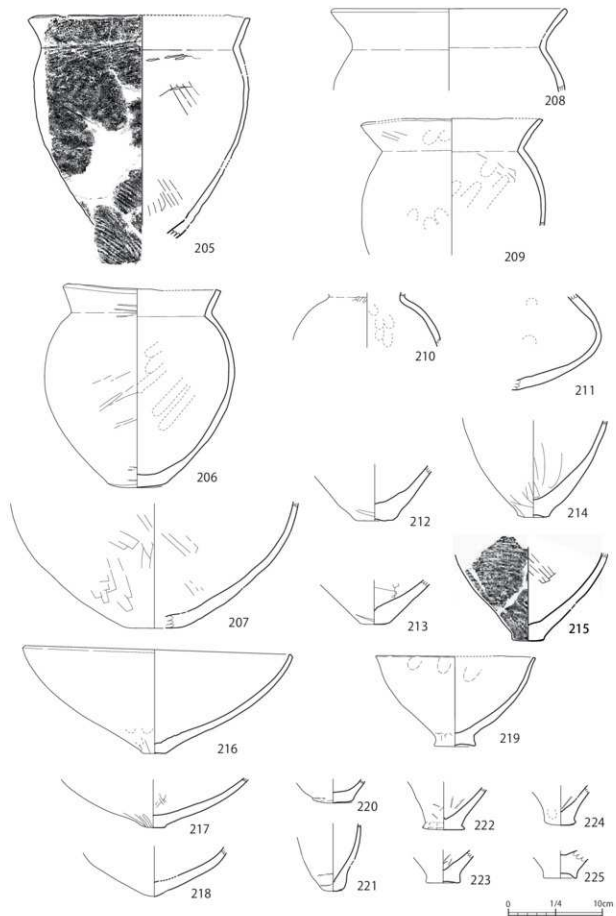
第66图 SA9出土土器实测图 (S=1/4)



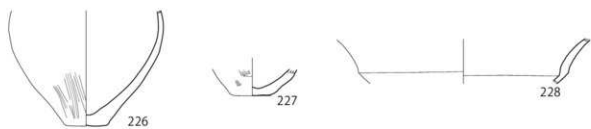
第67图 SA 10出土土器实测图 (S=1/4)



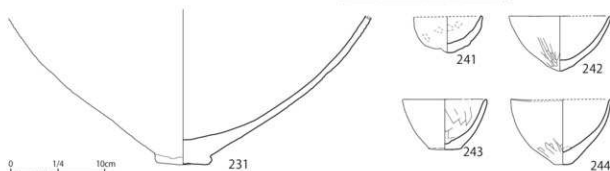
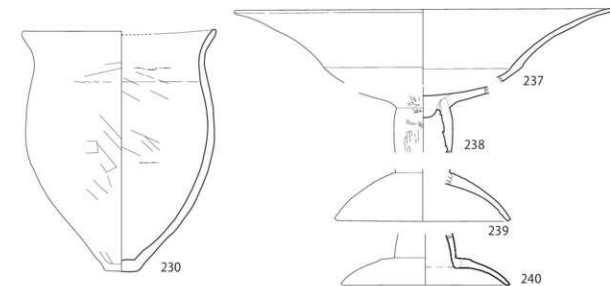
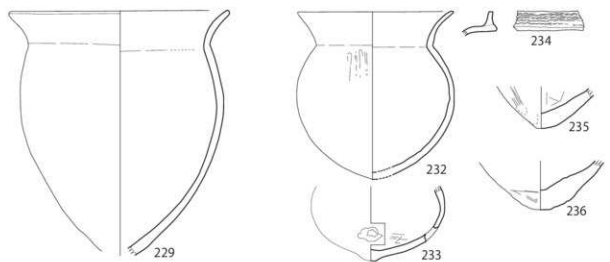
第68图 SA 11出土土器实测图 (1) (S=1/4)



第69圖 SA 11出土土器実測圖(2)(S=1/4)

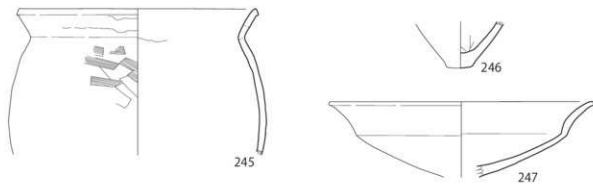


第70図 SA12出土土器実測図 (S=1/4)

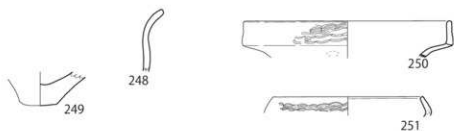


0 1/4 10cm

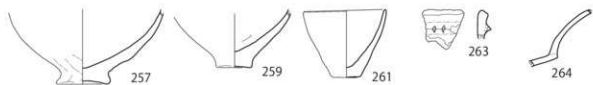
第71図 SA13出土土器実測図 (S=1/4)



第72图 SA14出土土器实测图 (S=1/4)



第73图 SA15出土土器实测图 (S=1/4)



第74图 SA16出土土器实测图 (S=1/4)



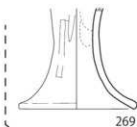
266



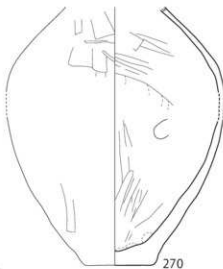
267



268



269



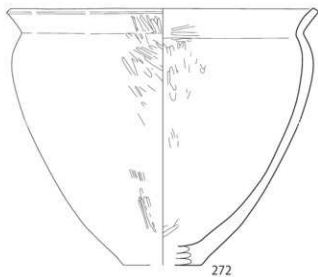
270



271

第75图 SA17出土土器实测图  
(S=1/4)

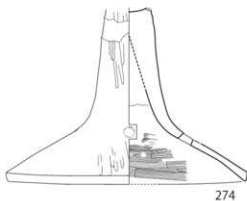
第76图 SA18出土土器实测图  
(S=1/4)



272



273



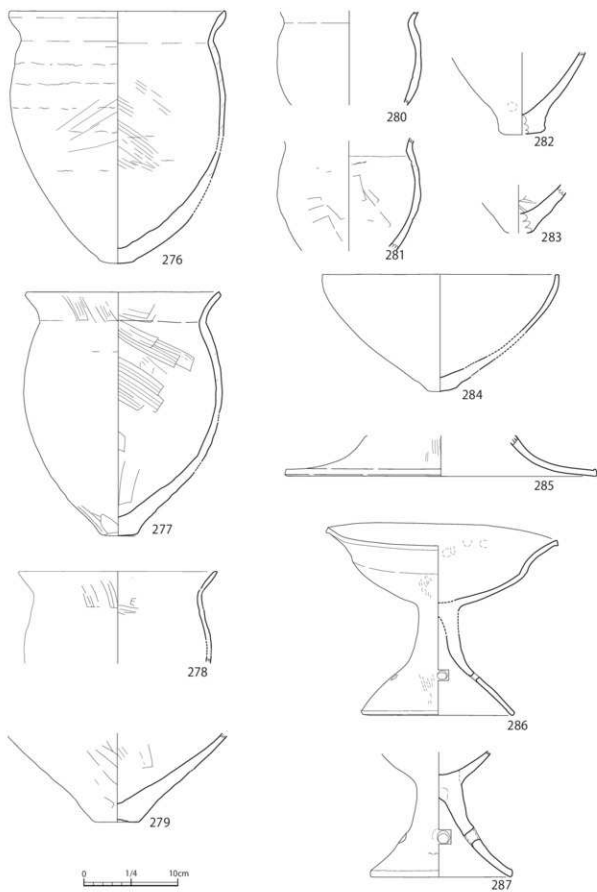
274



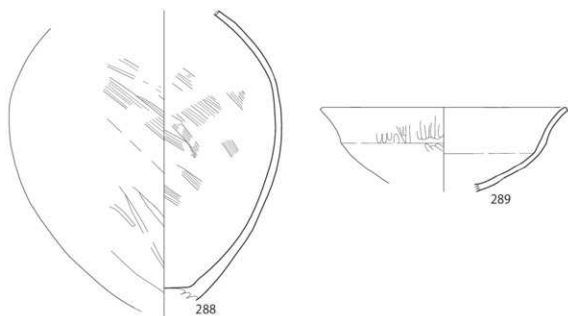
275



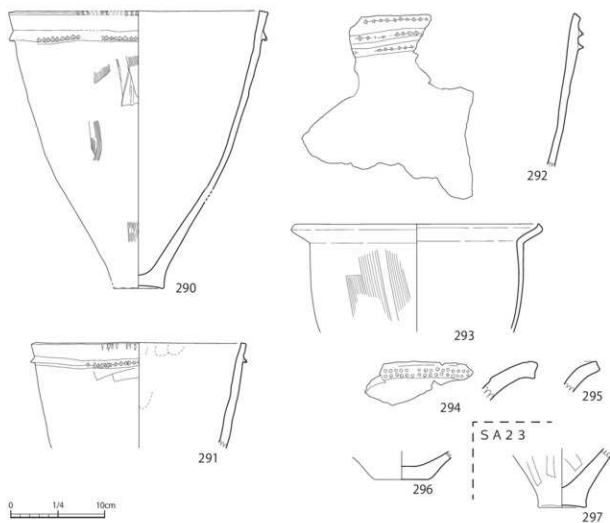
第77图 SA19出土土器实测图 (S=1/4)



第78图 SA20出土土器实测图(S=1/4)

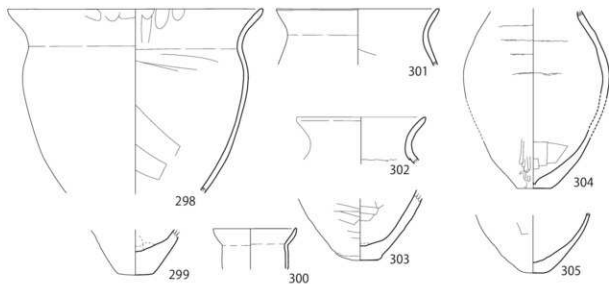


第79図 SA 21出土土器実測図 (S=1/4)

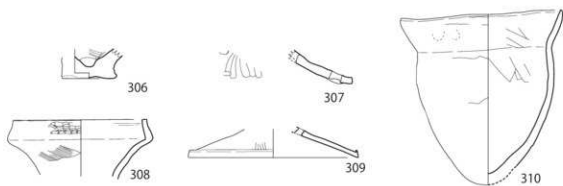


第80図 SA 22・24、SA 23出土土器実測図 (S=1/4)

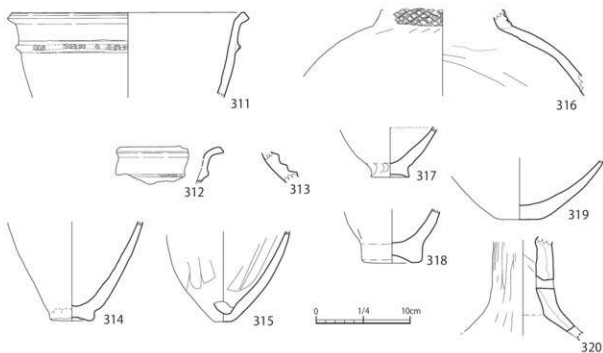




第81図 SB20出土土器実測図 (S=1/4)



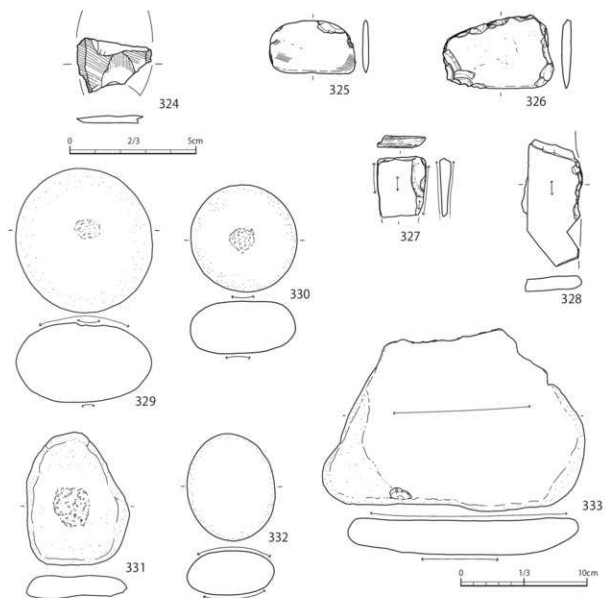
第82図 SC3、11、37出土土器実測図 (S=1/4)



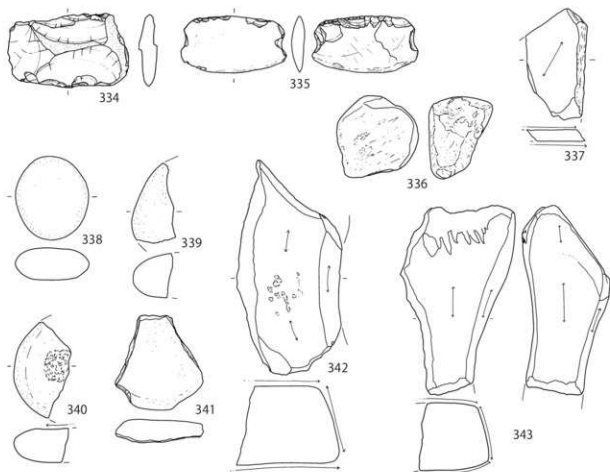
第83図 S7グリッド周辺出土土器実測図 (S=1/4)



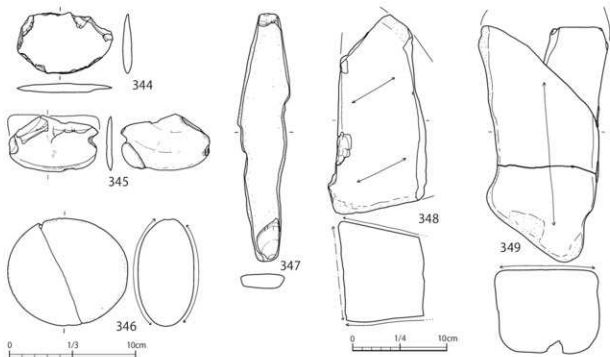
第84图 包含層出土土器実測図 (S=1/4、1/2、1/1)



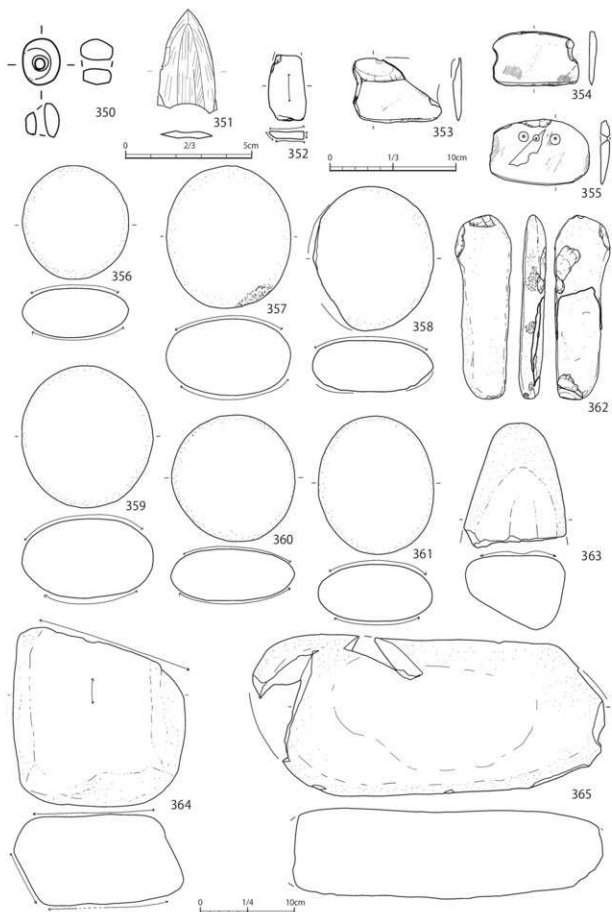
第85图 SA1出土石器実測図 (S=1/3、2/3)



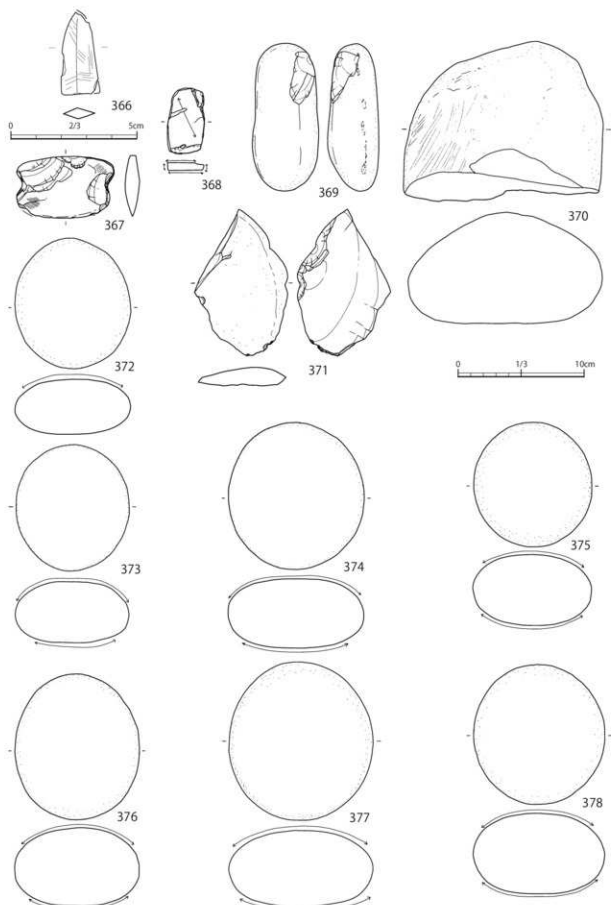
第86图 SA 2出土石器实测图 (S=1/3)



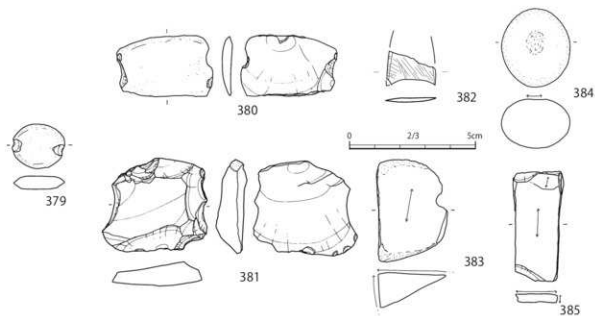
第87图 SA 3出土石器实测图 (S=1/3、1/4)



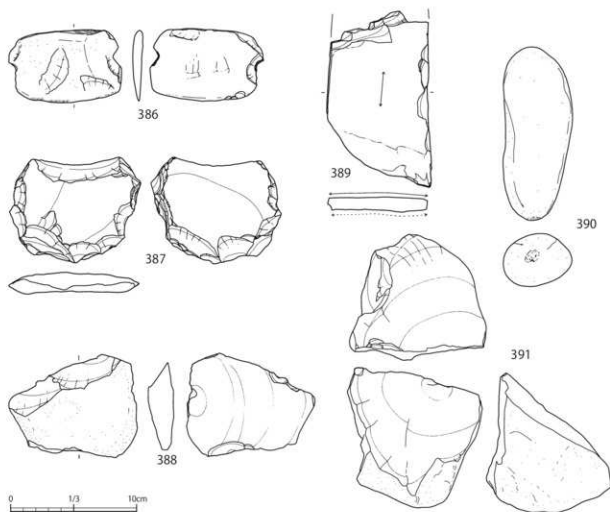
第88图 SA4出土石器实测图 (S=2/3、1/3、1/4)



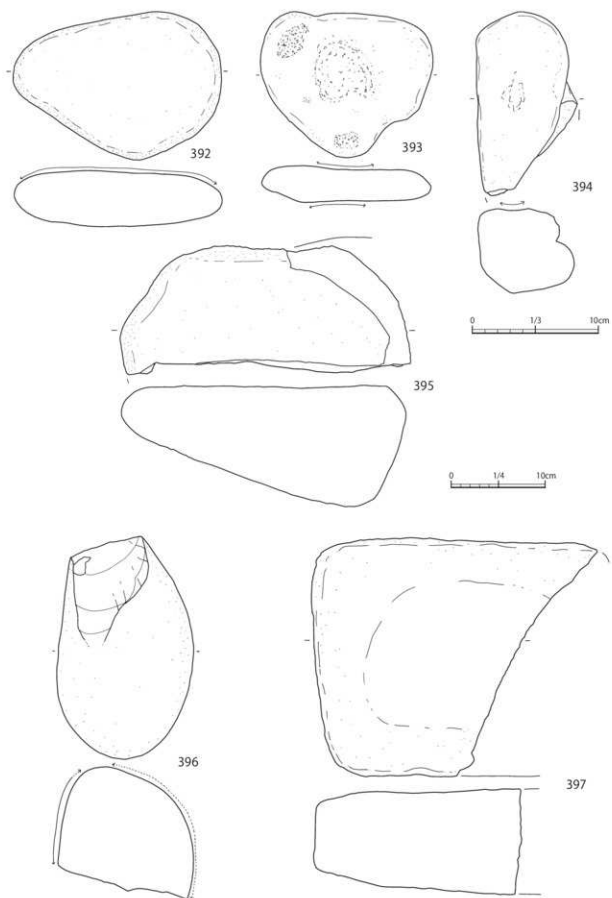
第89図 SA 5、6出土石器実測図 (S=1/3、2/3) ※371.375.378はSA 6出土



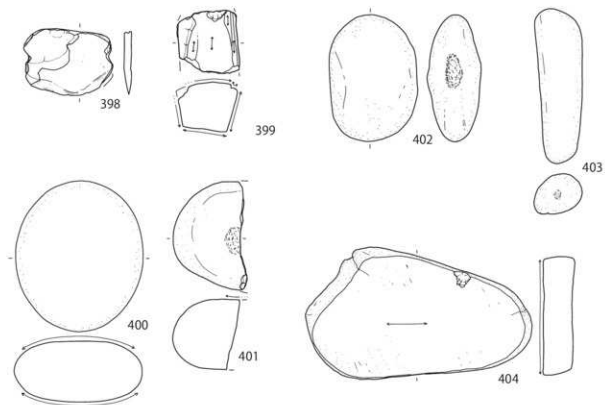
第90图 SA7出土石器实测图 (S=1/3、2/3)



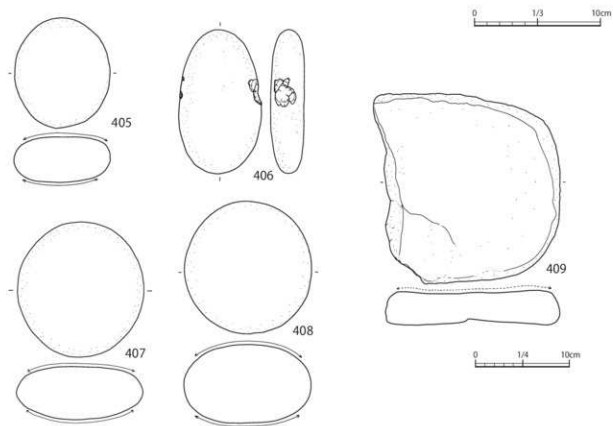
第91图 SA8出土石器实测图 (1) (S=1/3)



第92图 SA8出土石器实测图(2) (S=1/3、1/4)

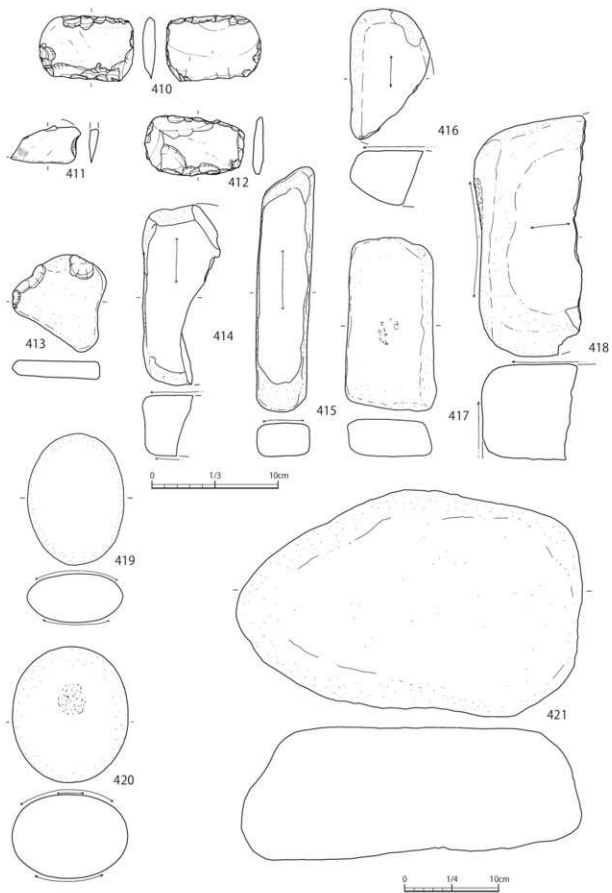


第93图 SA9出土石器实测图 (S=1/3)

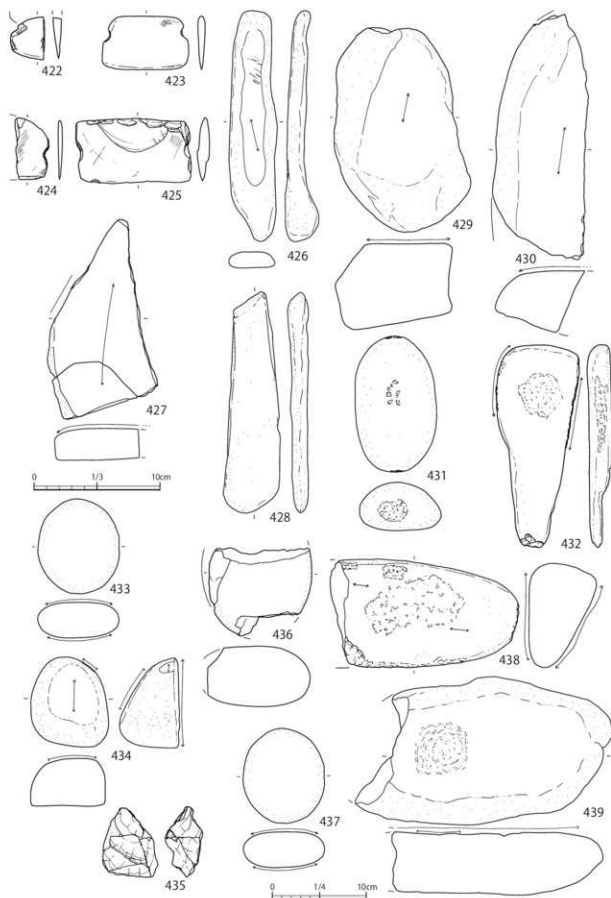


第94图 SA12出土石器实测图 (S=1/3、1/4)

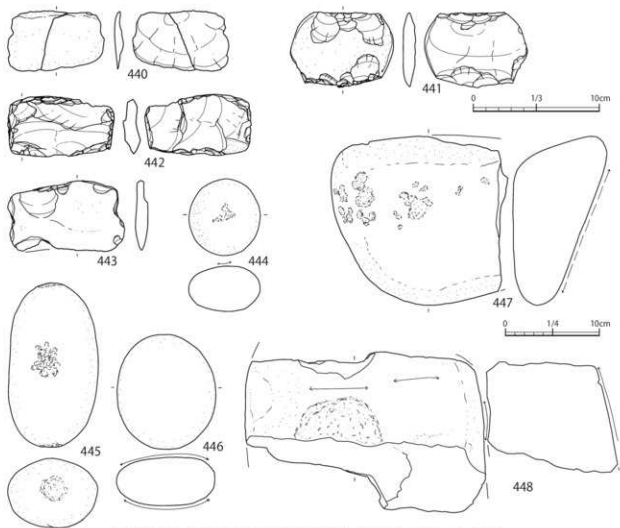




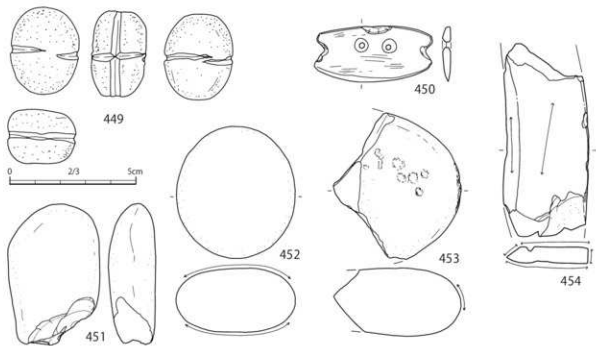
第95図 SA10出土石器実測図 (S=1/3、1/4)



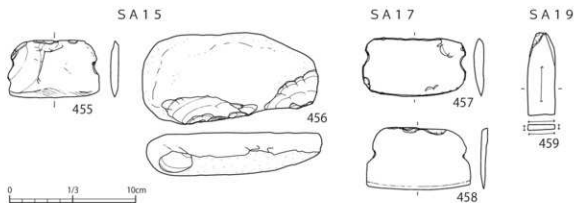
第96图 SA11出土石器实测图 (S=1/3、1/4)



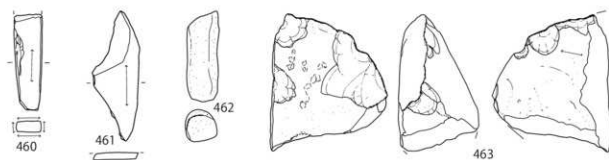
第97图 SA13出土石器实测图 (S=1/3、1/4)



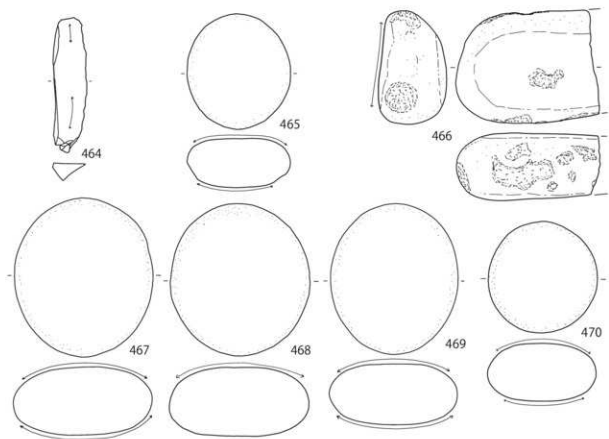
第98图 SA14出土石器实测图 (S=2/3、1/3)



第99图 SA 15、17、19出土石器实测图 (S=1/3)



第100图 SA 16出土石器实测图 (S=1/3)



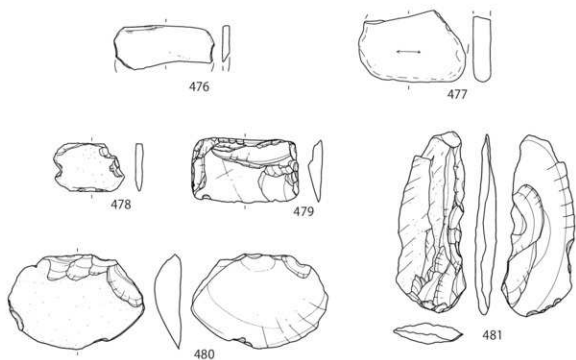
第101图 SA 20出土石器实测图 (S=1/3)



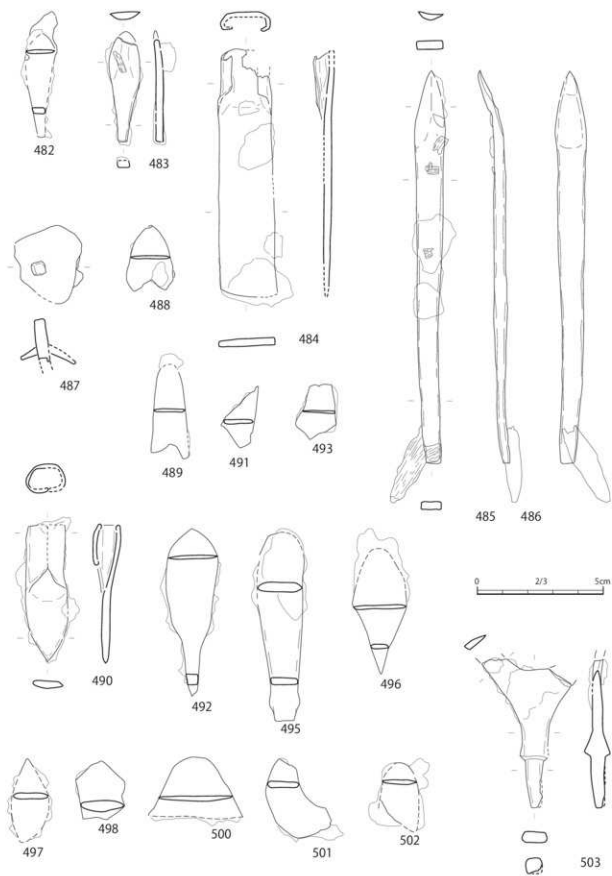
第102图 SA22出土石器实测图 (S=1/3)



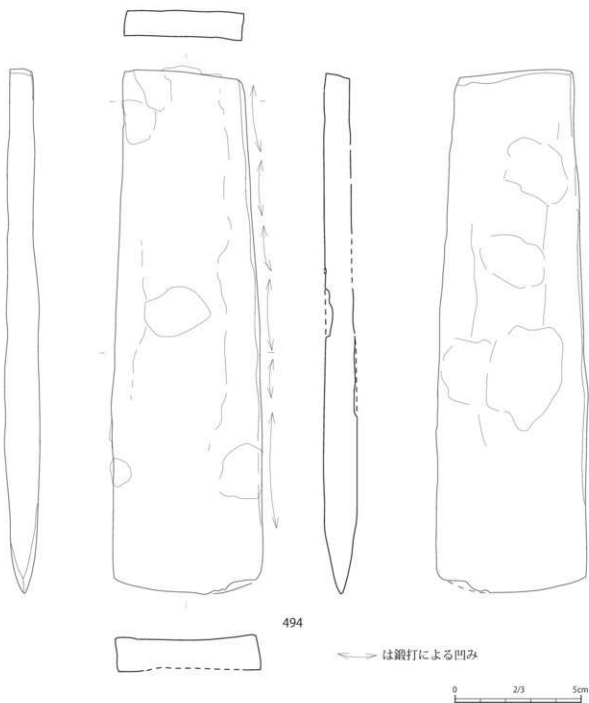
第103图 SA23出土石器实测图 (S=1/3)



第104图 包含层出土石器实测图 (S=1/3、1/4)



第105図 遺構および包含層出土鉄器実測図(1)(S=2/3)



第106図 遺構および包含層出土鉄器実測図(2)(S=2/3)

## 第6節 中世の遺構と遺物

### 1 遺構

Ⅲ層上面において中世の掘立柱建物跡23棟、竪穴式遺構3基、土坑5基、溝状遺構13条の遺構を検出した。また、それら遺構の内部で中世土師器・陶磁器片、石器などの遺物が出土した。

#### (1) 掘立柱建物跡(SB)

(第107～121、132図、第13～14表、  
図版21～22、33・34)

##### SB5 (第108図)

**規模** 梁行2間(358・330cm)・桁行3間(504・565cm)で、梁行柱間は179～214cm、桁行柱間は177～214cm、身舎部分の面積は約234㎡を測る。

**柱穴** 直径25～50cm・深さ19～54cmを測る。北側梁筋中央の柱穴は確認できなかった。

**遺物** P2内で備前系陶器片が、ほか柱穴内で砥石(560)が出土した。

##### SB6 (第109図)

**規模** 東西の桁筋両面に庇を、棟筋の身舎内にも柱穴を有する総柱建物である。身舎部分は、梁行2間(382・384cm)・桁行5間(984・996cm)で、梁行柱間は174～208cm、桁行柱間は185～265cm、身舎部分の面積は約382㎡を測る。身舎～庇部分の柱間は、西側92～116cm、東側122～140cmを測る。

**柱穴** 直径24～46cm・深さ22～83cmを測る。庇部分では直径24～43cm・深さ14～58cmを測る。北東側桁筋の柱穴及び北東側庇桁筋の柱穴は確認できなかった。

**遺物** P2で土師皿(506)が、P7・10・20で中世土師器細片が出土した。また、P2内で梅?の種子が、P3で炭化米塊が出土した。

##### SB7 (第110図)

**規模** 四面に庇を有する。身舎部分は梁行2間(358・

371cm)・桁行3間(618・620cm)で、梁行柱間は172～196cm、桁行柱間は187～231cm、身舎部分の面積は約230㎡を測る。身舎～庇部分の柱間は、北側76～88cm、南側100～115cm、西側58～92cm、東側92cmを測る。

**柱穴** 直径19～35cm・深さ18～31cmを測る。庇部分では直径16～33cm・深さ16～72cmを測る。北東、南東、南西側では庇部分の柱穴は確認できなかった。

**遺物** P22の底面より10cm程上位で青磁碗の底部(516)・台石(561)・礫が出土した。他にも、P23・24・20の底面より10～15cmほど上位で10～15cm長の礫が出土した。

##### SB8 (第117図)

**規模** 梁行1間(447・450cm)・桁行2間(466cm)で、桁行柱間は229～238cm、身舎部分の面積は約21㎡を測る。

**柱穴** 直径29～36cm・深さ23～46cmを測る。

##### SB9 (第108図)

**規模** 梁行1間(308・320cm)・桁行3間(536cm)で、桁行柱間は169～188cm、身舎部分の面積は約172㎡を測る。

**柱穴** 直径23～26cm・深さ26～52cmを測る。

##### SB10 (第111図)

**規模** 梁行2間(326・338cm)・桁行2間(413・422cm)で、梁行柱間は139～190cm、桁行柱間は204～215cm、身舎部分の面積は約143㎡を測る。両梁筋中央の柱穴は外側に外れる。

**柱穴** 直径15～31cm・深さ14～26cmを測る。

##### SB12 (第111図)

**規模** 梁行2間(360cm)・桁行3間(622cm)で、梁行柱間は176～184cm、桁行柱間は188～227cm、身舎部分の面積は約224㎡を測る。

**柱穴** 直径24～49cm・深さ20～37cmを測る。

**遺物** P3の柱痕跡内部の底面より10cm程上位で





第107図 遺構分布図 (S=1/600)

完形の土師皿(506)と青磁碗の体部片が出土。

### SB14 (第112図)

**規模** 梁行2間(384・389cm)・桁行3間(584・612cm)で、梁行柱間は184～206cm、桁行柱間は182～221cm、身舎部分の面積は約23.8㎡を測る。

**柱穴** 直径28～48cm・深さ5～54cmを測る。

**遺物** 中世土師器細片

### SB17 (第113図)

**規模** 梁行2間(468・490cm)・桁行3間(704・724cm)で、梁行柱間は250～251cm、桁行柱間は22～250cm、身舎部分の面積は約36.1㎡を測る。

**柱穴** 直径28～43cm・深さ45～88cmを測る。北側梁筋中央の柱穴は確認できなかった。

**遺物** P17で土師皿の底部(514)が出土。

### SB22 (第113図)

**規模** 梁行2間(332・364cm)・桁行3間(638cm)で、梁行柱間は163～203cm、桁行柱間は192～235cm、身舎部分の面積は約23.2㎡を測る。

**柱穴** 直径24～41cm・深さ22～71cmを測る。

**遺物** P4で弥生土器小片が、P1・3・4では底面より25～45cmほど上位で20～30cm角大の礎が出土。

### SB27 (第114図)

**規模** 北側桁筋と西側梁筋の二面に庇を有する。身舎部分は梁行2間(356・364cm)・桁行2間(428・430cm)で、梁行柱間は164～192cm、桁行柱間は212～220cm、身舎部分の面積は約15.7㎡を測る。身舎～底部分の柱間は、北側71～80cm、西側86～91cmを測る。

**柱穴** 直径21～30cm・深さ18～59cmを測る。庇部分では直径18～28cm・深さ5～28cmを測る。東側梁筋中央の柱穴は確認できなかった。

**遺物** P2・4・8で中世土師器細片が出土。

### SB28 (第114図)

**規模** 梁行1間(318・328cm)・桁行3間(546・

549cm)で、桁行柱間は172～192cm、身舎部分の面積は約18.0㎡を測る。

**柱穴** 直径22～32cm・深さ7～40cmを測る。

### SB29 (第115図)

**規模** 南側桁筋に庇を有する。梁行1間(355cm)・桁行3間(544cm)で、桁行柱間は178～184cm、身舎部分の面積は約19.3㎡を測る。身舎～庇部分の柱間は85cmを測る。

**柱穴** 直径19～32cm・深さ9～14cmを測る。庇部分では直径18～25cm・深さ25cmを測る。

### SB31 (第117図)

**規模** 底部分のみの検出。桁行(あるいは梁行)は最大5間(東側列974・西側列978cm)で、桁行(あるいは梁行)柱間は東側列178～210、西側列186～206cmを測る。

**柱穴** 東側列では直径21～35cm・深さ17～37cm、西側列では直径24～30cm・深さ30～76cmを測る。

### SB35 (第115図)

**規模** 底部分のみの検出。桁行(あるいは梁行)は最大3間(東側列567・西側列564cm)で、桁行(あるいは梁行)柱間は東側列184～194、西側列185～192cmを測る。

**柱穴** 東側列では直径27～44cm・深さ35～79cm、西側列では直径25～35cm・深さ43～51cmを測る。

**遺物** P2で土師皿片が、P3で弥生土器細片が出土。

### SB36 (第116図)

**規模** 梁行1間(339・346cm)・桁行3間(543・551cm)で、桁行柱間は173～198cm、身舎部分の面積は約19.1㎡を測る。

**柱穴** 直径21～31cm・深さ22～63cmを測る。

**遺物** 土器P1・2・8で縄文土器・弥生土器細片が出土。

### SB40 (第116図)

**規模** 桁筋両面に庇を有する。身舎部分は梁行2間(364・382cm)・桁行3間(508・601cm)で、梁行柱間は180～181cm、桁行柱間は193～214cm、身舎部分の面積は約230㎡を測る。身舎～庇部分の柱間隔は、北側75～77cm、南側77～86cmを測る。

**柱穴** 直径24～40cm・深さ15～60cmを測る。庇部分では直径22～37cm・深さ12～41cmを測る。東側梁筋中央の柱穴は確認できなかった。

**遺物** 弥生土器小片、P7下層で鉦? (588) が出土。

### SB41 (第119図)

**規模** 梁行2間(314・320cm)・桁行3間(607・624cm)で、梁行柱間は148～174cm、桁行柱間は197～216cm、身舎部分の面積は約200㎡を測る。

**柱穴** 直径19～35cm・深さ31～76cmを測る。

**遺物** P11で青磁碗の口縁部片(515)・白磁壺の小片が、P15で古瀬戸小片が出土。

### SB42 (第119図)

**規模** 梁行2間(356cm)・桁行3間(684cm)で、梁行柱間は160～196cm、桁行柱間は224～228cm、身舎部分の面積は約244㎡を測る。

**柱穴** 直径28～37cm・深さ13～54cmを測る。

### SB43 (第118図)

**規模** 梁行1間(439・450cm)・桁行5間(1084・1094cm)で、桁行柱間は196～229cm、身舎部分の面積は約492㎡を測る。

**柱穴** 直径23～35cm・深さ13～77cmを測る。

**遺物** 弥生土器細片

### SB45 (第120図)

**規模** 梁行2間(333・337cm)・桁行5間(775・787cm)で、梁行柱間は161～174cm、桁行柱間は150～172cm、身舎部分の面積は約265㎡を測る。

**柱穴** 直径14～29cm・深さ32～78cmを測る。

**遺物** P11で東播系須恵器片口鉢の口縁部片(513)が出土。

### SB46 (第120図)

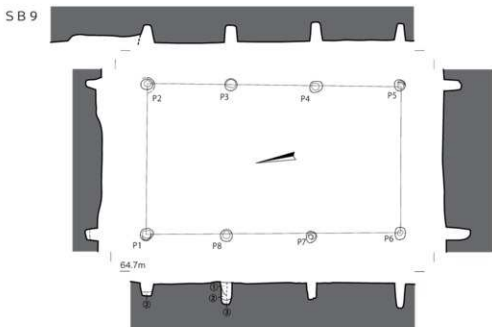
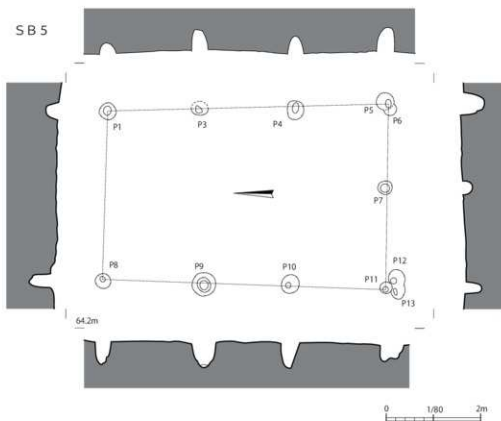
**規模** 梁行2間(304cm)・桁行3間(557・563cm)で、梁行柱間は150～155cm、桁行柱間は171～207cm、身舎部分の面積は約17.1㎡を測る。

**柱穴** 直径20～37cm・深さ20～57cmを測る。

### SB47 (第121図)

**規模** 梁行1間(375・380cm)・桁行3間(580・612cm)で、桁行柱間は186～206cm、身舎部分の面積は約233㎡を測る。

**柱穴** 直径25～43cm・深さ24～68cmを測る。



**SB 9**

**P 1**

①黒色土 (10YR1.7/1) しまりあり。粘性ほとんどなし。φ 3mm 以下の KAh 層土を極微量含む。

②黒色土 (10YR1.7/1) かなりしまりあり。粘性ほとんどなし。φ 5mm 以下の KAh 層土を極微量含む。

**P 3**

①黒色土 (10YR1.7/1) かなりしまりあり。粘性ほとんどなし。

**P 4**

①黒色土 (10YR2/1) ややしまりあり。粘性なし。φ 3cm 以下の KAh 層土ブロックと粒を 10% 含む。

**P 5**

①黒色土 (10YR2/1) しまりあり。粘性なし。φ 5mm 以下の KAh 層土粒を 20% 含む。底の方に P8③のような埋土少量あり。

**P 6**

③P 5のややしまりあり。

**P 7 = P 1**。

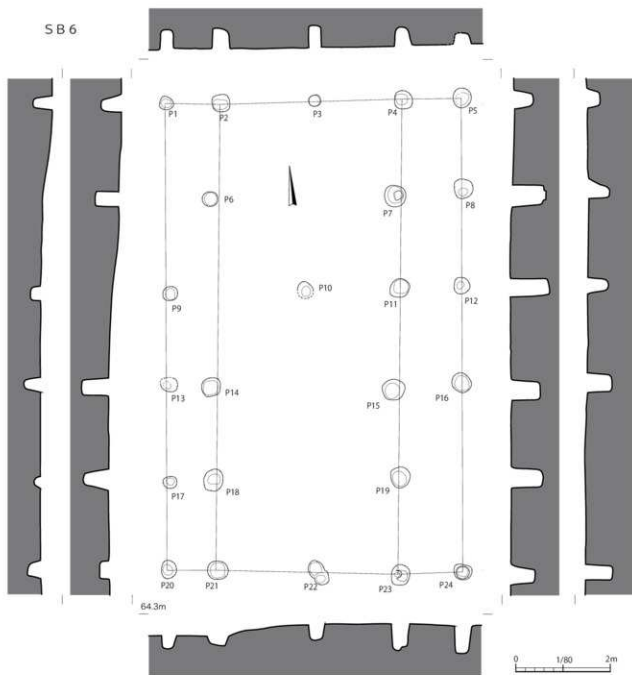
**P 8**

③黒色土 (10YR1.7/1) しまりあり。粘性ほとんどなし。φ 5mm 以下の KAh 層土の粒を 10% 含む。

②黒色土 (10YR1.7/1) かなりしまりあり。粘性ほとんどなし。φ 3cm 以下の KAh 層土ブロックを 60% 含む。

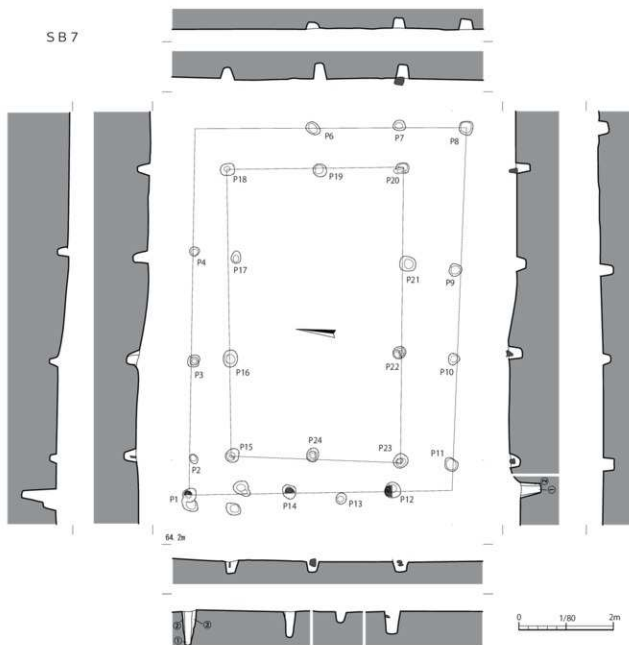
③黒褐色土 (10YR2/2) かなりしまりあり。粘性ややあり。φ 3cm 以下の ML1 フロツクを 60% 含む。

第 108 図 SB 5、9 実測図 (S = 1/80)



第109図 SB6実測図 (S=1/80)

SB 7



## SB 7

## P 1

①黒色土 (10YR1.7/1) しまりほとんどなし。粘性ほとんどなし。φ 3mm 以下の KAh 層士の粒を 30% 程含む。

②黒色土 (10YR2/1) しまりほとんどなし。粘性ほとんどなし。φ 3mm 以下の KAh 層士の粒を 20% 程含む。ML1 の土が混ざるような感じ。

## P 11

①黒色土 (10YR2/1) ややしまりあり。粘性ほとんどなし。φ 1cm 以下の KAh 層士ブロック 20% と φ 3cm 以下の ML1 ブロックを 20% 程含む。

## P 14

①黒色土 (10YR1.7/1) ややしまりあり。粘性ほとんどなし。φ 1mm 以下の

KAh 層士の粒を極微量含む。

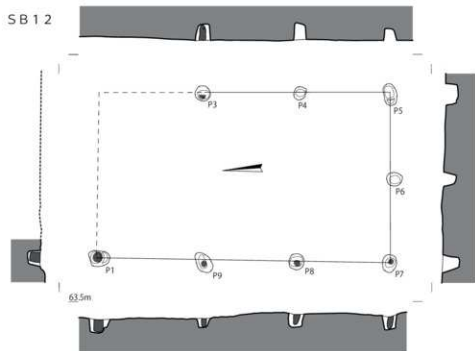
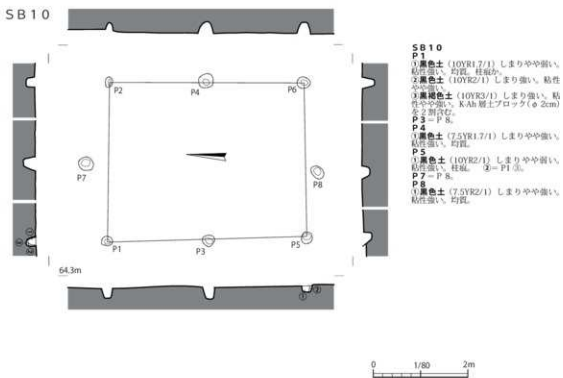
②黒色土 (10YR2/2) しまりほとんどなし。粘性なし。φ 3mm 以下の KAh 層士の粒を 40% 含む。

## P 16

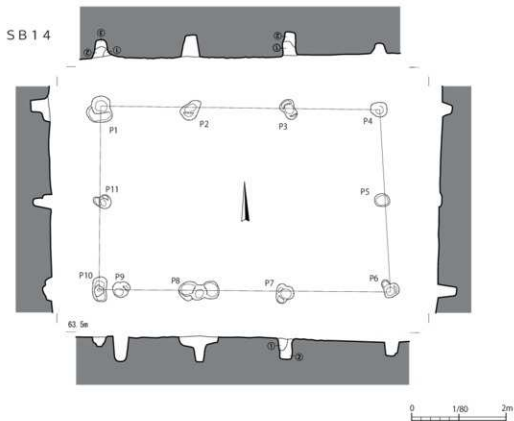
①黒色土 (10YR1.7/1) ややしまりあり。粘性ほとんどなし。φ 3cm 以下の KAh 層士の粒とブロックを 30% 程含む。また、φ 3cm 以下の ML1 ブロックを 20% 程含む。

②黒色土 (10YR2/1) しまりほとんどなし。粘性ほとんどなし。φ 3mm 以下の KAh 層士の粒を 20%、φ 5cm 以下の ML1 ブロックを 30% 程含む。

第 110 図 SB7 実測図 (S=1/80)



第111図 SB 10、12実測図 (S=1/80)



**SB14**

**P1**

①黒色土 (10YR1.7/1) 粒子細かく、粘性あり。しまり弱い。KAh層土粒を極微量に含む。

②黒色土 (10YR1.7/1) やや暗い。粒子細かく粘性あり。しまり弱く、KAh層土粒を極微量に含む。

③黒色土 (10YR1.7/1) やや暗い。粒子細かく粘性あり。①>②>③の順で暗い。

**P3**

①黒色土 (10YR1.7/1) 暗い。粒子細かく粘性強い。KAh層土はほとんど含まない。

②黒色土 (10YR1.7/1) やや暗い。粒子細かく粘性強い。KAh層土はほとんど含まない。

**P7**

①黒色土 (10YR1.7/1) 粒子細かく粘性強い。KAh層土粒を極微量に含む。

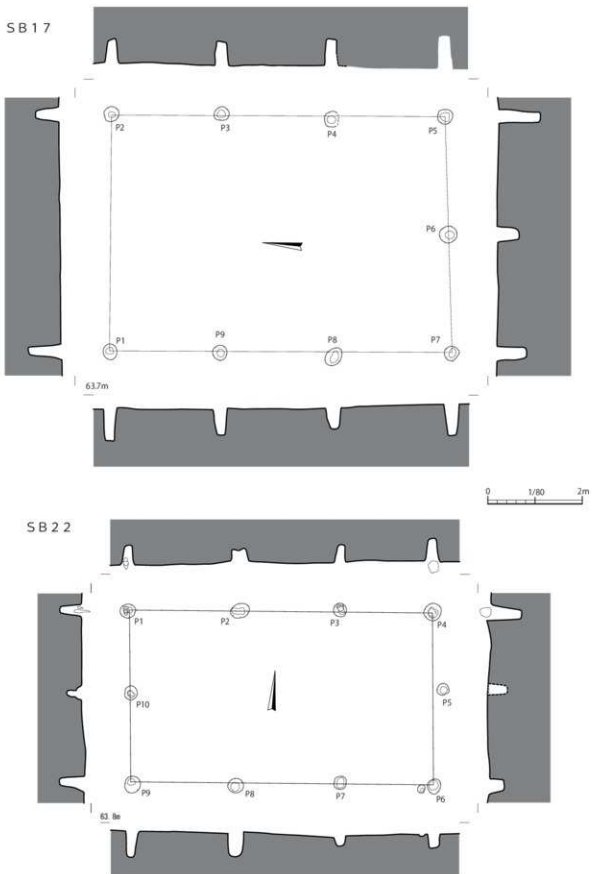
②黒色土 (10YR1.7/1) やや暗い。粒子細かく粘性強い。KAh層土粒は含まない。

**P11**

①黒色土 (10YR1.7/1) しまり強い。粒子細かく、粘性強い。φ 2~3mm 程のKAh層土ブロックを含む。

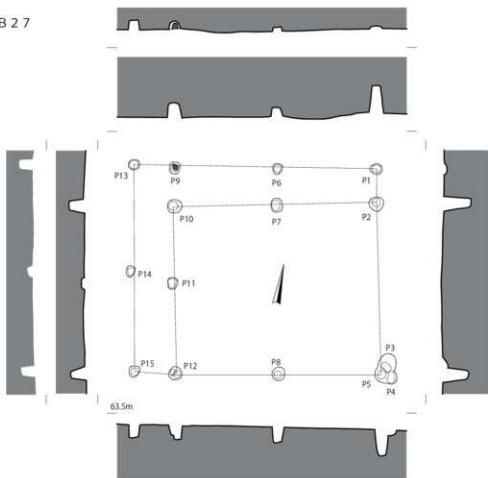
第112図 SB14実測図 (S=1/80)



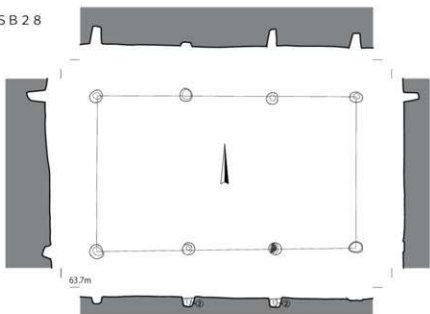


第113图 SB 17、22实测图 (S=1/80)

SB 27

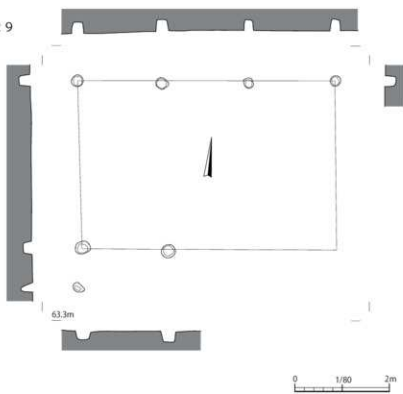


SB 28

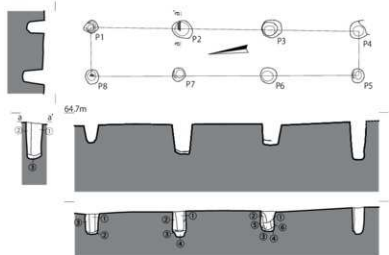


第114图 SB 27、28实测图 (S=1/80)

SB 29



SB 35



SB 35

P 1

①黄褐色土 (10YR2/1) かなりしまりあり。粘性ほとんどなし。φ 3cm 以下の K-Ah 層土層土ブロックを 30% 程含む。

P 2

①黄褐色土 (10YR1.7/1) しまりあり。粘性ほとんどなし。φ 3cm 以下の K-Ah 層土層土を 20% 程、φ 1cm 以下の黒褐色土 (10YR2/2) を 20% 含む。

②黄褐色土 (10YR2/1) しまりあり。粘性ほとんどなし。φ 3cm 以下の K-Ah 層土層土を 30%、φ 1cm 以下の黒褐色土 (10YR2/2) を 20% 程含む。

③黄褐色土 (10YR2/1) かなりしまりあり。やや粘性あり。φ 1cm 以下の K-Ah 層土層土を 40%、φ 1cm 以下の黒褐色土 (10YR2/2) を 10% 程含む。

P 3

①黄褐色土 (10YR2/1) やしまりあり。粘性ほとんどなし。φ 5mm 以下の K-Ah 層土層土を極微量含む。

P 4

P 5 = P 7.

P 6

①現代の土。②黄褐色土 (10YR1.7/1) ③と似ている。

③ = P 8 ①、④ = ③より若干黒色。⑤ = P 7 ②、⑥ = P 7 ④。

P 7

①黄褐色土 (10YR1.7/1) しまりあり。粘性ほとんどなし。φ 5mm 以下の K-Ah 層土を 30% 程含む。柱痕跡。

②黄褐色土 (10YR2/1) しまりあり。粘性ほとんどなし。φ 1cm 以下の K-Ah 層土を 25% 程、φ 1cm 以下の黒褐色土 (10YR2/2) を 30% 程含む。

③黄褐色土 (10YR2/2) かなりしまりあり。粘性ややあり。若干光沢あり。

④ 5mm 以下の K-Ah 層土を極微量含む。

⑤黄褐色土 (10YR2/1) かなりしまりあり。粘性ややあり。φ 1cm 以下の K-Ah 層土を 10% と φ 2cm 以下の黒褐色土 (10YR2/2) を 30% 程含む。

P 8

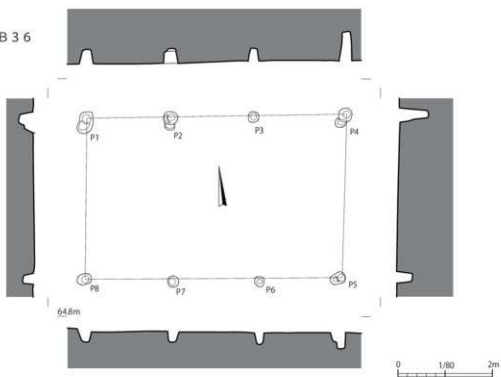
① P 7 ③の K-Ah 層土極微量タイプ。

② P 7 ②。

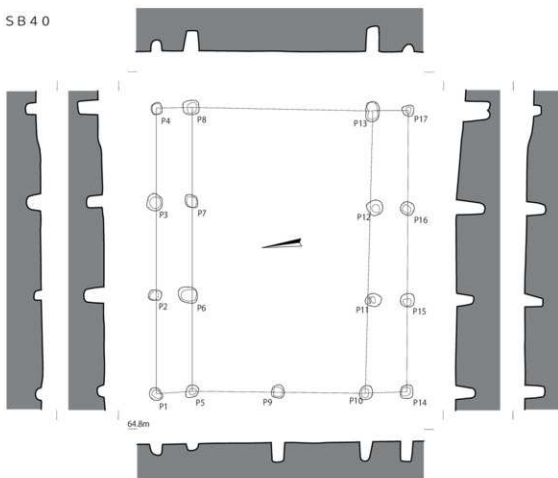
③ P 7 ④。

第 115 図 SB 29、35 実測図 (S=1/80)

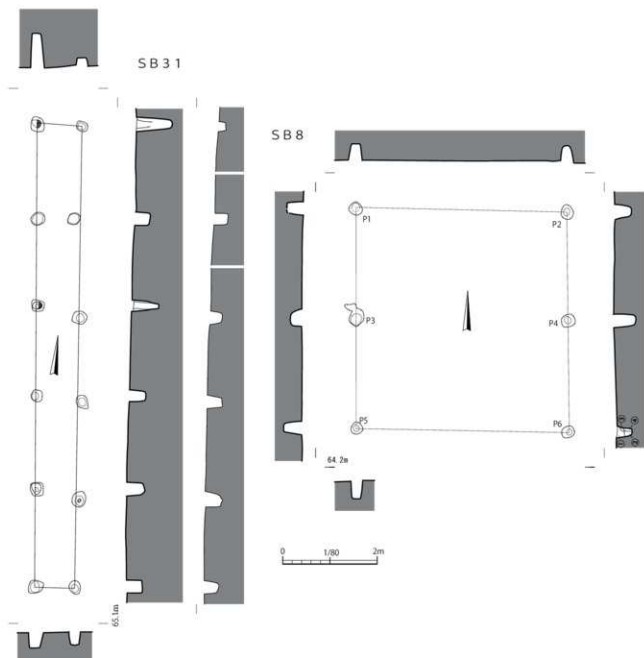
SB 36



SB 40

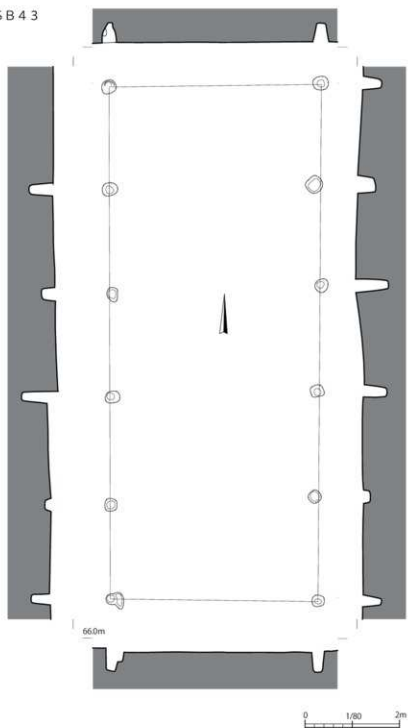


第116图 SB 36、40实测图 (S=1/80)



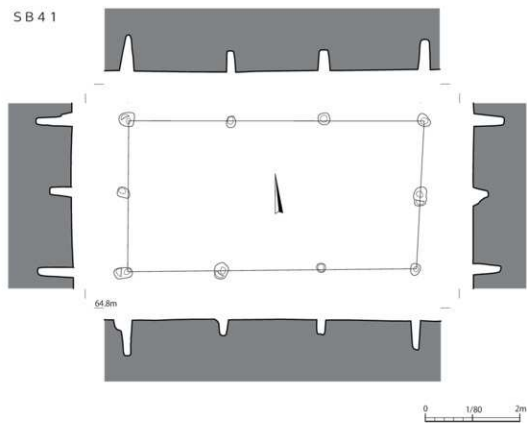
第117図 SB 31、8実測図 (S=1/80)

SB43

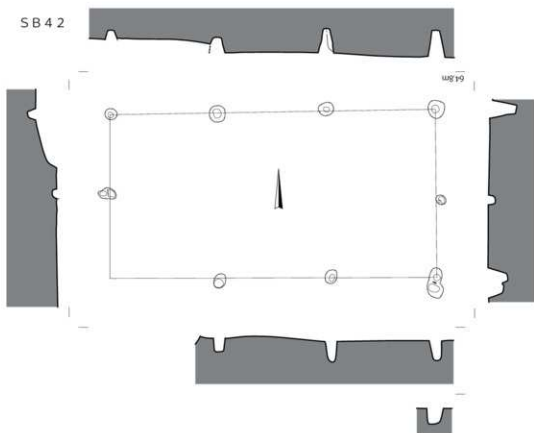


第118図 SB43実測図 (S=1/80)

SB 4 1

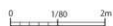
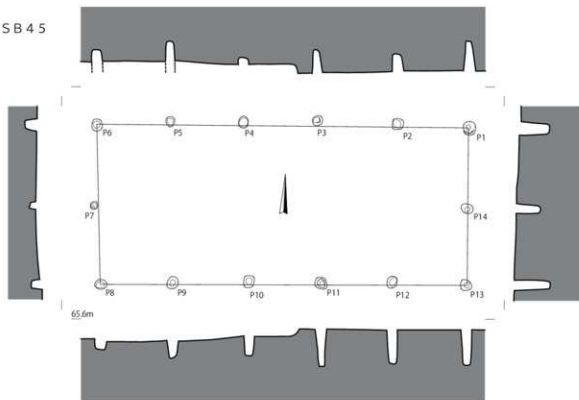


SB 4 2

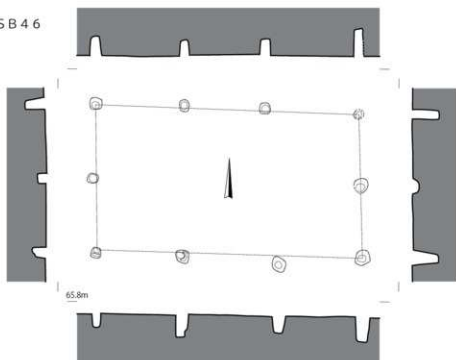


第119図 SB 4 1、4 2実測図 (S=1/80)

SB 45

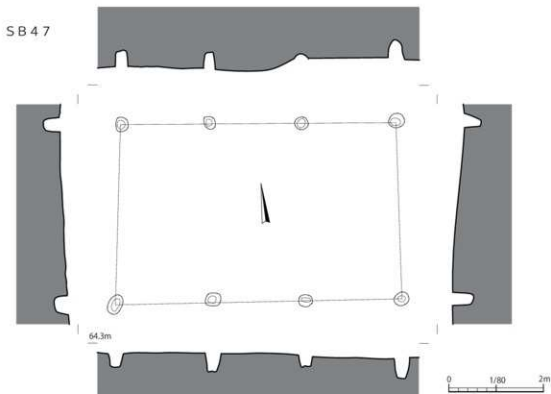


SB 46



第120图 SB 45、46实测图 (S=1/80)





第121図 SB47実測図 (S=1/80)

## (2) 竪穴状遺構 (SC)

(第122～123、127、132図、第10表、  
図版22、33)

### SC5 (第122図)

**形態・規模** 検出・床面プラン共に隅丸長方形。北側の2隅はより丸い。長軸276cm・短軸204cm・深さ36cm。壁はやや開きつつ立ち上がる。

**柱穴** 8基検出 (P1～P8)。各柱穴の床面からの深さは約10～15cm。棟持柱ともみられるようなP4・5は他の柱穴に比べ5cmほど浅い。

**遺物** 埋土中で多量の弥生土器小片、備前系陶器片・須恵器片・中世土師器片・青磁片が出土した。これらは南西側から北東側に集中し、南西側では検出面～埋土中位に、中央から北東側では検出面～埋土下位の床面近くまで散在する。

**所見** 竪穴建物跡と考えられるが、竪穴の平面規

模や柱穴数・柱穴の浅さは、他の竪穴状遺構 (SC7・9) と大きく異なっており、この遺構は建物としての構造の違いである可能性がある。

また、遺物の出土状況を見ると、南西側から北東隅へと床面へ下るように分布していることから、埋め戻し等を含む投棄等の流れ込みと考えられる。

### SC7 (第122図)

**形態・規模** 検出・床面プラン共に隅丸長方形。長軸216cm・短軸179cm・深さ24cm。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

**柱穴** 6基検出 (P1～P6)。床面での平面プランは略方形。各柱穴の床面からの深さは約60cm。

**遺物** 埋土中で中世土師器片・常滑系陶器片、粘土塊が出土した。

**所見** 柱穴の配置から竪穴建物跡と考えられる。

### SC9 (第123図)

**形態・規模** 検出・床面プラン共に正方形。上端の実測記録不備のため検出面での平面規模は不明。床面では、長軸154cm・短軸151cm。

**柱穴** 6基検出(P1～P6)。実測不備の2基を除き、他の柱穴の床面からの深さは約35～40cm。

**遺物** 検出面(床面より30～60cm上位)で土師皿片が散在し出土した。壁面から床面にかけて竹炭が、床直では木炭が検出された。床直の竹炭は格子状に検出された。また、壁際には焼土ブロックが検出された。

**所見** 柱穴の配置から竪穴建物跡と考えられる。床面の竹炭類は、敷物・壁材・屋根材等の建築部材である可能性がある。

## (3) 土坑(SC)

(第123図、第10表、図版23、33)

### SC4 (第123図)

**形態・規模** 検出・床面プラン共に方形で、コーナー部分は直角に近い。長軸95cm・短軸93cm・深さ不明。ほぼ底面のみを検出で壁の立ち上がりは不明。

**遺物** 底面で土師皿片2点(508・509)、短刀1点(580)が出土した。

**所見** 遺構の形態や土師皿が完形ではない点などは非定形的だが、土坑墓の可能性も想定しておきたい。

### SC16a (第123図)

**位置・切り合い** SC16b・cと隣接する。

**形態・規模** 検出・床面プラン共に楕円形で長軸70cm・短軸44cm・深さ52cm。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

**遺物** 底面から約10cm上位で弥生土器鉢口縁部片が、底面から約40cm上位で弥生土器の甕胴～底部片、備前系陶器甕/壺片(517)、10cm長の礫が数点出土している。

### SC16b

**位置・切り合い** SC16a・cと隣接する。

**形態・規模** 検出・床面プラン共に楕円形で検出プランの方が長い。長軸65cm・短軸34cm・深さ53cm。壁は底面から20～30cm上位まではほぼ垂直に、それより検出面までは開きつつ立ち上がる。

**遺物** 底面から約50cm上位の埋土中で、弥生土器甕片、敲石(562)、礫が出土している。

**所見** 掘立柱建物跡等の柱穴か。

### SC16c

**位置・切り合い** SC16aに隣接し、SC16bに切られる。

**形態・規模** SC16bに切られているが、残存部分は検出・床面プラン共に楕円形。長軸不明・短軸48cm。壁は緩やかに立ち上がる。

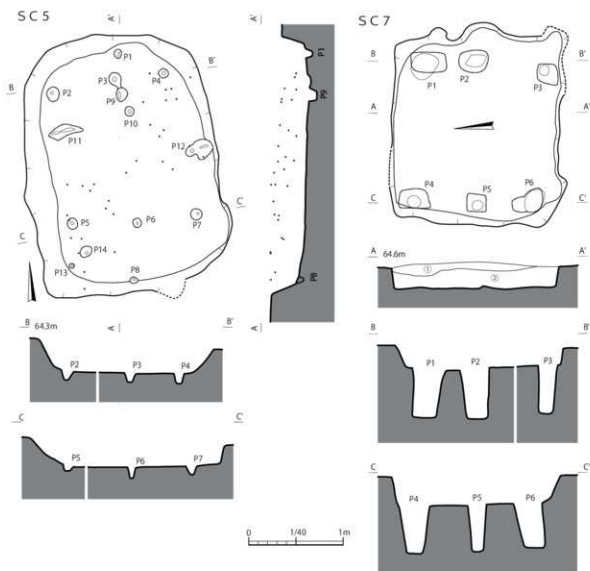
**遺物** 検出面で約2cm長の礫が出土。

### SC61 (第123図)

**形態・規模** 検出プランは不整形円形、床面プランは不整形楕円形。長軸88cm・短軸61cm・深さ27cm。壁は凹凸しつつ不整形に立ち上がる。

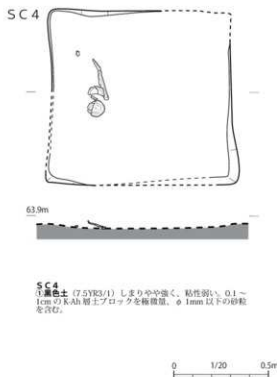
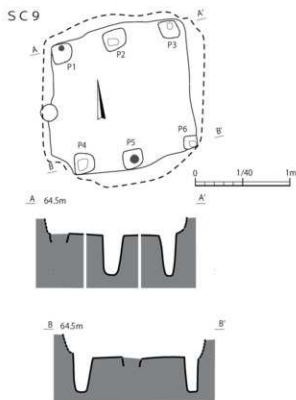
**遺物** 底面から約5～10cm上位の埋土中で、完形に近い土師碗3点が出土した。これらは東側を低くして傾いている。

**所見** 遺構形態は非定形的だが、土師碗の出土状況から土坑墓の可能性も想定しておきたい。

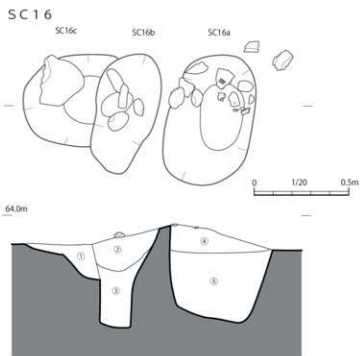


SC7  
 ① 黒色土 (10YR1.7/1) 湿らかくサラサラしている。土器小片を少量含む。KAh 粘土ブロック (φ 1~3cm) を複数に含む。  
 ② 黒色土 (10YR2/1) まらか、やや粘性あり。KAh 粘土ブロック (5mm~1cm) と土器小片を少量含む。粘土ブロック (φ 2~3cm) を複数に含む。粉色、黄褐色、白色粒 (φ 1mm) を多量に含む。

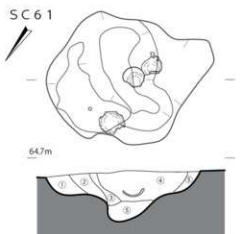
第122図 SC5、7実測図 (S=1/40)



SC 4  
①黒色土 (7.5YR3/1) しまりやや強く、粘性弱い。0.1~1cmのK-Ah 層土ブロックを極微量。φ 1mm以下の砂粒を含む。



SC 16  
①黒色土 (10YR2/1) 柔らかくサラサラしている。樹根が多い。K-Ah 層土ブロック (φ 1cm~4cm) を多く含む。土器片、漆を含む。  
②黒色土 (10YR2/1) ①より粗い。柔らかくサラサラし粘りあり、円礫を含む。K-Ah 層土ブロックを含まない。K-Ah 層土粒を微量に含む。  
③黒色土 (10YR2/1) ①より細く、泥より粗い。柔らかくサラサラしている。K-Ah 層土がほとんど見られず、底の部分にブロックあり。①②に切り取られている。  
④黒色土 (10YR2/1) ①②より粗い。柔らかくサラサラしている。土器片を多く含む。厚6cm。K-Ah 層土粒 (φ 1mm~3mm) を少量に含む。  
⑤黒色土 (10YR2/1) 4より粗い。柔らかくサラサラしている。K-Ah 層土ブロック、暗褐色土ブロックを少量含む。ビツの可能性あり。



SC 61  
①黒色土 (10YR1.7/1) 粒子細かく粘性弱い。ややしまりの強い層であり、φ 1mm程度のK-Ah 層土粒を7~10%程度含む。  
②黒色土 (7.5YR1.7/1) 粒子細かく粘性やや強い。ややしまりの強い層である。  
③黒色土 (10YR1.7/1) 粒子細かく、粘性がやや強くしまりの強い層である。  
④黒色土 (10YR2/1) 粒子細かく、粘性やや強い。ややしまりの強い層である。極僅かに炭化物を (φ 1~2mm程度) 含む。  
⑤黒色土 (10YR1.7/1) 粒子細かく、粘性やや強い。しまりの強い層。

第123図 SC 9、16、48、SD1、2実測図 (S=1/40、1/20)

## (5) 溝状遺構 (SE)

(第124～126、128～130、133・134図、  
図版23～25、34)

13条の溝状遺構が検出された。調査区南半では、SE1～4及びSE8が南北へ伸び、調査区中央付近でSE1・2は直角に近い角度で西へ、SE8は東へ屈曲する。SE3・4は屈曲せず、SE3は一定間隔が途切れる。

### SE1 (第125図)

**位置・切り合い** 調査区南半で南北へと伸び、調査区中央よりやや南で直角に近い角度で西へ屈曲する。SE2-aとの間隔は距離120～256cmを測る。

**形態・規模** 幅70～118cm、底幅30～76cm、深さ最大40cmを測る。断面皿形～逆台形で立ち上がりは全体的に緩やかである。底面勾配は、南から北へと下がっていき、西へと下がっていく。

**遺物** 所々に鏝や陶磁器片が出土し、C4及びG4グリッドで特に多く、ほとんどが底面より20～30cm上位である。古瀬戸瓶子片、須恵器・陶磁器片や、台石(569・571・572・570)・凹石(567・574・573)・砥石(568・579・577)・石包丁(563)・石包丁未製品(564・565・566)・打欠石錘(583・584)・磨石(575・576)・敲石(581・578)・敲石?(580)・石臼(582)等の石器、鉄滓がある。

### SE2a (第125図)

**位置・切り合い** SE1とほぼ平行に調査区南半で南北へと伸び、調査区中央よりやや南で直角に近い角度で西へ屈曲する。SE1との間隔は距離120～256cmを測る。

**形態・規模** 幅66～130cm、底幅28～60cm、深さ最大24cmを測る。断面皿形～逆台形で立ち上がりは全体的に緩やかである。底面勾配は、南から北へと下がっていき、西へと下がっていく。

**遺物** 敲石(587)・打欠石錘(585)等の石器、鉄滓が出土した。

### SE2b (第125図)

**位置・切り合い** SE10より調査区南で、SE2aを切る形でほぼ平行に南北へと伸びる。SE1との間隔は距離184～196cmを測る。

**形態・規模** 幅35cm、底幅23cm、深さ最大11cmを測る。断面皿形で立ち上がりは全体的に緩やかである。底面勾配は、南から北へと下がっていき、西へと下がっていく。

### SE3 (第125図)

**位置・切り合い** 調査区南半で南北へと伸び、G5グリッド付近で約3m途切れ、SA5付近で直角に近い角度で西へ屈曲する。SE2aとの間隔は距離120～308cmを測る。

**形態・規模** 幅48～92cm、底幅22～40cm、深さ最大31cmを測る。断面皿形～逆台形で立ち上がりは全体的に緩やかである。底面勾配は、調査区南半の途切れる部分までは南から北へと上がっていき、西へと下がっていく。

**遺物** 東播系片口鉢(537・538)・常滑系陶器壺/甕(534)・須恵器壺/甕(536・535)・備前系陶器壺/甕・産地不明陶器甕/壺以外(533)等の陶磁器や磨石(586)等の石器が出土した。

### SE4 (第125図)

**位置・切り合い** SE10より調査区南で南北へと伸びる。SE3との間隔は距離230～622cmを測る。

**形態・規模** 幅38～68cm、底幅18～41cm、深さ最大11cmを測る。断面逆台形で立ち上がりは全体的に緩やかである。底面勾配は、南から北へと下がっていく。

**遺物** 備前系陶器甕/壺等の陶磁器片が出土した。

### SE5 (第124図)

**位置・切り合い** 調査区南隅で東西へと伸びる。

**形態・規模** 幅60～64cm、底幅34～50cm、深さ最大24cmを測る。断面逆台形で立ち上がりは全体的に緩やかである。底面勾配は、東から西へと下

がっていく。

**遺物** 青磁碗 (541) の陶磁器片が出土した。

## SE6a (第124図)

**位置・切り合い** 調査区南隅でSE6bと平行に北西から南東へと伸びる。SE6bとの切り合いは断面では確認されなかった。

**形態・規模** 幅24～44cm、底幅12～20cm、深さ最大12cmを測る。断面皿形～逆台形で立ち上がりは全体的に緩やかである。底面勾配は、北西から南東へと下がっていく。

**遺物** 備前系陶器壺／甕片が出土。

## SE6b (第124図)

**位置・切り合い** 調査区南隅でSE6aと平行に北西から南東へと伸びる。SE6aとの切り合いは断面では確認されなかった。

**形態・規模** 幅28～47cm、底幅10～29cm、深さ最大11cmを測る。断面皿形～逆台形で立ち上がりは全体的に緩やかである。底面勾配は、北西から南東へと下がっていく。

## SE7 (第125図)

**位置・切り合い** F4グリット付近で東西へと伸び、SE2に接して途切れる。

**形態・規模** 幅34～48cm、底幅10～28cm、深さ最大22cmを測る。断面長方形で立ち上がりは全体的に緩やかである。底面勾配は殆どなく水平である。

**遺物** 青磁碗 (542)・東播系片口鉢 (545)・常滑系甕／壺 (544) 等の陶磁器片や土師質の坏 (539) の土器が出土した。

## SE8 (第125図)

**位置・切り合い** 調査区中央で南北へと伸び、調査区中央よりやや南で直角に近い角度で東へ屈曲する。

**形態・規模** 幅50～102cm、底幅20～40cm、深さ最大11cmを測る。断面皿形で立ち上がりは全体的に緩やかである。底面勾配は、北から南へと下

っていく東へと下がっていく。

**遺物** 常滑系甕／壺 (546)・須恵器の甕／壺の陶磁器片や弥生土器高環等の土器が出土した。

## SE9 (第125図)

**位置・切り合い** 調査区中央でSA8に切られる形でほぼ重なるように南北へと伸び、調査区中央よりやや南で直角に近い角度で西へ屈曲し、SA1に切られる形で、ほぼ平行に西へ伸びる。

**形態・規模** 幅94～104cm、底幅34～50cm、深さ最大21cmを測る。断面皿形～逆台形で立ち上がりは全体的に緩やかである。底面勾配は、北から南へと下がっていく、西へと下がっていく。

## SE11 (第126図)

**位置・切り合い** 調査区北東隅で北西から南東へと伸び、SA22・24を切る。

**形態・規模** 幅34～38cm、底幅24cm、深さ最大32cmを測る。断面逆台形で立ち上がりは全体的に緩やかである。底面勾配は、北西から南東へ下がっていく。

**遺物** 底面より20～30cm上位に礫が集中して出土した。

## SE12 (第126図)

**位置・切り合い** 調査区北端で北東から南西へと伸びる。

**形態・規模** 幅56～88cm、底幅33～67cm、深さ最大47cmを測る。断面逆台形で立ち上がりは全体的に緩やかである。底面勾配は、南西から北東へと下がっていく。

## SE13 (第126図)

**位置・切り合い** 調査区北端で、北西から南東へと伸び、SA12とぶつかる。

**形態・規模** 幅68cm、底幅32～46cm、深さ最大10cmを測る。断面逆台形で立ち上がりは全体的に緩やかである。底面勾配は、北から南へと下がっていく。

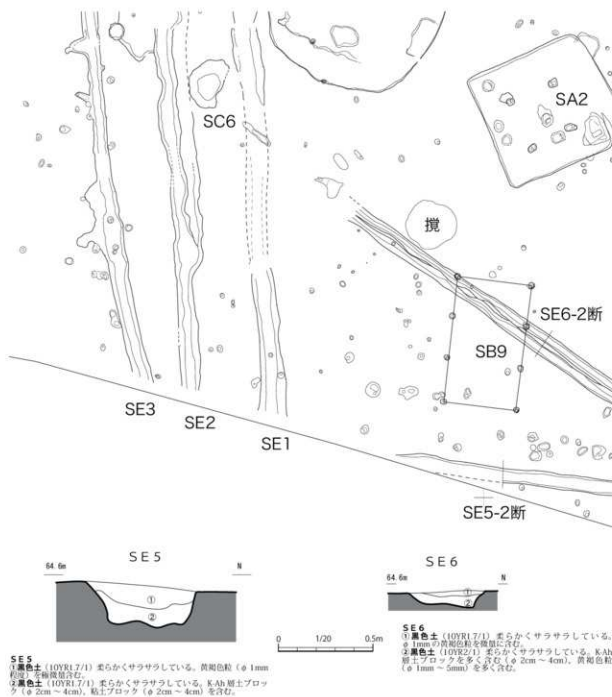
## SE14 (第126図)

**位置・切り合い** 調査区北端で北東から南西へと伸び、また新たに直角に近い角度で東へ伸びる。

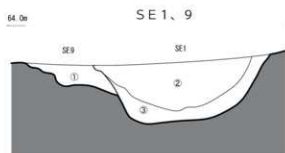
**形態・規模** 幅34～64cm、底幅15～22cm、深さ最大96cmを測り、断面は逆台形を呈する。東へ

伸びる部分は、幅28cm、底幅10～16cm、深さ最大8cmを測る。底面勾配は、北東から南西へと下がっていき、東へ下がっていく。

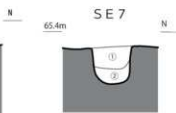
**遺物** 備前系鉄ノ董の陶磁器片が出土した。



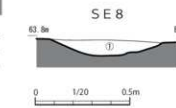
第124図 SE5、6実測図 (S=1/20)



**SE1, 9**  
 ①黒色土 (10YR1.7/1) 非常に柔らかくサラサラしている。透明・白色粒を微量に含む。  
 ②黒色土 (10YR1.7/1) 1より明るい。柔らかくサラサラしている。透明・白色粒 (φ 1mm以下)、褐色粒 (φ 1~2mm) を微量に含む。  
 ③黒色土 (10YR2/1) 柔らかく、粘性ほとんどなし。白色・赤褐色 (φ 1mm以下) と褐色粒 (φ 1~2mm) と褐色ブロック (φ 1cm程度) を含む。



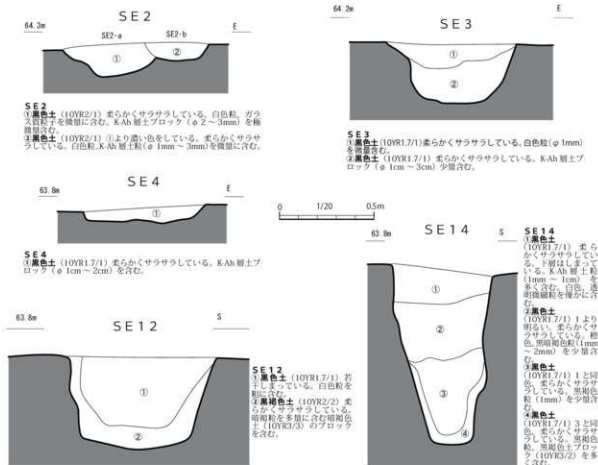
**SE7**  
 ①黒色土 (7.5YR2/1) しまり、粘性土に富み、1~5mmのKAh層土ブロックを5%含む。φ 1mm以下の砂粒を10%含む。  
 ②黒色土 (7.5YR2/2) しまりやや弱く、粘性強い。1mm以下の砂粒を10%含む。



**SE8**  
 ①黒色土 (10YR1.7/1) 柔らかくサラサラしている。KAh層土粒 (φ 1~2mm) を微量に含む。

第125図 SE1, 7, 8, 9実測図 (S=1/20)





第126図 SE 2、3、4、12、14実測図 (S=1/20)

## 2 遺物

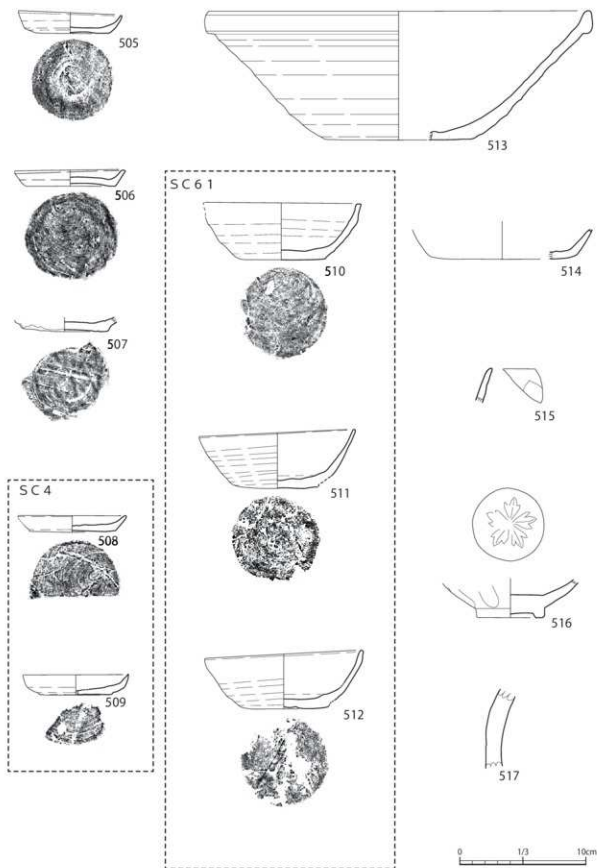
**陶磁器** 溝状遺構の出土が主で、そのほとんどが底面から大きく浮いた状況であった。東播系須恵器片口鉢や片身彫の蓮弁文を有する龍泉窯系青磁碗(太宰府分類Ⅱ類)が目立ち、なかには口禿の白磁皿(551)(太宰府分類ⅢX類)もみられる一方で、備前系擂鉢や中国産青花がほとんどみられない。ほか、古瀬戸系瓶子(532)(瀬戸編年瓶子Ⅰ類)も出土している。

出土状況からは、溝状遺構の埋没途とみられるものが多く、また局的にも十分でないため、各溝状遺構の先後関係や形成過程への言及は困難だが、集落跡全体の大まかな時期は12~14世紀におさまるものとみられる。

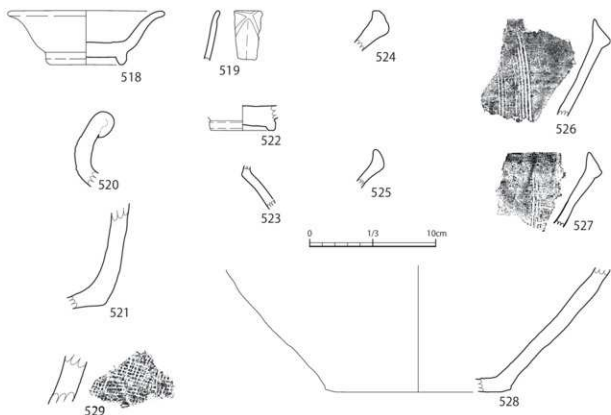
**土師器** 土師器には杯と皿があり、底部の切り離し技法にヘラ切りと糸切りの二種がみられる。

近年、本遺跡と同じ川南町銀座第1遺跡の報告において、ヘラ切りの土師器のみ見られる特徴が観察されており、一見、板状瓦痕(スノコ痕)にも類似する「外底面の回転ヘラ切り痕の上から施されるハケメ状の調整痕」をとりあげ、ヘラ切りの際突出する外底面中央部を「板の木口部分でなでつけるような調整」と想定されている(堀田編2006)。ほか、やはり切り離し後の内底面の盛り上げをならすような「内底面の指頭による横位のナデ」や胎土に着目し、糸切り技法の個体と違いがあるとし、生産技術の系譜やその担い手が全く異なる可能性を指摘している。

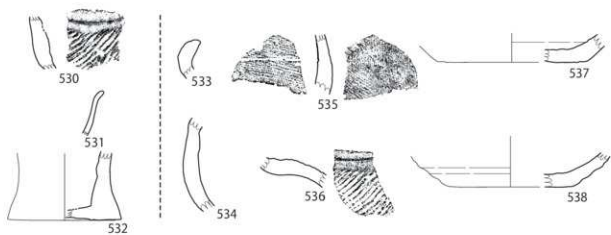
本遺跡の土師器においても、上記の視点で観察すると同様の差異が認められ(505・507・549などが顕著)、今後の比較研究が展望される事項である。



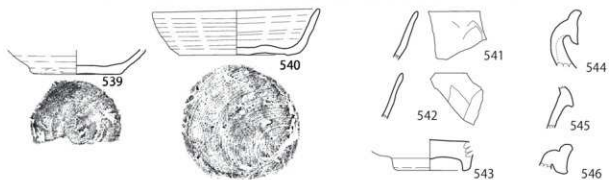
第127图 SB、SC出土土器、陶磁器实测图 (S=1/3)



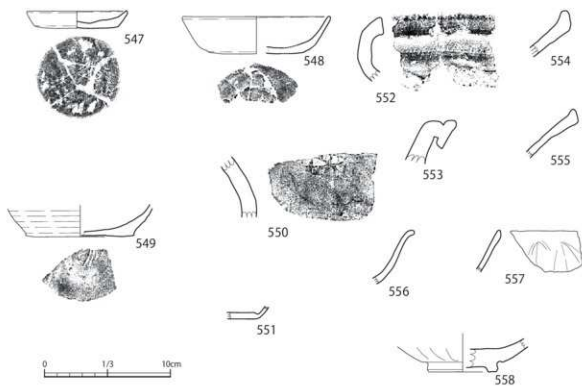
第128图 SE1出土土器、陶磁器实测图 (S=1/3)



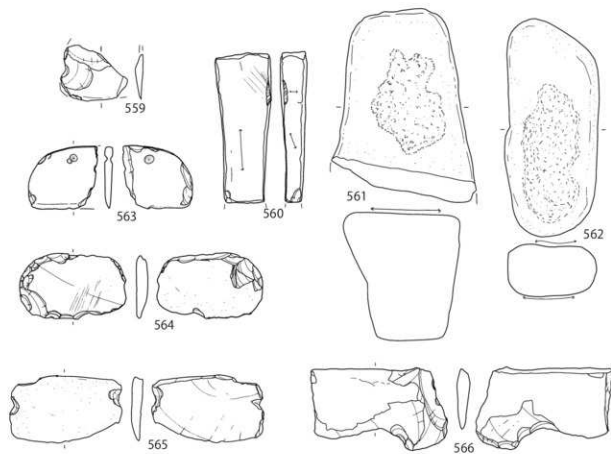
第129图 SE2、3出土土器、陶磁器实测图 (S=1/3)



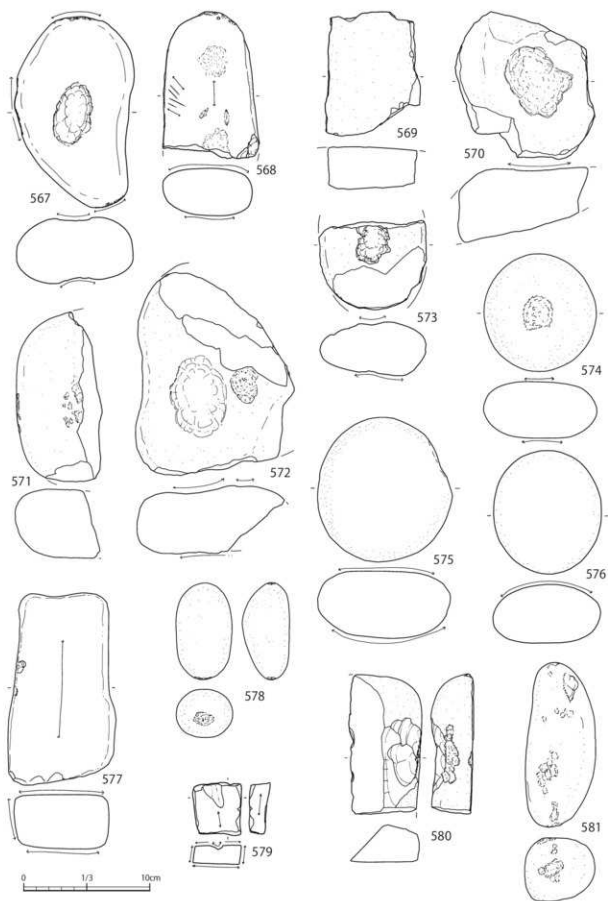
第130图 SE5、7、8、10、14出土土器、陶磁器实测图 (S=1/3)



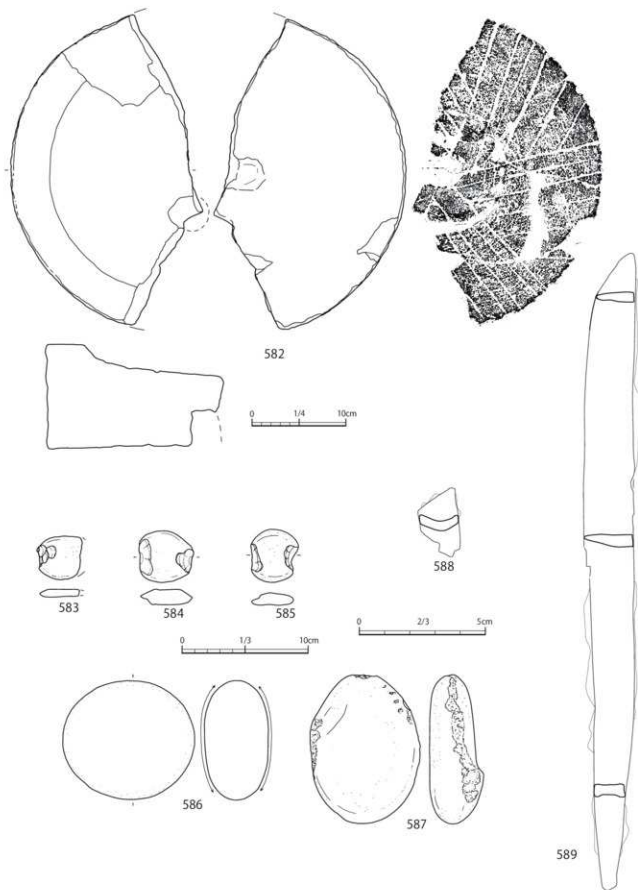
第131図 その他の出土土器、陶磁器実測図 (S=1/3)



第132図 SB、SC出土石器実測図 (S=1/3)



第133图 SE1出土石器实测图 (S=1/3)



第134図 SE1、2、3出土石器、鉄器実測図 (S=1/3、1/4、2/3)

## 第7節 その他の遺構と遺物

### 1 遺構

#### (1) 掘立柱建物跡 (SB)

(第135～141図、第13～14表、図版21、34)

##### SB1 (第135図)

**規模** 梁行1間(256・261cm)・桁行2間(289・292cm)で、桁行柱間は141～153cm、身舎部分の面積は約7.62㎡を測る。

**柱穴** 直径15～24cm・深さ15～28cmを測る。

**遺物** P4内から弥生土器高環裾部小片が出土。

##### SB2 (第135図)

**規模** 梁行1間(230・291cm)・桁行2間(340・351cm)で、桁行柱間は170～176cm、身舎部分の面積は約10.2㎡を測る。西側桁筋のP2はP1・3を結ぶ軸より20cmほど外れる。

**柱穴** 直径26～30cm・深さ12～20cmを測る。

**遺物** P2から弥生土器高環裾部小片が、P3の埋土中で石斧(SB1)が出土した。

##### SB4 (第136図)

**規模** 梁行1間(234・274cm)・桁行1間(288・306cm)で、身舎部分の面積は約8.38㎡を測る。両梁行の道難が異なり、各梁・桁筋からなるプランは台形を呈する。

**柱穴** 直径22～35cm・深さ35～54cmを測る。

##### SB13 (第136図)

**規模** 梁行1間(246・264cm)・桁行2間(506・510cm)で、桁行柱間は246～264cm、身舎部分の面積は約13.5㎡を測る。

**柱穴** 直径25～36cm・深さ7～57cmを測る。

##### SB15 (第137図)

**規模** 梁行1間(247・263cm)・桁行1間(248・

274cm)で、身舎部分の面積は約7.2㎡を測る。

**柱穴** 直径19～23cm・深さ28～71cmを測る。

**遺物** 柱穴内で石砲丁(SB2)が出土。

##### SB16 (第137図)

**規模** 梁行1間(296・311cm)・桁行2間(352・356cm)で、桁行柱間は174～179cm、身舎部分の面積は約11.1㎡を測る。

**柱穴** 直径22～30cm・深さ4～18cmを測る。

##### SB18 (第137図)

**規模** 梁行1間(265・316cm)・桁行4間(806・810cm)で、桁行柱間は182～212cm、身舎部分の面積は約25.6㎡を測る。

**柱穴** 直径28～41cm・深さ6～56cmを測る。

##### SB19 (第137図)

**規模** 梁行1間(346・355cm)・桁行2間(291・313cm)で、桁行柱間は129～178cm、身舎部分の面積は約11.1㎡を測る。

**柱穴** 直径20～28cm・深さ11～34cmを測る。

##### SB23 (第138図)

**規模** 梁行1間(251・256cm)・桁行1間(382・405cm)で、身舎部分の面積は約10.4㎡を測る。

**柱穴** 直径21～33cm・深さ33～50cmを測る。

##### SB24 (第139図)

**規模** 梁行1間(345cm)・桁行2間(456cm)で、桁行柱間は228cm、身舎部分の面積は約15.7㎡を測る。

**柱穴** 直径25～33cm・深さ13～38cmを測る。P1は攪乱に切られる。北側桁筋中央の柱穴は確認できなかった。

##### SB25 (第139図)

**規模** 梁行2間(243・245cm)・桁行2間(346・360cm)で、梁行柱間は117～126cm、桁行柱間は162～193cm、身舎部分の面積は約8.8㎡を測る。

**柱穴** 直径15～35cm・深さ7～53cmを測る。  
北側梁筋中央の柱穴は確認できなかった。

### SB26 (第135図)

**規模** 梁行2間(222・230cm)・桁行2間(272・278cm)で、梁行柱間は109～115cm、桁行柱間は113～168cm、身舎部分の面積は約64㎡を測る。

**柱穴** 直径14～24cm・深さ8～34cmを測る。  
西側梁筋中央の柱穴は確認できなかった。

### SB32 (第140図)

**規模** 梁行1間(313・336cm)・桁行2間(253・271cm)で、桁行柱間は104～148cm、身舎部分の面積は約91㎡を測る。

**柱穴** 直径18～44cm・深さ11～45cmを測る。

### SB34 (第140図)

**規模** 梁行1間(198・216cm)・桁行1間(273・288cm)で、身舎部分の面積は約62㎡を測る。

**柱穴** 直径25～34cm・深さ20～30cmを測る。

### SB37 (第140図)

**規模** 梁行1間(339・346cm)・桁行3間(543・551cm)で、桁行柱間は173～198cm、身舎部分の面

積は約191㎡を測る。

**柱穴** 直径21～31cm・深さ22～63cmを測る。

**遺物** 弥生土器細片

### SB38 (第141図)

**規模** 梁行1間(250・267cm)・桁行1間(193・208cm)で、身舎部分の面積は約5.6㎡を測る。

**柱穴** 直径20～29cm・深さ23～43cmを測る。

**遺物** 弥生土器腰部部など小片が出土。

### SB39 (第141図)

**規模** 梁行1間(327・349cm)・桁行4間(870・882cm)で、桁行柱間は177～244cm、身舎部分の面積は約308㎡を測る。

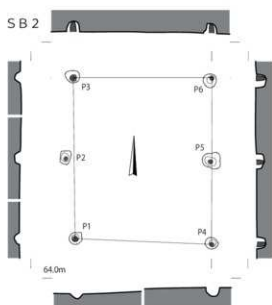
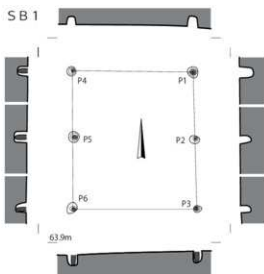
**柱穴** 直径23～34cm・深さ27～60cmを測る。

### SB44 (第141図)

**規模** 梁行1間(260・268cm)・桁行2間(417・421cm)で、桁行柱間は192～227cm、身舎部分の面積は約113㎡を測る。

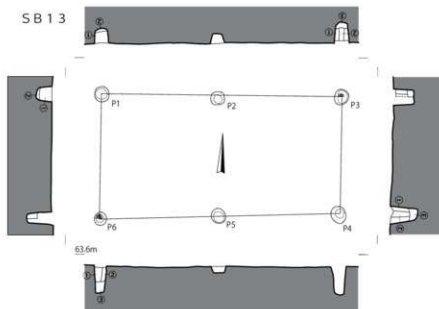
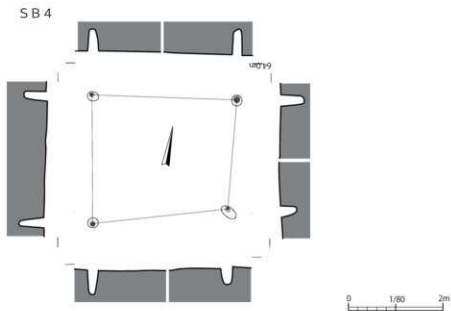
**柱穴** 直径18～33cm・深さ20～41cmを測る。

**遺物** 縄文土器細片



第135図 SB1、2実測図 (S=1/80)





**SB 13**

**P 1**

① = P3 ②, ③ = P3 の③

**P 2**

① 黒色土 (10YR1 7/1) ややしまりあり。粘性ほとんどなし。

② KAb 層土の砂粒を極微量含む。

**P 3**

① 黒色土 (10YR1 7/1) あまりしまりなし。ほとんど粘性なし。下Ab層土の砂粒を極微量含む。

② 黒色土 (10YR2/1) 僅微粒あまりしまりなし。粘性なし。

③ 黒色土 (10YR2/1) しまりあり。粘性ほとんどなし。KAb層土ブロックとMLIブロックを10%含む。

**P 4**

① = P3 ①, ② = P3 ②, ③ = P3 ③

**P 5**

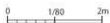
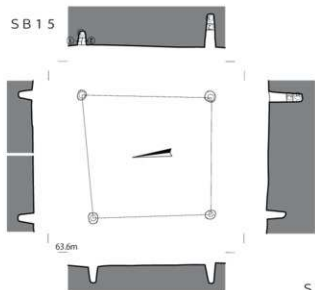
① 黒色土 (10YR2/1) しまりあり。粘性なし。KAb層土の砂粒を極微量含む。

**P 6**

① 黒色土 (10YR1 7/1) かなりしまりあり。粘性ほとんどなし。φ 1mm ~ 1cm KAb層土を20%程含む。

第136図 SB4、13実測図 (S=1/80)

SB 15



**SB 15**

**P 1**

①黒色土 (7.5YR1.7/1) 粘土細かく、粘性強い、しまりやや弱い。

**P 2**

①黒色土 (10YR1.7/1) 粘土細かく、粘性強い、φ 2~3cm の K-Ah 層土ブロックを含む。

**P 3**

①黒色土 (7.5YR1.7/1) ①とはほぼ同様、ただし、K-Ah 層土は含まない。

**P 4**

①黒色土 (10YR1.7/1) ①と同様、これも K-Ah 層土は含まず。

**P 3**

①黒色土 (10YR1.7/1) P4 と同様。

**P 2**

①黒色土 (10YR2/1) しまりあり、粘性なし、φ 5mm 以下の小石 (ハイスラ) を多量に含む。

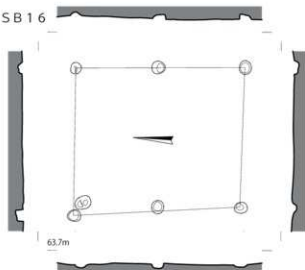
**P 1**

①黒色土 (10YR2/1) あまりしまりなし、粘性ほとんどなし、K-Ah 層土の砂粒を極微量含む。

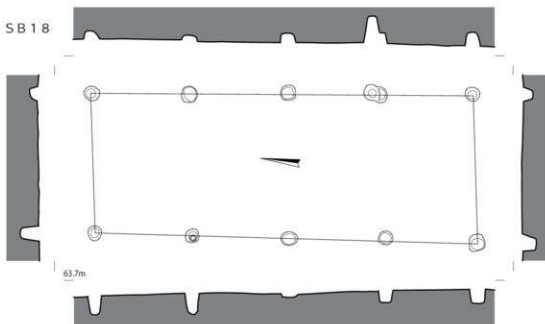
**P 2**

①黒色土 (10YR1.7/1) 粘土細かく、粘性強い、φ 1~2mm ほどの K-Ah 層土粒を 20% 程度含む。

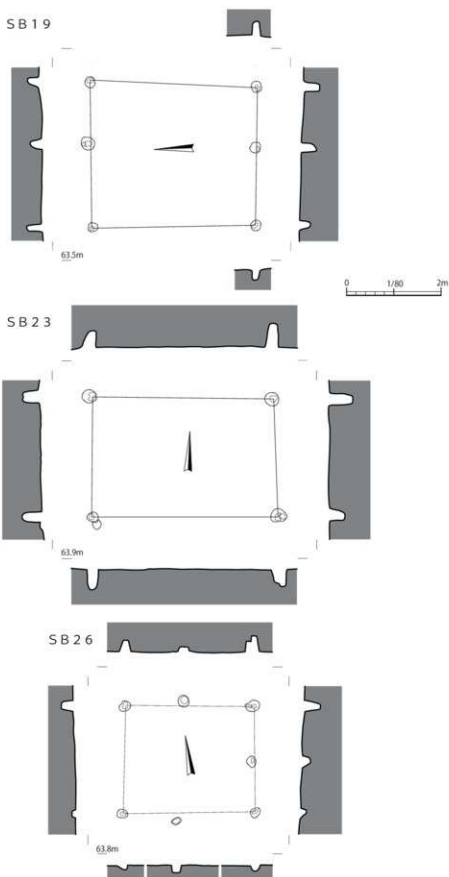
SB 16



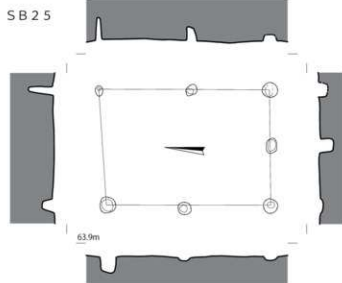
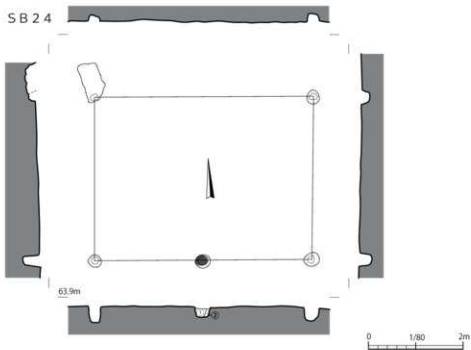
SB 18



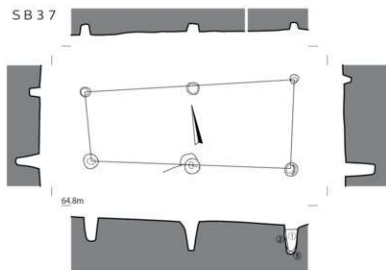
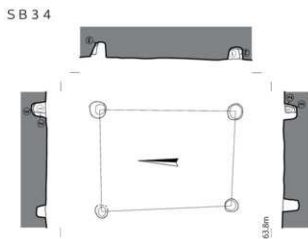
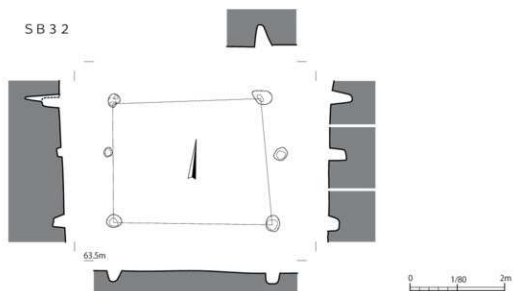
第 137 図 SB 15、16、18 実測図 (S=1/80)



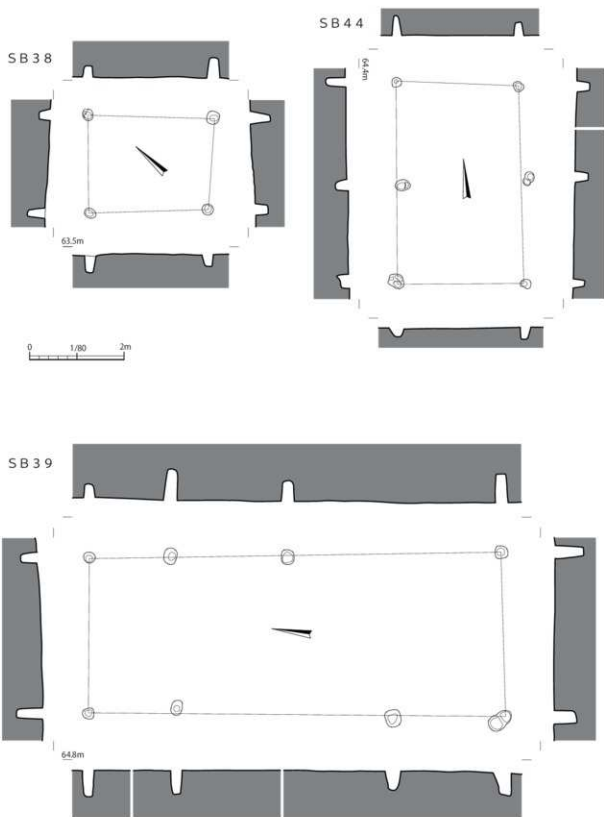
第138图 SB 19、23、26实测图 (S=1/80)



第139图 SB 24、25实测图 (S=1/80)



第140图 SB 32、34、37实测图 (S=1/80)



第141図 SB 38、39、44実測図 (S=1/80)

## (2) 土坑 (SC)

(第142～144図、第10表、図版34)

### SC10 (第142図)

**形態・規模** 検出・床面プラン共に不整な長方形を呈する。長軸188cm・短軸116cm・深さ23cmを測る。壁面はやや開きつつ立ち上がる。

**遺物** 土坑中央の底面より約40cm上位の埋土中で、二重口縁壺(300)が出土した。

**所見** 埋土の特徴や土坑自体の不整な形態などから、後世の廃棄土坑など攪乱である可能性が高い。

### SC15 (第142図)

**位置・切り合い** SC51を切る。

**形態・規模** 検出・床面プラン共に不整楕円形。長軸73cm・短軸(53)cm・深さ24cm。壁面はやや開きつつ立ち上がる。

### SC17 (第142図)

**位置・切り合い** SA9の北西隅を切る。

**形態・規模** 検出・床面プラン共に楕円形。長軸117cm・短軸64cm・深さ20cm。壁は緩やかに立ち上がる。

### SC50 (第142図)

**位置・切り合い** SC52を切る。

**形態・規模** 検出・床面プラン共に不整楕円形。長軸79cm・短軸(53)cm・深さ24cm。壁面はやや開きつつ立ち上がる。

### SC51 (第142図)

**位置・切り合い** SE2に切られる。

**形態・規模** 検出・床面プラン共に不整楕円形。長軸(104)cm・短軸66cm・深さ26cm。壁面はやや開きつつ立ち上がる。

### SC68 (第143図)

**分布・切り合い** 調査区中央西側18グリッド。

**形態・規模** 検出・床面プラン共に楕円形。長軸142cm・短軸85cm・深さ12cm。ほぼ底面のみを検出。

### SC70 (第143図)

**分布・切り合い** 調査区中央西側K8グリッド。

**形態・規模** 検出プランは楕円形、床面プランは長軸両端の2面共に楕円形。2基の土坑が連なる可能性もあったが土層断面で切り合いは確認できなかった。長軸142cm・短軸56cm・深さ31cmを測る。壁は北側の緩やかに、南側おぼろ垂直に立ち上がる。**遺物** 埋土中で縄文土器細片、砥石(538)が出土した。

### SC73 (第143図)

**形態・規模** 検出・床面プラン共に円形。長軸90cm・短軸86cm・深さ11cm。ほぼ底面のみを検出で壁の立ち上がりは不明。

### SC74 (第142図)

**形態・規模** 検出・床面プラン共に円形。長軸104cm・短軸94cm・深さ11cm。ほぼ底面のみを検出で壁の立ち上がりは不明。

### SC75 (第143図)

**分布・切り合い** 調査区中央L4グリッド。周辺にはSC73～78がある。

**形態・規模** 検出・床面プラン共に不整楕円形。長軸112cm・短軸78cm・深さ14cm。壁は部分によってほぼ垂直～やや開きつつ立ち上がる。

### SC76 (第143図)

**分布・切り合い** 調査区中央L4グリッド。周辺にはSC73～78がある。

**形態・規模** 検出・床面プラン共に不整円形。切り合うピットを除き、長軸63cm・短軸63cm・深さ26cm。ピットは深さ40cm。壁はやや開きつつ立ち上がる。

### SC77 (第143図)

**形態・規模** 検出・床面プラン共に不整形。長軸76cm・短軸62cm・深さ7cm。ほぼ底面のみの検出で壁の立ち上がりは不明。

**所見** 自然的な窪みか。

### SC78 (第143図)

**位置・切り合い** 柱穴らしきピットに切られる。

**形態・規模** 検出・床面プラン共に不整形。長軸88cm・短軸76cm・深さ8cm。ほぼ底面のみの検出で壁の立ち上がりは不明。

**所見** 自然的な窪みか。

### SC94 (第143図)

**形態・規模** 検出・床面プラン共に不明。長軸64cm・深さ11cm。ほぼ底面のみの検出で壁の立ち上がりは不明。

### SC95 (第144図)

**形態・規模** 検出・床面プラン共に楕円形。長軸68cm・短軸51cm・深さ4cm。ほぼ底面のみの検出で壁の立ち上がりは不明。

### SC96 (第144図)

**形態・規模** 検出・床面プラン共に円形。長軸45cm・深さ8cm。ほぼ底面のみの検出で壁の立ち上がりは不明。

### SC97 (第144図)

**形態・規模** 検出・床面プラン共に楕円形。長軸61cm・短軸41cm・深さ5cm。ほぼ底面のみの検出で壁の立ち上がりは不明。

## 2 遺物

グリッド一括や確認調査時のトレンチ等で石器が出土した。

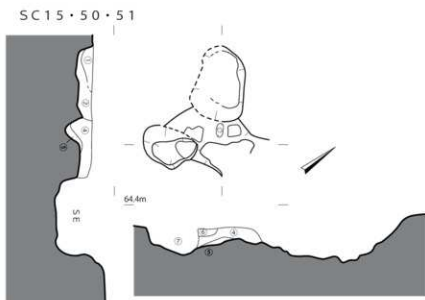
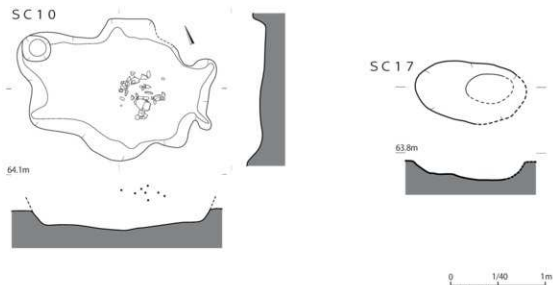
**打製石斧** 第4章第4節に掲載したV層出土の石斧に比して厚みがなく、いわゆる扁平打製石斧の範疇で捉えられるが、いずれも時期決定は困難である。ただ591・596のような挟りが入り肩部をもつ形態は、弥生時代に定形的な有肩石斧とも見なされ、同様の時期である可能性を考えたい。

**石錘** 宮崎県域における打欠石錘は、縄文時代早期に卓越し、弥生時代以降は減少しつつも使用された可能性を残すとされている(藤木2003)。本遺跡ではそれらの時期に含まれており、また遺跡内での出土・分布状況からも時期を特定し得ない。

**火打石** 火打石は第5節に掲載したSA11出土の1点も含め計3点確認された。いずれも石英・チャート製で、中世の集落跡に由来するものであろう。

**その他の石器** 石包丁や砥石・敲石・台石が出土している。弥生時代～古墳時代の壱穴住居跡に多くみられたものであり、当該期の遺物と考えられる。



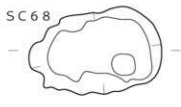


**SC15, 50, 51**  
 ①黒色土 (7.5YR1.7/1) 粒子細かく、粘性あり。しまりのやや強い層であり、k-Ah 層土粒 (φ 1~2mm 程) を極微量含む。  
 ②黒色土 (10YR1.7/1) 粒子細かく、粘性あり。しまりのやや強い層 (1より柔らかい) であり、k-Ah 層土粒 (φ 1mm 程) を極微量含む。  
 ③黒色土 (7.5YR2/1) 粒子細かく、粘性あり。しまりのやや強い層 (1と同じ位) であり、黒色 (10YR1.7/1よりやや明るい) のブロック (φ 2~3cm) を含む。

④黒色土 (10YR2/1) 粒子細かく、粘性あり。しまりのやや強い層 (1と同じ位) であり、φ 3~4cm 程の k-Ah 層土ブロックを 5~10% 程含む。  
 ⑤黒色土 (1.7YR1.7/1) 粒子細かく、粘性あり。しまりのやや強い層であり、φ 1~2mm 程の k-Ah 層土粒を極微量含む。  
 ⑥黒色土 (5YR1.7/1) 粒子細かく、粘性あり。しまりのやや強い層であり、φ 1~2mm 程の k-Ah 層土粒を極微量含む。

第142図 SC10、17、15・50・51実測図 (S=1/40)

SC 68



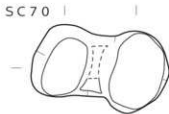
63.8m



SC 68

①黒色土 (10YR2/1) 中冷固くしまっていて粘性はない、白色系・透明微細砂を含む。

SC 70



63.6m



SC 70

①黒色土 (10YR1.7/1) しまり非常に強い、粘性強い、K-Ah 層土をまばらに含む。  
②黒色土 (10YR2/1) しまり非常に強い、粘性強い、均質、MB0 に近い。  
③黒色土 (10YR2/1) しまり非常に強い、粘性強い、K-Ah 層土を層状に含む。①より若干明るい。

0 1/40 1m

SC 73



62.0m



SC 73

①黒色土 (10YR1.7/1) しまりなし、粘性ほとんどなし、K-Ah 層土ブロック (φ 2cm ~ 5mm) と砂粒を 10% 含む。

SC 74



63.2m



SC 74

①黒色土層 (10YR1.7/1) K-Ah 層土ブロック (φ 2cm ~ 5mm) と砂粒を 20% 含む、しまりなし、粘性ほとんどなし、炭化物を極微量含む。

SC 75



63.1m



SC 75

①黒色土 (10YR2/1) しまりあり、粘性ほとんどなし。  
②黒色土 (10YR2/2) しまりなし、粘性なし、K-Ah 層土の砂粒を 20% 含む。

SC 76



63.2m



SC 76

①黒色土 (10YR2/1) あまりしまりなし、ほとんど粘性なし、K-Ah 層土ブロック (φ 5cm ~ 1cm) と砂粒を 30% 含む。  
②黒色土 (10YR1.7/1) しまりなし、粘性なし、K-Ah 層土の砂粒を 10% 含む。  
③黒色土 (10YR2/1) あまりしまりなし、粘性ほとんどなし、K-Ah 層土ブロック (φ 5mm) と砂粒を 10% 含む。

SC 77



63.1m



SC 77

①黒色土 (10YR2/1) しまりあり、粘性ほとんどなし、K-Ah 層土の砂粒を極微量に含む。

SC 78



63.1m



SC 78

①黒色土 (10YR1.7/1) しまりあり、粘性ほとんどなし、K-Ah 層土の砂粒を極微量に含む。

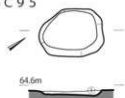
第 143 図 SC 68、70、73~78 実測図 (S=1/40)

SC 94



SC 94  
①黒褐色土 (10YR2/1) かなりしまりあり。粘性なし。φ3mm以下のK-AB層土の粒を10%含む。  
②黒褐色土 (10YR2/2) かなりしまりあり。粘性なし。φ3mm以下のK-Ah層土の粒を50%含む。

SC 95



SC 95  
①黒色土 (10YR2/1) しまりあり。粘性なし。φ3cm以下のK-AB層土ブロックを10%含む。

SC 96



SC 96  
①黒色土 (10YR2/1) ややしまりあり。粘性なし。

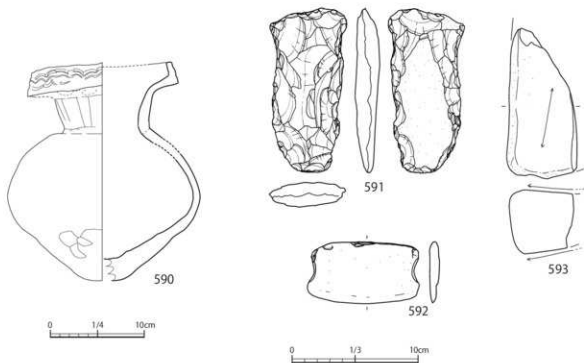
0 1/40 1m

SC 97

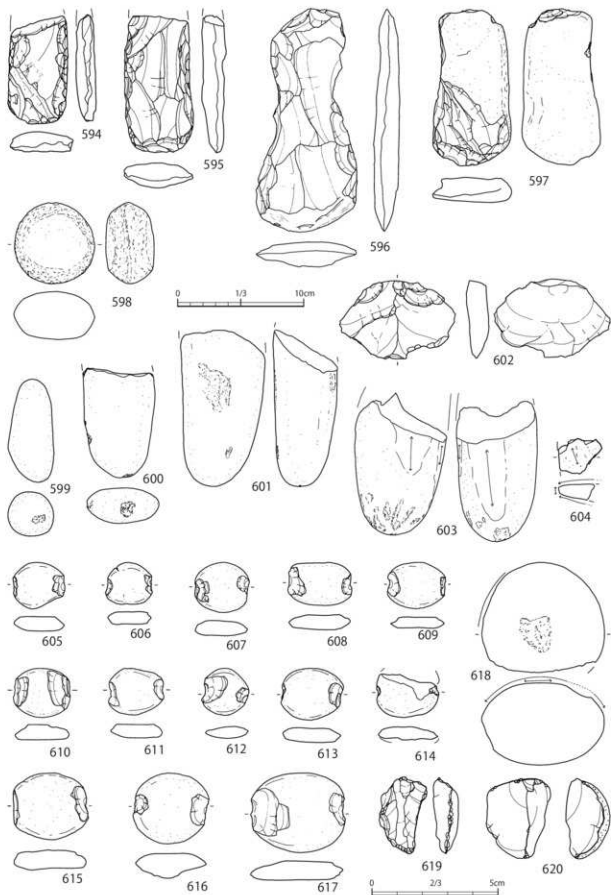


SC 97  
①黒色土 (10YR2/1) ややしまりあり。粘性なし。

第144図 SC 94~97実測図 (S=1/40)



第145図 SB2、15、SC10、70出土土器、石器実測図 (S=1/4、1/3)



第146图 包含层出土石器实测图 (S=1/3、2/3)

# 第V章 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

## 第1節 自然科学分析の目的

本遺跡の主体である弥生時代の集落跡では、焼失住居が多数目づつ比較的良好に残留しており、なかには炭化した木製品が検出されたものもある。こうした例は九州内においても稀であり、文化財としての価値は非常に高いと評価できる。また、竪穴住居跡や土坑の埋土から、水洗浮遊選別法により炭化種子等を多数検出している。

これらの調査成果からは、自然科学分析を通してさらに有用な情報を得ることができ、当時の様相をより詳細に復原できると期待されるため今回の委託を実施する。分析項目とその目的の詳細は以下の通りである。

**放射性炭素年代測定:** 焼失住居や、そこで出土した遺物の帰属時期を明らかにするため。

**樹種同定:** 焼失住居で検出された、炭化した屋根部材・木製品について、使用していた樹種を明らかにするため。

**炭化種実同定:** 竪穴住居跡などの遺構埋土を対象に、水洗浮遊選別法により炭化した種子と見られる微細遺物を多数検出しているが、それらの品種等について詳細に分析するため。

**植物珪酸体分析:** 焼失住居で検出された、屋根部材

の下地と考えられる植物性繊維質の品種を明らかにするため。

**花粉分析:** 国光原台地の裾部にあたる調査区北側は、周辺よりも標高の低い谷筋となっており、集落周辺の植物遺残物が流水作用により堆積している可能性が高い。そこで、これら植物遺残物を分析し、集落周辺の植生環境を明らかにするため。

## 第2節 放射性炭素年代測定

### 1 試料と方法 (第2表)

#### (1) $^{14}\text{C}$ 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単輻射に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$ の半減期は、国際的慣例により Libby の 5568 年を用いた。

#### (2) デルタ $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

#### (3) 補正 $^{14}\text{C}$ 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知

第2表 放射性炭素年代測定の試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	SA 2, No.11, 垂木	炭化物	酸-7%加-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.2	SA 2, No.13, 梁 or 桁	炭化物	酸-7%加-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.3	SA 3, ①, 鋤	炭化物	酸-7%加-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.4	SA 3, No.63, 土器付着物	炭化物	酸-7%加-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.5	SA 3, 種7	炭化物	酸-7%加-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.6	SA10, No.3, 炭化材	炭化物	酸-7%加-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.7	SA10, No.30, 土器付着物	炭化物	酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.8	SA10, No.62, 炭化米	炭化物	酸-7%加-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.9	SA16, C 15, 垂木	炭化物	酸-7%加-酸洗浄, 石墨調整	AMS

AMS: 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

## 2 測定結果

**第3表 放射性炭素年代測定結果**

試料名	測定No (Beta)	$^{14}\text{C}$ 年代 (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年 BP)	暦年代 (西暦) (1 $\sigma$ 68%確率, 2 $\sigma$ 95%確率)
No.1	200244	1880 $\pm$ 40	-26.2	1860 $\pm$ 40	交点: cal AD 130 1 $\sigma$ : cal AD 100-220 2 $\sigma$ : cal AD 70-240
No.2	200245	1810 $\pm$ 40	-25.4	1800 $\pm$ 40	交点: cal AD 230 1 $\sigma$ : cal AD 150-250 2 $\sigma$ : cal AD 120-340
No.3	200246	1950 $\pm$ 40	-26.0	1930 $\pm$ 40	交点: cal AD 70 1 $\sigma$ : cal AD 40-110 2 $\sigma$ : cal BC 10- AD 140
No.4	200247	1880 $\pm$ 40	-26.6	1850 $\pm$ 40	交点: cal AD 140 1 $\sigma$ : cal AD 110-230 2 $\sigma$ : cal AD 70-250
No.5	200248	1790 $\pm$ 40	-25.7	1780 $\pm$ 40	交点: cal AD 240 1 $\sigma$ : cal AD 220-260, 290-320 2 $\sigma$ : cal AD 130-370
No.6	200249	1820 $\pm$ 40	-26.2	1800 $\pm$ 40	交点: cal AD 230 1 $\sigma$ : cal AD 150-250 2 $\sigma$ : cal AD 120-340
No.7	200250	1870 $\pm$ 40	-25.8	1860 $\pm$ 40	交点: cal AD 130 1 $\sigma$ : cal AD 100-220 2 $\sigma$ : cal AD 70-240
No.8	200251	1810 $\pm$ 40	-24.2	1820 $\pm$ 40	交点: cal AD 220 1 $\sigma$ : cal AD 130-240 2 $\sigma$ : cal AD 100-260, 290-320
No.9	200252	1930 $\pm$ 40	-26.8	1900 $\pm$ 40	交点: cal AD 100 1 $\sigma$ : cal AD 70-130 2 $\sigma$ : cal AD 30-220

り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25‰に標準化することによって得られる年代である。

#### (4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動を校正することにより算出した年代(西暦)。calはcalibrationした年代値であることを示す。校正には、年代既知の樹木年輪の $^{14}\text{C}$ の詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と $^{14}\text{C}$ 年代の比較により作成された校正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19000年BPまでの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは、補正 $^{14}\text{C}$ 年代値と暦年代校正曲線との交点の暦年代値を意味する。1シグマ $\sigma$ (68%確率)と2 $\sigma$ (95%確率)は、補正 $^{14}\text{C}$ 年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 $\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。

#### 3 所見

加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定の結果、No.1の炭化物では1860 $\pm$ 40年BP(1 $\sigma$ の暦年代でAD100 $\sim$ 220年)、No.2の炭化物では1800 $\pm$ 40年BP(同AD150 $\sim$ 250年)、No.3の炭化物では1930 $\pm$ 40年BP(同AD40 $\sim$ 110年)、No.4の炭化物では1850 $\pm$ 40年BP(同AD110 $\sim$ 230年)、No.5の炭化物では1780 $\pm$ 40年BP(同AD220 $\sim$ 260, 290 $\sim$ 320年)、No.6の炭化物では1800 $\pm$ 40年BP(同AD150 $\sim$ 250年)、No.7の炭化物では1860 $\pm$ 40年BP(同AD100 $\sim$ 220年)、No.8の炭化物では1820 $\pm$ 40年BP(同AD130 $\sim$ 240年)、No.9の炭化物では1900 $\pm$ 40年BP(同AD70 $\sim$ 130年)の年代値が得られた。

#### 文献

Stuiver et al. (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, *Radiocarbon*, 40, p.1041 $\sim$ 1083.

中村俊夫(1999)放射性炭素法。考古学のための年代測定学入門。古今書院, p.1 $\sim$ 36.

### 第3節 樹種同定

#### 1 はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的広域の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したのものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

#### 2 試料

試料は、弥生時代の焼失住居(SA 2, SA 3, SA14, SA16)から出土した屋根部材、鋤、鎌などの木製品を含む炭化材40点である。

#### 3 方法

試料を割折して炭化材の新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柎目)、接線断面(板目)の基本三断面の切片を複製し、落射顕微鏡によって50 $\sim$ 1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

#### 4 結果

第4表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 第147図

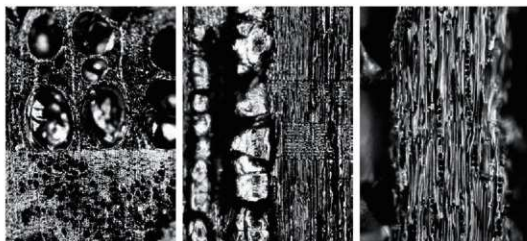
横断面：年輪のはじめに大型の道管が数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火災状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射顕微鏡は平伏細胞からなる。接線断面：放射顕微鏡は単列の同形放射細胞型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大

第4表 樹種同定結果

遺構名	番号	備考	結果(学名/和名)	
SA2	2	垂木に直行	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ
	6	用途不明	<i>Castanopsis</i>	シイ属
	8	梁か桁	<i>Prunus</i>	サクラ属
	11	垂木(板材?)	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ
	12	梁か桁と平行	Fagaceae	ブナ科
	13	梁か桁	<i>Prunus</i>	サクラ属
	17	垂木	<i>Meliosma</i>	アワブキ属
	18	垂木	<i>Meliosma</i>	アワブキ属
	19	垂木	<i>Prunus</i>	サクラ属
	24	母屋桁?	<i>Castanopsis</i>	シイ属
	29	垂木(板材?)	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ
	30	垂木	<i>Meliosma</i>	アワブキ属
	31	二股	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.	イスノキ
	32	垂木	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ垂属
	34	垂木	<i>Meliosma</i>	アワブキ属
	40	垂木	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ
	41	垂木	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ
	42	垂木	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ
	43	壁際/垂木に直行	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ
	45	垂木	<i>Meliosma</i>	アワブキ属
SA3	1	木製鋤	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ垂属
	2	木製鋤	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ垂属
	4	木製鋸の柄	<i>Vaccinium bracteatum</i> Thunb.	シャシャンボ
	5	木製鋸の刃部	Fagaceae	ブナ科
	6	不明木製品	<i>Vaccinium bracteatum</i> Thunb.	シャシャンボ
	10	不明木製品	<i>Meliosma</i>	アワブキ属
	11	不明木製品	<i>Rhus javanica</i> L.	ヌルデ
	C13		<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
C14		<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節	
SA14	3		<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima	スダジイ
	6		<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima	スダジイ
	13		<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ
	16		<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima	スダジイ
	17		<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
18		<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節	
SA16	C3		<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
	C4		<i>Syrax</i>	エゴノキ属
	C8		<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
	C15		<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
	C21		<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節





横断面 : 0.4mm

放射断面 : 0.4mm

接線断面 : 0.2mm

1, SA16 C8 垂木 クリ

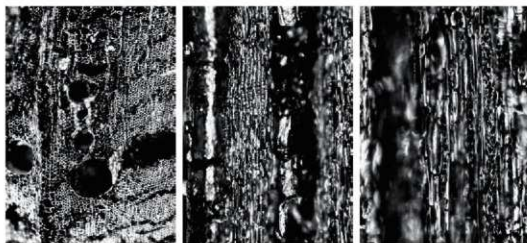


横断面 : 0.4mm

放射断面 : 0.4mm

接線断面 : 0.2mm

2, SA14 6 垂木 スダジイ



横断面 : 0.4mm

放射断面 : 0.4mm

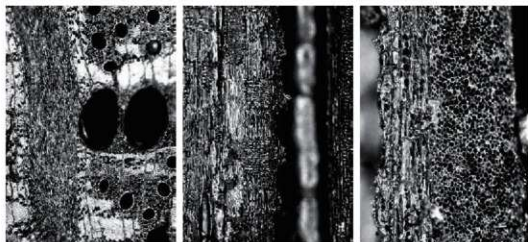
接線断面 : 0.2mm

3, SA14 13 垂木 ツブラジイ

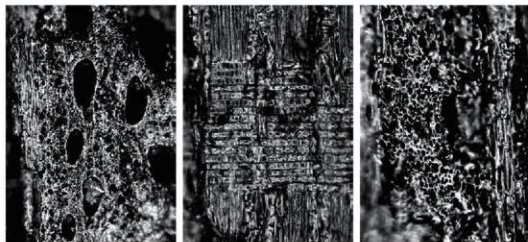
第147図 湯牟田遺跡の炭化材



横断面 ————— : 0.4mm    放射断面 ————— : 0.4mm    接線断面 ————— : 0.2mm  
 4. SA16 C3 雑木? コナラ属コナラ節



横断面 ————— : 0.4mm    放射断面 ————— : 0.4mm    接線断面 ————— : 0.2mm  
 5. SA14 17 垂木 コナラ属クスギ節

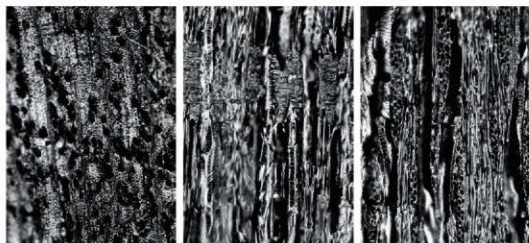


横断面 ————— : 0.4mm    放射断面 ————— : 0.2mm    接線断面 ————— : 0.2mm  
 6. SA3 1 木製軸 (部位不明) コナラ属アカガシ亜属

第148図 湯牟田遺跡の炭化材



横断面 ————— : 0.4mm      放射断面 ————— : 0.1mm      接線断面 ————— : 0.2mm  
 7, SA2 31 二股状 イスノキ

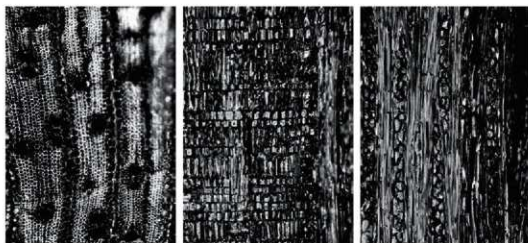


横断面 ————— : 0.4mm      放射断面 ————— : 0.2mm      接線断面 ————— : 0.2mm  
 8, SA2 13 梁あるいは桁 サクラ属

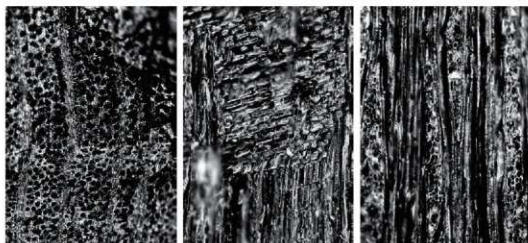


横断面 ————— : 0.4mm      放射断面 ————— : 0.4mm      接線断面 ————— : 0.2mm  
 9, SA3 11 不明木製品 スルデ

第149図 湯牟田遺跡の炭化材



横断面 ————— : 0.4mm    放射断面 ————— : 0.4mm    接線断面 ————— : 0.4mm  
 10. SA3 10 木製鋤(柄部) アワビキ属



横断面 ————— : 0.4mm    放射断面 ————— : 0.2mm    接線断面 ————— : 0.2mm  
 11. SA3 4 木製クワ? (柄部) シヤシヤンボ



横断面 ————— : 0.4mm    放射断面 ————— : 0.2mm    接線断面 ————— : 0.2mm  
 12. SA16 C4 垂木 エゴノキ属

第150図 湯牟田遺跡の炭化材

きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

スタジイ *Castanopsis sieboldii* Hatusima ブナ科 第147図

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりスタジイに同定される。スタジイは本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する常緑の高木で、高さ20m、径15mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schotky ブナ科 第147図

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。放射組織：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは、関東以南の本州、四国、九州に分布する常緑の高木で、高さ20m、径15mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いられる。

シイ属 *Castanopsis* ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布す

る常緑高木で、高さ20m、径15mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。シイ属にはスタジイとツブラジイがあり、集合放射組織の有無などで同定できるが、本試料は小片で広範囲の観察が困難であるため、シイ属の同定にとどめた。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 第148図

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射組織：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強韌で弾力に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aeglops* ブナ科 第148図

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射組織：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強韌で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科 第148図

横断面：中型から大型の道管が1～数列幅で年輪界に關係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30 m、径1.5 m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

#### ブナ科 *Fagaceae*

横断面：部分的ではあるが大型の道管と小道管が見られた。放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりブナ科の、クリ、シイ属、コナラ属コナラ節、コナラ属クスミ節のいずれかに同定される。なお、本試料は焼け膨れなどにより変形が著しく広範囲の観察が困難であるため、ブナ科の同定にとどめた。

#### イスノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc. マンサク科 第149図

横断面：小型でやや角張った道管が、ほぼ単独に散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に向かって黒い線状に並んで見られ、ほぼ一定の間隔で規則的に配列する。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的に少なく15前後のものが多い。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で、ほとんどが1～2細胞幅であるが、まれに3細胞幅のものも存在する。

以上の形質よりイスノキに同定される。イスノキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する常緑の高木で、高さ20 m、径1 mに達する。耐朽性および保存性の高い材で、建築、器具、楽器、ろくろ細工、櫛、薪炭などに用いられる。

#### サクラ属 *Prunus* バラ科 第149図

横断面：小型で丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内腔にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性である。接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉の高木または低木である。

#### ヌルデ *Rhus javanica* L. ウルシ科 第149図

横断面：年輪のはじめにやや小型から中型の道管が単独あるいは2～3個複合して配列する環孔材である。晩材部で小道管が多数集合して、接線方向あるいは斜線方向に配列する。早材から晩材にむけて道管の径は徐々に減少していく。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。小道管の内腔にはらせん肥厚が存在する。接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の形質よりヌルデに同定される。ヌルデは、北海道（渡島半島）、本州、四国、九州、沖縄に分布する落葉高木で、通常高さ5～10 m、径20～30 cmであるが、大きいものは高さ13 m、径45 cmに達する。耐朽、保存性はさほど高くない材で、器具、ろくろ細工、薪炭に用いられる。

#### アワブキ属 *Meliosma* アワブキ科 第150図

横断面：小型の道管が単独ないしその複合部に1～2個の柔細胞をはさんで、放射方向に向かって2～4個複合して散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は少なく10本前後である。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質よりアワブキ属に同定される。アワブキ属は本州、四国、九州に分布する落葉または常緑の小高木から高木である。

シャシャンボ *Vaccinium bracteatum* Thunb. ツツジ科 第150図

横断面：小型で角張った道管が、単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく10本前後のものが多いが、まれに単穿孔も認められる。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、直立細胞からなる単列のものと、6～8細胞幅で長い紡錘形を示す多列のものからなる。多列のものはほとんどが平伏細胞からなるが、上下縁辺部と側面部に直立細胞が見られる。

以上の形質よりシャシャンボに同定される。シャシャンボは関東南部以西の本州、四国、九州に分布する常緑の低木で、通常高さ1～5m、径10cmぐらいであるが、大きいものは高さ10m、径70cmに達する。

エゴノキ属 *Syrax* エゴノキ科 第150図

横断面：年輪のはじめに、やや小型で丸い道管がおもに2～4個放射方向に複合して散在し、晩材部ではごく小型で角張った道管が単独あるいは数個放射方向に複合して散在する半環孔材（散孔材）である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。軸方向柔細胞が、晩材部において接線状に配列する。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10本前後である。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～3細胞幅である。

以上の形質よりエゴノキ属に同定される。エゴノキ属には、エゴノキ、ハクウンボクなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉の小高木で、高さ10m、径30cmである。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

## 5 所見

分析の結果、ツブラジイ8点、アワブキ属6点、スダジイ3点、クリ3点、コナラ属アカガシ亜属3点、

サクラ属3点、コナラ属コナラ節3点、シイ属2点、コナラ属クヌギ節2点、ブナ科2点、シャシャンボ2点、イスノキ1点、ヌルデ1点、エゴノキ属1点が同定された。最も多いシイ属（ツブラジイ、スダジイ）および次に多いアワブキ属は、垂木などの屋根部材に多く使用されている。コナラ属アカガシ亜属は、木製脚や垂木に使用されている。

シイ属やコナラ属アカガシ亜属は、温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要高木であり、シャシャンボも照葉樹林の構成要素である。クリ、コナラ属コナラ節とコナラ属クヌギ節は、温帯に広く分布する落葉広葉樹で、乾燥した台地や丘陵地に生育し、二次林的要素でもある。サクラ属はやや乾燥した斜面等に、アワブキ属は山地に普通に生育する。ヌルデは日当たりの良い斜面に、エゴノキ属は山地の谷治いなどに生育する。いずれの樹木も、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

## 文献

- 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞。木材の構造。文永堂出版。p.20-48。  
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞。木材の構造。文永堂出版。p.49-100。  
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣。p.296  
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成。植生史研究特別第1号。植生史研究会。p.242

## 第4節 炭化種実同定

### 1 はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。



第5表 炭化種実同定結果(1)

ケース番号	遺構名	採取地点	フナ番号	分類群		部位	個数	備考			
				学名	和名						
1	SA3	5	①	<i>Myrica rubra</i> Sieb. et Zucc.	ヤマモモ	積片	1	炭化物片(種子以外)3 炭化物片(種子以外)1          炭化物片(種子以外)1 炭化物片(種子以外)1 炭化物片(種子以外)1			
2											
3											
4						②	<i>Quercus gilva</i> Blume		イチイガシ	子葉片	1
5							Unknown		不明種実		1
6						③	<i>Oryza sativa</i> L.		イネ	果実	1
7						④	<i>Quercus gilva</i> Blume		イチイガシ	子葉片	1
8						⑤	<i>Oryza sativa</i> L.		イネ	果実片	1
9							<i>Capsella bursa-pastoris</i> Medic.		ナズナ	種子	1
10						⑥					
11						⑦	<i>Oryza sativa</i> L.		イネ	果実片	1
12											
13						⑧	<i>Oryza sativa</i> L.		イネ	果実	1
14						⑨					
15	SA4	1b	①	<i>Vigna</i>	ササゲ属	子葉	1	炭化物片(種子以外)1 炭化物片(種子以外)3 炭化材片1			
16						<i>Oryza sativa</i> L.	イネ		果実	1	
17						<i>Hordeum vulgare</i> L.?	オオムギ?		果実	1	
18						Unknown	不明種実			1	
19							<i>Oryza sativa</i> L.		イネ	穎	1
20						②	<i>Oryza sativa</i> L.		イネ	果実	1
21							<i>Hordeum-Triticum</i>		ムギ類	果実	1
22							<i>Polygonum prfoliatum</i> L.		イシミカワ	種子	10
23						③	<i>Vigna</i>		ササゲ属	子葉片	3
24						④					
25	SA15	炉	①	Unknown	不明種実		2	炭化物片(種子以外)1 炭化物片(種子以外)3			
26						Unknown	不明種実			1	
27							Unknown		不明種実		2
28					炉(焼土)	③					2
29	SA20	炉(焼土)	①	<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実	2	炭化物片(種子以外)1 炭化物片(種子以外)3 炭化物片(種子以外)2 虫嚙片1.炭化物片1			
30											
31			炉2	①	<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実		1		
32											
33											
34	SC47	b2	⑥	Asteroidae	キク亜科	果実	1	虫嚙片1.炭化物片1 虫嚙片1 炭化材片1			
35											
36											
37											
38			⑧	<i>Vigna</i>	ササゲ属	子葉	1				



第6表 炭化種実同定結果(2)

ケース番号	遺構名	採取地点	ソフ番号	分類群		部位	個数	備考
				学名	和名			
39		b2						炭化物片(種子以外)1
40		b15						炭化物片(種子以外)1
41			①	<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実	1	炭化物片(種子以外)1
42				<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実	1	
43		b21		<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実片	1	
44				Unknown	不明種実		1	
45			②	<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実	1	炭化物片(種子以外)1
				<i>Quercus</i>	コナラ属	ヘソ片?	1	
				<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉	1	
		b26		<i>Quercus gilva</i> Blume	イチイガシ	子葉片	1	
				<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実	1	
46								
47		b28		<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実片	1	
48				Unknown	不明種実片		1	炭化物片(種子以外)1
49								
50				Unknown	不明種実片		1	
51		d6	①	<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実	1	炭化物片1.炭化材片1
52								炭化物片(種子以外)2
53		d12		<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実	1	
54				<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実片	1	
55		d17						炭化物片(種子以外)1
56								炭化物片(種子以外)15
57		d18		<i>Quercus</i>	コナラ属	ヘソ片?	1	
58			②					炭化物片(種子以外)1
59								炭化物片(種子以外)1
60		d23	①	Unknown	不明種実片		1	
61			②					炭化物片(種子以外)1
62	SA10	d25		Rubiaceae?	アカネ科?	種子	1	
63		e6	①					炭化物片(種子以外)1
64		c11		<i>Quercus</i>	コナラ属	子葉片	1	
65								炭化物片(種子以外)1
66			②					炭化物片(種子以外)1
67		c12						炭化物片(種子以外)1
68			③					炭化物片(種子以外)1
69				<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実	1	
70				<i>Quercus</i>	コナラ属	子葉片	1	
71		c13	①	<i>Xanthium Strumarium</i> L.	オナモミ	果実片	2	
72								炭化物片(種子以外)1
73								炭化物片(種子以外)1
74		c16	④					炭化物片(種子以外)1
75			①					炭化物片(種子以外)1
76		c18		<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実片	1	
77			③					炭化物片(種子以外)1
78		c19		<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	1	
79		c21						炭化物片(種子以外)1
80		c25	①	<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実片	1	
81				Unknown	不明種実片		1	
82		a1		Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	1	
83				Unknown	不明種実片		1	
84		d6	③	<i>Xanthium Strumarium</i> L.	オナモミ	果実片	4	
85		d11	④	<i>Quercus</i>	コナラ属	子葉片	2	
86		d12	③	Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	1	
87		d17	②	Unknown	不明種実片		1	
88				Unknown	不明種実片		1	
89		d22	③					炭化物片(種子以外)1



第151図 湯牟田遺跡の炭化種実

## 2 試料

試料は、弥生時代の住居跡 (SA 3、SA 4、SA10、SA15、SA20) および SC47 の遺構埋土から水洗浮遊選別法により選別採取された、種実を含む微細な炭化物である。

## 3 方法

肉眼及び双眼顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

## 4 結果

### (1) 分類群

分析の結果、樹木3、草本11の計14分類群が同定された。学名、和名および粒数を第5・6表に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

#### (樹木)

ヤマモモ *Myrica rubra* Sieb. et Zucc. 核片 ヤマモモ科

茶褐色で楕円形を呈し、両端がややとがる。一端にへそがあり、表面は粗い。断面は扁平である。

イチイガシ *Quercus giva* Blume 子葉片 ブナ科

炭化していて黒色で、楕円形を呈する。表面はなめらかで、縦方向に一条の凹線が入る。

コナラ属 *Quercus* 子葉片・ヘソ片? ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は投斗が欠落し、属レベルまでの同定である。

#### (草本)

イネ *Oryza sativa* L. 穎・果実 イネ科

穎は茶褐色で扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。完形のものは無かった。炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が

走る。

オオムギ? *Hordeum vulgare* L.? 果実 イネ科

炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。背面には縦に一本の溝があるが、腹部の端の筋が欠落しているため、オオムギ?までの同定である。

ムギ類 (オオムギ・コムギ) *Hordeum-Triticum* 果実 イネ科

オオムギもしくはコムギと思われるが、発泡しているためムギ類とした。

カヤツリグサ科 *Cyperaceae* 果実

黒褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

イシミカワ *Polygonum perfoliatum* L. 果実 タデ科

黒色でやや光沢がある。円形を呈し、一端にへそ部がある。断面は円形に近い三角形である。

タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科

黒褐色で先端がとがる卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

ササゲ属 *Vigna* 子葉 マメ科

黒色で楕円形を呈す。へそは縦に細長い。ササゲ属にはリョクトウ、アズキ、ササゲなどの栽培植物が含まれるが、現状の研究では識別は困難である。

アカネ科? *Rubiaceae*? 種子

偏球形を呈し、背面は広楕円状円形である。中央に円形のくぼみがある。炭化が著しく表面が欠落しているため、アカネ科?までの同定である。

ナズナ *Capsella bursa-pastoris* Medic. 種子 アブラナ科

金褐色で長楕円形、やや扁平を呈す。浅い溝による倒U字状模様がみられる。

オナモミ *Xanthium strumarium* L. 果実片 キク科

黒褐色で長楕円形を呈し、先端は2本の突起が伸びる。表面にかぎ状の突起が全体に分布する。

キク亜科 Asteroidae 果実 キク科

茶褐色で楕円形を呈し、両端は切形となる。表面には縦方向に8本程度の筋が走る。

## (2) 種実群集の特徴

### 1) SA 3

ヤマモモ1、イチイガシ1、イネ4、ナズナ1、不明種実1が同定された。

### 2) SA 4

イネ6、オオムギ?1、ムギ類1、イシミカワ10、ササゲ属4が同定された。

### 3) SA15

不明種実5が同定された。

### 4) SA20

イネ3が同定された。

### 5) SC47

ササゲ属1、キク亜科1が同定された。

### 6) SA10

イチイガシ5、コナラ属6、イネ12、カヤツリグサ科2、タデ属1、アカネ科?1、オナモミ6、不明種実9が同定された。

## 5 所見

分析の結果、栽培植物としてはイネ、オオムギ?、ムギ類、ササゲ属が認められた。当時の遺跡周辺では、これらの作物を栽培する農耕が営まれていたと考えられる。食用となる有用植物としては、ヤマモモ、イチイガシが認められた。カヤツリグサ科、イシミカワ、タデ属、アカネ科?、ナズナ、キク亜科、オナモミは、耕地や路傍などの人里の環境に多い草本である。

## 文献

- 笠原安夫 (1985) 日本雑草図説 養賢堂, 494p.  
笠原安夫 (1988) 作物および旧日雑草種類 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣 出版, p131-139.  
南木勝彦 (1991) 栽培植物. 古墳時代の研究第4巻生産と流通1, 雄山閣出版株式会社, p165-174.  
南木勝彦 (1992) 低湿地遺跡の種実. 月刊考古学ジャーナル No.355, ニューサイエンス社, p18-22.  
南木勝彦 (1993) 葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p276-283.  
吉崎昌一 (1992) 古代雑穀の検出. 月刊考古学ジャーナル No.355, ニューサイエンス社, p. 2-14.

## 第5節 植物珪酸体分析

### 1 はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO<sub>2</sub>) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。

### 2 試料

分析試料は、DIXN 4グリッド地点から採取された土壌7点、および弥生時代の焼失住居 (SA 2、SA 5、SA14、SA16) から採取された繊維質植物遺体 (炭化物) 5点の計12点である。

### 3 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気灰化法 (550℃・6時間) に

第7表 植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: × 100 個 / g)		D区N4グリッド						
分類群	学名	地点・試料						
		1	2	3	4	5	6	7
イネ科	Gramineae (Grasses)							
イネ	Oryza sativa	7						
キビ族型	Panicae type	21	22	22	7	37	22	15
ヨシ属	Phragmites							7
スキ属型	Miscanthus type	170	87	192	89	37	66	117
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	57	72	44	60	80	132	80
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)							
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	325	623	532	379	482	405	510
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasasa	1753	1528	1893	1555	1601	1479	1196
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.		29	30	30	44	15	73
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi		14	15	30	15	51	15
未分類等	Others	141	442	370	372	614	706	350
その他のイネ科	Others							
表皮毛起源	Husk hair origin	21	14	30	22	7	22	22
棒状珪酸体	Rodshaped	961	1369	1560	1361	1484	1766	1225
未分類等	Others	855	963	1065	1049	1118	1111	1130
樹木起源	Arboreal							
その他	Others	14	7	15				
植物珪酸体総数	Total	4326	5171	5768	4954	5518	5775	4739

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg / m<sup>2</sup> · cm) : 試料の仮比重を 1.0 と仮定して算出

イネ	Oryza sativa	0.21						
ヨシ属	Phragmites							0.46
スキ属型	Miscanthus type	2.10	1.08	2.38	1.11	0.45	0.82	1.45
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	3.77	7.23	6.18	4.40	5.60	4.69	5.92
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasasa	8.41	7.34	9.09	7.46	7.68	7.10	5.74
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.		0.22	0.22	0.22	0.33	0.11	0.55
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi		0.04	0.04	0.09	0.04	0.15	0.04

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	31	49	40	36	41	39	48
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasasa	69	49	59	61	56	59	47
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.		1	1	2	2	1	4
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi		0	0	1	0	1	0

よる脱有機物処理

4) 超音波水中照射 (300W・42kHz・10分間) による分散

5) 沈底法による 20  $\mu$ m 以下の微粒子除去

6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成

7) 検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0 と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位:  $10^{-5}$  g) をかけて、単位面積で層厚 1cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は 294、ヨシ属 (ヨシ) は 631、ススキ属 (ススキ) は 124、メダケ節は 1.16、ネザサ節は 0.48、チマキザサ節・チシマザサ節は 0.75、ミヤコザサ節は 0.30 である (杉山 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

繊維質植物遺体については、電気灰化法 (550°C・6時間) によって灰化し、オイキットで封入してプレパラートを作成した。検鏡は偏光顕微鏡を用いて、100 ~ 400 倍の倍率で行った。なお、灰化物の内部を調べるために、灰体組織の一部を破壊して観察を行った。

## 4 分析結果

### (1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第 7 表および第 152 図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型 (おもにススキ属)、ウシクサ族 A (チガヤ属など)

[イネ科—タケ亜科]

メダケ節型 (メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型 (ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型 (ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

[イネ科—その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

その他

### (2) 植物珪酸体の検出状況

#### 1) D区N4グリッド地点 (図1)

弥生時代とされる II a 層、およびその下位の II b 層について分析を行った。その結果、II b 層 (試料 4~7) では、ネザサ節型が極めて多量に検出され、メダケ節型も多量に検出された。また、ススキ属型やウシクサ族 A も比較的多く検出され、キビ族型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型も少量検出された。II a 層 (試料 1~3) では、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型が増加しており、試料 3 ではネザサ節型の密度が約 19 万個/g に達している。また、樹木 (その他) が出現しており、試料 1 ではイネが検出された。イネの密度は 700 個/g と低い値であり、水田跡 (稲作跡) の検証や探査を行う場合の判断基準としている 5,000 個/g を下回っている。おもな分類群の推定生産量によると、全体的にメダケ節型およびネザサ節型が卓越しており、II a 層ではススキ属型も多くなっている。

#### 2) 焼失住居の繊維質植物遺体

弥生時代の焼失住居から検出された繊維質植物遺体 (SA 2 の試料 20 と試料 39、SA 5 の試料 1、SA14 の試料 1、SA16 の試料 3) について灰体の観察を行った。その結果、各試料ともススキ属型の機動細胞珪酸体が多く検出され、ススキ属型の機動細胞組織列や細胞組織片も観察された (顕微鏡写真参照)

照)。なお、メダケ節型やネザサ節型の機動細胞珪酸体も多く検出されたが、機動細胞組織列や細胞組織片が認められないことから、試料に付着していた土壌に由来するものと考えられる。

## 5 考察

### (1) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

弥生時代とされるⅡ a 層の上部では、少量ながらイネが検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。これは、種実同定(第三章)で弥生時代の住居跡からイネ(炭化米)が検出されていることと符合している。

Ⅱ a 層およびその下位のⅡ b 層の堆積当時は、メダケ属(メダケ節やネザサ節)などのタケ亜科を主体としてススキ属やチガヤ属なども生育するイネ科植物が繁栄されていたと推定される。これらのイネ科植物は、陽当たりの悪い林地では生育が困難であり、ススキ属やチガヤ属の草原が維持されるためには定期的な刈り取りや火入れ(焼き払い)が必要である(堀田, 1991, 近藤, 1995)。このことから、当時は火入れなど人間による植生干渉が行われていた可能性が考えられる。このような植生環境下で、土壌中に多量の有機物が供給され、炭素含量の多い黒色土壌(黒ボク土)が形成されたと考えられている(杉山ほか, 2002)。

なお、樹種同定(第二章)や花粉分析(第五章)では、シイ属、イスノキ属、アカガシ亜属などの照葉樹が認められたが、植物珪酸体分析では照葉樹に由来する分類群は検出されなかった。このことの原因として、植物珪酸体は花粉よりも現地性が高いため、丘陵部などの周辺地域の植生が反映されにくいことが考えられる。なお、火入れなど人間による植生干渉が、調査区周辺における照葉樹林の分布拡大を妨げる一因となった可能性も考えられる(杉山, 1999)。

### (2) 焼失住居の繊維質植物遺体

灰燼の顕微鏡結果から、弥生時代の焼失住居(SA 2、SA 5、SA14、SA16)から検出された繊維質植物遺

体は、いずれもススキ属の茎葉に由来すると判断される。前述のように、当時の遺跡周辺にはススキ属が豊富に存在していたと考えられることから、住居の屋根材や壁材、敷物、燃料、道具などとしてススキ属の茎葉が盛んに利用されていたことが想定される。

## 文献

- 近藤錬三(1995)日本における植物珪酸体研究とその応用。近藤祐弘教授退官記念論文集刊行会: p31-56.
- 杉山真二(1987)タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告, 第31号, p70-83.
- 杉山真二(1999)植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究, 38(2), p109-123.
- 杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)。考古学と植物学, 同成社, p189-213.
- 杉山真二・渡邊眞紀子・山元希里(2002)最終氷期以降の九州南部における黒ボク土発達史。第四紀研究, 41(6): 361-373.
- 藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)一数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法一。考古学と自然科学, 9, p15-29.
- 藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)一プラント・オパール分析による水田址の探査一。考古学と自然科学, 17, p73-85.
- 堀田満(1991)日本列島の植物。カラー自然ガイドⅡ, 保育社: p68-69.

## 第6節 花粉分析

### 1 はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存

していない場合もある。

## 2 試料

試料は、D区N4グリッド地点から採取された5点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

## 3 方法

花粉粒の分離抽出は、中村(1973)の方法をもとに、以下の手順で行った。

1) 0.5%りん酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎する。

2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱除去で砂粒を除去

3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す

5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理

6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

### 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。イネ属については、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表面彫面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

## 4 結果

### (1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉15、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉11、シダ植物胞子2形態の計30である。なお、寄生虫卵についても観察を行ったが、いずれの試料からも検出されなかった。分析結果を第8表に示し、花粉数が100個以上

計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記す。

#### 〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、ヤマモモ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属—アサダ、クリ、シイ属—マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、カエデ属

#### 〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科、マメ科

#### 〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、ソノ属、アカザ科—ヒユ科、アブラナ科、フウロソウ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

#### 〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

### (2) 花粉群集の特徴

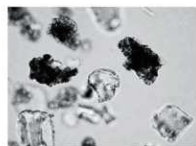
II b層(試料5、7)では、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、イネ科およびヨモギ属が優占し、キク亜科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属が多く、コナラ属コナラ亜属、ツガ属などが伴われる。II a層(試料1~3)では、イネ科の占める割合が増加しており、カヤツリグサ科、ソノ属、アカザ科—ヒユ科、アブラナ科などが出現している。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属の占める割合がやや減少している。

## 5 花粉分析から推定される植生と環境

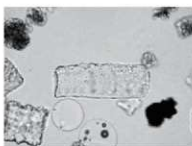
弥生時代とされるII a層の堆積当時は、イネ科やヨモギ属を主としてアカザ科—ヒユ科、キク亜科なども生育する日当たりの良い人里の環境であったと考えられ、同層上部の時期にはソノ属やアブラナ科などを栽培する農耕が行われていたと推定される。遺跡周辺には森林植生は少なく、周辺地帯にカシ類(コナラ属アカガシ亜属)などの照葉樹をはじめ、ナラ類(コナラ属コナラ亜属)やツガ属なども生育す



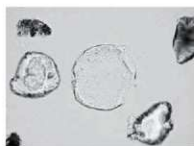




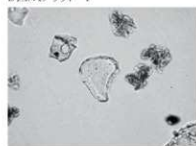
イネ  
DEKN4グリッド 1



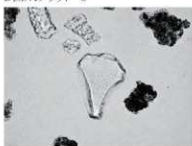
キビ族型  
DEKN4グリッド 5



ヨシ属  
DEKN4グリッド 7



ススキ属型  
DEKN4グリッド 2



ススキ属型  
DEKN4グリッド 3



ススキ属型  
SA16 3



ススキ属型(機動細胞組織列)  
SA2 39



ススキ属型(機動細胞組織列)  
SA2 39



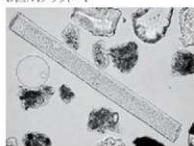
メダケ節型  
DEKN4グリッド 1



ネザサ節型  
DEKN4グリッド 1



チマキザサ節型  
DEKN4グリッド 4



棒状珪酸体  
DEKN4グリッド 2

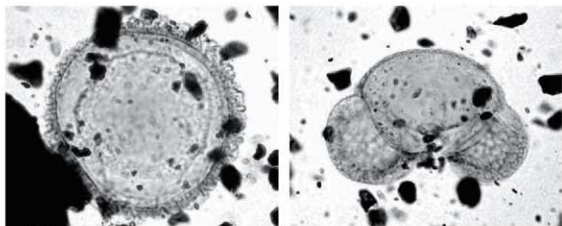
50 μm

第153図 湯羊田遺跡の植物珪酸体(プラント・オパール)

第8表 花粉分析結果

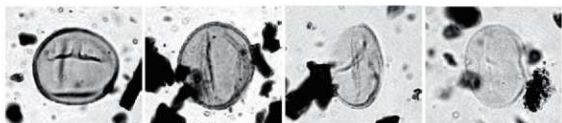
学名	分類群	D区N4グリッド地点				
		1	2	3	5	7
Arboreal pollen	樹木花粉					
<i>Abies</i>	モミ属					1
<i>Tsuga</i>	ツガ属	7	8	4	4	8
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylo</i>	マツ属複雑管束亜属	4	1			1
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	3				2
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1				
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属	1				
<i>Alnus</i>	ハンノキ属					2
<i>Betula</i>	カバノキ属	1				
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	1		1		
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	1	3	1		
<i>Castanea crenata</i>	クリ	1				
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイ属-マテバシイ属	2	2	1	1	2
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	9	2	13	5	8
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	24	15	28	41	46
<i>Acer</i>	カエデ属		1			
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉					
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	1				1
Leguminosae	マメ科					15
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Gramineae	イネ科	199	223	204	198	109
Cyperaceae	カヤツリグサ科	9	3	4		3
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	1				
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1	1	1		
Cruciferae	アブラナ科	1				
<i>Geranium</i>	フウロソウ属	1				
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	2				
Apioidae	セリ亜科	2	1	1	3	3
Lactucoideae	タンポポ科	3				5
Asteroideae	キク亜科	4	4	1	5	9
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	76	70	83	91	115
Fern spore	シダ植物胞子					
Monolate type spore	単条溝胞子	15	12	3	6	2
Trilate type spore	三条溝胞子	3	2	2		5
Arboreal pollen	樹木花粉	55	32	48	53	68
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1	0	0	1	15
Nonarboreal pollen	草本花粉	299	302	294	300	241
Total pollen	花粉総数	355	334	342	354	324
Unknown pollen	未同定花粉	12	6	5	11	16
Fern spore	シダ植物胞子	18	14	5	6	7
Helminth eggs	寄生虫卵	( )	( )	( )	( )	( )
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	( )	( )	( )	( )	( )





1 ツガ属

2 マツ属複維管束型

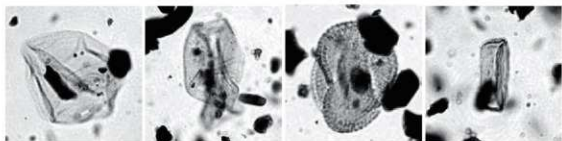


3 スギ

4 コナラ属コナラ型

5 コナラ属アカガシ型

6 マメ科

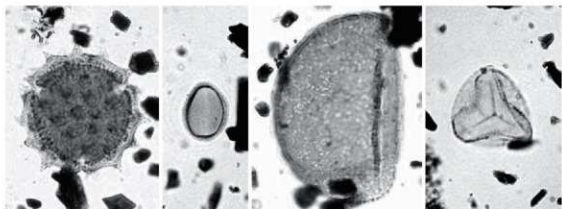


7 イネ科

8 カヤツリグサ科

9 ソバ属

10 セリ亜科



11 キク亜科

12 ヨモギ属

13 シダ植物単条溝胞子

14 シダ植物三條溝胞子

—10 $\mu$ m

第155図 湯牟田遺跡の花粉・胞子

## 第Ⅵ章 まとめ

### 第1節 旧石器時代

後期旧石器時代の石器が、調査区北東端のR6・7グリッド近辺に集中し、V・IV層にわたってナイフ形石器や細石器が多数出土した。ほかに調査区南半H7グリッドで、VI層(Kr-Kb相当層)よりナイフ形石器5点・石核2点が出土した。これらは、分布や出土層位から異なる文化層として把握できる。

ただ調査区北東端では、石鏃や土器など縄文時代早期を主体とする遺物と混在しての出土であり、文化層として明確に分離はできなかった。

基本層序として把握される層位が、そのまま単一文化層ではありえないことが確認される出土状況である。自然為による遺物の上下も当然考えられようが、V層(ML1層)と認識したものが完全な自然層位(または層の形成に該当する時期の文化層)ではなく、新しいところでは縄文時代早期の文化層でもあったと考えられる。早期生活面は一部でV層にも達し、あるいは一部でV層が露出していた可能性が想定される。

だが、このような文化層の混在が見られつつも、多数の石器が出土したことはひとつの成果であったといえる。近年、宮崎県域における当該期の調査・研究が活発で、10段階特編なる総合的研究成果が挙げられており(宮崎県旧石器文化談話会2005)、中での細分の議論など今も進展しつつあるという。今後、本遺跡の出土石器もこれら動向の中で評価されることが望まれる。

### 第2節 縄文時代

遺構・遺物共に、調査区北東端のR6・7グリッド近辺に多くみられたほか、集石遺構に関しては、調査区南半にも点在している。

調査区北東端では、無文土器を中心に中期後半の押型文土器もみられ、同様の分布を示す集石遺構もこの時期に収まるものとみられる。この集中区は、北接する国光原遺跡で検出された多数の穴・集石遺構群と一連するものであり、本遺跡でのそれは断

片でしかないため、多く言及することは避ける。ただ集石遺構にみられる傾向として、掘り込みを伴わないタイプが主体であり、またその中で、5m長前後の比較的小さめの円環を主体とする特徴的なタイプ(SB6、8、10)が認められた。

最後に、本遺跡及び国光原遺跡にみられる、水場隣接する穴・集石遺構群としての特徴は、縄文時代早期の遺跡を地理的異質性の中でみていくとき一定の重要性を持つだろうことを指摘しておく。

### 第3節 弥生時代～古墳時代

#### 1 調査・評価上の問題点

当該地域は、そもそも全局的にみられる弥生時代後期の遺跡増加が顕著な地域であり、ならべて焼失住居が多く検出されることは周知の事実である。遺跡増加に関する評価は、個別遺跡のみから即座に解釈できるような類のものではなく、考古学的評価の上層レイヤーとも言うべき広域的・巨視的な研究の一つの極みであり、本遺跡の調査および報告において真向の単独に置けるものではない。一方で焼失住居に関しては、本遺跡の調査開始期において既に残存良好なケースとして認識され、焼失住居に一定の評価を与えることが調査における課題となっていた。

さてこの焼失住居の評価だが、調査研究史において大きく二つの議論がある。一つは焼失要因の解釈、二つは焼失状況からみた竪穴住居構造の復元である。焼失住居自体は当該時期に限らず縄文時代や古代においてもみられるものだが、事例数的にはやはり弥生時代後期が圧倒的に多い(近年の総合的研究動向は高田ほか2003に詳しい)。

当該時期での焼失要因に関する議論は大きく二者が存在する。古くは防御・社会的緊張状態と理解される環濠集落・高地性集落の存在とも相俟って、いわゆる焼き討ちなど戦乱による直接的な結果とする傾向が強かった。近年では、遺跡数増加の背景とともに、集落間の頻繁な移動に伴う建物の焼却とする

論も多い(久世 2001 など)。

二つめの議論である竪穴住居構造の復元については、焼土の存在を主な鍵に従来の草葺き屋根構造に対し「土葺き」を提唱する調査・研究が主要である(浅川 2001 など)。しかし、焼土について住居跡(後の鏡火に伴い)被せられた土と捉え、土葺き屋根構造に未だ懐疑的な立場もある。

以下、こうした調査・評価上の問題点・課題点を踏まえつつ、本遺跡にみられる特徴を概観する。

## 2 湯牟田遺跡における集落の特徴

### (1) 集落の存続した時期

集落跡のなかで竪穴住居跡の廃絶時期をみると、弥生時代中期末～後期初頭、後期後葉～古墳時代前期が認められる。このうち、中期末～後期初頭とみられる、調査区北端に位置する SA22・24、23 は、遺構の一部のみという部分的な調査であり、また調査区南半の後期後葉～古墳時代前期の住居群とは時間的に連続しない可能性も多分にあるため、この節では敢えて言及しないこととする。

さて、後期後葉～古墳時代前期の竪穴住居跡は、第5節で個別に触れたように、廃絶時期として後葉～終末期と古墳時代初頭～前期の大きく二つの時期がみられる。本遺跡において、この二時期に取り立てて断絶や画期を見出せるわけではないが、ここでは便宜的に前者をⅠ期、後者をⅡ期と分けて論を進める。

竪穴住居群をみると、Ⅰ期(SA1、4、5、11、12、14、16、18、19)、Ⅱ期(SA2、3、7、8、9、10、13)ともに分布の偏りはみられない。焼土住居もⅠ・Ⅱ期ともにみられ分布の偏りはない。また、調査区東史跡の SA8、9 でみられた住居廃絶後～竪穴部埋没途中における土器廃棄の在り方を考えると、調査区外東側にⅡ期あるいはそれ以降の集落が続くものと推察される。

### (2) 竪穴住居の構造

#### ① 柱穴、床面規模

時期差を問わず全ての竪穴住居跡をみると、柱穴数により床面規模及び柱穴間距離に相関関係が認め

られ、小型の0～1本柱、中型の2本柱、大型の4～7本柱、の4類型に分けられよう。これは当然、床面規模に応じて自ずと規模を増す上屋構造に対応した結果と考えられる。また、1本柱類型のみは規模が近似しており規格的であると言える。他の類型内では規模はまちまちで明確な線引きはできないものの、直ちに床面規模の規格外には言及できない。というのは、一部の張り出し等が住居建設後に拡張された可能性を考えると、検出された規模は本来の規模ではなく、単に住居使用の最終的な規模でしかないためであり、考慮されるべき問題であろう。

また柱穴に関しては、SA2、4、5、13において、柱穴の形態や遺物出土状況から柱抜き取りが行われたと考えられる例が認められた。特に SA2 は、不定形の張り出し部分が拡張された可能性も含め、住居の建て替えが行われたものと想定される。

#### ② 張り出しなど付帯/拡張空間

張り出し及び間切切りは、住居の建設時から定形的にそうあるように一見されるが、住居の建築から廃絶に至るまでの過程(住居の使用過程)で拡張されるなど、使用過程の動的な結果によるものである場合が少なくなく、「拡張間切切り住居」(石川 1991)など先学概念規定する通りである。

本遺跡においては、拡張された可能性のある例として SA2 東側、SA11 北東側(SA9 北東側、SA13 北～東側も)がある。SA11 は壁溝を埋めたとみられる痕跡が確認されており、拡張である可能性は高い。SA2 は柱穴のあり方からも併せ、建て替えが行われたと考えられる例である。SA13 も、柱穴の位置からみて北～東側の張り出しは建築当初よりそうあったとは考えにくく、拡張された可能性を考えたい。逆に SA5 などは、柱穴間際に見られる間切切りや全体の柱穴位置から、当初設計された張り出しとみなされよう(柱穴位置に基づく竪穴住居構造の分析は、北郷 1980、中塚 1998 などがある)。

#### ③ か、か接土坑

かほほとんどの住居で確認されたが、各類型を問わず確認できなかった住居もある。かはいずれも、

床面（貼床面）が被熱により赤化したいわゆる焼土面として検出されるような、単純な地床面である。痕跡の不明瞭な場合は検出し得ない可能性も当然ある。

これと併せ、調査時に「灰接土坑」として留意した特徴的な屋内土坑がある。SA1、2、4、5、11、14、15、16、20の9軒で検出された。石川氏が「方形基調平面住居の中央寄りピット」とし「中央灰」の可能性を指摘したタイプに相当する（石川前掲書）。また同書の焼土面の項にて、「ピットに伴う焼土面」と認識されたそのピットである。

本遺跡の調査報告では、あくまで灰を主と捉え「灰接土坑」と呼称しておきたい。この灰接土坑は、屋内土坑のうち、灰を検出できて初めて認識し得るといふネストがあり、また灰に接するという条件からのみの認定ではあるが、平面略長方形～略楕円形で、灰より深く30cm前後のものかほとんどという共通性が認められる。

こうした灰接土坑の機能に関して、宮崎市柳原遺跡A・B地区では、「掘り込みで直接焼土が伴わず、また掘り込み面も焼けていないことなどいわゆる貯蔵穴的な役割」との可能性が示されている（管付1988）。

他地域での類別をみると（調査指導委員田崎博之氏の御教示による）、愛媛県松山市東本遺跡の壁穴住居跡（弥生時代後期後葉～末）では、「掘り方は浅く、炭と焼土が検出される」と「掘り方は深く、炭や焼土は検出されない」ものが隣接しており、これらを「副次的灰坑（一つは燃焼部、他は炭の欠き出し所）」としている（高尾編1996）。

さて、本遺跡の灰接土坑では、SA1、4、14で特に顕著だが、灰に接する部分がスロープ状に連続しており、さらにSA4では、灰からその接する部分にまで焼土の拡がりが出ている。またこうした状況に加え、「灰に接する必然性」を考えたとき、灰接土坑が貯蔵穴である可能性は再考の余地が出てこよう。遺構の機能については、可能性の指摘に留まらざるを得ないが常だが、上記の検討を踏まえ、東本遺跡と同様に、炭や灰など灰での燃料・残渣物等を（一時的に）溜めておく機能を想定しておく。

#### ④ 屋内土坑

上記の灰接土坑以外でも、壁穴住居跡の多くで屋内土坑とみられる土坑を検出した。壁際や住居隅部に位置し複数基が壁際と並ぶものなどは貯蔵穴の可能性が考えられる。SA2SC2、SA4南壁際の土坑群、SA13南壁際の土坑群およびSC29、SA20SC1などが特徴的である。

しかし特筆すべきはSA13SC29であり、その規模の大きさや一定量の粘土塊が検出されたことは注目される。壁際に位置し住居と軸を同じくすることからSA13に伴う貯蔵穴と考えられる。同様の土坑として旧佐上原町下那阿遺跡SC15が挙げられる（甲斐2004）。

SC29で粘土や糞、台石等が出土したのは土坑の底面より2/3程上位の面であり、その下位は意図的に埋め戻された可能性が高い。断定はできないが、こうした埋め戻しは、掘り込み底面がローム層の場合、水の溜まりやすいことから、水捌けを考慮した措置である可能性を想定したい。

検出された粘土だが、褐灰色～にぶい黄色を呈しており、褐灰色部分は粘性が非常に強いが、にぶい黄色部分は比較的弱い。粘土に多様な用途はあろうが、土器製作用の粘土と想定し出土土器の胎土と比較したところ、焼成に左右される色調の問題は別として、それぞれ同様の土器が確認できた。

#### (3) 焼失状況

焼失住居は、不確定の2軒を含め計11軒確認された。ほぼ全てにおいて炭化材が床直で検出され、その分布と違えて焼土が検出された。こうした状況からは、住居部材の焼失が壁穴住居の焼損間もない時機におけるものと考えられる。また焼土の在り方は、炭化材として残る部材ではなく、完全に燃焼する部材の上で顕著に形成された結果と考えられる。

またこの焼土がかなりの被熱したもののかについて、SA5内152・156付近の2箇所の焼土から重鉾物を抽出し観察を行った。結果、いずれもKAH固有の火山ガラスを比較的多量に含み、MBOBに見られるような、粒子の比較的大きい石英・長石を多



く含むという所見を得た。このことから、焼土は住居竪穴部の掘削土に相当する土が焼熟したものであると考えられる。

#### (4) 遺物出土状況

竪穴住居跡で出土した遺物を、大きく床直と埋土中という視点でみていく。

##### ① パターン

まず床直では、分布状況として住居南半での出土が圧倒的に多い。種類・量的には、台石（+磨石など）の石器に加え、完形土器は少なく、破片の散在するパターンが圧倒的に多い（SA1～4、6、8、9、10～18、21）。これらは、住居の廃絶に際し道具の持ち出し・片付け等行われた後、最終的に放置されたものと考えられる。一般的な居住用の竪穴住居において、日常的にどれほどの個数の土器が保有されたかについて明らかにはし難いが、6～10個体という推定値の示された研究は参考となる（石野 1984、桐生 1993、久世 2001 など）。

また、床直で完形土器や土器片集中の出土するパターンがSA5、7、19、20にみられ、大小の破片がまとめて廃棄されたものとみられる。このなかでSA5の土器には、意図的に分割され、配置された可能性の高いものが見受けられ注目される。

つぎに埋土中では、竪穴部が（掘り鉢状に）埋没する過程で、徐々に廃棄されたとみられるものが多く、特にSA1に顕著である。また中には、SA3、SA8南東、SA11北側、SA13北側、SA20北東のように廃棄のままとりや投棄された方向の明確な場合も認められる。

##### ② 接合状況

土器片の接合は、竪穴住居間の時期差の検討材料として重視しつつ行ったが、作業の都合上遺構の分布位置の近いもの同士（4～6グリッド程度）をままとりとして進めたため、全てを同等には扱えない。

本文で述べてきた通り小片同士の接合は埋土中を主として、SA1、4間やSA2、3間、SA7、8、9、10、13間で多数みられており、集落内における廃絶住居竪穴部の廃穴としての利用や土の移動など、

当然起こり得る活動の結果として理解でき、その詳細な状況はここでは取り上げない。

ただSA7の大型壺片等からなる土器小片集中とSA13SC30の接合事例は、単純な廃棄としてのみでは理解できず、何らかの意図性をも考慮すべき事例であるといえる。

##### ③ 小結

ここまでみてきた出土状況及び接合状況の在り方は、遺構出土遺物の一括性はもとより、廃棄の意味性を考える上で重要である。

竪穴部埋没過程における土器等の廃棄は、近隣の西ノ別府遺跡SA1においても、やはり北東側からの一括廃棄が報告されている（三品編 2006）。また傍らには複製重層文鏡か型土器と共に出土しており、祭祀の後の廃棄とされている。

一方、SA5にみられた土器の分割、意図的な配置に関する類型は、高千穂町向原第1遺跡SA5（弥生時代中期後半）にみることができる。やはり大型壺の頸部から上位が竪穴上に正置状態で出土しており、胴部以下は出土していない（戌亥 2006）。柱抜き取り後の配置である可能性が高く、さらには「竪穴住居廃絶時の土器（壺）分割、配置」という行為の共通性を示唆する事例である。

さらにSA7、13間でみられた住居間土器接合の類型として、埋土中ではあるが、高千穂町神輿遺跡B地区SA1と50m以上離れたA地区SA2間で（弥生時代終末～古墳時代初期）、壺の胴部上位と底部が接合し、その意図性が留意された事例がある（谷口 1999）。

こうした土器分割・意図的な配置や住居間廃棄は大分県久住町高瀬遺跡等にみられるようであり、竪穴住居の廃絶儀礼として総合的に分析・研究されている（宮内 2004）。大分県域では、高添遺跡や高松遺跡など弥生時代後期後葉～終末における「主柱の抜き取り後に柱穴内部に完形土器や土器片を埋置く例」が多く知られており、上述したような宮崎県域における事例の評価・研究において参考となる。

### 3 評価、考察

#### (1) 焼失住居の評価

##### ① 焼失要因

焼失要因に関しては、冒頭にも述べたように、遺構そのもののみの評価に止まらず、集落論や社会論に関する議論にまで深く関与する議論である。以下では、これまで観測した本遺跡における竪穴住居跡の諸状況から、この焼失要因について検討する。

まず、集落の存続した期間からは、全ての竪穴住居が同時に焼失したというようなアクシデンタルな要因は考え難い。遺物出土状況からは、焼失かどうかを問わずほとんどの竪穴住居で、土器等の持ち出し・片付けが（なかには意図的な配置も）行われたと考えられ、ここでも当然、アクシデンタルな要因により焼失したとする認は想定し得ず、片付けの一環として住居を焼却処分した可能性が高いと考えられる。

久世氏は竪穴住居の焼却処分について、廃屋の解体や焼却が、有害動物の繁殖や土地の占有を防止・解消させる行為と解釈している。後述するように、本遺跡から想定される集落内移転を考えると、住居の焼失がこうした理由による焼却処分であったという論は説得的である。

##### ② 上屋構造の復元

焼失住居は、竪穴住居の上屋構造を復元する上で多くの情報を有しており、その調査研究の多くで、焼土を葺き土とみなす復元がなされている。本遺跡では残存の良好な焼失住居が多く検出されており、以下ではこうした視点を踏まえ検討したい。

先述のように、焼土の重鉱物観察から焼土が竪穴部の掘削土に相当する可能性は指摘できるが、これが屋根上である十分条件とはいえない。しかし、鎖火の露出された土とする論に対しては、焼土の量・厚みにおいて、多量の焼土が形成されるに至る温度や燃焼のあり方を考慮した場合、果たして土をかきることが可能なほど住居に近寄れるのかという検討の余地も残る。

一方、SA2、5、14で炭化材に載る状態で繊維質植物遺体が検出されたが、屋根土を検出した群馬県

中筋遺跡の事例から、炭化材に直交するものは葺き土の下地である可能性が高いという（大塚氏の御教示による）。SA2、14がこれに該当するが、SA5では炭化材に平行する。そもそも検出された繊維質が屋根の表層なのか、草葺きの場合下地層は直交し得ないのか、を検討する余地がある。

焼土や繊維質植物遺体、あるいは「断面形状の垂木材」など、土葺き構造の傍証はあるが、未だ十分条件となる事象は確認できていない。ここでの結論として、いずれの傍証にしろ、「草葺きでは再現し得ない」事象の認定など、それぞれの再現性を検証する実験やその比較検討も必要であろう。

#### (2) 竪穴住居の廃絶

##### ① 竪穴住居の廃棄パターン

竪穴住居の廃棄パターンに関する研究においては、小林達雄氏が唱出し、後に多くの研究者によって継承され発展を遂げる「井戸尻、吹上、平台和」の3パターンや、住居放棄における行動戦略として視る研究がある（石野、久世前掲書）。

以上に見てきた竪穴住居跡での遺物出土パターンでは、埋土中で土器等遺物の出土しないパターンはほとんどなく、多くの場合遺物が散在して出土し、あるいは集中して廃棄されている。このあり方からは、埋土に遺物の残らない平台和パターンに想定されるような、他「遠方」への移動・移転ではなく、井戸尻や吹上パターンに想定されるような、同一集落内や隣接地への移動であったと考えられる。

この住居放棄のあり方は、本遺跡に見られる集落跡が、SA2、4にみたような建て替えも一部で行われつつ、大きくは1・Ⅱ期（弥生時代後期後葉から古墳時代前期）にわたり存続したことからも指摘できる。

##### ② 土器の分割・意図的な配置

SA5でみられた土器の分割・意図的な配置に関して、上述した大分県域での事例研究のほかに、南部九州における先行研究がある（中村2004）。

中村氏は、住居跡及び周辺における土器の意図的な配置に見られる共通性について、個人の偶発性など

ではない集団の公的表象と捉え、南部九州での事例分析を行っている。「本来の機能を破壊された土器片を並べる行為」という共通性、その器種選定における時期的推移を指摘しつつ、それらの組成や並べ方は遺構（遺跡）によって大きく異なるとし、集落内での表象共有にとどまると解釈している。

本遺跡 SA5 や向原第 1 遺跡の事例にも認められる「機能を破壊された土器片を並べる〔配置する〕行為」が、上述他地域での事例も含め如何に議論し得るかは、「共通する／しない」の線引きの仕方が重要であろう。中村氏の指摘するように、地域性を知る上で今後の事例分析・比較が期待される。

### (3) 遺跡増加の背景

本遺跡の評価のみから当該時期の歴史的背景を言及するのは困難だが、研究史上にみられるような、集団再編成や集住、あるいは造墓などの議論と全く無関係ではないだろう。ただ、一定地域での集落遺跡の分析を抜きにしてこれら文言に準るだけの言及は避けたい。当該期における周知遺跡をはじめ、本遺跡を含む東九州自動車道周知遺跡の総合的分析を通しての、当地域の様相が明らかとされ得るだろう。

## 第 4 節 中世

本遺跡に見える集落は、本文中で触れたように時期的には 12～14 世紀におさまるものとみられ、15 世紀代を中心とする前ノ田村上第 1 遺跡や銀座第 1 遺跡に先行する集落であると言える。

屈曲する溝状遺構とそれに囲まれる掘立柱建物跡群が特徴的で、上記 2 遺跡とも共通する方形区画を基調とする構造と考えられる。またこれら 2 遺跡では、方形区画が 1 町あるいは半町単位を基礎とすることが指摘されており、その方位からは条里制地割が淵源である可能性も想定されている。

本遺跡の場合、溝状遺構が明確に方形区画であったとしても、調査区内には断片的にしか残っており、その基調とする単位に言及することは難しいが、2 遺跡との類似性は指摘できよう。

ほか、竪穴式遺構 3 基が検出されているが、竪穴式遺構の機能については、主に工房や穴蔵が想定さ

れており、一部給引に使用され埋め戻される事例が確認されている（堂込 2008）。さらに、埋め戻しを触媒状態の対処とし、皮革製品や骨細工加工場所との機能解釈に至っている。本遺跡の竪穴式遺構でも埋め戻されたような状況が確認されており、こうした研究事例も参考になろう。

### 主要な引用、参考文献

- 浅川雄男編 2001 『竪穴住居の空間分節に関する復原研究』平成 10～12 年度科学研究費補助金基礎研究 C 課題番号 10650643
- 石川悦雄 1991 『宮崎における弥生時代竪穴式住居の展開』『宮崎県史研究』第 5 号 宮崎県
- 石野博信 1984 『古代住居の日常容器』『福考古学研究所』第 6 集 吉川弘文館
- 大塚昌彦 1998 『土層根をもつ竪穴住居』『先史日本の住居とその周辺』奈良国立文化財研究所シンポジウム報告同成社
- 甲斐貴直編 2004 『下那珂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター
- 榎生直彦 1993 『床面出土遺物の検討（2）』『物質文化』第 56 号 物質文化研究会
- 久世辰男 2001 『焼失住居の考察』『集落遺構からみた南関東の弥生社会』六一書房
- 菅付和樹 1988 『熊野原遺跡 A、B 地区 第 5 節まとめ』『宮崎県学術都市遺跡発掘調査報告書』第 4 集 宮崎県教育委員会
- 高尾和長編 1996 『東本遺跡 4 次調査、枝松遺跡 4 次調査』松山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 高田和徳ほか 2003 『考古学ジャーナル 特集 列島各地の焼失住居』No.509 ニューサイエンス
- 谷口武範 1999 『神鏡遺跡 B、C 地区 ほか』宮崎県埋蔵文化財センター
- 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器、陶磁器』真業社
- 堂込秀人 1993 『竪穴建物』『季刊考古学』第 85 号 雄山閣
- 戌亥浩志 2006 『向原第 1 遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター
- 中摩浩太郎 1998 『南部九州弥生時代竪穴住居の分類』『人類学研究』第 10 号 人類学研究会
- 中村直子 2004 『住居跡およびその周辺における土器出土状況の特殊な事例について—南九州古墳時代を中心として—』『鹿児島考古』第 38 号
- 三品典生編 2006 『西ノ別府遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター
- 宮崎県旧石器文化談話会 2005 『宮崎県下の旧石器時代遺跡概観』『旧石器考古』66 旧石器文化談話会
- 北郷泰道 1989 『南九州における開住切土壁住居の成立と終焉』『宮崎県史研究』第 3 号 宮崎県
- 藤木聡 2003 『宮崎県域の道具の変遷と分布』『先史学、考古学論究Ⅳ』龍田考古学会
- 堀田孝博編 2006 『銀座第 1 遺跡（一、二、三、四次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター
- 松永幸寿 2004 『日向における古式土師器の成立と展開—宮崎平野部を中心として—』『西南四国—九州間の交流に関する考古学的研究』平成 14～15 年度科学技術研究費補助金（基礎研究（C）（1））研究代表者下條信行 真鍋篤行 1995 『弥生、古墳時代の瀬戸内地方の漁業』『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第 8 号 瀬戸内海歴史民俗資料館
- 宮内克己 2004 『竪穴住居跡の廃絶』『九州考古学』第 79 号 九州考古学会
- 宮本長二郎 1996 『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版
- 山口謙治 2005 『木器研究の現状と課題』『七隈史学』第 6 号

第9表 集石遺構一覧表

※単位はcm

遺構名	位置	建形跡			掘り込み				構成層		配石	遺物	備考	
		プラン	長軸	短軸	プラン	長軸	短軸	深さ	密度	特徴				
S1 1	R6	壊	84		不明	93	-	26	やや高	10cm 長の角礫が多い	中角	-	-	層且により一部破壊
S1 2	R7	不定	128	89	-	-	-	11	やや高	5-10cm 長の円礫が多い	中円	-	-	
S1 3	R7	長橋門	108	40	-	-	-	-	雑	5-10cm 長の円・帯円礫が多い	中円	-	-	
S1 4	Q7	円	85	72	-	-	-	-	高	5-10cm 長の円礫が多い	中円	-	-	土類片1 (無文系か)、棒状殿石2
S1 5	R6	円	73	62	-	-	-	13	高	10cm 長前後の帯円～角礫が多い	大角	-	-	土類片1
S1 6	P5	不定	50	48	-	-	-	-	やや高	5cm 長以下の円礫が多い	小円	-	-	
S1 7	O5	円	118	106	-	-	-	22	高	5-10cm 長の円・帯円礫が多い	中円	-	-	
S1 8	L8	不定	97	83	-	-	-	-	高	5cm 長前後の円・帯円礫が多い	小円	-	-	
S1 9	R6	不定	85	50	-	-	-	-	やや雑	5-10cm 長の帯角・角礫が多い	中角	-	-	土類片1
S1 10	R6	円	90	71	不整円	136	108	34	高	5cm 長前後の円・帯円礫が多い	小円	-	-	石核2、銅片1、7cm 長棒殿石
S1 11	R6	円	110	90	-	-	-	-	高	5cm 長前後の円～角礫が同等	小全	-	-	土類片1 (無文系か)
S1 12	R6	円	98	77	-	-	-	-	高	5-10cm 長の帯円・角礫が多い	中垂	-	-	
S1 13	R6	不整	49	34	-	-	-	-	やや雑	10cm 長以上の帯角・角礫が多い	大角	-	-	
S1 14	R7	不整	58	41	-	-	-	-	やや雑	5-10cm 長の帯角・角礫、10cm 長以上の円・帯円礫が同等	中角 大円	-	-	
S1 15	R7	円	120	115	-	-	-	-	やや高	5-10cm 長の帯円～角礫が同等	小全	-	-	土類片1、棒状/円状殿石4
S1 16	R7	不整	127		-	-	-	-	やや雑	10cm 長の円・帯円礫が多い	大円	-	-	
S1 17	O5	円	87	86	-	-	-	15	高	5-10cm 長の帯角・角礫、10cm 長以上の円・帯円礫が同等	中角 大円	-	-	
S1 18	G6	円	190	160	-	-	-	-	雑	5cm 長前後の帯角・角礫が多い	小角	-	-	
S1 19	E4	円			円	150	137	30	高	5-10cm 長の帯円～角礫が多い	中角	○	-	配石は中央に40cm 長の円礫、周囲に10-20cm 長の帯円礫 S12・23に付随。 写真のみ
S1 20	R6	不整	100	45	-	-	-	-	やや高	5-10cm 長の帯円・角礫が多い	中垂	-	-	S12・23に付随。 写真のみ
S1 21	R6	不整	132	83	-	-	-	-	やや雑	5-10cm 長の帯円・角礫が多い	中垂	-	-	S12・23に付随。 写真のみ
S1 22	R6				円	157		34	高	10cm 長以上の帯円～角礫が多い	大角	-	-	掘り込み内のみ
S1 23	R6				円	115		28	高	5-10cm 長の帯角・角礫が多い	中角	-	-	掘り込み内のみ

※構成層の特徴では、「5cm 長以下/5-10cm/10cm 以上」をそれぞれ「小/中/大」としている。「全」は、「円～角の全ての形状が同等に含まれる」の意。

第10表 土坑一覧表

※単位はcm

遺構名	位置	プラン	長軸	短軸	深さ	遺物	備考
SC 2	B5	不整	>162	>122	>14	弥生土器小片	—
SC 3	H4	円	>86	>75	>30	弥生土器費口縁部・底部片、高环製部片、ほか小片多量	—
SC 4	H3	方	95	93	—	土師皿之、短刀1	—
SC 5	G2	隅丸長方	276	204	36	弥生土器小片、畿前系陶器片・須恵器片・土師器片・青銅片など小片多量	堀穴状遺構、柱穴? 6基
SC 6	B4	不整	205	143	32	高环製部片	底面凹凸有り
SC 7	E2	隅丸長方	216	179	24	土師器片・常滑系陶器片、粘土塊	堀穴状遺構、柱穴6基
SC 9	F2	正方	(154)	(151)	—	土師皿片、焼土塊	堀穴状遺構、柱穴6基、竹炭
SC 10	C4	不整長方	188	116	23	二重口縁蓋	—
SC 11	B1	楕円	91	(64)	31	甕	—
SC 13	H7	隅丸長方	179	144	45	甕製部片・二重口縁蓋口縁部片など	床面中央に不整窪み
SC 15	D5	楕円	58	39	28	—	—
SC 17	E1K	楕円	(117)	64	20	—	—
SC 37	C4	円	68	64	18	甕・二重口縁蓋・高环	SA21 と接合
SC 50	D5	楕円	79	(53)	24	—	—
SC 51	D5	不整	—	—	—	—	—
SC 55	D2	隅丸長方	102	76	22	弥生土器小片	—
SC 61	C2	不整円	88	61	27	土師輪3	—
SC 68	38	楕円	142	85	12	—	—
SC 70	K7	楕円	142	56	31	縄文土器破片、瓦石	—
SC 73	L4	円	90	86	11	—	—
SC 74	L5	円	104	94	11	—	—
SC 75	L4	不整楕円	112	78	14	—	—
SC 76	L4	不整円	82	63	26	—	—
SC 77	L5	不整円	76	62	7	—	自然的な窪みか
SC 78	L5	不整円	88	76	8	—	自然的な窪みか
SC 89	P6	円	140	131	17	—	—
SC 90	Q8	長楕円	250	150	54	炭化材	—
SC 94	E3	不明	64	—	11	—	—
SC 95	E3	楕円	68	51	4	—	—
SC 96	E3	円か	45	—	8	—	—
SC 97	E3	楕円	61	41	5	—	—
SC 98	E2	楕円	71	52	21	弥生土器破片、鉄片	—
SC 100	R7	楕円	276	224	40	—	—
SC 16a	H3	楕円	70	44	52	常滑系陶器甕/甕、鉄滓	—
SC 16b	H3	楕円	65	34	53	弥生土器費口、瓦石・礎	—
SC 16c	H3	楕円	>50	48	19	礎	—



第12表 竪穴住居跡一覧表(2)

※単位はc.m

遺構名	位置	竪穴部		柱穴 主柱穴の 前後行間数	遺積 深さ	間仕 長さ	幅	扉	扉の 位置	土坑 数	遺物	備考					
		プラン 形状	面積㎡														
S.A. 13	6a	方	700 642 28	44.9	4	204 - 302	32 65	2	5	0	0	0	3	6	溝・礎・二重口溝礎・竪穴・高坪・石版丁・台石・柱礎を取り 掘上階床穴?		
S.A. 14	117	方	402 472 45	23.2	2	182	40 71	1	0	0	0	0	1	1	100 26	2	溝・竪・高坪・石版丁・礎石・礎石・石積・ 有線石積・敷物品
S.A. 15	17	方	340 329 28	11.2				0	0	0	0	0	1	1	50 7	7	溝・礎・二重口溝礎・高坪・竪・高坪・石版 丁
S.A. 16	16	長方	440 378 35	16.6	2	162	28 63	1	0	0	△	0	1	1	80 46	5	溝・礎・高坪・竪・高坪・礎石・礎石・礎石・礎石
S.A. 17	B1	方	398 340 25	13.5	2	240	38 73		0	0	0	0				3	溝・竪・石版丁・台石
S.A. 18	B1	方	350 337 8	11.8						1	1	0	1	1		1	溝・礎・三二子丁礎・高坪・高坪・高坪
S.A. 19	D4	方	360 290 12	10.4													溝・竪・高坪・高坪
S.A. 20	16	方	358 313 40	11.2				△	△	2	1	46 18	3	3		3	溝・礎・二重口溝礎・竪・高坪・高坪・高坪・台石・ 高坪
S.A. 21	C4	不明		272													二重口溝礎・高坪・敷物品
S.A. 22	24	方?	20	1	30 52	△	0										溝・礎・石版丁・礎石
S.A. 23	Q5	不明	20														溝・台石

第 13 表 掘立柱建物跡一覽表 (1)

※單位以 cm

遺蹟名	位置	規模 (長×幅)	進行側長	柱間	相行側長	柱間	面積	柱穴直徑	柱穴深さ	遺物
S B 1	C5	1×2	256-261	256-261	289-292	141-152	7.6	15-24	15-28	弥生土器高杯基部小片
S B 2	C5	1×2	290-291	290-291	340-351	170-176	10.2	26-30	15-20	弥生土器高杯基部小片、石片
S B 3	C5	1×1	186-192	186-192	240	240	4.6	18-26	15-43	弥生土器小片
S B 4	D5	1×1	234-274	234-274	288-306	288-306	8.4	22-35	15-54	—
S B 5	D4	2×3	358-393	179-214	594-595	177-214	23.4	25-50	15-54	彌前系陶器片
S B 6	D2	2×5	382-384	174-208	984-996	185-205	38.2	24-48	15-83	土師皿、梅棗子・炭化米塊
S B 7	G7	2×3	358-371	172-196	618-620	187-231	23.0	19-35	15-31	青磁甕底部片、台石・礎
S B 8	F5	1×2	447-450	447-450	466	229-238	21.0	29-36	15-46	—
S B 9	A2	1×3	308-320	308-320	536	169-188	17.2	23-26	15-52	—
S B 10	G4	2×2	326-338	139-190	413-422	204-215	14.3	15-31	15-26	—
S B 11	B1	3×4	365-371	106-136	444-470	105-147	17.4	24-41	15-57	—
S B 12	K4	2×3	360	176-184	622	188-227	22.4	24-49	15-37	青磁甕片、土師皿
S B 13	K5	1×2	246-264	246-264	506-510	246-264	13.5	25-36	15-57	—
S B 14	K4	2×3	384-389	184-206	584-612	182-221	23.8	28-48	15-54	中世土師器小片
S B 15	K4	1×1	247-263	247-263	248-274	248-274	7.2	19-23	15-71	石瓦丁
S B 16	J5	1×2	296-311	296-311	352-356	174-179	11.1	22-30	15-18	—
S B 17	J5	2×3	498-499	250-251	704-724	232-250	36.1	28-43	15-88	土師環底部片
S B 18	J5	1×4	295-316	295-316	806-810	182-212	25.6	28-41	15-56	—
S B 19	K5	1×2	346-355	346-355	291-313	129-178	11.1	20-28	15-34	—
S B 20	I7	1×1	315-324	315-324	298-308	298-308	10.0	29-37	15-47	弥生土器壺/甕口・底部片
S B 21	J5	1×2	194-234	194-234	341-355	165-183	8.3	15-37	15-37	—
S B 22	J7	2×3	362-364	163-203	638	192-235	23.2	24-41	15-71	弥生土器小片、礎
S B 23	J7	1×1	251-256	251-256	382-405	382-405	10.4	21-33	15-50	—
S B 24	J7	1×2	345	345	456	228	15.7	25-33	15-38	—
S B 25	J8	2×2	243-245	117-126	346-360	162-193	8.8	15-35	15-53	—
S B 26	J8	2×2	222-230	109-115	272-278	113-168	6.4	14-24	15-34	—
S B 27	K4	2×2	356-364	164-192	428-430	212-220	15.7	21-30	15-59	中世土師器碎片
S B 28	K7	1×3	318-328	318-328	546-549	172-192	18.0	22-32	15-40	—
S B 29	K6	1×3	355	355	544	178-184	19.3	19-32	15-14	—
S B 30	H5	1×2	200-247	200-247	434-448	—	11.1	19-28	15-57	弥生土器壺/鉢口緣部片
S B 31	K9	—×—	—	—	—	—	—	—	—	—
S B 32	I7	1×2	313-336	313-336	253-271	104-148	9.1	18-44	11-45	—
S B 33	Q6	3×3	305-319	94-122	407	125-146	13.0	19-36	17-48	—
S B 34	J4	1×1	198-216	198-216	273-288	273-288	6.2	25-34	20-33	—
S B 35	B1	—×—	—	—	—	—	—	—	—	土師皿片、弥生土器碎片
S B 36	C1	1×3	339-346	339-346	543-551	173-198	19.1	21-31	22-63	縄文土器・弥生土器碎片
S B 37	C1	1×3	339-346	339-346	543-551	173-198	19.1	21-31	22-68	弥生土器碎片



第14表 掘立柱建物跡一覧表(2)

※単位はcm

遺構名	位置	規模(面積)	掘立柱長	柱間	桁行長	柱間	敷厚	柱穴直径	柱穴深さ	遺物
S B 38	C3	1×1	250-267	250-267	193-208	193-208	5.6	20-29	23-43	赤生土製灰皿部など小片
S B 39	D2	1×4	327-349	327-349	870-882	177-244	30.8	23-34	27-60	—
S B 40	E2	2×3	364-382	180-184	598-601	193-214	23.0	24-40	15-60	赤生土器小片、籾?
S B 41	E2	2×3	314-320	148-174	607-624	197-216	20.0	19-35	31-76	青磁輪口縁部片、白磁壺小片
S B 42	E2	2×3	356	160-196	684	224-228	24.4	28-37	13-54	—
S B 43	F3	1×5	439-450	439-450	1084-1094	196-229	49.2	23-35	13-77	赤生土器小片
S B 44	G3	1×2	260-268	260-268	417-421	192-227	11.3	18-33	20-41	縄文土器細片
S B 45	F2	2×5	333-337	161-174	775-787	150-172	26.5	14-29	32-78	東播磨系片口縁口縁部片
S B 46	E2	2×3	304	150-155	557-562	171-207	17.1	20-37	20-57	—
S B 47	G2	1×3	375-380	375-380	580-612	186-206	23.3	25-43	24-68	—

第15表 石器一覧表(旧石器時代～縄文時代)(1)

※単位はcm、g

番号	器種	位置	層	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
1	ナイフ形石器	H6	VI	流紋岩	5.3	1.8	9.5	9.0	
2	ナイフ形石器	H7	VI	流紋岩	3.7	1.7	0.9	5.0	
3	ナイフ形石器	H7	VI	流紋岩	4.3	1.7	0.8	4.5	
4	ナイフ形石器	H7	VI	流紋岩	3.4	2.0	1.0	5.0	
5	ナイフ形石器	H7	VI上	流紋岩	4.3	2.2	0.6	4.9	
6	撿器	G7	VI	流紋岩	4.9	4.1	1.4	23.9	
7	石核	H7	VI	流紋岩	3.0	2.8	2.5	23.7	
8	石核	H7	VI	流紋岩	2.1	3.0	3.4	15.6	
9	ナイフ形石器	G7	V上	頁岩	5.3	1.3	1.0	6.5	
10	ナイフ形石器	R6	V	流紋岩	4.0	2.0	0.7	1.6	
11	ナイフ形石器	Q5	V上	流紋岩	3.8	2.2	0.5	4.2	
12	ナイフ形石器	R6	V上	黒曜石(豊島産)	2.7	1.2	0.8	1.6	
13	ナイフ形石器	H6	V上	流紋岩	5.2	2.3	1.1	9.8	
14	細石刃	R7	V	黒曜石(豊島産)	1.4	0.7	0.2	0.1	
15	細石刃	R6	V上	頁岩	1.1	0.7	0.2	0.1	
16	細石刃核	Q7	V	黒曜石(豊島産)	0.7	1.7	0.9	0.8	
17	細石刃核	R7	V上	黒曜石(豊島産)	1.9	1.1	1.4	2.6	
18	細石刃核	R6	V上	黒曜石(豊島産)	1.2	1.3	0.7	1.2	
19	細石刃核	Q5	V上	黒曜石(豊島産)	1.7	1.4	1.5	4.0	
20	細石刃核	Q7	V上	流紋岩	3.3	4.6	2.2	41.9	
21	石鏃	R7	V	チャート	2.1	1.6	0.2	0.5	
22	石鏃	R6	V	チャート	1.9	1.2	0.3	0.5	
23	石鏃	R7	V	水晶	1.9	1.8	0.4	1.0	
24	石鏃	R6	V上	チャート	2.1	2.1	0.5	2.1	
25	撿器	R7	V	頁岩	2.6	2.0	0.5	1.6	
26	撿器	Q7	V上	黒曜石(白鹿産か)	4.0	3.3	1.1	18.8	
27	撿器	C3	V	ホルンフェルス	7.5	12.1	2.7	276.1	
28	石沖	R6	V	ホルンフェルス	7.8	7.0	2.8	185.8	石芥木製品

第16表 石器一覧表(旧石器時代～縄文時代)(2)

※単位はcm, g

番号	種別	位置	層	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
29	石斧	R7	V	ホルンフェルス	14.3	7.4	4.3	565.5	
30	二次加工剥片	R7	V	チャート	2.3	3.7	1.2	8.0	
31	二次加工剥片	R6	V	チャート	3.1	2.6	1.5	11.7	
32	二次加工剥片	P8	V	流紋岩か	6.9	3.0	1.1	14.0	微細刻線ある剥片
33	二次加工剥片	R6	V上	ホルンフェルス	5.5	11.7	2.0	115.3	
34	石核	R7	V	黒曜石(桑ノ木津留産)	1.6	3.1	1.4	5.4	
35	石核	R7	V上	黒曜石(桑ノ木津留産)	1.9	1.6	2.1	5.3	
36	石核	R7	V	黒曜石(日東産)	3.0	3.6	1.5	12.8	
37	石核	C3	V	ホルンフェルス	16.3	15.4	2.8	711.0	
38	石核	P5	V	ホルンフェルス	8.0	6.0	2.7	112.1	
39	石核	R7	V	流紋岩か	2.7	3.7	2.9	34.9	
40	石核	R7	V	砂岩	5.9	11.0	9.2	739.1	
41	ナイフ形石器	Q6	IVb	流紋岩	2.8	1.2	0.6	1.8	
42	細石刃	Q6	IVb	頁岩	1.3	0.8	0.2	0.1	
43	細石刃	Q6	IVb	黒曜石(鵜島産)	1.2	0.7	0.3	0.1	
44	細石刃	Q7	IVb	流紋岩	2.3	0.9	0.3	0.5	
45	細石刃	R5	IV	黒曜石(桑ノ木津留産)	1.3	0.4	0.2	0.1	
46	細石刃核	P6	IVb	流紋岩	2.2	2.3	1.4	7.8	
47	細石刃核	Q6	IVb	黒曜石(鵜島産か)	1.7	1.9	1.6	4.4	
48	細石刃核	Q7	IVb	黒曜石(鵜島産)	2.3	1.1	1.2	2.8	
49	細石刃核	Q8	IVb	黒曜石(鵜島産)	1.2	1.0	1.0	1.2	
50	細石刃核	P5	IVb	黒曜石(桑ノ木津留産)	1.5	1.3	0.9	1.5	
51	細石刃核	Q6	IVb	黒曜石(鵜島産)	1.1	0.8	1.2	1.2	
52	石鏃	Q7	IVb	チャート	2.4	1.9	0.4	1.1	
53	石鏃	S6	IVb	チャート	1.5	1.4	0.3	0.8	
54	石鏃	R6	IVb	頁岩	2.6	2.0	0.5	1.5	
55	石鏃	R6	IVb	頁岩	2.2	1.6	0.5	1.2	
56	石鏃	Q6	IV	チャート	1.9	2.7	0.3	1.8	
57	石鏃	Q6	IV	黒曜石(桑ノ木津留産)	1.9	1.5	0.3	0.6	
58	石鏃	R6	IVb	チャート	1.6	1.8	0.4	1.1	
59	石鏃	Q7	IVb	チャート	2.0	2.6	0.6	3.0	
60	石鏃	R6	IVb	チャート	2.5	1.5	0.4	1.5	
61	石鏃	R6	IVb	チャート	1.6	1.5	0.3	0.7	
62	石鏃	Q6	IVb	頁岩	1.4	1.5	0.3	0.6	
63	石鏃	R7	IV	黒曜石(桑ノ木津留産)	1.2	1.1	0.2	0.2	
64	石鏃	Q7	IVb	黒曜石(桑ノ木津留産)	1.2	1.1	0.2	0.2	
65	剥片尖頭器	R7	IVb	チャート	2.7	2.5	0.9	6.5	
66	掻器	Q5	IVa	黒曜石(鵜島産)	2.8	1.9	1.1	3.4	
67	二次加工剥片	Q7	IVb	黒曜石(鵜島産)	3.4	15.5	0.7	1.4	
68	二次加工剥片	Q6	IVb	チャート	2.5	2.1	0.9	4.4	石鏃未製品か

第17表 石器一覧表（旧石器時代～縄文時代）（3）

※単位は c.m., g

番号	器種	位置	層位	石村	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
69	二次加工剥片	R6	IV b	流紋岩	3.9	2.6	1.0	7.8	
70	二次加工剥片	Q7	IV	チャート	4.2	3.5	1.2	14.7	
71	二次加工剥片	Q7	IV b	尾跡山酸性岩類	8.8	11.0	2.9	347.6	破器
72	剥片	Q6	IV b	頁岩	3.5	0.8	0.9	0.9	燧石刀剥片
73	二次加工剥片	R6	IV b	ホルンフェルス	7.1	11.7	2.2	145.2	
74	石核	R6	IV b	黒曜石（日東産か）	2.6	2.7	1.4	8.9	
75	石核	L5	IV a	黒曜石（駿島産）	1.8	2.1	0.7	4.7	
76	石核	Q7	IV b	ホルンフェルス	2.9	6.0	6.2	110.6	
77	石核	D5	IV d	ホルンフェルス	5.4	8.7	3.8	169.9	
78	石核	Q7	IV	頁岩	6.5	8.1	3.0	166.3	石片か
79	ナイフ形石器	T44		流紋岩	2.3	1.2	0.6	1.2	
80	石鏃	O9	II	チャート	1.7	1.6	0.3	0.5	
81	石鏃	SA22		チャート	1.9	2.0	0.5	1.4	
82	石鏃	F2	II	黒曜石（駿島産）	2.6	2.1	0.4	1.7	
83	石鏃	—		チャート	3.0	2.2	0.4	2.6	
84	石鏃	C3	VI上	頁岩	3.0	2.4	0.4	2.5	
85	石鏃	SA22		チャート	1.4	1.3	0.3	0.4	
86	石鏃	SA22		チャート	1.4	1.4	0.3	0.4	
87	石鏃	SA16	SC4	頁岩	1.7	1.5	0.3	0.4	
88	石鏃	SA13		チャート	1.8	1.4	0.4	0.6	
89	石鏃	G3	II	チャート	2.9	3.9	1.0	5.6	
90	石核	SH0		流紋岩	2.7	4.5	2.2	22.6	
91	石核	SH0		ホルンフェルス	7.6	12.2	3.3	298.1	

第18表 石器一覧表（弥生時代～古墳時代、中世、その他）（1）

※単位は c.m., g

番号	器種	位置	層位	石村	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
324	磨製石鏃	SA1		頁岩	2.2	3.0	0.3	2.3	
325	石槍丁未製品	SA1		ホルンフェルス	4.2	6.8	0.4	18.8	
326	石槍丁	SA1		ホルンフェルス	5.8	8.8	0.7	56.3	
327	砥石	SA1		頁岩	4.9	3.9	1.0	23.3	
328	砥石	SA1		頁岩	10.0	4.8	1.4	59.5	
329	凹石	SA1		尾跡山酸性岩類	11.4	10.8	6.1	1,028.1	
330	凹石	SA1		尾跡山酸性岩類	8.4	8.3	4.2	444.0	
331	凹石	SA1		ホルンフェルス	10.5	9.1	2.2	242.7	
332	磨石	SA1		尾跡山酸性岩類	8.5	7.0	3.5	304.9	
333	台石/砥石	SA1		砂岩	19.3	27.8	3.9	3,330.4	
334	石槍丁	SA2		ホルンフェルス	5.8	9.6	1.4	92.6	
335	石槍丁	SA2		ホルンフェルス	5.4	8.4	0.9	47.6	
336	磨石	SA2		軽石	6.5	6.5	5.1	18.5	
337	砥石	SA2		頁岩	8.7	4.8	0.9	60.8	
338	磨石	SA2		尾跡山酸性岩類	6.5	5.9	2.5	142.1	
339	磨石	SA2		尾跡山酸性岩類	6.3	3.5	3.5	92.7	

第19表 石器一覧表(弥生時代～古墳時代、中世、その他)(2) ※単位はc.m., g

番号	種別	位置	層位	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
340	凹石	SA2		砂岩	7.6	4.5	2.8	105.2	
341	磨石	SA2		砂岩	7.5	7.0	1.9	90.8	
342	砥石	SA2		砂岩	16.9	8.3	6.3	1,232.5	
343	砥石	SA2		砂岩	20.1	12.2	7.3	2,263.5	
344	石座丁	SA3		ホルンフェルス	4.8	7.6	0.7	29.6	
345	石座丁	SA3		頁岩	4.6	7.1	0.4	18.2	
346	磨石	SA3		尾跡山酸性岩類	9.5	8.5	4.4	537.7	
347	砥石?	SA3		ホルンフェルス	19.7	4.2	1.3	133.5	
348	砥石	SA3		砂岩	21.2	9.5	14.5	3,205.8	
349	砥石	SA3		砂岩	25.0	13.7	9.0	3,561.1	
350	小玉	SA4		蛇紋岩	0.9	0.8	—	0.7	
351	磨製石鏃	SA4		頁岩	4.2	2.3	0.3	4.1	
352	砥石	SA4		頁岩	5.2	3.0	0.8	17.8	
353	石座丁	SA4		ホルンフェルス	5.0	6.5	0.8	34.2	
354	石座丁	SA4		ホルンフェルス	4.2	6.8	0.6	26.7	
355	石座丁	SA4		ホルンフェルス	5.2	8.0	0.8	49.9	
356	磨石	SA4		尾跡山酸性岩類	8.9	8.4	3.9	438.6	
357	磨石	SA4		尾跡山酸性岩類	11.2	10.0	6.0	1,091.7	磨面の一部に敲打痕有り
358	磨石	SA4		尾跡山酸性岩類	11.4	9.6	4.0	654.8	
359	磨石	SA4		尾跡山酸性岩類	11.2	10.4	6.2	1,075.6	
360	磨石	SA4		尾跡山酸性岩類	10.0	9.8	4.1	610.6	
361	磨石	SA4		尾跡山酸性岩類	10.9	9.1	4.5	691.3	
362	砥石?	SA4		ホルンフェルス	14.5	4.4	1.8	180.7	
363	砥石	SA4		砂岩	9.9	8.1	5.8	587.7	
364	台石	SA4		砂岩	19.0	18.2	10.5	4,925.4	
365	台石	SA4			17.2	37.3	9.5	9,000.0	
366	磨製石鏃	SA5		頁岩	3.2	1.6	0.4	2.8	
367	石座丁	SA5		ホルンフェルス	4.8	7.8	1.1	53.9	
368	砥石	SA5		頁岩	5.2	2.9	0.7	19.9	
369	砥石?	SA5		砂岩	11.6	5.3	4.1	359.2	
370	台石	SA5		?	12.6	15.7	8.8	2,517.4	
371	削片	SA6		ホルンフェルス	11.6	7.4	1.5	114.7	
372	磨石	SA5-SC44		尾跡山酸性岩類	10.3	9.2	4.4	619.4	
373	磨石	SA5		尾跡山酸性岩類	10.0	10.0	4.8	610.9	
374	磨石	SA5		尾跡山酸性岩類	11.6	10.8	5.5	975.5	
375	磨石	SA6		尾跡山酸性岩類	9.8	9.4	5.6	743.7	
376	磨石	SA5		尾跡山酸性岩類	11.5	9.9	6.3	966.2	
377	磨石	SA5		尾跡山酸性岩類	12.4	11.4	6.0	1,220.0	
378	磨石	SA6		尾跡山酸性岩類	11.0	10.4	6.4	1,021.7	
379	打矢石鏃	SA7		尾跡山酸性岩類	3.4	4.2	1.0	22.5	
380	石座丁	SA7		ホルンフェルス	4.9	7.7	0.8	43.4	
381	二次加工ある削片	SA7		ホルンフェルス	7.5	8.3	2.4	145.6	
382	磨製石鏃	SA7		頁岩	1.3	2.0	0.1	0.7	

第20表 石器一覧表(弥生時代～古墳時代、中世、その他)(3)

◎単位はc m、g

番号	器種	位置	層位	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
383	砥石?	SA7		砂岩	8.0	5.7	2.3	143.7	
384	砥石	SA7		砂岩	6.2	5.5	3.9	178.9	
385	砥石	SA7		頁岩	8.6	4.1	1.0	48.8	
386	石座丁	SA8		ホルンフェルス	5.7	9.0	0.8	61.8	
387	石座丁未製品?	SA8		ホルンフェルス	8.5	10.4	1.8	169.0	
388	削片	SA8		ホルンフェルス	8.1	10.1	2.0	167.5	
389	砥石	SA8		頁岩	13.9	8.3	1.3	206.0	
390	砥石	SA8		砂岩	13.7	5.5	5.4	400.5	
391	石核	SA8		ホルンフェルス	10.9	10.8	9.9	1,045.6	
392	台石	SA8		砂岩	22.1	16.0	5.9	2,556.7	
393	台石	SA8		砂岩	15.3	8.2	4.3	1,603.3	
394	台石	SA8		尾跡山酸性岩類	19.4	10.7	9.6	2,200.0	
395	台石	SA8		尾跡山酸性岩類	30.3	13.6	13.0	7,000.0	
396	台石	SA8		尾跡山酸性岩類	23.7	14.6	14.3	6,000.0	
397	台石	SA8		尾跡山酸性岩類	30.2	25.3	12.0	13,000.0	
398	石座丁	SA9		ホルンフェルス	5.2	7.1	0.6	35.6	
399	砥石	SA9		シルト岩	5.0	5.0	4.0	96.5	
400	磨石	SA9		尾跡山酸性岩類	2.8	11.4	6.6	1,382.3	
401	凹石	SA9		砂岩	8.5	5.9	5.6	351.9	
402	砥石	SA9		砂岩	9.9	7.1	4.2	413.4	
403	砥石	SA9		砂岩	12.2	3.8	3.3	212.6	
404	砥石	SA9		砂岩	17.9	10.5	2.7	758.9	
405	磨石	SA12		尾跡山酸性岩類	8.7	7.6	3.6	358.4	
406	砥石	SA12		砂岩	11.4	6.7	2.6	287.5	
407	磨石	SA12		尾跡山酸性岩類	10.6	10.0	4.3	691.0	
408	磨石	SA12		尾跡山酸性岩類	10.5	10.1	6.2	966.9	
409	台石	SA12		尾跡山酸性岩類	20.2	19.9	3.7	2,572.3	
410	石座丁	SA10		ホルンフェルス	5.1	7.5	1.0	52.1	
411	石座丁	SA10		ホルンフェルス	3.0	5.6	0.7	13.5	
412	石座丁未製品	SA10		ホルンフェルス	4.8	8.0	1.0	48.9	
413	打欠石鏝	SA10		砂岩	7.7	7.4	1.4	106.6	
414	砥石	SA10		ホルンフェルス	14.2	6.1	5.0	611.8	
415	砥石	SA10		頁岩	19.4	4.6	2.6	444.0	
416	砥石	SA10		ホルンフェルス	10.3	6.3	4.5	394.5	
417	砥石	SA10		ホルンフェルス	13.6	7.3	2.9	595.9	
418	砥石	SA10		砂岩	15.6	11.9	12.8	4,639.0	
419	磨石	SA10		尾跡山酸性岩類	10.4	8.1	3.8	461.4	
420	凹石	SA10		尾跡山酸性岩類	10.8	9.2	6.6	974.6	
421	台石	SA10		尾跡山酸性岩類	36.5	24.1	14.1	22,000.0	
422	石座丁	SA11		ホルンフェルス	3.4	2.7	0.7	6.8	
423	石座丁	SA11		ホルンフェルス	4.3	6.8	0.6	26.8	
424	石座丁	SA11		頁岩	4.9	2.7	0.4	9.0	
425	石座丁	SA11		ホルンフェルス	5.1	9.1	1.0	67.1	

第21表 石器一覧表 (弥生時代～古墳時代、中世、その他) (4) ※単位はc.m., g

番号	種別	位置	層位	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
426	砥石	SA11		ホルンフェルス	18.2	3.8	2.6	189.0	
427	砥石	SA11		砂岩	15.8	8.8	2.6	471.3	
428	砥石?	SA11		ホルンフェルス	17.4	4.5	1.3	157.0	
429	砥石	SA11		砂岩	16.1	10.9	7.5	1,653.0	
430	砥石	SA11		砂岩	19.3	6.6	5.5	750.3	
431	砥石	SA11		砂岩	10.7	6.5	3.6	368.3	
432	砥石	SA11		砂岩	11.0	6.6	2.0	254.5	
433	磨石	SA11		尾跡山酸性岩類	7.5	6.5	2.8	211.0	
434	磨石	SA11		砂岩	7.1	6.2	4.8	282.5	
435	火打石	SA11		石英	5.6	4.4	3.0	60.4	
436	磨石	SA11		尾跡山酸性岩類	7.1	8.2	4.8	389.1	
437	磨石	SA11		尾跡山酸性岩類	13.8	12.3	5.2	1,387.6	
438	台石	SA11		砂岩	14.9	8.6	5.6	957.8	
439	台石	SA11		尾跡山酸性岩類	15.7	27.2	7.9	4,096.7	
440	削片	SA13		ホルンフェルス	4.3	7.2	0.7	32.7	
441	石座丁未製品	SA13		ホルンフェルス	5.9	8.2	0.9	77.9	
442	石座丁未製品	SC57 (SA13SC)		ホルンフェルス	4.8	8.4	1.2	56.9	
443	石座丁	SA13		ホルンフェルス	5.7	8.7	1.1	79.1	
444	砥石	SA13 縄文 層上		砂岩	6.0	5.6	3.6	164.9	
445	砥石	SA13		砂岩	13.0	7.1	5.5	730.9	
446	磨石	SA13		尾跡山酸性岩類	9.1	7.9	3.8	401.0	
447	台石	SA13		砂岩	18.8	17.8	8.9	4,246.1	
448	台石	SC29		砂岩	25.5	17.0	13.8	7,000.0	
449	有溝石鏃	SA14		砂岩	3.4	2.2	2.1	31.7	
450	石座丁	SA14		ホルンフェルス	4.1	9.3	0.7	42.9	
451	石槌	SA14		ホルンフェルス	11.1	7.3	3.8	467.8	
452	磨石	SA14		尾跡山酸性岩類	10.4	9.5	5.1	734.6	
453	砥石	SA14		砂岩	11.5	10.1	5.4	650.0	
454	砥石	SA14		粘板岩	15.2	6.7	1.7	214.5	
455	石座丁	SA15		ホルンフェルス	4.5	7.2	0.6	34.4	
456	石槌	SA15		尾跡山酸性岩類	13.9	7.1	3.5	466.9	
457	石座丁	SA17		ホルンフェルス	4.6	8.2	0.8	49.1	
458	石座丁	SA17		ホルンフェルス	4.9	8.2	0.6	29.6	
459	砥石	SA19		粘板岩	6.5	2.2	0.8	16.1	
460	砥石	SA16		粘板岩	7.6	2.3	0.9	26.9	
461	砥石	SA16		ホルンフェルス	10.4	3.8	0.6	25.9	
462	砥石	SA16		砂岩	7.2	2.5	2.4	62.2	
463	?	SA16		砂岩	10.9	9.3	6.2	536.7	
464	砥石	SA20		粘板岩	10.7	2.8	1.4	44.4	
465	磨石	SA20		尾跡山酸性岩類	11.9	10.1	4.8	903.1	
466	台石	SA20		砂岩	11.3	8.9	5.3	857.6	
467	磨石	SA20		尾跡山酸性岩類	12.6	11.0	5.4	1,146.6	
468	磨石	SA20		尾跡山酸性岩類	12.0	11.0	5.5	1,100.0	

第22表 石器一覧表(弥生時代～古墳時代、中世、その他)(5)

◎単位はc.m., g

番号	器種	位置	層位	石村	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
469	磨石	SA20		尾跡山酸性岩類	9.1	8.2	3.9	429.3	
470	磨石	SA20		尾跡山酸性岩類	8.8	8.6	4.5	511.0	
471	石座丁?	SA22		ホルンフェルス	10.3	13.2	1.6	222.7	
472	砥石?	SA22		ホルンフェルス	9.1	2.9	1.2	53.1	
473	砥石	SA22		砂岩	6.0	5.3	1.2	42.2	
474	石鏃	SA23		尾跡山酸性岩類	4.6	5.6	1.6	51.2	
475	台石	SA23		砂岩	13.6	9.3	4.8	766.6	
476	石座丁	S7h	II	粘板岩	3.8	8.0	0.5	24.4	
477	砥石	S7g		ホルンフェルス	8.4	5.7	1.4	128.6	
478	石座丁?	ユムタ②		ホルンフェルス	3.8	5.6	0.7	21.0	
479	石座丁	L4		ホルンフェルス	5.2	8.4	1.3	68.5	
480	石座丁素材削片	ユムタE		ホルンフェルス	7.5	10.9	2.2	109.9	
481	石鏃?	B3	II	ホルンフェルス	14.3	5.5	1.7	114.9	
559	石座丁	SC5		ホルンフェルス	4.5	5.3	0.7	19.0	
560	砥石	SB5		砂岩	11.8	4.4	2.2	155.3	
561	台石	SB7		砂岩	15.3	11.4	10.2	2,429.7	
562	砥石	SC16		砂岩	17.2	7.9	4.4	943.2	
563	石座丁	SE1	B4	ホルンフェルス	5.0	5.5	0.7	27.3	
564	石座丁未製品	SE1		ホルンフェルス	5.2	8.4	0.9	53.3	
565	石座丁未製品	SE1		ホルンフェルス	5.3	8.9	1.0	66.8	
566	石座丁未製品	SE1		ホルンフェルス	6.6	10.8	1.0	81.9	
567	凹石	SE1	H5	砂岩	15.1	9.5	5.7	1,143.9	
568	砥石	SE1	H6	砂岩	11.6	7.7	3.8	549.7	
569	台石	SE1	G4	砂岩	9.8	7.5	4.5	416.9	
570	台石	SE1	D4	砂岩	11.7	11.1	6.1	949.5	
571	台石	SE1	C4	砂岩	13.4	6.8	5.4	675.1	
572	台石	SE1	C4	砂岩	16.0	12.7	5.9	1,285.4	
573	凹石	SE1	C4	砂岩	7.0	8.5	4.5	330.6	
574	凹石	SE1	A4	尾跡山酸性岩類	9.3	8.9	4.5	573.0	
575	磨石	SE1		尾跡山酸性岩類	11.4	10.8	5.4	998.4	
576	磨石	SE1	E4	尾跡山酸性岩類	9.7	8.5	4.6	565.4	
577	砥石	SE1	D4	砂岩	15.1	8.5	4.8	980.7	
578	砥石	SE1	E4	砂岩	7.6	4.5	3.7	176.5	
579	砥石	SE1	C4	砂岩	4.2	3.9	1.7	36.7	
580	砥石?	SE1	C4	砂岩	11.0	5.8	3.4	312.2	
581	砥石	SE1	B4	砂岩	13.0	5.7	5.0	547.3	
582	石臼	SE1		凝灰岩	32.9	20.2	11.3	7,000.0	
583	打欠石鏃	SE1		ホルンフェルス	3.5	3.7	0.7	12.9	
584	打欠石鏃	SE1	F4	砂岩	4.1	4.4	1.2	30.1	
585	打欠石鏃	SE2	E4	砂岩	4.2	3.8	1.0	23.7	
586	磨石	SE3	D4	砂岩	10.4	9.5	3.3	502.5	
587	砥石	SE2	C4	砂岩	11.8	8.7	4.3	491.7	
591	打製石斧	SB2		ホルンフェルス	13.0	6.1	2.0	177.0	

第23表 石器一覧表(弥生時代～古墳時代、中世、その他)(6)

※単位はcm, g

番号	器種	位置	層位	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
592	石槍丁	SB15		ホルンフェルス	4.9	8.9	0.8	51.4	
593	砥石	SC70		砂岩	11.9	5.6	5.1	569.8	
594	打製石斧	ユムタE		ホルンフェルス	8.5	5.0	1.5	88.5	
595	打製石斧	B4	II	ホルンフェルス	10.8	5.5	1.8	142.0	
596	打製石斧	B3	II	ホルンフェルス	17.6	7.9	2.0	278.3	
597	打製石斧未製品?	ユムタD/E		ホルンフェルス	12.3	6.2	1.9	223.5	
598	蔽石	B3		尾跡山酸性岩類	6.4	6.4	3.8	223.2	
599	蔽石	T41	II	砂岩	8.1	3.6	3.5	138.5	
600	蔽石	K9		砂岩	8.8	5.7	2.6	190.4	
601	蔽石	T1	II	砂岩	12.2	6.6	5.2	541.6	
602	剥片	ユムタE		ホルンフェルス	6.1	9.2	1.7	80.6	
603	砥石	O10		砂岩	11.4	6.6	6.2	642.5	
604	砥石?	ユムタD		軽石	2.8	3.4	1.3	3.7	
605	打欠石鏃	ユムタE		頁岩	3.7	4.1	1.1	23.3	
606	打欠石鏃	ユムタE		砂岩	3.3	3.7	1.0	18.8	
607	打欠石鏃	ユムタ②		ホルンフェルス	4.0	4.3	1.2	28.8	
608	打欠石鏃	ユムタE		尾跡山酸性岩類	3.5	5.1	1.2	30.2	
609	打欠石鏃	ユムタ②		砂岩	3.7	4.6	0.9	23.1	
610	打欠石鏃	H3	II	砂岩	3.8	4.5	1.2	30.6	
611	打欠石鏃	I3	II	砂岩	3.7	4.4	1.2	28.7	
612	打欠石鏃	E4	II	砂岩	3.8	3.8	1.0	17.2	
613	打欠石鏃	ユムタE		ホルンフェルス	4.1	5.0	1.2	37.4	
614	打欠石鏃	T16	II	ホルンフェルス	3.4	4.9	1.1	23.6	
615	打欠石鏃	I3	II	砂岩	5.3	5.7	1.5	73.2	
616	打欠石鏃	T22		尾跡山酸性岩類	5.5	6.0	1.9	90.8	
617	打欠石鏃	ユムタE		砂岩	6.3	7.5	1.5	107.3	
618	磨石	C1		尾跡山酸性岩類	8.7	9.7	6.5	776.2	
619	火打石	SAB		チャート	3.1	1.9	1.0	5.7	
620	火打石	T8/T11		石英	3.1	2.6	1.6	14.8	

第24表 土器一覧表(縄文時代)(1)

※単位はmm

番号	器種	部位	出土地点	層位	法量(mm)				手法・調整・文様ほか		胎土	色調		備考
					口径	胴径	底径	器高	外周	内周		外周	内周	
92	深鉢	口-胴	Q5	V	192	-	-	-	口外はナデ、口縁は目取履縁による横・斜ミガキ、胴部はナデ	ナデ	1mm以下砂粒・灰口地を少し含む	にぶい黄緑	にぶい黄緑	無文系
93	深鉢	口-胴	Q6	IV/b	204	-	-	-	横ナデ	横ナデ	黄緑な灰白・黒色光沢調を多く含む	暗	暗	無文系
94	深鉢	口	Q7		-	-	-	-	横ナデのち上位のみ横ナデ	横ナデ	黄緑な灰白・黒色光沢調を少し含む	暗	暗	無文系
95	深鉢	口	Q7	IV/b	-	-	-	-	ナデ	横工具ナデ	黄緑な灰白・黒色光沢調を多く含む	灰黄緑	灰黄緑	無文系
96	深鉢	口	K7	V	-	-	-	-	横ナデ	横ナデ	黄緑な灰白地色を僅かに含む	にぶい黄緑	にぶい黄緑	無文系



第25表 土器一覧表(縄文時代)(2)

※単位はmm

番号	器種	部位	出土 地点	層位	法 量 (mm)				手法・調整・文様ほか		胎 土	色調		備 考
					口径	胴径	底径	継高	外周	内周		外周	内周	
97	深鉢	口	R6	V	-	-	-	-	横ナデ	風化	濃緑な灰白・茶色光沢を 含む	にぶい・暗 7.5YR5/4	暗 7.5YR6/6	無文系
98	深鉢	口	R5	IV b	-	-	-	-	横ナデ	横ナデ	濃緑な灰白・茶色・黒色 光沢を多く含む	にぶい・黄緑 10YR5/3	にぶい・黄緑 10YR6/4	無文系
99	深鉢	不明	Q6	IV b	-	-	-	-	横位の山形押型文	ナデ	3mm以下の褐色・灰白 色を多く含む	灰黄 2.5Y6/2	にぶい・黄緑 10YR7/3	山付式
100	深鉢	口	SA10	SA10	-	-	-	-	ナデ、口側に横沈 線	縦沈線	4mm以下の褐色・黒灰 色を多く含む	にぶい・黄緑 10YR6/3	にぶい・黄緑 10YR6/3	
101	深鉢	不明	O7	-	-	-	-	-	磨糸文	風化	濃緑な褐色・褐色を少 く含む	灰黄緑 10YR5/2	黄灰 2.5Y4/1	
102	深鉢	口	P6	-	-	-	-	-	縦・横位の粘土結 晶付、斜目	ナデ	濃緑な灰白色粒を非常に 多く含む	暗 7.5YR4/4	暗 7.5YR4/4	
102	深鉢	口	P6	-	-	-	-	-	縦・横位の粘土結 晶付、斜目	ナデ	濃緑な灰白色粒を非常に 多く含む	暗 7.5YR4/4	暗 7.5YR4/4	333と同一
103	深鉢	口	Q7	IV b	-	-	-	-	口側に山形押型文	横ナデ	濃緑な褐色・灰白色粒を 含む	にぶい・黄緑 10YR7/3	にぶい・黄緑 10YR7/3	
104	深鉢	口	P6	IV b	-	-	-	-	口縁は波状沈線か	口唇・口縁は横位 の山形押型文	3mm以下の褐色を極 かに、濃緑な光沢を含む	明黄緑 10YR7/6	灰黄緑 10YR6/2	平山式
105	深鉢	R6	IV b	-	-	-	-	-	斜糸文	横位の山形押型文	濃緑な褐色色粒を非常に 多く含む	にぶい・黄緑 10YR6/4	にぶい・黄緑 10YR7/4	104と同一
106	深鉢	口	T32	II	-	-	-	-	磨糸文のち斜糸文	横ナデのち上位の み斜磨糸文	1mm以下の灰白・灰白 色を少し含む	にぶい・黄緑 10YR6/4	にぶい・暗 7.5YR6/4	磨式
107	深鉢	口	P7	-	-	-	-	-	口唇を横ナデ後、 粘土晶付・横ナデ	横ナデ	濃緑な灰白・明褐色色 を含む	にぶい・暗 7.5YR5/4	にぶい・暗 7.5YR5/3	

第26表 土器一覧表(弥生時代～古墳時代)(1)

※単位はmm

番号	器種	部位	出土 地点	層位	法 量 (mm)				手法・調整・文様ほか		胎 土	色調		備 考
					口径	胴径	底径	継高	外周	内周		外周	内周	
108	甕	胴・底	SA1	-	-	44	-	-	斜工具ナデ、丁寧 なナデ	斜工具ナデ	2.4mmのオリ・ブ粒を 僅かに、1.2mm程度の灰 白色を少し、1.3mmの にぶい・黄緑色を僅かに 含む	にぶい・黄緑 7.5YR7/4	にぶい・黄緑 10YR6/3	
109	甕	底	SA1	-	-	95	-	-	ナデ	風化、底部は指オ サエ	1.3mmの暗褐色・灰白 色粒を非常に多く含む	にぶい・暗 7.5YR6/4	浅黄緑 10YR8/4	焼け込み
110	甕	胴・底	SA1	-	-	38	-	-	斜タタキ、底部付 返しナデ	斜工具ナデ	1.3mmの灰白色・にぶい 黄緑色を少し含む	灰黄 2.5Y7/2	黄緑 10YR3/2	
111	甕?	胴・底	SA1	-	-	29	-	-	ナデ	縦・斜ハケ目、底 部は粘土補填のち 指オサエ	1.2mmの灰白色粒を少 し、4mmの褐色・にぶ い・黄緑色を極かに含む	にぶい・暗 7.5YR6/4	にぶい・黄緑 10YR6/3	内面の粘土押し込み明 瞭
112	浅鉢	口・底	SA1	190	-	15	85	-	口縁は横ナデ、体 部は横ミガキ、底 部付返しナデ	体部はナデ、体部 は縦ミガキのち、 口縁を横ナデ	3.5mmのにぶい・褐色 粒を含む	にぶい・黄緑 10YR7/3	浅黄緑 10YR8/3	
113	深鉢	口・底	SA1	94	-	36	92	-	口縁は横ナデ、以 下ナデ	口縁は横ナデ、以 下ナデ、底部に指 オサエ	1.2mmの赤褐色・黒色粒 を少し含む	にぶい・黄緑 10YR7/4	浅黄緑 10YR8/4	
114	瓶付	柱	SA1	-	-	-	-	-	縦ミガキ	瓶は斜工具ナデ	1.5mmの暗褐色・灰白色 粒を含む	にぶい・暗 10YR7/4	にぶい・黄緑 10YR7/4	
115	瓶付	柱	SA1	-	-	-	-	-	縦ミガキ	受部は横ミガキ	5mm以下の暗褐色・灰 色粒を多く含む	にぶい・黄緑 10YR7/3	浅黄緑 10YR8/3	
116	高杯	柱	SA1	-	-	-	-	-	縦ミガキ	受部は縦ミガキ、 柱部は丁寧なナ デ、指オサエ	1.2mmの灰白色粒を極 かに含む	暗 7.5YR6/6	暗 5YR6/8	
117	首玉	定形	SA1	乳井 2	表層 7	-	長さ 26	-	丁寧なナデ	-	1mmの暗・黄褐色を 僅かに含む	暗 5YR7/6	-	
118	高杯/ 高台	瓶	SA1	-	-	181	-	-	縦ミガキ、瓶は横 ナデ	瓶は横ナデ	2mm以下のにぶい・暗 褐色・2mm以下の暗褐色か 2mm以下の暗褐色を 含む	にぶい・暗 7.5YR6/4	にぶい・暗 7.5YR7/4	

第27表 土器一覧表(弥生時代～古墳時代) (2)

※単位はmm

番号	器種	部位	出土 地点	法 量 (mm)			手法・調整・文様ほか		胎 土		色 調		備 考
				口径	胴径	底径	高さ	外側	内側	外側	内側		
119	高環	胴	SA1	-	-	229	-	斜鉢ハケ目のち、 口縁を横ナデ	斜鉢ハケ目のち、 口縁を横ナデ	4mm以下の灰白・黄褐色・ 2mm以下の灰黄褐色・ 2mm以下の灰白を少量含む	にぶい橙 10YR7/3	にぶい橙 10YR7/3	
120	甕	口・胴	SA2	200	-	-	-	斜工具ナデ	縦・斜の工具ナデ	1.3mmの灰白・赤・ 1.2mmの黒褐色を少量含む	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR5/4	
121	甕	胴・底	SA2	-	-	44	-	ナデ	斜鉢ハケ目	1.5mmの灰白・赤褐色を多く含む	にぶい黄橙 1YR7/3	浅黄橙 10YR8/3	
122	二重	口・胴	SA2	180	-	-	-	風化。1次口縁は 膠泥状文4.5条。 2次口縁は横ナデ。 2次口縁一部は斜 工具ナデ	1次口縁は横ナデ	3mm以下の灰白・黄褐色・ 赤褐色を多く含む	にぶい橙 10YR7/6	にぶい橙 10YR7/4	
123	甕	口	SA2	-	-	-	-	風化。突帯	斜ナデ、口縁は横 ナデ	1.4mmの褐色・灰白を少 量含む	橙 5YR6/6	橙 7.5YR6/6	
124	二重	口	SA2	-	-	-	-	口縁は横ナデのち 竹管文、口縁は風 化(横ナデ?)	風化。円形浮文	黄褐色乳白・赤・黒褐色 を少量含む	橙 7.5YR4/6	明赤 7.5YR5/6	円形浮文、竹管文
125	鉢	完形	SA2	103	-	43	110	口縁は横ナデ。体 部はナデ。底部付 近はツマミ	口縁は横ナデ。体 部は横工具ナデ、 底部は指オサエ	1.3mmのにぶい赤褐色・ 灰白を少量含む	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR6/6	
126	深鉢	完形	SA2	147	-	-	-	口縁は横ナデ。体 部は斜工具ナデ、 胴下はナデ	口縁は横ナデ。体 部は縦・斜 ツマミ	1.3mmの黄色・褐色・灰 白を少量含む	にぶい橙 5YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	
127	深鉢	完形	SA2	120	-	23	67	斜工具ナデのち、 部分的に縦ミガキ	ナデ	5mm以下の赤褐色・灰 褐色を多く含む	にぶい黄橙 10YR7/6	明黄橙 10YR7/6	
128	高環	柱	SA2	-	-	-	-	ナデ	ナデ	3mm以下の褐色・黒 褐色を少量含む	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 22.5Y7/4	
129	甕	完形	SA3	202	204	8	283	口縁は横ナデ。頸 部以下風化	口縁は横ナデ。頸 部以下風化(工具 ナデ?)	1.4mmの灰白を少量 含む	明赤黄 10YR6/6	明赤黄 10YR7/6	
130	甕	胴・底	SA3	-	-	36	-	縦工具ナデ	風化(縦工具ナ デ?)	5mm以下の灰白・赤 褐色を少量含む。2mm 以下の黒褐色を少量含む	灰黄褐色 10YR5/2	にぶい黄橙 10YR6/3	
131	甕	口・胴	SA3	181	175	-	-	口縁は横ナデ。頸 以下は斜工具ナデ のちナデ	口縁は横ナデ。頸 以下は斜工具ナデ	3mm以下のにぶい赤褐 色。4mm以下の褐色 粉を含む	灰黄褐色 10YR5/2	にぶい黄 10YR6/3	
132	深鉢	口・底	SA3	202	-	67	149	口縁は横ナデ。体 部は風化(縦工具 ナデ?)。底部付 近はナデ	口縁は横ナデ。体 部は横工具ナ デ?。下平・底部は ナデ	1.2mmの浅黄褐色を少 量含む	浅黄橙 7.5YR8/6	明赤 10YR4/1	
133	手捏鉢	完形	SA3	67	-	34	-	指オサエ	指オサエ	1mm以下の褐色・黄 褐色を少量含む	にぶい黄 2.5YR3/3	にぶい黄橙 10YR7/4	
134	高環	柱・底	SA3	-	-	124	-	柱部は縦ミガキ、 基部は縦工具ナデ	柱部は横工具ナ デ、基部は横ナデ	1mm以下の赤褐色・灰 褐色を少量含む	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	
135	甕	口	SA4	173	-	-	-	口縁は横ナデ。頸 部以下は横ナデ	横・斜工具ナデ	1.2mmの明赤・白褐色 を含む	橙 5YR7/6	にぶい赤 5YR5/4	
136	甕	底	SA4	-	-	60	-	風化。底部付近は 斜工具ナデ	風化。底部は指オ サエ	2mm以下のにぶい赤・ 明赤褐色を少量含む	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	
137	甕	底	SA4	-	-	48	-	ナデ	斜ハケ目。底部は 指オサエ	2mm以下の褐色・3mm 以下の灰白・にぶい赤 褐色を少量含む	にぶい黄 10YR6/4	灰黄褐色 10YR6/2	
138	甕	底	SA4	-	-	-	-	縦工具ナデ。底部 付近は指ナデ	斜工具ナデ。底部 は指オサエ	3mm以下のにぶい赤・ 灰白・黒褐色を多く 含む	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄 10YR6/2	
139	深鉢	口・底	SA4	125	-	32	-	風化	風化(一部縦ナデ)	3mm以下の茶・乳白 粉を含む	浅黄 2.5YR8/4	浅黄 2.5Y7/3	
140	深鉢	口・底	SA4	09	-	48	-	口縁は横ナデ。以 下縦ミガキ。頸部 は横ナデ	口縁は横ナデ。以 下ナデ。底部は指 オサエ	4mm以下のにぶい赤・ 1mm未満の黒褐色を 含む	明赤黄 2.5YR5/6	橙 5YR6/6	
141	浅鉢	胴・底	SA4	-	-	30	-	縦工具ナデ。底部 付近はナデ	縦ナデ	1.4mmの灰白を少 量含む。1.2mmの赤 褐色。1.4mmの黒 褐色を少量含む	明赤黄 2.5YR5/6	明赤黄 2.5YR5/6	
142	高環	口	SA4	-	-	-	-	縦ミガキ	縦ミガキ	2mm以下のにぶい赤 褐色を含む	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	
143	甕	口	SA4	-	-	-	-	横ナデ。頸部突帯	横ナデ	1.3mmの灰白・黒褐色 を含む	灰黄 5YR4/2	7.5YR5/3	
144	紡錘形	完形	SA3	孔径 2	底径 33	-	高さ 25	上半は膠泥状文。口 縁部。下半は単色 の1色肌調子。上半 1単位は太さ約0.2mmの2 条状線。下半は細い 3～5mm幅の帯状文。4 単位で1帯。帯の 内径は0.2mm未満の 間隔で5、6条の条線 が互に平行。おそら く有段に施されたよ うに、帯状文の一端に 中央より一段凹み 深さとなり一段目 に見える。		1mm以下の灰白・黄 褐色を少量含む	にぶい黄 10YR6/4		

第28表 土器一覧表(弥生時代～古墳時代) (3)

※単位はmm

番号	器種	部位	出土 地点	法量 (mm)			手法・調整・文様ほか	胎土	色相		備考
				口径	胴径	底径			外側	内側	
145	深鉢	口・底	SA6	—	—	—	口縁は横ナデ、頸部は縦工具ナデ、以下斜ナデ	1.3mmの縹・赤灰包粉を多く含む	にぶい・黄緑	浅黄緑	
146	甕	胴・底	SA6	—	—	14	肩部状況文のち、頸部上半はナデ、下半は縦ケズリ	5mm以下の黄緑・黒褐色、2mm以下の赤い赤褐色を少し含む	縹	にぶい・縹	肩部状況文は注口上位から右回りに描かれ、右下りに頸部を2周して注口下位で途切れる
147	甕	完形	SA5	255	250	53	—	2mm以下の赤い赤褐色、黒褐色を少し含む	にぶい・縹	暗縹	
148	甕	完形	SA5	194	—	30	147	2mm以下の赤い赤褐色、5mm以下の黄褐色を含む	にぶい・縹	にぶい・縹	
149	小甕	完形	SA5	129	—	31	129	1.3mmの縹・灰白・黒褐色を多く含む	縹	縹	
150	甕	口・底	SA5	—	—	24	—	2mm以下の縹・灰褐色を多く含む	縹	縹	
151	甕	胴・底	SA5	—	—	38	—	2mm以下の赤褐色、4mm以下の灰白包粉を含む	にぶい・黄緑	黒	
152	二甕	完形	SA5	204	263	57	303	4mm以下の黄緑・赤灰包粉を多く含む	浅黄緑	浅黄緑	
153	甕	口・底	SA5	117	—	34	165	4mm以下の黄緑・黒褐色を赤灰に多く含む	浅黄緑	にぶい・黄緑	
154	深鉢	口・底	SA5	56	—	12	54	3mm以下の赤褐色を含む	黄緑	黄灰	底部を横方向に貫通する孔有り(径5mm)
155	甕 円筒形	底	SA5	—	—	132	—	5mm以下の黄緑・赤褐色を赤灰に多く含む	にぶい・黄緑	灰白	
156	高杯	杯	SA5	308	—	—	—	5mm以下の黄褐色を多く含む	にぶい・黄緑	灰灰	1次・2次口縁間の輪を突出するように横ケズリ
157	高杯	1次口	SA5	352	—	—	—	1.4mmの縹・灰白包粉を赤灰に多く含む	縹	浅黄緑	
158	甕	口・底近	SA7	264	—	—	—	3mm以下の灰白、4mm以下の赤灰・にぶい・縹包粉を含む	にぶい・縹	にぶい・黄緑	
159	甕	口・胴	SA7	219	—	—	—	黄褐色、2mm以下の縹・黒灰、4mm以下の赤い・にぶい・縹包粉を含む	にぶい・縹	明黄緑	
160	甕	口・胴	SA7	185	—	—	—	黄褐色、白色包粉、2mm以下の黄褐色、5mm以下の黒灰包粉を含む	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	
161	甕	胴・底	SA7	—	—	31	—	4.5mmの灰白包粉を多く含む	にぶい・黄緑	浅黄	
162	甕	胴・底	SA7	—	—	46	—	黄褐色、灰白・灰白包粉を含む	にぶい・縹	にぶい・赤黒	
163	甕	胴・底	SA7	—	—	—	—	1.4mmの縹・黒灰・灰白包粉を多く含む	にぶい・黄緑	浅黄	

第29表 土器一覧表(弥生時代～古墳時代) (4)

※単位はmm

番号	器種	部位	出土 地点	法 量 (mm)			手法・調整・文様ほか		胎 土	色 調		備 考
				口径	胴径	底径	高さ	外周		内周	外周	
164	甕	胴・底	SA7	-	-	21	-	縦・斜工具ナデ、 底部付近は屈化	斜工具ナデ	2.4mmの灰白色胎を含む	浅黄褐色 10YR8/4	明赤褐 5YR5/6
165	甕	胴下・底	SA7	-	-	45	-	屈化(横工具ナ デ)	横工具ナデ	黄褐色乳白・茶褐色を 多く、5mm以下の黒濁 灰色光沢胎を含む	にぶい黄褐色 10YR7/4	にぶい黄褐色 10YR7/4
166	浅鉢	口・底	SA7	-	-	-	-	口縁は横ナデ、以 下ナデ	口縁は横ナデ、以 下ナデ	2mm以下の灰・乳白 胎を少し含む	にぶい黄褐色 7.5YR6/4	にぶい黄褐色 10YR7/3
167	深鉢	口・底	SA7	45	-	12	80	縦ミガキ	上半は横工具ナ デ、下半はナデ	黄褐色乳白・灰白色胎 を含む	にぶい黄褐色 10YR7/4	明褐色 7.5YR5/6
168	甕	口・底	近SA8	173	-	0	-	口縁は横ナデのち 底部付近まで縦ミ ガキ	口縁は横ナデのち 底部まで縦ミガキ	2mm以下の黒濁・茶濁 胎を含む	にぶい黄褐色 10YR7/4	にぶい黄褐色 10YR6/4
169	甕	口・底	近SA8	-	-	-	-	口縁は横ナデ、頸 部以下は斜工具ナ デ	口縁は横ナデ、頸 部以下は斜工具ナ デ	1.3mmの灰白色胎を少 し含む	浅黄褐色 2.5Y7/3	にぶい黄褐色 10YR7/4
170	甕	完形	SA8	236	230	42	250	口縁は横ナデ、頸 部以下斜ナデ	口縁は横ナデ、頸 部以下斜ナデ	1.5mmの灰白色胎を僅 か	にぶい黄褐色 10YR6/4	にぶい黄褐色 10YR6/4
171	甕	胴下・底	SA8	-	-	30	-	縦ナデ	ナデ	4mm以下の灰・乳白・ 白色胎を非常に多く含む	浅黄褐色 10YR8/3	黄灰 2.5Y5/1
172	甕	完形	SA8	196	190	20	227	口縁は横ナデ、口 縁は横ハケ目のち 縦ハケ目、肩部は 横ハケ目のち底部 付近まで縦ハケ目	口縁は横ナデ、頸 部以下は斜ハケ目	3mm以下の灰口・明焼 褐色胎を含む	にぶい黄褐色 10YR7/4	にぶい黄褐色 10YR6/4
173	甕	底	SA8	-	-	30	-	縦・斜工具ナデ	黄褐色灰色光沢・灰白色 胎を少し含む	にぶい黄褐色 10YR5/4	にぶい黄褐色 10YR7/4	
174	甕	胴下・底	SA8	-	-	38	-	タタキ	工具ナデ	5mm以下の黒濁・3mm 以下の茶濁・灰白色 胎を非常に多く含む	にぶい黄褐色 10YR7/3	灰黄褐色 10YR5/2
175	甕	口・胴	SA8	144	-	-	-	ナデ	口縁は斜ナデ、頸 部以下ナデ	黄褐色乳白・灰褐色を少 し含む	にぶい黄褐色 10YR6/3	にぶい黄褐色 10YR6/4
176	無須部 ?	口・底	近SA8	152	-	-	-	口縁は横ナデ、頸 部以下ナデ	口縁は横ナデ、頸 部以下ナデ	2mm以下の黒濁・灰白 胎を多く含む	にぶい黄褐色 10YR6/4	にぶい黄褐色 10YR6/3
177	甕	胴・底	SA8	139	-	40	147	口縁は横ナデ、以 下ナデ、胴部中に 筋ナデ	口縁は横ナデ、以 下ナデ、底部は指 オサエ	4mm以下の灰濁・茶濁 胎を非常に多く含む	にぶい黄褐色 10YR6/3	にぶい黄褐色 10YR7/4
178	甕	口・底	SA8	-	-	-	-	ナデ	口縁は横工具ナ デ、頸部以下はナ デ	2mm以下の黒濁・灰濁 胎を含む	にぶい黄褐色 10YR7/4	にぶい黄褐色 10YR7/4
179	小甕?	胴・底	SA8	-	-	28	-	縦ナデ	縦工具ナデ	黄褐色灰白・灰白色を、 黄褐色灰色光沢を僅か に含む	明褐色 10YR3/1	にぶい黄褐色 7.5YR6/4
180	深鉢	完形	SA8	106	-	20	102	口縁は横工具ナ デ、以下ナデ	口縁は横・斜工具 ナデ、以下ナデ	2mm以下の灰白色胎を 少し、灰色胎を含む	にぶい黄褐色 10YR7/4	にぶい黄褐色 10YR7/4
181	深鉢	口・底	SA8	80	-	8	58	縦・斜ミガキ	横・斜ミガキ	黄褐色灰褐色を多く含 む	浅黄褐色 2.5Y7/3	浅黄褐色 2.5Y7/3
182	高杯	受・柱	SA8	-	-	-	-	2次口縁は縦ミガ キ、柱部は縦ミガ キ	杯部は縦・斜ミガ キ	黄褐色乳白・灰白色を 含む	にぶい黄褐色 10YR6/4	黄褐色 5YR6/6
183	甕	口・胴	SA9	23	225	-	-	口縁は横ナデ、頸 部以下はナデ	口縁は横ナデ、頸 部以下はナデ	黄褐色灰色胎を少し含む	にぶい黄褐色 7.5YR6/4	にぶい黄褐色 7.5YR7/4
184	甕	口・胴	SA9	245	250	-	-	口縁は斜ナデのち 上半を横ナデ、縦 ナデ	口縁は横ハケ目のち 上半を横ナデ、以 下横ハケ目のちナ デ	黄褐色は褐色・茶褐色 を含む	にぶい黄褐色 10YR6/3	にぶい黄褐色 10YR7/4
185	甕	口・底	SA9	101	-	14	136	口縁は上半が巻掛 成文文、下半上位 は斜工具ナデ、 下半下位～胴部は 曲部まで縦の工具 ナデ、胴部曲部 ～は斜口・下に 横ナデ、以下縦・ 斜工具ナデ	口縁は横ナデ、胴 上半は斜工具ナ デのち斜ナデ、胴下 半は横・斜ナデ	黄褐色乳白・灰色胎を多 く含む	にぶい黄褐色 10YR7/4	灰 5Y4/1
186	甕	胴	SA9	-	-	0	-	胴部は上半が横ナ デ、下半は縦ナデ	ナデ	2mm以下の茶濁・灰濁 胎を含む	浅黄褐色 10YR8/3	にぶい黄褐色 10YR7/4
187	甕	ほぼ完 形	SA9	-	-	-	-	口縁は横ナデ、口 縁は斜ナデ、頸部 以下は斜工具ナデ	口縁はナデ、胴上 半は横ナデ、下半 は斜ナデ	2mm以下の灰白色胎・ 褐色胎を含む	にぶい黄褐色 7.5YR6/4	にぶい黄褐色 7.5YR5/4
188	深鉢	完形	SA9	104	-	34	70	ナデ	ナデ	2mm以下の茶濁色・灰 濁色胎を含む	浅黄褐色 7.5YR8/4	浅黄褐色 10YR8/3

第30表 土器一覧表(弥生時代～古墳時代) (5)

※単位はmm

番号	器種	部位	出土 地点	法量(mm)				手法・調整・文様ほか		胎土	色相		備考
				口径	胴径	底径	高さ	外面	内面		外面	内面	
189	深鉢	口・底近	SA9	86	-	-	-	10 ナデ。底部付近は 甌工具ナデ	ナデ。底部に指オ サエ	3mm以下の灰褐色の胎 土を含む	にぶい・黄褐色 10YR6/4	明黄褐色 10YR7/6	
190	高杯	柱	SA9	-	-	-	-	風化(ナデ?)	ナデ。甌工具ナデ	1.4mmの灰・灰白・褐色 胎土を多量に多く含む	浅黄褐色 10YR8/4	にぶい・黄褐色 10YR7/4	
191	甕	完形	SA10	238	249	31	310	口縁は上半が横ナ デ・下半は斜ナデ。 頸部以下は甌ナデ (一部甌工具ナデ)	口縁は上半が横ナ デ・下半は斜ナデ。 頸部以下は斜・甌 ナデ	1.2mmの黒色灰泥・ 3.5mmの灰白・褐色 胎土を含む	にぶい・黄褐色 7.5YR6/4	にぶい・黄褐色 10YR7/4	
192	甕	口・底	SA10	228	226	-	-	口縁上は指オサ エ・中位以下は甌 工具ナデ	口縁上は指オサ エ・中位以下はナ デ	4mm以下の灰・乳白色 胎土・褐色胎土を少 く含む	にぶい・黄褐色 10YR5/4	にぶい・黄褐色 7.5YR6/4	
193	甕	口・胴下	SA10	208	247	-	-	口縁は横ナデ・口 縁は横・甌工具ナ デ。頸部以下はナ デ	口縁は横工具ナ デ。頸部以下は斜 工具ナデ	2.4mmの赤褐色胎土を 含む	にぶい・黄褐色 10YR7/4	にぶい・黄褐色 10YR7/4	
194	甕	底	SA10	-	-	58	-	甌工具ナデ。底部 付近は工具オサエ	斜・甌工具ナデ	4mm以下の灰褐色・茶褐色 胎土を多く含む	褐色 7.5YR6/6	灰褐色 7.5YR4.2	
195	甕	底	SA10	-	-	10	-	甌ナデ	ナデ	3mm以下の茶・灰・茶 褐色胎土を多量に多く含む	浅黄褐色 10YR8/4	褐色 7.5YR7/6	
196	甕	底	SA10	-	-	21	-	ナデ	ナデ。絞り痕。頸 部オサエ	1.4mmの灰泥・黄褐色 胎土を多量に多く含む	にぶい・黄褐色 10YR7/4	灰オリーブ 5Y5/2	
197	深鉢?	底	SA10	-	-	21	-	ナデ	ナデ	1.2mmの灰白・褐色胎土 を含む	にぶい・黄褐色 10YR5/4	にぶい・黄褐色 10YR5/4	
198	深鉢	底	SA10	-	-	12	-	甌工具ナデ	ナデ。底部は指オ サエ	微細な茶褐色・灰褐色胎 土を含む	にぶい・黄褐色 10YR7/4	褐色 7.5YR6/6	
199	高杯	杯	SA10	-	-	-	-	風化(口縁は横ナ デ)	風化	微細な茶褐色・灰褐色を多 く含む	褐色 7.5YR7/6	褐色 7.5YR7/6	
200	二重	口	SA11	-	-	-	-	1次口縁は横ナデ のち蓋面状文。2 次口縁は斜ナデの ち頸部まで甌ナ デ。1・2次口縁 接合部は横ナデ	口縁上は横ナ デ。中位以下は斜 ナデ。2次口縁は 横ナデのち一部 斜・横ナデ	3mm以下の茶褐色・灰褐色 胎土を多く含む	褐色 5YR7/6	にぶい・黄褐色 7.5YR7/4	
201	二重	受	SA11	-	-	-	-	風化(ナデ?)のち 磨面状文	風化(ナデ?)	微細な黒色灰泥を多量に 含む。2mm以下の褐色胎 土を含む	浅黄褐色 10YR8/4	浅黄褐色 10YR8/4	
202	高杯	杯	SA11	226	-	-	-	口縁は横ナデ。口 縁～頸部は甌工具 ナデ。以下甌工具 ナデ	口縁は横・斜ナ デ。頸部以下甌工具 ナデ・横ナデ	4mm以下の茶褐色・灰褐色 胎土を多く含む	浅黄褐色 10YR8/3	浅黄褐色 10YR8/4	
203	高杯	柱	SA11	-	-	-	-	風化(ナデ?)	風化。絞り痕	5mm以下の茶・灰褐色・ 乳白色胎土を多量に多く含む	浅黄褐色 10YR8/3	浅黄褐色 10YR8/3	
204	高杯	脚	SA11	-	-	129	-	甌縁は横ナデ。の ち底部を斜ナデ	横ナデ	1mm以下にぶい・赤褐色 胎土を少し含む	浅黄褐色 10YR8/3	にぶい・黄褐色 10YR7/3	
205	甕	口・胴下	SA11	-	-	-	-	口縁は横ナデ・口 縁は横タタキ。頸 部～胴部中位は 横・斜タタキのち ナデ。胴部下位以 下は斜タタキ	口縁は斜ナデ。頸 部以下は斜ハケ目 のちナデ	5mm以下の茶褐色・灰褐色 胎土を多く含む	灰黄褐色 10YR6/2	にぶい・黄褐色 10YR5/4	
206	甕	完形	SA11	168	201	62	22	口縁は横ナデ。頸 部以下は斜ナ デ。底部付近は甌 工具オサエ	口縁は横ナデ。頸 部以下は斜ナデ	5mm以下の茶・褐色胎 土を含む	にぶい・黄褐色 10YR7/4	黄褐色 10YR6/1	
207	甕/甕	胴上・底	SA11	-	-	-	-	斜工具ナデ	斜工具ナデ	4mm以下の茶褐色・灰褐色 胎土を多量に多く含む	淡黄 2.5Y8/3	灰黄 2.5Y7.2	
208	甕	口・肩	SA11	246	-	-	-	口縁は横ナデ。以 下風化	風化(ナデ?)	4mm以下の茶褐色・灰褐色 胎土を多く含む	浅黄褐色 10YR8/3	淡黄 2.5Y8/3	
209	甕	口・肩	SA11	193	-	-	-	口縁は横ナデ。口 縁は斜工具ナデの ち指オサエ。頸部 以下は斜ナデ・甌 オサエ	口縁は斜ナデのち ナデ。頸部以下は 斜工具ナデのちナ デ・斜ナデ	5mm以下の茶褐色・灰褐色 胎土を多く含む	にぶい・黄褐色 10YR7/4	灰白 10YR8/2	
210	甕	肩・胴	SA11	-	-	-	-	頸部は横ナデ。以 下は斜・横ナデの ち斜ナデ	頸部は横ナデ。以 下は斜・横ナデの ち斜ナデ	2mm以下の茶・灰褐色胎 土を含む	褐色 7.5YR7/6	浅黄褐色 10YR8/4	
211	甕	底	SA11	-	-	-	-	風化(甌工具ナ デ)	風化(ナデ?)。指 オサエ	3mm以下の茶・灰・乳 白色胎土を多量に多く含む	褐色 7.5YR7/6	浅黄褐色 10YR8/3	
212	甕/甕	底	SA11	-	-	43	-	風化(ナデ?)	ナデ。指ナデ	1mmの茶・乳白色胎土 を含む	灰白 2.5Y8/2	淡黄 2.5Y8/3	

第3 1表 土器一覧表(弥生時代～古墳時代) (6)

※単位はmm

番号	器種	部位	出土 地点	法 量 (mm)			手法・調整・文様ほか		胎 土	色 調		備 考
				口径	胴径	底径	外側	内側		外側	内側	
213	甕/甕底	SA11	-	-	31	-	ナデ	斜工具ナデ、絞り肌	2mm以下の黒期・灰・乳白・黒色光沢を含む	明褐色 7.5YR5/8	黄灰 2.5Y4/1	
214	甕/甕底	SA11	-	-	34	-	縦ケズリのちナデ	縦工具ナデ	2mm以下の茶期・灰期 灰期を多く含む	橙 5YR7/6	浅黄褐色 7.5YR8/4	
215	甕	底	SA11	-	33	-	斜タタキ、底部付近はナデ	斜ハケ目、底部はナデ・指オサエ	6mm以下の灰・灰・乳白 灰期を非常に多く含む	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/4	
216	浅鉢	口・底	SA11	-	25	-	風化(ナデ?)	ナデ、底部は指オサエ	4mm以下の灰・茶・乳白 色粉を含む	明褐色 5YR6/6	7.5YR5/6	
217	浅鉢	底	SA11	-	24	-	縦ハケ目	縦ミガキ	2mm以下の灰白・茶・ 褐色粉を含む	にぶい黄褐色 10YR6/3	にぶい黄褐色 10YR7/2	
218	浅鉢		SA11	-	0	-	風化	風化	2mm以下の灰・褐色粉 を含む	浅黄褐色 10YR8/3	淡黄 2.5YR/3	
219	深鉢	口・底	SA11	167	-	43	口縁は横ナデ、以下 丁寧なナデ	口縁は横ナデ、以下 ナデ	4mm以下の灰期・茶期 灰期を非常に多く含む	橙 5YR6/6	橙 7.5YR7/6	
220	深鉢	底	SA11	-	43	-	ナデ	ナデ	4mm以下の茶・茶期・ 灰褐色を非常に多く含む	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	
221	深鉢	底	SA11	-	28	-	風化	ナデ、指オサエ	1mm以下の茶・灰・乳 白粉を含む	浅黄褐色 10YR8/4	7.5YR8/4	
222	深鉢	底	SA11	-	45	-	斜工具ナデのちナ デ、指オサエ	斜工具ナデのちナ デ、指オサエ	2mm以下の茶・褐色粉 を含む	橙 7.5YR6/6	にぶい黄褐色 10YR7/3	
223	深鉢	底	SA11	-	36	-	ナデ	斜ハケ目のちナデ	微細な茶・褐色色粉を 含む	7.5Y7/8	2.5Y5/1	
224	深鉢	底	SA11	-	32	-	ナデ	工具ナデ、ナデ	1mmの茶・灰・褐色粉 を少し含む	にぶい黄褐色 10YR7/3	灰黄褐色 10YR6/2	
225	甕/甕底	SA11	-	-	34	-	ナデ、ツマミ	指オサエ	2mm以下の茶・灰・灰 色粉を多く含む	にぶい橙 7.5YR7/3	灰黄褐色 10YR6/2	
226	甕	胴・底	SC18 SA12	-	46	-	縦ハケ目	ナデ	微細な灰期・褐色粉を 含む	にぶい黄褐色 10YR7/4	にぶい黄褐色 10YR7/3	
227	甕/甕底	SA12	-	-	43	-	縦ハケ目、のち 部分的にナデ	工具ナデ、ナデ、 指オサエ	3mm以下の茶期・灰期 灰期を非常に多く含む	浅黄褐色 10YR8/3	にぶい黄褐色 10YR7/2	
228	高杯	杯	SA12	-	-	-	風化(縦ミガキ?)	縦ミガキ	1mm以下の灰・赤褐色 粉を含む	にぶい黄褐色 10YR6/3	にぶい橙 7.5YR6/6	
229	甕	口・底	近SA13	229	215	-	口縁は横ナデ、頸 部以下は斜工具ナ デ	口縁は横ナデ、頸 部以下は斜工具ナ デ、ナデ	2mm以下の灰期と少 量、微細な灰・黒色光 沢粉を含む	にぶい黄褐色 10YR7/4	黄褐色 2.5Y5/3	
230	甕	完形	SA13	203	200	34	口縁～頸部を斜工 具ナデ、のち口縁 を横ナデ、胴部以 下は斜工具ナデ、 のち部分的にナデ	口縁～頸部を斜工 具ナデ、のち口縁 を横ナデ、頸部 以下は斜工具ナ デ底部はナデ・指 オサエ	2mm以下の乳白(灰) 微細な黒色光沢粉を 含む	黄褐色 10YR5/6	にぶい黄褐色 10YR6/4	
231	甕	胴中・底	SA13	-	55	-	胴部は横タタキ、 底部付近は斜タタ キ	斜・横ナデ	2mm以下の灰・灰期・ 茶褐色粉を非常に多く 含む	橙 7.5YR6/6	にぶい黄褐色 10YR7/4	
232	甕	完形	SA13	164	-	0	口縁は横ナデのち 縦ミガキ、胴部以 下は縦ミガキ・丁 字ナデ	口縁は横ナデのち 縦ミガキ、胴部以 下は斜ミガキ・丁 字ナデ	2mm以下の灰期・褐色 粉を多く、微細な黒色 光沢粉を含む	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	
233	甕	胴中・底	SA13	-	14	-	縦ナデ・部分的に 横ナデ	工具ナデ・ナデ	1mm以下の灰・茶期 灰期を非常に多く含む	橙 7.5YR6/6	橙 5YR6/6	
234	二重口	SA13	-	-	-	-	横ナデ、1次口縁 は縦線状文	横ナデ	1mm以下の茶・灰期・ 白色光沢粉を少し含む	橙 10YR7/6	にぶい黄褐色 10YR7/2	
235	甕/甕底	SA13	-	-	9	-	縦工具ナデ	工具ナデ、ナデ、 指オサエ	2mm以下の乳白・灰・ 灰褐色粉を多く含む	にぶい黄褐色 10YR6/4	にぶい黄褐色 10YR6/4	
236	甕/甕底	SA13	-	-	15	-	ナデ	横・斜ナデ	4mm以下の灰白・灰・ 灰褐色粉を非常に多く 含む	にぶい黄褐色 10YR7/4	浅黄褐色 10YR8/4	
237	高杯	杯	SA13	394	-	-	口縁は横ナデ、以 下茶色(部分的に ミガキ残る)	口縁は横ナデ、以 下ナデ	2mm以下の灰白・灰・ 褐色粉を非常に多く 含む	明黄褐色 10YR7/6	にぶい黄褐色 10YR7/4	
238	高杯	柱	SA13	-	-	-	縦ミガキ	斜方向の工具ナ デ、のち中央以下 を縦ミガキ	微細な灰・乳白・色 澤粉を含む	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	
239	高杯	脚	SA13	-	186	-	風化(ナデ?)	ナデ	2mm以下の灰・灰期・ 褐色粉を非常に多く 含む	橙 7.5YR7/6	明黄褐色 10YR7/6	
240	高杯	脚	SA13	-	174	-	丁寧なナデ	ナデ、部分的に縦 工具ナデ	2mm以下の乳白・微細 な黒色光沢粉を含む	橙 7.5YR7/6	黄褐色 10YR3/1	
241	手形鉢	完形	SA13	69	-	0	指ナデ	指ナデ	微細な灰褐色粉を 含む	にぶい黄褐色 10YR5/3	灰黄褐色 10YR4/2	
242	深鉢	完形	SA13	108	-	5	口縁は横ナデ、体 部以下は縦ミガキ	口縁は横ナデ、体 部以下はナデ	1mmの灰期・茶褐色 粉を多く含む	にぶい黄褐色 10YR7/4	にぶい黄褐色 10YR7/3	

第32表 土器一覧表(弥生時代～古墳時代) (7)

※単位はmm

番号	器種	部位	出土 地点	寸法(mm)				手法・調整・文様ほか		胎土	色相		備考
				口径	胴径	底径	総高	外面	内面		外面	内面	
243	深鉢	完形	SA13	88	-	32	53	口縁は横ナデ、体部以下は斜工具ナデのちナデ。	口縁は横ナデ、体部以下は斜工具ナデのちナデ。底部分は指オサエ	1.3mmの黒灰・茶褐色を多く含む。灰白色を少し含む	にぶい・黄褐色R/4	7.5YR6/4	
244	深鉢	完形	SA13	106	-	18	60	口縁は横ナデ、体部以下はナデのち縦ミガキ	口縁は横ナデ、体部以下はナデ	1mmの灰褐色を含む	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y4.1	
245	甕	口・胴	SA14	-	-	-	-	口縁は横ナデ、頸部以下は斜ハケ目	口縁は横ハケ目のちナデ、頸部以下は斜工具ナデ、ナデ	2mm以下の茶黒・灰褐色を多く含む	にぶい・黄褐色 10YR6/4	にぶい・黄褐色 10YR6/3	
246	深鉢	底	SA14	-	-	27	-	縦ミガキナデ	横・斜工具ナデ	1.3mmの茶黒・灰黒・乳白色を非常に多く含む	灰黄 2.5Y7/2	にぶい・黄褐色 10YR7/4	
247	高杯	杯	SA14	277	-	-	-	口縁・口縁上は横ナデ、以下縦ミガキ	縦ミガキ	1.3mmの灰・褐色を多く含む	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	
248	甕	口	SA15	-	-	-	-	風化(頸部は斜ハケ目)	風化(頸部は斜ハケ目)	1mm以下の茶・黒・灰褐色を含む	浅黄褐色 10YR8/4	にぶい・黄褐色 10YR7/4	
249	甕/甕底	底	SA15	-	-	40	-	ナデ	ナデ、指オサエ	3mm以下の茶・茶褐色を多く含む	10YR7/4	暗褐色 3/3	
250	二重	口	SA15	220	-	-	-	風化(1次口縁は彫刻状文、2次口縁はナデ、3次口縁は斜ナデ)	1次口縁は横ナデ、2次口縁は斜ナデ	2mm以下の茶・灰褐色を多く含む	浅黄褐色 10YR8/4	浅黄褐色 10YR8/3	
251	二重	1次口	SA15	157	-	-	-	口縁・1次口縁上は横ナデ、中位以下は彫刻状文	横ナデ	2mm以下の茶・褐色を多く含む	浅黄褐色 10YR8/3	浅黄 2.5Y8/3	
252	甕	胴・底	SA16	-	-	51	-	風化(縦ナデ?)	斜ハケ目・工具ナデのちナデ。底部分は指オサエ	4mm以下の茶・乳白・褐色を多く含む	橙 7.5YR7/6	黄灰 2.5Y4/1	
253	小甕	口・底	SA16	132	-	-	-	口縁は横ナデ、頸部以下は斜ハケ目・工具ナデ	口縁は横ナデ、以下ナデ	2mm以下の茶黒・茶褐色を含む	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	
254	二重	口	SA16	-	-	-	-	口縁は横ナデ、1次口縁は横ナデのち彫刻状文、2次口縁以下は縦ハケ目のち横口は指オサエ	1・2次口縁は横ナデ、頸部は横ハケ目のち横口は指オサエ	1mmの灰褐色を含む	にぶい・黄褐色 10YR7/3	にぶい・黄褐色 10YR7/2	
255	甕/甕底	底	SA16	-	-	28	-	横・斜工具ナデ	風化(ミガキ?)	1mm以下の茶黒・乳白色を含む	にぶい・黄褐色 10YR7/4	黄褐色 7.5YR7/8	
256	甕/甕底	底	SA16	-	-	34	-	丁寧なナデ	縦ミガキ	1mm以下の茶褐色を含む	浅黄褐色 10YR8/3	明黄褐色 10YR6/6	
257	鉢	胴・底	SA16	-	-	56	-	口縁は横ナデ、口縁上は横ナデ、以下ナデ。底部付近は斜工具ナデ、指ナデ	ナデ、底部は指オサエ	1mm以下の茶・黒・乳白色を非常に多く含む	浅黄褐色 7.5YR8/4	にぶい・黄褐色 10YR7/4	
258	深鉢	底	SA16	-	-	44	-	ナデ	斜ハケ目のちナデ、底部は指ナデ	2mm以下の褐色を含む	にぶい・黄褐色 2.5Y6/3	灰黄 2.5Y7/2	
259	深鉢	底	SA16	-	-	35	-	風化(ナデ?)	風化(工具ナデ、ナデ?)	4mm以下の茶黒・灰褐色を非常に多く含む	浅黄褐色 10YR8/3	浅黄褐色 10YR8/4	
260	深鉢	底	SA16	-	-	39	-	風化(ナデ?)	風化(ナデ?)	1mm以下の茶黒・灰黒・乳白色を非常に多く含む	にぶい・黄褐色 10YR7/4	浅黄褐色 10YR8/4	
261	深鉢	底	SA16	85	-	31	71	ナデ	ナデ	4mm以下の茶黒・灰褐色を非常に多く含む	浅黄褐色 10YR8/4	浅黄褐色 10YR8/4	
262	浅鉢	口	SA16	-	-	-	-	口縁は横ナデ、以下風化(ナデ?)	風化(ナデ?)	2mm以下の茶・黒・乳白色を非常に多く含む	橙 7.5YR7/6	にぶい・黄褐色 10YR7/4	
263	甕	口	SA16	-	-	-	-	口縁は横ナデ、口縁上は横ナデ、斜口突帯	横ナデ	1mm以下の茶黒・灰褐色を多く含む	浅黄褐色 10YR8/3	にぶい・黄褐色 10YR7/3	
264	高杯	杯	SA16	-	-	-	-	縦ミガキ	縦ミガキ	微細な茶黒・灰褐色を僅かに含む	にぶい・黄褐色 10YR7/3	にぶい・黄褐色 10YR7/3	
265	高杯	受・柱	SA16	-	-	-	-	縦ミガキ	杯部は縦・斜ミガキ、柱部は縦工具ナデ	微細な茶褐色を少し含む	にぶい・黄褐色 10YR7/3	にぶい・黄褐色 10YR7/3	
266	甕	口・胴・底	SA17	116	-	-	-	口縁は横ミガキ、頸部以下は縦ミガキ	口縁は横ナデ、頸部以下は斜ナデ	2mm以下の茶黒・灰褐色を多く含む	にぶい・黄褐色 10YR7/4	にぶい・黄褐色 10YR7/4	
267	鉢	完形	SA17	78	-	40	63	ナデ、縦ミガキ	ナデ、縦ミガキ	微細な乳白・明褐色を含む	黒 7.5YR2/1	にぶい・黄褐色 10YR5/3	

第33表 土器一覧表(弥生時代～古墳時代) (8)

※単位はmm

番号	器種	部位	出土 地蔵	法 量 (mm)			手法・調整・文様ほか		胎 土	色 調		備 考	
				口径	胴径	底径	高さ	外周		内周	外周		内周
268	小皿	底形	SA18	56	-	21	132	風化(口縁は横ナデ、胴部以下は横・斜ナデ?)	口縁は横ナデ、胴部以下は横・斜ナデ	2mm以下の灰白・灰・茶褐色を多く含む	黄橙 10YR8/6	浅黄橙 10YR8/4	
269	部弁/高杯	脚	SA18	-	-	121	-	柱部は縦ミガキ、基部は横ナデ	柱部はナデ、基部は横ミガキ	微細な灰濁・黒色光沢を少し含む	にぶい黄橙 10YR5/3	にぶい黄橙 7.5YR6/4	
270	皿	胴・底	SA18	-	-	72	-	縦ミガキナデ	胴部上半は斜工具ナデ、下半は横ナデ	3mm以下の灰・茶褐色を含む	橙 2.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4	
271	甕	口	SA18	-	-	49	-	縦ミガキ	縦・斜ハケ目、底部は指オサエ	3mm以下の灰褐色を含む	黄橙 10YR8/6	にぶい黄橙 10YR6/4	
272	甕	口・底	SA19	321	315	81	271	口縁は横ナデ、口縁以下は縦ミガキ	口縁は横ナデ、胴部以下は横・斜ナデ	5mm以下の灰白・灰濁・灰褐色を多く含む	にぶい黄橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 7.5YR6/3	
273	甕	口・胴下	SA19	184	-	-	-	口縁は横ナデ、胴部以下は斜ナデ	口縁は横ナデ、胴部以下は横・斜ナデ	2mm以下の灰濁・灰濁・茶濁・乳白色を多く含む	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	
274	高杯	脚	SA19	-	-	256	-	縦ミガキ、基部は横ナデ	柱部はナデ、基部は横・斜ハケ目	1mm以下の赤濁・灰濁・乳白色を非常に多く含む	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	
275	高杯	脚	SA19	-	-	178	-	基部は横ナデ、縦は縦ミガキ	横ナデ、横工具ナデ	1mm以下の赤濁・灰濁・茶濁を少し含む	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	
276	甕	底形	SA20	228	228	37	237	風化	口縁は風化、胴部上半は斜ハケ目、下半はナデ、底部は指オサエ	2mm以下の茶・灰・褐色を含む	浅黄橙 10YR8/3	橙 5YR6/6	
277	甕	底形	SA20	203	200	40	258	口縁は横ナデ、口縁は斜ハケ目、胴部以下はナデ、底部付近は縦ミガキ	口縁は上半が横ナデ、下半は斜ハケ目、胴部上半は斜ハケ目、下半は縦工具ナデ・ナデ	2mm以下の乳白・明褐色を含む	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄 2.5YR/3	
278	甕	口・胴上	SA20	208	-	-	-	口縁は横ナデ、口縁・胴部は斜ハケ目、胴部以下は斜ハケ目のナデ	口縁は横ナデ、胴部以下は斜ハケ目のナデ	4mm以下の茶濁・赤濁・灰褐色を含む	灰白 10YR8/2	にぶい黄橙 10YR7/3	
279	甕	底	SA20	-	-	42	-	斜工具ナデ	縦・斜ハケ目、底部は指オサエ	1mm以下の灰褐色を含む	浅黄橙 10YR8/4	灰濁 10YR4/1	
280	甕	胴・脚	SA20	-	152	-	-	風化(ナデ?)	風化(斜ナデ?)	微細な灰濁・乳白色を少し含む	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	
281	甕	胴・脚	SA20	-	152	-	-	部分的に斜工具ナデ	斜工具ナデ	1mm以下の灰濁・茶濁・茶濁を少し含む	灰黄濁 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR6/3	
282	甕	底	SA20	-	-	40	-	風化	風化(斜ナデ?)	1mm以下の茶濁・乳白色を含む	にぶい黄 7.5YR5/3	黒 10YR1.7/1	
283	甕	底	SA20	-	-	32	-	焼熟風化	工具ナデ・ナデ	微細な灰・灰褐色を少し含む	2.5YR6/6	10YR2/1	
284	鉢	底形	SA20	247	-	27	124	風化	風化(口縁は横ナデ、以下ナデ)	1mm以下の茶濁・灰濁・乳白色を含む	にぶい黄 7.5YR6/4	にぶい赤濁 5YR5/4	
285	高杯	脚?	SA20	-	-	33	-	風化(基部は横ナデ、基部は縦ミガキ)	風化(ナデ?)	1mm以下の赤濁・灰濁・乳白色を非常に多く含む	7.5YR8/3	浅黄 2.5YR/4	
286	高杯	底形	SA20	242	-	150	204	風化(口縁は横ナデ、以下縦ミガキ)	風化(縦ミガキ?)	1mm以下の灰白・灰白・茶濁を多く含む	橙 7.5YR6/6	黄橙 10YR8/6	
287	高杯	受・脚	SA20	-	-	147	-	ナデ、基部は斜ナデ、基部は横ナデ	受け部はハケ目のちり寄せナデ、柱部はナデ、基部はハケ目のちり寄せ、基部は横ナデ	微細な乳白・茶濁を僅かに含む	黒 10YR2/1	黒 10YR2/1	
288	皿	胴・底	SA21	-	-	-	-	胴部上半は斜ハケ目、下半は斜工具ナデ	胴部上半は斜ハケ目、下半は斜ハケ目のちり寄せ	4mm以下の灰・赤濁・茶濁を非常に多く含む	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 10YR8/4	
289	高杯	杯	SA21	256	-	-	-	口縁は横ナデ、口縁は縦ミガキ、受け部は1寄せナデ	口縁は横ナデ、口縁は横ミガキ	3mm以下の灰濁・乳白色を多く含む	橙 5YR6/6	明赤濁 5YR5/6	
290	甕	口・底	SA22	273	-	52	292	口縁は横ナデ、口縁は横ナデのちり寄せの明白突部、以下縦ハケ目のちり寄せ	口縁は横ナデ、以下ナデ	微細な乳白色を多く含む	灰黄濁 10YR5/2	黒 7.5YR4/4	
291	甕	口・胴	SA22	227	-	-	-	口縁は横ナデ、口縁は横ナデのちり寄せの明白突部、胴部はナデ	口縁は横ナデのちり寄せナデ、以下ナデ	微細な灰・黒色光沢を僅かに含む	黒濁 7.5YR3/1	にぶい黄 7.5YR6/4	



第34表 土器一覧表(弥生時代～古墳時代) (9)

※単位はmm

番号	器種	部位	出土 地点	法 量 (mm)				手法・調整・文様ほか		胎 土	色 相		備 考
				口径	胴径	底径	総高	外面	内面		外面	内面	
292	甕	口・胴	SA22	-	-	-	-	口縁は横ナデ、口縁は横ナデのうち2条の短辺突部、以下風化	風化	1mm以下の乳白色彩を多く含む	褐色黄	にぶい黄褐色	10YR5/4
293	甕	口・胴	SA22	258	-	-	-	口縁・口縁は横ナデ、頸部以下は縦ハケ目	口縁～頸部は横ナデ、以下ナデ	黄褐色灰黄・黒色先灰彩を少し含む	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	10YR6/4 10YR5/4
294	甕	口	SA22	-	-	-	-	口縁は横ナデのうち2列の列点文、口縁はナデ	風化	5mm以下の灰白・黄・茶褐色を非常に多く含む	にぶい黄褐色	橙	10YR7/4 7.5YR6/6
295	甕	口	SA22	-	-	-	-						
296	甕	底	SA22	-	-	58	-	風化	風化(ナデ?)	黄褐色灰黄・1mm以下の乳白色彩を多く含む	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	5YR5/4 10YR6/4
297	甕	底	SA23	-	-	51	-	風化(縦工具ナデ?)、底部付近はツマミ	風化(縦工具ナデ?)	5mm以下の灰白・灰褐色を非常に多く含む	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	10YR7/3 10YR7/2
298	甕	口・胴	SB20 SC27	270	238	-	-	口縁はナデ・指オサエ、口縁中位～頸部は縦ナデ、頸部以下はナデ	口縁はナデ・指オサエ、頸部以下は斜工具ナデ	3mm以下の黄灰・茶褐色を含む	浅黄褐色	にぶい黄褐色	10YR8/3 10YR7/4
299	甕	底	SB20 SC27	-	-	38	-	ナデ	ナデ・指オサエ	1mm以下の黄・灰褐色を多く含む	浅黄	浅黄褐色	2.5Y7/4 10YR8/4
300	甕	口・胴	SB20 SC24	86	-	-	-	口縁は斜ナデ、頸部以下は丁寧ナデ	口縁上平は横ナデ、下半は斜ナデ、頸部は横ナデ、以下ナデ	黄褐色灰黄・茶褐色を多く含む	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	10YR6/4 7.5YR6/6
301	甕	口・胴	SB20 SC26	170	-	-	-	口縁は横ナデ、以下ナデ	口縁は横ナデ、頸部以下は斜工具ナデ	1mm以下の黄灰・灰褐色を少し含む	にぶい橙	浅黄褐色	7.5YR5/4 10YR8/4
302	甕/甕	口	SB20 SC26	134	-	-	-	横ナデ	横ナデ	黄褐色茶褐色を含む	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	10YR7/4 10YR6/4
303	甕	底	SB20 SC26	-	-	46	-	斜工具ナデ	横・斜工具ナデ、底部はナデ・指オサエ	黄褐色灰黄・黒色先灰彩を僅かに含む	褐色	にぶい黄褐色	10YR4/1 10YR6/4
304	甕	底	SB20 SC24	-	-	36	-	ナデ、底部付近は丁寧ナデ	ナデ、頸部下半は横工具ナデ	黄褐色灰黄・茶褐色を多く含む	橙	橙	7.5YR7/6 7.5YR7/6
305	甕	底	SB20 SC27	-	-	27	-	斜ナデ	斜ナデ	黄褐色灰白・乳白色彩を含む	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	10YR6/4 10YR6/4
306	甕	底	SC3	-	-	54	-	ナデ・指オサエ	横頸部ナデのうちナデ、指オサエ	2mm以下の灰白・灰褐色を多く含む	橙	灰黄	5YR6/6 7.5YR5/2
307	高坏	胴	SC3	-	-	-	-	縦部は横ナデ、頸部は縦ミガキ	横ナデ	3mm以下の黄灰・灰褐色を多く含む	にぶい橙	にぶい黄褐色	7.5YR7/4 7.5YR7/4
308	二重	口・胴	SC37	137	-	-	-	口縁・1次口縁は横ナデのうち縦溝状文、2次口縁は斜ハケ目	1次口縁は横ナデ、2次口縁は横ナデ	2mm以下の黄灰・褐色・茶褐色を少し含む	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	10YR7/3 10YR7/3
309	高坏	胴	SC37	-	-	180	-	頸部上平は斜ナデ、下半は縦ミガキ、腹縁は横ナデ	頸部はナデ、腹縁は横ナデ	1mm以下の黄灰・茶褐色を少し含む	明黄褐色	にぶい黄褐色	10YR7/6 10YR7/4
310	甕	完形	SC11	170	146	15	180	風化(ナデ?)、口縁は指オサエ	風化(口縁～頸部上平は斜工具ナデ、以下ナデ?)	黄褐色乳白・明褐色を含む	浅黄褐色	灰白	10YR8/4 10YR8/2
311	甕	口	SC11	243	-	-	-	口縁は横ナデ、口縁は横ナデのうち1条の短辺突部、以下ナデ	風化(口縁は横ナデ、以下ナデ?)	黄褐色乳白・黄褐色を多く含む	褐色	浅黄	7.5YR4/2 2.5Y8/4
312	甕	口	S7	-	-	-	-	口縁は横ナデ、口縁は横ナデのうち短辺突部	風化(ナデ?)	2mm以下の乳白・灰褐色を含む	浅黄褐色	灰黄	10YR8/4 2.5Y7/2
313	甕?	胴?	S7	-	-	-	-	風化。三角突部	風化(ナデ?)	2mm以下の茶褐色・灰褐色を多く含む	橙	橙	5YR6/6 5YR7/6
314	甕	底	S7	-	-	46	-	風化(ナデ?)、てい部は指オサエ	風化(ナデ?)	1mm以下の乳白・褐色・黒色先灰彩を含む	にぶい黄褐色	灰黄	2.5Y6/3 2.5Y6/2
315	甕	底	S7	-	-	21	-	縦工具ナデ	縦工具ナデ、底部は指オサエ	2mm以下の乳白・褐色・黒色先灰彩を含む	にぶい橙	にぶい黄褐色	7.5YR5/4 10YR6/3
316	二重	口・胴	S7	-	-	-	-	頸部に格子刻目突部、以下は縦ナデ	風化(ナデ?)	3mm以下の茶褐色・褐色・乳白色彩を多く含む	にぶい黄褐色	浅黄	10YR6/4 2.5Y7/4
317	深鉢	底	S7	-	-	31	-	縦ナデ、底部縁は指オサエ・ツマミ	縦ナデ・指オサエ	黄褐色灰白・黒色先灰彩を少し含む	にぶい橙	にぶい黄褐色	7.5YR6/4 10YR5/3
318	甕	底	-	-	-	60	-	風化(ナデ?)	風化(ナデ?)	黄褐色乳白・灰褐色を多く含む	浅黄褐色	灰白	10YR8/4 10YR4/2

第35表 土器一覧表(弥生時代～古墳時代) (10)

※単位はmm

番号	器種	部位	出土 地点	法 量 (mm)			手法・調整・文様ほか		胎 土	色 調		備 考
				口径	胴径	底径	高さ	外側		内側	外側	
319	甕	底	S7	-	-	48	-	風化(ナデ?)	風化(ナデ?)	黄緑な乳白・赤褐色を 含む	灰 2.5Y/5-1	灰 10YR5/1
320	高杯	脚	S7	-	-	-	-	縦ミガキ 工具ナデ・ナデ	工具ナデ・ナデ	黄緑な乳白・紫褐色を 少し含む	橙 5YR6/6	にぶい黄緑 10YR6/3
321	甕	胴・底	H4	-	-	31	-	胴部上位はタタキ のちナデ、胴部中 位は斜タタキ・下 位は横タタキ	胴部上位は横ハ ツ目・中位以下は斜 ハツ目、底部は指 オサエ	3mm以下の茶褐色・紫 褐色を含む	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6
322	注口土 器	注口	T20	孔径 5.7	-	-	-	注口側に刺突文、 体上部に1条の波 状文	-	黄緑な乳白・赤褐色を 含む	明黄緑 10YR6/6	にぶい黄緑 10YR6/4
323	甕	取っ手	ユム タE	-	-	-	-	ナデ	-	黄緑な灰白色を僅かに 含む	橙 5YR6/6	-
590	二重	口・底	SC10	148	-	27	230	口縁は横ナデ、1 次口縁は横ナデの ち縦波状文、2 次口縁は横ナデの ち指オサエ。胴部 は斜ナデ、胴部上 位は横ナデ、胴 部下半は横ナデ・ 下半はナデ・部分 的にケズリ	口縁は横ナデ、胴 部はナデ、胴部上 位は横ナデ(工具ナデ?)	黄緑な茶褐色・乳白褐色を 含む	浅黄 2.5Y/7/3	黄灰 2.5Y/6/1

第36表 土器一覧表(中世)

※単位はmm

番号	器種	部位	出土 地点	法 量 (mm)			手法・調整・文様ほか		胎 土	色 調		備 考
				口径	胴径	底径	高さ	外側		内側	外側	
505	皿	口・底	S06	81	φ	56	18	回転ナデ、底部は 具編	回転ナデ、底部 を部分ナデ	黄緑な赤褐色を僅かに 含む	にぶい黄緑 10YR7/3	にぶい黄緑 10YR7/3
506	皿	完形	S012	85	-	72	13	回転ナデ、底部は 右回転糸切り	回転ナデ	1mm以下の赤褐色を 含む	浅黄緑 7.5YR8/4	浅黄緑 7.5YR8/3
507	不明	底	S035	-	-	68	-	右回転へら切り・ 部分工具ナデ	回転ナデ、底部 を工具ナデ	黄緑な赤褐色・紫褐色・茶 褐色を含む	浅黄緑 10YR8/3	浅黄緑 10YR8/4
508	皿	完形	SC4	85	-	68	13	風化(回転ナデ?) 右回転糸切り	回転ナデ	黄緑な赤褐色・紫褐色を 少し含む	橙 5YR6/8	橙 5YR6/8
509	皿	口・底	SC4	83	-	58	16	回転ナデ、回転糸 切り	回転ナデ、底部を 部分ナデ	1mm以下の赤褐色・紫 褐色を少し含む	浅黄緑 7.5YR8/4	浅黄緑 7.5YR8/4
510	杯	完形	SC61	121	-	63	45	回転ナデ、へら切 り・部分ナデ	回転ナデ、底部を 部分ナデ	1mm以下の赤褐色・紫 褐色を含む	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4
511	杯	完形	SC61	123	-	66	46	回転ナデ、へら切 り・部分工具ナデ	回転ナデ、底部を 部分ナデ	2.5mmの赤褐色を少 し、紫褐色・紫褐色 を含む	にぶい黄緑 10YR7/4	にぶい黄緑 10YR7/3
512	杯	完形	SC61	124	-	70	46	回転ナデ、回転へ ら切り	回転ナデ、底部を 部分ナデ	黄緑な赤褐色・紫褐色を 含む	にぶい黄緑 10YR5/2	灰黄緑 10YR6/2
514	杯	体・底	S017	-	-	95	-	回転ナデ、糸切り?回転ナデ	回転ナデ	2mm以下の赤褐色を 含む	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6
539	杯	体・底	SE7	-	-	68	-	回転ナデ、右回転 へら切り・部分工 具ナデ	回転ナデ、底部を 部分ナデ	2mm以下の赤褐色を 少し含む	暗黄 2.5Y/5-2	浅黄 2.5Y/7/3
540	杯	口・底	SE14	131	-	92	36	回転ナデ、右回転 糸切り	回転ナデ、底部を 部分ナデ	1mm以下の茶褐色・紫 褐色を僅かに含む	にぶい黄緑 10YR7/4	にぶい黄緑 10YR7/4
547	皿	完形	S7	70	-	66	14	風化(回転ナデ、 へら切り?)	回転ナデ、部分ナ デ	黄緑な赤褐色・紫褐色を 含む	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4
548	杯	口・底	K5	117	-	73	20	回転ナデ、回転へ ら切り	回転ナデ、底部を 部分ナデ	黄緑な赤褐色・紫褐色を 僅かに含む	灰黄緑 10YR7/6	灰黄緑 10YR7/6
549	杯	体・底	S17	-	-	86	-	回転ナデ、回転へ ら切り・部分工 具編	回転ナデ、底部を 部分ナデ	黄緑な赤褐色・紫褐色を 少し含む	浅黄緑 10YR8/4	橙 7.5YR7/6

第37表 陶磁器一覽表(中世)(1)

◎単位はmm

番号	種別	器種	部位	出土 地点	流量(mm)		手法・調整・文様ほか		胎土	胎土色調	釉調	備考		
					口径	底径	高さ	重量g					外底	内底
513	東播	片口鉢	口	SB45	—	—	381.3	回転ナデ	回転ナデ	1mm以下の灰白色・ 黒色の胎土を含む	黄灰 5YR5/1	緑灰 10GY5/1	倉田編年第2期第2段階	
515	青磁	碗	口	SB41	—	—	5.7	蓮弁文、胎釉	胎釉	胎土	灰白 5Y7/1	明緑灰 10GY7/1		
516	青磁	碗	底	SB7	φ	52	φ 153.4	蓮弁文、胎釉	花文、胎釉	胎土	灰 10Y6/1	オリーブ灰 5GY6/1		
517	備前	密書	不明	SC16	—	—	136.9	自然釉	横ナデ	胎釉な灰白色胎土を 多く、茶褐色胎土を 少し含む	—	オリーブ黒 10YR3/2		
518	鹿島突	皿	口・底	SE1	125	58	43 138.2	胎釉、蛇目高台	胎釉、蛇目輪割ぎ	胎土	灰白 7.5Y7/1	オリーブ灰 2.5GY6/1		
519	青磁	碗	口	SE1	—	—	7.1	簡蓮弁文、胎釉	胎釉	胎土	灰白 5Y7/1	オリーブ灰 2.5GY6/1	鹿島突系1-5b(編 蓮弁文?)	
520	須恵器	密書	口	SE1	—	—	90.4	回転ナデ	横ナデ	胎釉な灰白色胎土を 少し含む	黄灰 2.5Y7/2	—		
521	須恵器	密書	底	SE1	—	—	273.2	縦工具ナデ。底 部部は横工具ナ デ。	横工具ナデ	1mm以下の灰白色 胎土を含む	黄灰 2.5Y7/2	—		
522	青磁	碗		SE1	—	50	—	79.0	胎釉(高台無胎)	胎釉	胎土	黄灰黒 10YR6/2	に深い黄緑 10YR6/3	
523	白磁	密	肩	SE1	—	—	—	26.9	胎釉、貫入あり	胎釉	胎土	灰白 7.5Y7/1	灰オリーブ 7.5Y6/2	
524	東播	片口鉢	口	SE1	—	—	—	39.1	回転ナデ	回転ナデ	胎釉な黒褐色胎土を 僅かに含む	黄 10YR5/1	—	
525	東播	片口鉢	口	SE1	—	—	—	23.7	回転ナデ	回転ナデ	胎釉な黒褐色胎土を 僅かに含む	黄灰 2.5Y5/1	—	
526	備前	部鉢	口	SE1	—	—	—	82.3	回転ナデ	回転ナデ、1単位 10条の横目	5mmの茶斑・胎土 粒を少し、1mm以 下の灰白色胎土を 含む	黄灰 5YR4/1	—	
527	備前	部鉢	口	SE1	—	—	—	52.5	回転ナデ	回転ナデ、1単位3 胎釉な茶斑・胎土 色粒を多く含む	黄灰 2.5Y6/2	—		
528	備前	密書	底	SE1	—	147	—	181.6	縦ナデ	回転ナデ	胎釉な灰白色胎土を 少し含む	に深い黄緑 10YR4/3	—	
529	須恵器	密書	不明	SE1	—	—	—	64.9	格子目タタキ、 自然釉	ナデ	胎釉な灰白色胎土を 僅かに含む	黄灰 2.5Y6/1	オリーブ灰 2.5GY6/1	
530	須恵器	密書	肩	SE2	—	—	—	45.6	頸部は回転ナデ、 肩はカキ目	横ナデ	胎釉な黒褐色胎土を 僅かに含む	黄灰黄 2.5Y5/2	—	
531	青磁	碗	口	SE2	—	—	—	14.3	胎釉	胎釉	胎土	黄灰 2.5Y6/1	灰オリーブ 7.5Y6/2	
532	古瀬戸	瓶子	底	SE2	—	90	—	93.6	胎釉(輪割)	胎釉	胎土	灰白 7.5Y7/1	灰オリーブ 7.5Y6/2	藤澤編年瓶子1類
533	産地不明	密書以外	口	SE3	—	—	—	32.1	回転ナデ	回転ナデ	胎釉な黒褐色胎土を 僅かに含む	黄灰黒 10YR5/2	—	
534	常滑	密書	皿	SE3	—	—	—	97.4	回転ナデ、肩部 に自然釉	回転ナデ、頸部 に自然釉	1mm以下の灰白色 胎土を少し含む	黄灰 10YR4/1	黄オリーブ 7.5Y4/3	
535	須恵器	密書	不明	SE3	—	—	—	39.9	ハナ目	横ハナ目	1mm以下の灰白色 胎土を少し含む	灰 5Y5/1	—	
536	須恵器	密書	肩	SE3	—	—	—	32.1	頸部は回転ナデ、 肩はカキ目	横ナデ	胎釉な黒褐色胎土を 僅かに含む	黄灰 2.5Y6/1	—	
537	東播	片口鉢	底	SE3	—	112	—	64.8	回転ナデ、右回 転糸切り	摩滅	胎釉な灰褐色胎土を 僅かに含む	黄灰 10YR6/1	—	
538	東播	片口鉢	底	SE3	—	—	—	81.8	回転ナデ、回転 糸切り	摩滅	2mm以下の黒褐色 胎土を含む	黄灰 2.5Y6/1	—	
541	青磁	碗	口	SE5	—	—	—	12.7	蓮弁文、胎釉	胎釉	胎土	灰 10Y6/1	灰オリーブ 7.5Y5/2	
542	青磁	碗	口	SE7	—	—	—	9.4	蓮弁文、胎釉	胎釉	胎土	灰 5Y6/1	灰オリーブ 7.5Y5/3	

第38表 陶磁器一覧表(中世)(2)

※単位はmm

番号	種別	器種	部位	出土 地点	流量(mm)			手法・調整・文様ほか		胎土	胎土色調	焼成	備考	
					口径	底径	器高	重量g	外面					内面
543	甗	甗	底	SE10	-	-	-	141.8	胎軸(高台内無胎)、ハリ筋1	胎軸	粗良	灰白 7.5Y7/1	灰オリーブ 7.5Y6/2	
544	常滑	甗	口	SE7	-	-	-	57.9	回転ナデ	回転ナデ	1mm以下の乳白色 灰を含む	灰白 7.5Y8/3	-	
545	東播	片口鉢	口	SE7	-	-	-	10.6	回転ナデ	回転ナデ	1mmの黒褐色胎土 灰を含む	黄灰 2.5Y4/1	-	
546	常滑	甗	口	SE8	-	-	-	49.1	回転ナデ	回転ナデ	黄褐色灰口地胎土 を含む	黄 7.5YR4/3	-	N字口縁成立期 (497編年6a期) 13C後半
550	常滑	甗	不明	D3	-	-	-	72.5	ナデ、押印文	回転ナデ	1mm以下の乳白色 胎土を少し含む	黄灰 10YR4/1	-	
551	白磁	甗	底	219②	-	-	-	14.3	胎軸、底部に板状痕	胎軸	黄褐色胎土を僅かに含む	灰白 7.5Y8/1	灰白 10Y8/1	口尻
552	瀬田器	甗	口	E4	-	-	-	66.5	回転ナデ、頸部口縁部に5筋	回転ナデ	黄褐色灰口地胎土を少し含む	灰 7.5Y5/1	-	
553	常滑	甗	口	E2	-	-	-	49.5	回転ナデ	口縁に自然胎	黄褐色灰口・明褐色胎土を少し含む	明褐色 7.5YR3/3	灰オリーブ 5Y3/2	N字口縁
554	東播	片口鉢	口	A3	-	-	-	46.8	回転ナデ	回転ナデ	黄褐色胎土・明褐色胎土を含む	黄灰 2.5Y6/1	-	
555	東播	片口鉢	口	14	-	-	-	32.2	回転ナデ	回転ナデ	黄褐色胎土・明褐色胎土を含む	黄灰 2.5Y5/1	-	
556	甗	甗	口	219 E	-	-	-	26.9	焼熱風化	焼熱風化	粗良	灰 5Y6/1	-	
557	青磁	甗	口	SA7b	-	-	-	15.2	蓮弁文、胎軸	胎軸	粗良	黄灰 2.5Y6/1	明褐色 7.5C7/1	
558	青磁	甗	底	T40	-	-	-	73.3	高台削り出し、蓮弁文、胎軸(高胎軸台内無胎)	胎軸	粗良	灰 5Y5/1	灰オリーブ 5Y5/3	

第39表 鉄器一覧表

※単位はmm、g

番号	位置	種類	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	番号	位置	種類	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
482	SA1	鉄鏝	47	12	3	3.9	先端付近に錆粉質が付着	494	SA7	板状鉄片	208	59	13	765.7	朝鮮半島製。鋸山の磨行により表面が若干平歪む
483	SA1	鉄鏝	42	12	3	3.5	木質付着	495	SA11	鉄鏝	76	19	5	130	
484	SA1	袋状工具	98	20	3	22.5		496	SA13	鉄鏝?	51	22	4	6.8	
485	SA2	鋸	156	12	4	22.0	表面刃部付近に錆粉?。裏面に木質付着。柄を装着していた可能性あり。	497	SA13	製品?	35	16	3	3.0	
486	SA2	鋸	-	-	-	-	485と接合	498	SA14	鉄片	24	5	2.6		
487	SA2	不明	26	-	3	7.8		500	SA16	鉄片?	25	37	2	7.1	
488	SA3	鉄鏝	26	19	1	1.4		501	SA16	鉄片	34	-	3	6.5	
489	SA4	鉄鏝	38	16	2	3.0		502	SA21	製品欠損?	31	16	6	6.7	
490	SA4	袋状工具	55	15	3	10.2		503	棒土	鉄鏝	59	36	6	11.5	刃部は上端のみ
491	SA4	鉄片	21	-	2	1.3		588	SB40	鉄片	27	-	4	5.6	
492	SA7	鉄鏝	67	21	3	8.6		589	SC4	鉄刀	254	20	6	63.2	
493	SA7	鉄片?	24	-	1	2.0									



土層断面 (O6グリッド西壁)



土層断面 (H6グリッド西壁)



確認調査風景



竪穴住居跡調査風景



台風一過、調査区が湯羊田溜池と繋がった



2.5%調査風景



S11検出状況



S12検出状況

図版 8



S 1 3 検出状況



S 1 4 検出状況



S 1 5 検出状況



S 1 6 検出状況



S 1 7 検出状況



S 1 8 検出状況



S 1 9 検出状況



S 1 1 0 検出状況



S I 11 検出状況



S I 12 検出状況



S I 13 検出状況



S I 14 検出状況



S I 15、16 検出状況



S I 17 検出状況



S I 18 検出状況



S I 19 半截状況



図版 10



S120~23 検出状況



SC89 土層断面



SC90 断ち割り状況



SC100 半截状況



SA1 遺物出土状況



SA2 焼土・炭化材検出状況



SA2 炉接土坑半截状況



SA3 炭化木製品出土状況





SA 3 炭化材検出（焼土除去後）、遺物出土状況



SA 4 焼土・炭化材検出、遺物出土状況



SA 4 炉と炉接土坑完掘状況



SA 4 屋内土坑群



SA 5 炉と炉接土坑

図版 12



SA5-P5、6断割り状況



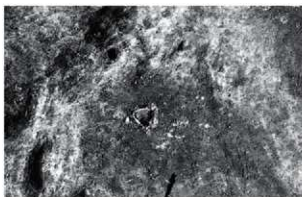
SA5-P2、SC66完掘状況



SA5土器出土状況



SA5土器出土状況



SA5-SC65検出状況



SA5炭化材に載る繊維質植物遺体



SA6遺物出土状況



SA7-SC2、3完掘状況



S A 7 焼土・炭化材検出、遺物出土状況



S A 8 遺物出土状況 (土器集中取り上げ後)



S A 8 南東隅土器集中



S A 8 北西隅土器集中



S A 9 焼土・炭化材検出、遺物出土状況

図版 14



SA 9炭化材検出、遺物出土状況



SA 10遺物出土状況



SA 10-191 甕と磨石



SA 11 遺物出土状況



SA 11 炉壇土坑半截状況



SA 11 炉と炉壇土坑



SA 12 遺物出土状況



SA 13 遺物出土状況



SA 13-SC 30、-P 2



SA 13ベッド状遺構と壁溝



SA 13褐色土貼床範囲セクション (南から)



SA 13-SC 29



SA 13屋内土坑群



SA 14焼土・炭化材検出、遺物出土状況



SA 14焼土・炭化材検出箇所セクション



SA 14-P 1、2断ち割り状況





SA14 繊維質植物遺体検出状況



同上



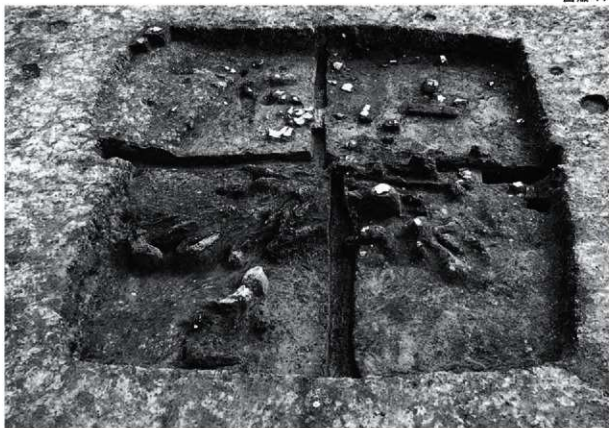
SA14 欠込痕?のある炭化材



SA15 貼床面検出状況



SA16 炉と炉接土坑



SA 16 炭化材検出（焼土除去後）、遺物出土状況



SA 16 炭化材



SA 17 遺物出土状況



SA 17 壁溝



SA 17 壁溝

図版 18



SA 18 遺物出土状況



SA 18 床面検出状況



SA 19 遺物出土状況



SA 19 遺物出土状況



SA 20 遺物出土状況



SA 20 遺物出土状況



SA 20-SC 1 遺物出土状況



SA 21 遺物出土状況





SA 22・24 検出状況



SA 22・24 遺物出土状況



SA 23 検出状況



SA 23 遺物出土状況



SA 23 床面検出状況



SB 3 完掘状況 (一部断ち割り)



SB 11



SB 11-P1 断面

圖版 20



SB 20-P 3 半截狀況



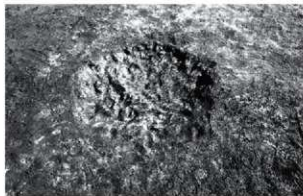
SB 20-P 4 半截狀況



SB 30-P 1、5 半截狀況



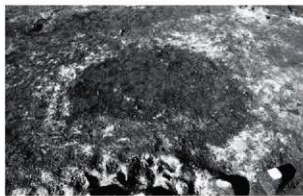
SB 30-P 6、7 半截狀況



SC 2 完掘狀況



SC 3 遺物出土狀況



SC 6 檢出狀況



SC 11 遺物出土狀況



SC 13 遺物出土状況



SC 37 遺物出土状況



SC 55 半截状況



SC 98 半截状況



S7 グリッド周辺



S7 グリッド周辺遺物出土状況 (1)



S7 グリッド周辺遺物出土状況 (2)



SB 2、4、5



SB 7



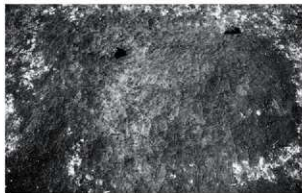
SB 7-P 8



SB 6



SB 6-P 3出土炭化米



SC 5 検出状況



SC 7 完掘状況



SC 9 床面検出状況



SC 9 土層断面



SC 16 半截狀況



SC 4 遺物出土狀況



SC 6 1 遺物出土狀況



SE 1 遺物出土狀況 (1)



SE 1 遺物出土狀況 (2)



SE 1、9 土層断面



SE 2 土層断面



SE 5 土層断面



圖版 24



SE 6 土層断面



SE 5、6 完掘狀況



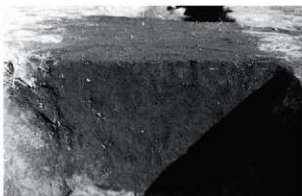
SE 7 土層断面



SE 8 遺物出土狀況



SE 11 遺物出土狀況



SE 12 土層断面



SE 13 遺物出土狀況



SE 14 土層断面



SE 14 屈曲部分



VI・V層出土石器



V層出土石器



V層出土石器



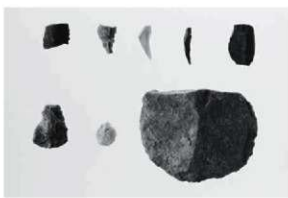
V層出土石器



V層出土石器



IV層出土石器



IV層出土石器

图版 26



IV層出土石器



IV層出土石器



IV層出土石器



IV層ほか出土石器



SA 1出土土器



SA 2出土土器



SA 3出土土器



SA 4出土土器





SA 5 出土土器



SA 6 出土土器



SA 7 出土土器



SA 8 出土土器



SA 9 出土土器



SA 10 出土土器



SA 11 出土土器 (1)



SA 11 出土土器 (2)



SA 12 出土土器



SA 13 出土土器



SA 14、15 出土土器



SA 16 出土土器



SA 17、18 出土土器



SA 19出土土器



SA 20出土土器



SA 21出土土器



SA 22・24, 23出土土器



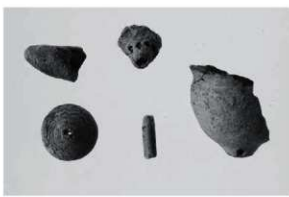
SB 20出土土器



SC 3, 11, 37出土土器

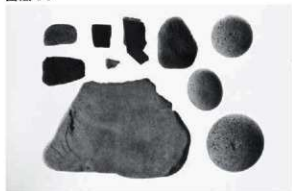


S 7グリッド周辺出土土器



SA 1, 3, 5, 包含層出土土器・土製品

(上段左から右: 包含層出土土器(片), 土1 | 下段左から右: SA1 土器, SA3 ミニチュア型)



SA 1出土石器



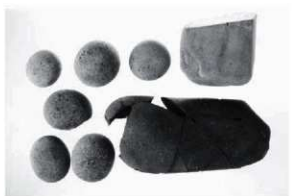
SA 2出土石器



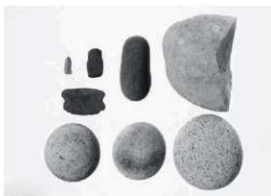
SA 3出土石器



SA 4出土石器 (1)



SA 4出土石器 (2)



SA 5出土石器



SA 6出土石器



SA 7出土石器



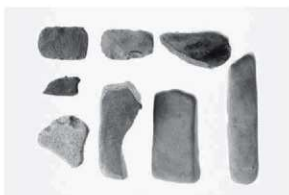
SA 8出土石器 (1)



SA 8出土石器 (2)



SA 9出土石器



SA 10出土石器 (1)



SA 10出土石器 (2)



SA 11出土石器 (1)



SA 11出土石器 (2)



SA 12出土石器

図版 32



SA 13 出土石器



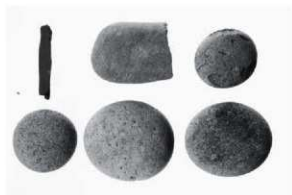
SA 14 出土石器



SA 15、17、19 出土石器



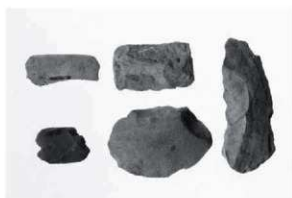
SA 16 出土石器



SA 20 出土石器



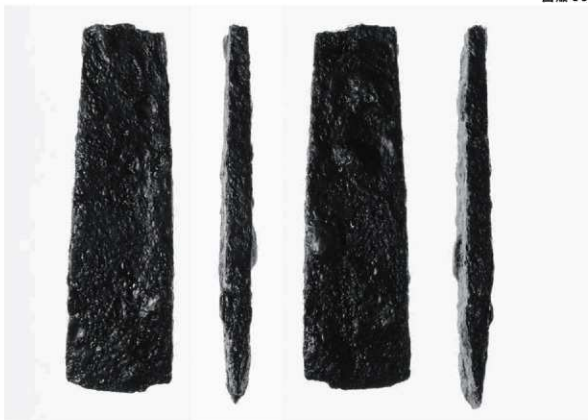
SA 22、23 出土石器



包含層出土石器



SAほか出土鉄器(1)



SA7 出土板状铁斧



SAほか出土鉄器 (2)



SB、SC出土土師器・陶磁器



SC4 出土遺物



SC61 出土遺物

図版 34



SE 1 出土土師器・陶磁器



SE 2、3 出土土師器・陶磁器



SE 5、7、8、10、14 出土土師器・陶磁器



その他の出土土師器・陶磁器



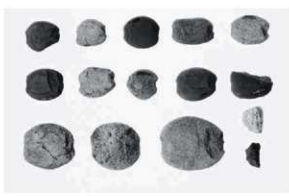
SE 1、2、3 出土石器



その他のSB、SC出土石器



その他の出土石器 (1)



その他の出土石器 (2)



報告書抄録

ふりがな	ゆむたいせき (にじちようさ)							
書名	湯牟田遺跡 (二次調査)							
副書名	東九州自動車道 (都農～西都間) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 152							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第 47 集							
執筆・編集 担当者名	松元 一浩							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒 880-0212 宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地							
発行年月日	2007 年 3 月 16 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ゆむたいせき 湯牟田遺跡	みやざきけん 宮崎県 こほくぐん 児湯郡 かわみなみちやう 川南町 おほあざかわみ 大字川南 あざゆむた 字湯牟田	45505		32° 10' 12"	131° 30' 08"	2003.8.28 / 2005.3.31	9.950㎡	東九州自動車道 (都農～西都間) 建設に伴う発掘調査
種別		主な時代		主な遺構		主な遺物		
集落跡		旧石器時代 縄文時代 弥生～古墳時代 中世		集石遺構 23 基 竪穴住居跡 24 軒、掘立柱建物跡 6 棟、土坑 9 基 溝状遺構 13 条、掘立柱建物跡 23 棟、竪穴状遺構 3 基、土坑 6 基		ナイフ形石器、細石刃・核、搔器、削器、二次加工剥片、石核、剥片 土器 (無文、押型文など)、石器類 (尖頭器、石鏃、石匙、二次加工剥片、搔器、削器、石核、剥片) 土器、土製品 (紡錘車、管玉)、石器 (石砲丁、台石、磨石、砥石他)、鉄製品 (鉄鏝、板状鉄滓、袋状工具)、木製品 (籬)		

---

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第152集

湯牟田遺跡（二次調査）

東九州自動車道（郡農～西郡間）建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 47

2007年3月16日

発行 宮崎県埋蔵文化財センター  
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地  
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印刷 有限会社 鯨 脈 社  
〒880-8551 宮崎市田代町 263 番地  
TEL 0985(25)1758 FAX 0985(25)7286

---

---